

京都府遺跡調査概報

第 57 冊

1. 国道176号関係遺跡
 - (1) 嗎岡南古墳
 - (2) 嗎岡遺跡
 - (3) 白米山北古墳
2. 堀坂神社古墳群
3. 桜遺跡
4. 穴川遺跡
5. 名神高速道路関係遺跡
 - (1) 長岡京跡左京第286次
 - (2) 長岡京跡右京第368・395次
 - (3) 長岡京跡右京第367・394次
6. 若林遺跡第2次
7. 燈籠寺遺跡第7次

1 9 9 4



(1) 嗎岡遺跡及び嗎岡南古墳の全景(上が西)



(2) 白米山北古墳の全景(上が東)



(1) 嗎岡南古墳出土の赤色顔料塊を納めた蓋杯(第6図7・8)



(2) 白米山北古墳出土土器 (左側：非在地系 右側：在地系)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来12年以上経過し、今後も職員一同心を新たにして調査・研究に邁進しようと日夜努力しております。この間、当調査研究センターの業務遂行にあたりまして、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

これまでの調査をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところでもあります。

本書は、平成4・5年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府農林水産部、日本道路公団大阪建設局、建設省近畿地方建設局、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した、嗎岡南古墳・嗎岡遺跡・白米山北古墳、堀坂神社古墳群、桜遺跡、穴川遺跡、長岡京跡左京第286次・長岡京跡右京第368・395次・長岡京跡右京第367・394次、若林遺跡第2次、燈籠寺遺跡第7次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で何がしらかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・加悦町教育委員会・久美浜町教育委員会・綾部市教育委員会・亀岡市教育委員会・向日市教育委員会・大山崎町教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・宇治市教育委員会・木津町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に取めた概要は、下記のとおりである。

1. 国道176号バイパス関係遺跡 2. 堀坂神社古墳群 3. 桜遺跡 4. 穴川遺跡
5. 名神高速道路関係遺跡 6. 若林遺跡第2次 7. 燈籠寺遺跡第7次

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国道176号バイパス関係遺跡 (1) 嗎岡南古墳	与謝郡加悦町字後野	平5.5.18～ 7.29	京都府土木 建築部	河野一隆
(2) 嗎岡遺跡	与謝郡加悦町字後野	平5.5.18～ 7.29		
(3) 白米山北古墳	与謝郡加悦町字後野	平5.7.20～ 9.10		
2. 堀坂神社古墳群	熊野郡久美浜町字長野小 字五反田	平5.7.8～ 9.8	京都府土木 建築部	岡崎研一
3. 桜遺跡	綾部市西方町桜	平5.6.7～ 7.15	京都府農林 水産部	野島 永
4. 穴川遺跡	亀岡市吉川町穴川小字替 田22ほか	平5.12.9～ 平6.1.21	京都府土木 建築部	三好博喜
5. 名神高速道路関係遺跡 (1) 長岡京跡左京第286次	京都市伏見区久我本町	平4.12.9～ 平5.3.2	日本道路公 団大阪建設 局	戸原和人 岩松 保 中川和哉 竹井治雄 石尾政信 鍋田 勇
(2) 長岡京跡右京第368・395次	乙訓郡大山崎町円明寺壱 町田	平4.4.8～ 平5.3.5		
(3) 長岡京跡右京第367・394次	乙訓郡大山崎町円明寺百 々	平4.4.8～ 平5.3.5		
6. 若林遺跡第2次	宇治市伊勢田町若林33	平5.5.6～ 6.29	建設省近畿 地方建設局	岸岡貴英
7. 燈籠寺遺跡第7次	相楽郡木津町大字木津小 字西ノ裏	平5.4.9～ 6.28	京都府教育 委員会	伊賀高弘

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 国道176号関係遺跡発掘調査概要-----	1
(1) 嗎岡南古墳-----	3
(2) 嗎岡遺跡-----	9
(3) 白米山北古墳-----	18
2. 堀坂神社古墳群発掘調査概要-----	31
3. 桜遺跡発掘調査概要-----	41
4. 穴川遺跡発掘調査概要-----	47
5. 名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要-----	51
(1) 長岡京跡左京第286次調査 京都工区-----	54
(2) 長岡京跡右京第368・395次 下植野工区-----	56
(3) 長岡京跡右京第367・394次 大山崎工区-----	97
6. 若林遺跡第2次発掘調査概要-----	117
7. 燈籠寺遺跡第7次発掘調査概要-----	129

挿 図 目 次

1. 国道176号関係遺跡	
第1図	調査地周辺図-----1
第2図	調査地地形図及びトレンチ配置図-----2
(1) 嗎岡南古墳	
第3図	嗎岡南古墳主体部配置図-----3
第4図	第2主体部実測図-----4
第5図	第1・3・4主体部実測図-----5
第6図	嗎岡南古墳出土遺物実測図(1)-----7
第7図	嗎岡南古墳出土遺物実測図(2)-----8
第8図	嗎岡南古墳出土遺物実測図(3)-----8
(2) 嗎岡遺跡	
第9図	嗎岡遺跡 遺構配置図-----10
第10図	嗎岡遺跡 陥穴実測図-----11
第11図	嗎岡遺跡出土押型文土器実測図(1)-----12
第12図	嗎岡遺跡出土押型文土器実測図(2)-----14
第13図	出土石器実測図-----15
第14図	嗎岡遺跡出土押型文土器復原模式図-----16
(3) 白米山北古墳	
第15図	調査前地形図-----18
第16図	白米山北古墳 遺構配置図-----19
第17図	第1・2・3主体部実測図-----20
第18図	礎敷遺構実測図-----21
第19図	白米山北古墳出土鉄製品-----23
第20図	白米山北古墳出土土器実測図(1)-----24
第21図	白米山北古墳出土土器実測図(2)-----25
第22図	検出花粉化石比率分布-----29

2. 堀坂神社古墳群

第23図	調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	32
第24図	堀坂神社古墳群地形測量図	33
第25図	長野ノ古墳外形図(1923年測量図)	34
第26図	堀坂神社1号墳石室実測図	35
第27図	堀坂神社2号墳墳丘測量図	36
第28図	堀坂神社2号墳石室実測図	37
第29図	堀坂神社2号墳出土遺物実測図	38
第30図	長野区保管遺物実測図	39

3. 桜遺跡

第31図	調査地と周辺の遺跡	41
第32図	調査地位置図	42
第33図	第1トレンチ北壁セクション図・第2トレンチ南壁セクション図	43
第34図	第1トレンチ遺構図	44
第35図	柱穴列1・2実測図	45
第36図	土器実測図	45

4. 穴川遺跡

第37図	調査地位置図	47
第38図	トレンチ配置図	48
第39図	8トレンチ南壁土層柱状図	49
第40図	出土遺物実測図	50

5. 名神高速道路関係遺跡

第41図	調査地区位置図(長岡京全体図)	53
------	-----------------	----

(1)長岡京跡左京第286次

第42図	調査トレンチ配置図	54
------	-----------	----

(2)長岡京跡右京第368・395次

第43図	下植野工区 調査トレンチ配置図	56
第44図	下植野工区A地区 遺構平面図(1)	58
第45図	下植野工区A地区 遺構平面図(2)	60
第46図	下植野工区A地区 遺構平面図(3)	62
第47図	下植野工区A地区 出土遺物実測図(1)	63
第48図	下植野工区A地区 出土遺物実測図(2)	64

第49図	下植野工区A地区	出土遺物実測図(3)	-----	65
第50図	下植野工区A地区	出土遺物実測図(4)	-----	66
第51図	下植野工区B地区	遺構平面図	-----	68
第52図	下植野工区B地区	出土遺物実測図(1)	-----	70
第53図	下植野工区B地区	出土遺物・拓影	-----	71
第54図	下植野工区B地区	出土遺物実測図(2)	-----	72
第55図	下植野工区B地区	出土遺物実測図(3)	-----	73
第56図	下植野工区C-1地区	遺構平面図	-----	76
第57図	下植野工区C-1地区	出土遺物実測図(1) 弥生土器	-----	77
第58図	下植野工区C-1地区	出土遺物実測図(2)	-----	78
第59図	下植野工区C-2地区	遺構平面図	-----	80
第60図	下植野工区C-2地区	土坑S K 395602実測図	-----	81
第61図	下植野工区C-2地区	出土遺物実測図(1) 縄文土器	-----	81
第62図	下植野工区C-2地区	出土遺物実測図(2)	-----	83
第63図	下植野工区C-2地区	出土遺物実測図(3)	-----	84
第64図	下植野工区C-2地区	出土遺物実測図(4)	-----	85
第65図	下植野工区C-3地区	遺構平面図	-----	86
第66図	下植野工区C-3地区	出土遺物実測図	-----	88
第67図	下植野工区C-4 a地区	遺構平面図	-----	90
第68図	下植野工区C-4 a地区	出土遺物実測図	-----	91
第69図	下植野工区C-4 a・4 b地区	出土遺物実測図	-----	92
第70図	下植野工区C-4 b地区	遺構平面図	-----	93
第71図	下植野工区D-2地区	遺構平面図	-----	94
第72図	下植野工区	主要遺構変遷図	-----	95

(3)長岡京跡右京第367・394次

第73図	大山崎工区	調査トレンチ配置図	-----	97
第74図	大山崎工区C-4地区	遺構平面図	-----	98
第75図	大山崎工区C-4地区	主要遺構平面図	-----	99
第76図	大山崎工区C-4地区	(上)井戸S E 394001実測図	-----	100
		(下)土坑S K 394007実測図	-----	
第77図	大山崎工区C-4地区	出土遺物実測図(1)	-----	102
第78図	大山崎工区C-4地区	出土遺物実測図(2)	-----	103

第 79 図	大山崎工区 D-3 地区遺構平面図	104
第 80 図	大山崎工区 D-3 地区 出土遺物実測図(1)	106
第 81 図	大山崎工区 D-3 地区 出土遺物実測図(2)	106
第 82 図	大山崎工区 D-3 地区 出土遺物実測図(3)	106
第 83 図	大山崎工区 E 地区 遺構平面図	109
第 84 図	大山崎工区 E 地区 竪穴式住居跡 S H367045実測図	110
第 85 図	大山崎工区 E 地区 出土遺物実測図(1)	111
第 86 図	大山崎工区 E 地区 出土遺物実測図(2)	112
6. 若林遺跡第 2 次		
第 87 図	調査地周辺の遺跡	118
第 88 図	調査地位置図	119
第 89 図	検出遺構図	120
第 90 図	掘立柱建物跡 1 実測図	121
第 91 図	竪穴式住居跡 1 実測図	121
第 92 図	竪穴式住居跡 2 実測図	122
第 93 図	主要な土坑集成図	124
第 94 図	出土土器実測図	126
第 95 図	削器実測図(包含層)	126
第 96 図	円面硯変遷図	127
7. 燈籠寺遺跡第 7 次		
第 97 図	調査地周辺遺跡分布図	129
第 98 図	トレンチ配置図	131
第 99 図	燈籠寺遺跡 調査地周辺主要遺構配置図	132
第 100 図	燈籠寺遺跡 A 地区遺構平面図	133
第 101 図	燈籠寺遺跡 A 地区トレンチ断面図	134
第 102 図	燈籠寺遺跡 古墳・方形周溝墓周溝断面図	135
第 103 図	S X 9304(埴輪棺)実測図	136
第 104 図	出土遺物実測図(1)	140
第 105 図	出土遺物実測図(2)	142

付 表 目 次

1. 国道176号関係遺跡	
(3) 白米山北古墳	
付表1 検出花粉化石一覧表-----	30
5. 名神高速道路関係遺跡	
付表2 調査地一覧表-----	52
6. 若林遺跡第2次	
付表3 溝一覧表-----	122
付表4 土坑一覧表-----	125

図 版 目 次

1. 国道176号関係遺跡	
(1) 嗎岡南古墳	
図版第1 (1) 調査地全景(古墳は地山面まで掘削)	
(2) 嗎岡南古墳主体部配列状況(北東から)	
図版第2 (1) 陥穴6 検出状況 (2) 陥穴3 検出状況	
図版第3 嗎岡南古墳出土遺物1(番号は第6図と対応)	
図版第4 嗎岡南古墳出土遺物2(番号は第7図と対応)	
(2) 嗎岡遺跡	
図版第5 嗎岡遺跡出土押型文土器	
(3) 白米山北古墳	
図版第6 (1) 白米山北古墳全景 (2) 白米山北古墳第1主体部(北西から)	
図版第7 (1) 白米山北古墳第2主体部(南西から)	

- (2) 白米山北古墳第3主体部(西から)
- 図版第8 (1) 白米山北古墳礫敷遺構全景(北西から)
(2) 礫敷遺構内の土器出土状況
- 図版第9 白米山北古墳出土遺物1(番号は第20・21図と対応)
- 図版第10 白米山北古墳出土遺物2

2. 堀坂神社古墳群

- 図版第11 (1) 堀坂神社古墳群遠景(南東から) (2) 堀坂神社2号墳近景(北東から)
- 図版第12 (1) 堀坂神社1号墳近景(南東から) (2) 堀坂神社1号墳近景(南東から)
- 図版第13 (1) 堀坂神社2号墳近景(南東から) (2) 堀坂神社2号墳近景(北東から)
- 図版第14 (1) 堀坂神社2号墳奥壁近景(南東から)
(2) 堀坂神社2号墳側壁近景(東から)
- 図版第15 (1) 堀坂神社2号墳閉塞石検出状況(北西から)
(2) 堀坂神社2号墳墳丘断面(北から)
- 図版第16 出土遺物

3. 桜遺跡

- 図版第17 (1) 調査地近景(南から) (2) 柱穴検出状況(北から)
- 図版第18 (1) 柱根検出状況(柱穴5) (2) 柱穴断面(柱穴6)
(3) 柱穴断面(柱穴8)
- 図版第19 (1) 第1トレンチ (2) 第1トレンチ近景(北から)
- 図版第20 (1) 第2トレンチ近景(東から) (2) 出土遺物

4. 穴川遺跡

- 図版第21 (1) 調査地全景(北西から) (2) 2トレンチ全景(東から)
- 図版第22 (1) 6トレンチ全景(東から) (2) 8トレンチ全景(東から)

5. 名神高速道路関係遺跡

(1) 長岡京跡左京第286次(京都工区)

- 図版第23 (1) 京都工区B-2地区全景(北東から)
(2) 京都工区C-2地区全景(北東から)

(2) 長岡京跡右京第368・395次(下植野工区)

- 図版第24 (1) A地区中・近世遺構面(西から)
(2) A地区奈良・平安時代遺構面(西から)
- 図版第25 (1) A地区古墳時代I期遺構面(北から)
(2) A地区古墳時代II期遺構面(東から)

- 図版第26 (1) A地区 S H395338(東から) (2) A地区 S H395336(東から)
- 図版第27 (1) A地区 S H395407上層(北西から)
(2) A地区 S H395407・S X395411(北西から)
- 図版第28 (1) A地区 S H395407(東から)
(2) A地区 S H395405・S H395433・S B395451・S K395504(南から)
- 図版第29 (1) A地区 S H395401炭化物出土状況(南から)
(2) A地区 S H395401・S K395502(東から)
- 図版第30 (1) A地区 S D395501(南から) (2) A地区 S D395501北側拡大(南から)
- 図版第31 A地区出土遺物(1)
- 図版第32 A地区出土遺物(2)
- 図版第33 (1) B地区全景(西から) (2) B地区全景(東から)
- 図版第34 (1) B地区掘立柱建物跡 S B368107・S B368108・S B368105(南から)
(2) B地区井戸跡 S E368106(西から)
- 図版第35 (1) B地区竪穴式住居跡 S H368118(南から)
(2) B地区土器埋納土坑 S X368131
- 図版第36 B地区出土遺物
- 図版第37 (1) C-1地区西半部全景(東から) (2) C-1地区 S D368242(南から)
(3) C-1地区 S H368204(西から)
- 図版第38 (1) C-1地区 S K368248(左)・S K368226(中央)(南から)
(2) C-1地区 S K368226遺物出土状況(北から)
(3) C-1地区 S K368248検出状況(西から)
- 図版第39 C-1地区出土遺物 S H36803
- 図版第40 C-1・C-2地区出土遺物
- 図版第41 C-2地区全景(西南西から)
- 図版第42 (1) C-2地区 S K395602検出状況(南東から)
(2) C-2地区 S H395685検出状況(南南西から)
- 図版第43 (1) C-2地区 S H395677遺物出土状況(北西から)
(2) C-2地区 S H395677床面検出状況(北西から)
- 図版第44 (1) C-3地区全景(西から)
(2) C-3地区古墳 S X268301(北西から)
- 図版第45 C-3地区出土遺物
- 図版第46 (1) C-4 a地区全景(南から) (2) C-4 a地区全景(北東から)

- 図版第47 (1) C-4 a 地区 S D 395702 遺物出土状況(北東から)
(2) C-4 a 地区 S D 395702 埋土堆積状況(東南東から)

- 図版第48 (1) C-4 b 地区全景(南西から)
(2) C-4 b 地区 S B 395821(南東から)

- 図版第49 (1) C-4 b 地区 S H 395803(北東から)
(2) C-4 b 地区 S B 395841(南東から)
(3) C-4 b 地区 S K 395801(南から)
(4) C-4 b 地区調査風景

図版第50 C-4 a・b 地区出土遺物

(3) 長岡京跡右京第367・394次調査(大山崎工区)

- 図版第51 (1) C-4 地区調査地全景(東から)
(2) C-4 地区掘立柱建物跡 S B 39409・10(南から)

- 図版第52 (1) C-4 地区井戸跡 S E 39410(西から)
(2) C-4 地区埋め甕遺構 S K 39407(南から)

- 図版第53 (1) C-4 地区土坑 S K 39404(東から)
(2) C-4 地区土坑 S K 39404完掘後(南から)

- 図版第54 (1) D-3 地区西国街道路面・東側溝 S F 394103・S D 394101(南から)
(2) D-3 地区 S X 394104(北から)

- 図版第55 (1) D-3 地区全景(東から) (2) D-3 地区西半検出柱穴群(南東から)

図版第56 C-4 地区・D-3 地区出土遺物

図版第57 C-4 地区出土遺物

- 図版第58 (1) E 地区調査地全景(東から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H 367045(南東から)

- 図版第59 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H 36747(南から)
(2) E 地区竪穴式住居跡 S H 36747竈(東から)

図版第60 E 地区出土遺物

6. 若林遺跡第2次

- 図版第61 (1) 若林遺跡全景(西から) (2) 調査地全景(北から)

- 図版第62 (1) 調査地全景(上空から) (2) 調査地全景(東から)

- 図版第63 (1) 掘立柱建物跡 1(上空から) (2) 竪穴式住居跡 1(南から)

- 図版第64 (1) 土坑 13・14(南西から) (2) 土坑 15(北西から)

- 図版第65 (1) 溝 1～3ほか(東から) (2) 土坑 10(南西から)

図版第66 出土遺物

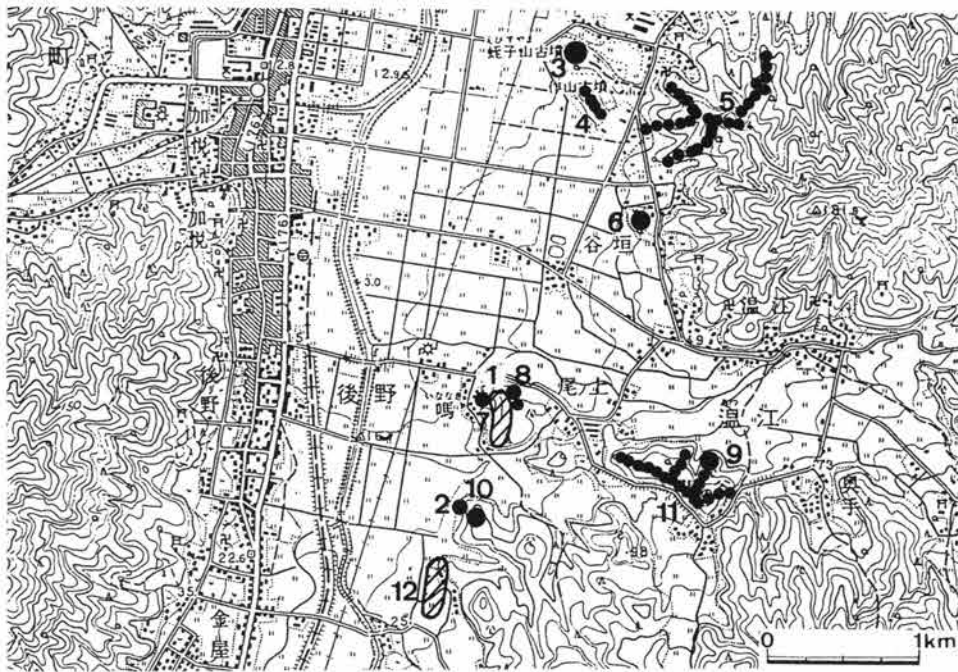
6. 燈籠寺遺跡第7次

- 図版第67 (1)調査地遠景(西から) (2)調査地遠景(北から)
- 図版第68 (1)A地区空中写真(右が北方向) (2)A地区全景(北西から)
- 図版第69 (1)A地区南西部(S X 9301・9304 北から)
(2)A地区S B 9305(北から)
- 図版第70 (1)A地区S X 9302全景(北から) (2)A地区S X 9302全景(北西から)
- 図版第71 (1)A地区S X 9304(北から) (2)A地区S X 9310(北から)
- 図版第72 (1)A地区S X 9303全景(北から) (2)A地区S X 9303全景(東から)
- 図版第73 (1)A地区S K 9321(奥)・S K 9322(手前) (南西から)
(2)A地区S K 9321(東から)
- 図版第74 (1)B地区全景(南から) (2)B地区西半部検出状況(北から)

1. 国道176号関係遺跡発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、一般国道176号新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した嗎岡遺跡と白米山北古墳について報告する。^(注1) 嗎岡遺跡は、当センターによって平成4年1月13日～2月28日に試掘調査、平成5年1月18日～2月25日に第2次調査が行われ、今回の調査が第3次目に当たる。^(注2) 期間は平成5年5月18日～7月29日であり、面積は2,000㎡である。白米山北古墳は『京都府遺跡地図』には記載されていないが、試掘の結果、遺跡であることが判明し発掘調査を行った。期間は平成5年7月20日～9月10日であり、面積は450㎡である。いずれの調査も、調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員河野一隆が担当した。なお、発掘調査にかかる費用は全額京都府が負担した。調査中とその後も関係諸機関及び調査参加者に多大な労苦をかけたことに深謝したい。^(注3)

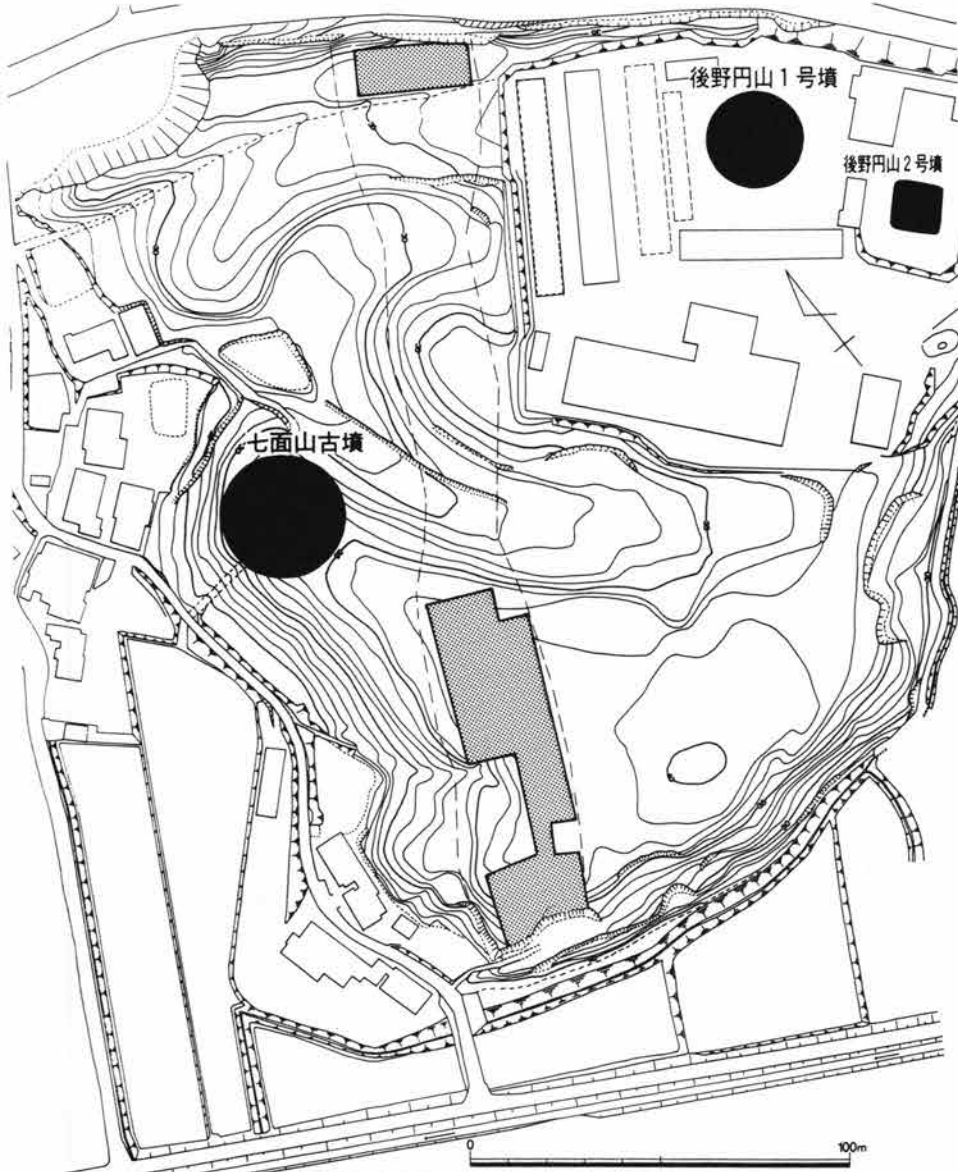


第1図 調査地周辺図(1/25,000)

- | | | | |
|-----------------|-----------------|--------------|------------|
| 1. 嗎岡遺跡・嗎岡南古墳 | 2. 白米山北古墳 | 3. 蛭子山古墳 | 4. 作山古墳群 |
| 5. 明石大師山・愛宕山古墳群 | 6. 温江丸山古墳(谷垣遺跡) | 7. 七面山古墳 | 8. 後野円山古墳群 |
| 9. 鳴谷東古墳群 | 10. 白米山古墳 | 11. 尾上・鳴谷古墳群 | 12. 桜内遺跡 |

位置と環境

両遺跡は、野田川が形成した沖積平野に臨む低平な丘陵端部に位置する。この地区は縄文時代以来、人々の往来が密で、周辺には白米山古墳、七面山古墳などのほか、中世の大集落である桜内遺跡がある。特に、1981年に加悦町教育委員会により調査された後野円山古墳群はこの地域における調査の先駆であり、2号墳下層で検出された押型文土器が嗎岡遺跡発見の端緒となった^(注4)。また、白米山古墳は加悦谷第2の規模の前方後円墳であるが、墳形以外に資料がなく、隣接地の調査は時期比定など手掛かりとなることが予想された^(注5)。



第2図 調査地地形図及びトレンチ配置図(1/200)

INANAKI NO OKA MINAMI

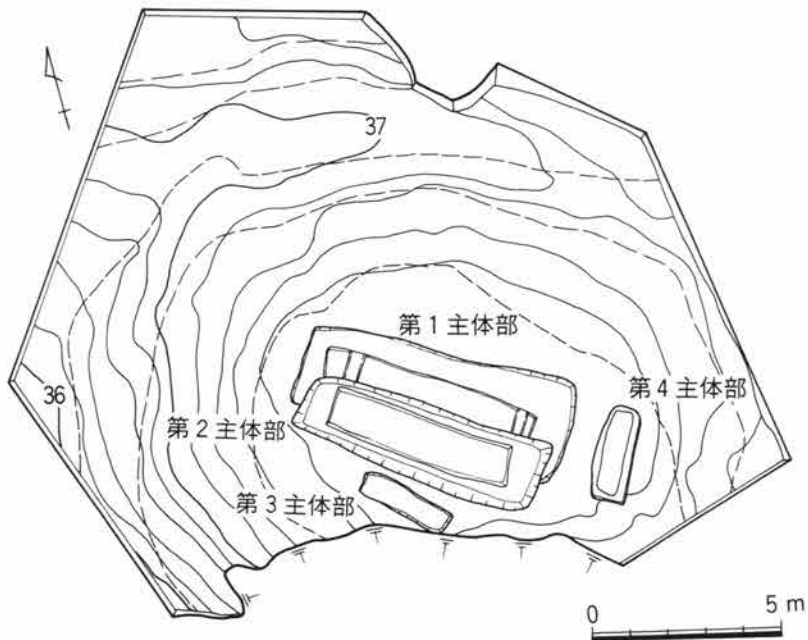
(1) 嗎岡南古墳

平成4年の試掘調査では、押型文土器が丘陵南側にも一定程度分布していることや、遺跡南端の小丘が中期末の古墳であることが確認された。続く第2次調査では、嗎岡南古墳と命名されたこの古墳の範囲確認を主眼として進められた。この先行調査を踏まえ、今次の調査は、嗎岡南古墳の主体部調査と、この北側に広がる嗎岡遺跡の平面調査を柱に、調査区を設定した。

1. 古墳の概要

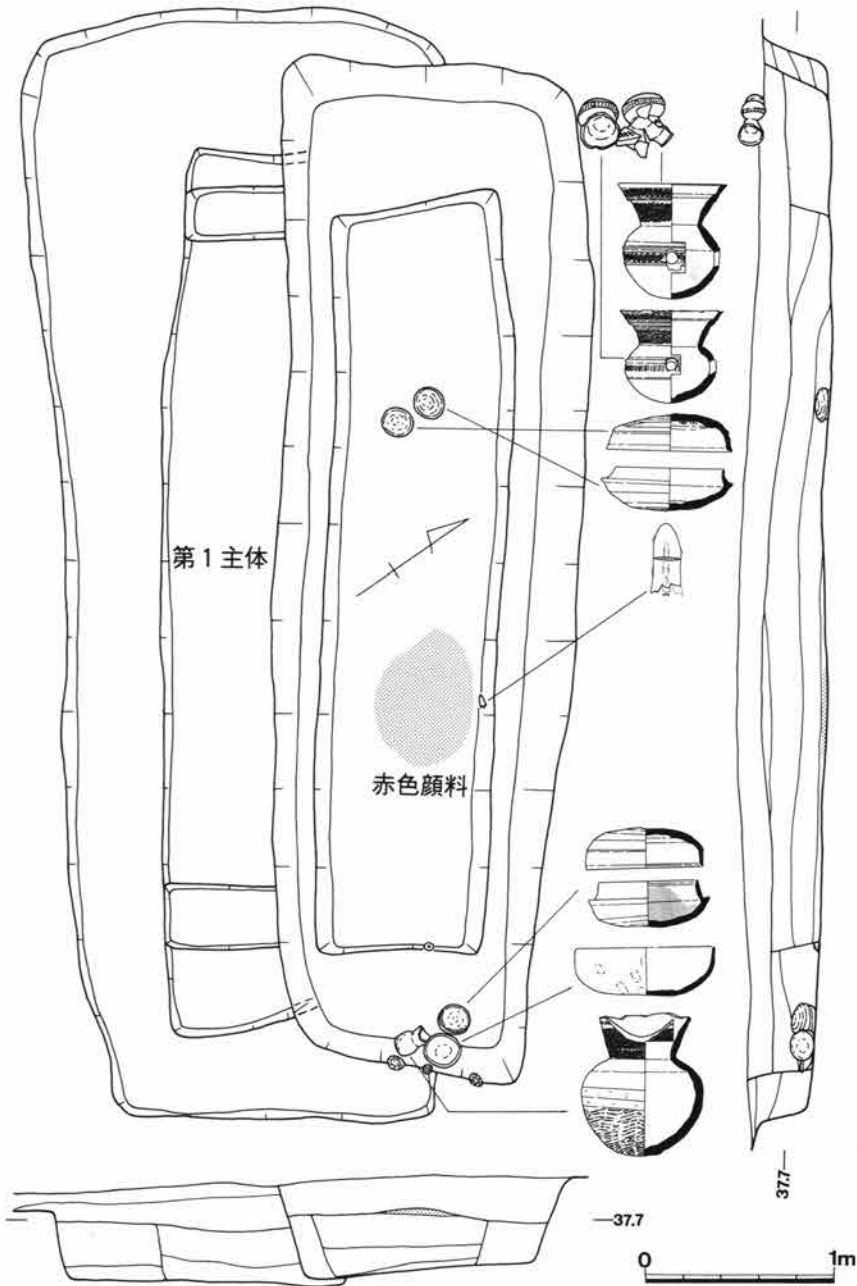
この古墳の平面形は、隅丸の長方形を呈し、長軸19.5m・短軸10.5mを測る。現高は、墳裾から0.8mである。古墳の周囲は、底面幅2.5mの周溝がめぐるが、一部は神社造成で壊されている。墳丘は、ゆるやかに傾斜する旧地形に直接盛り土することで築造された。しかも、旧表土は南側ほど厚いので、そちらから盛り土が開始されたと推定される。

埋葬施設は、木棺直葬墓(第1・2・4主体部)と土壙墓(第3主体部)の4基である。規



第3図 嗎岡南古墳主体部配置図(1/200)

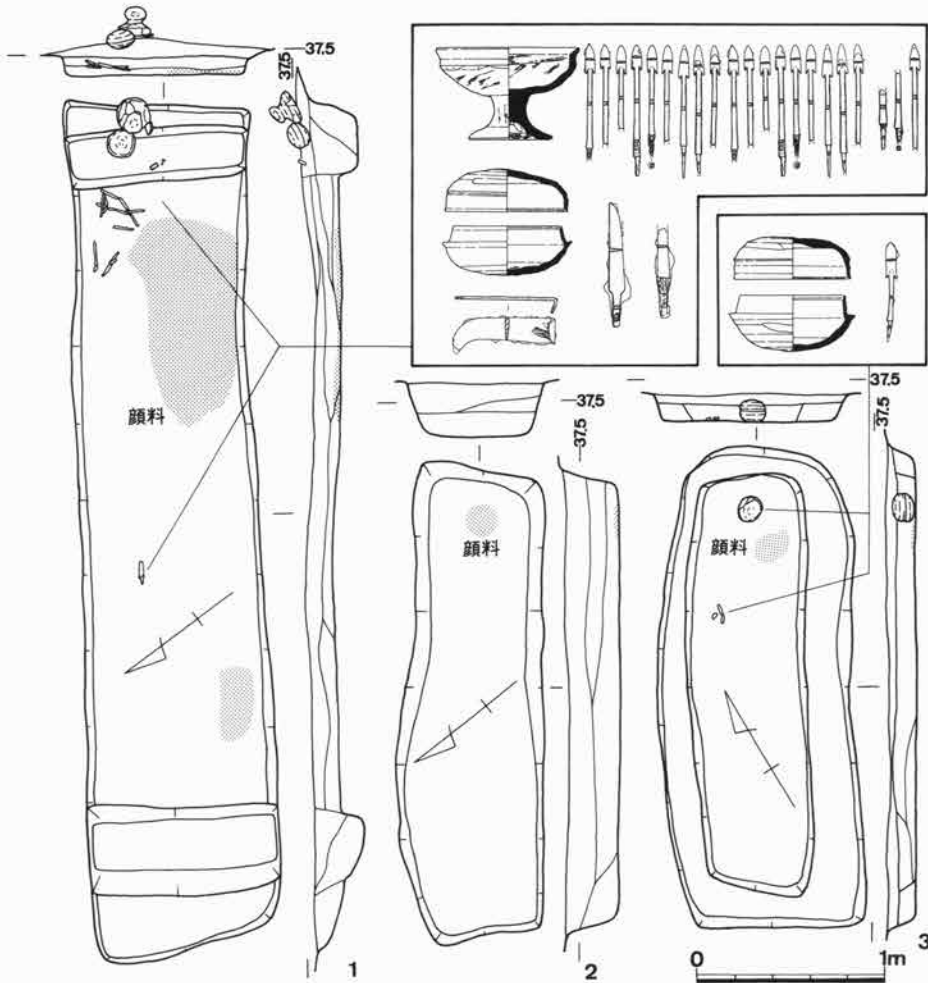
模的には5m余りの長大なもの(第1・2)と2.6m前後のもの(第3・4)とに二分される。層位や副葬品配置から、第1と第3から第2と第4へと大小の主体部がセットとなって推移して築かれた可能性が高い。



第4図 第2主体部実測図(1/40) 梨地は赤色顔料塗布範囲

第2主体部は、第1主体部の南側に掘り込まれた墓壇内に、長さ3.9m・幅0.9mの木棺を納める。床面には赤色顔料を散布し、床面レベルは第1主体部よりも高い。棺痕跡はほとんどなかったが、第1主体部のような小口板の掘り込みは持たない。棺内の副葬品は、無頸鉢(14)と枕と考えられる蓋杯(5・6)である。この枕は、セット関係の身と蓋を、それぞれ底と天井を上に向けて並置したもので、野田川流域では霧ヶ鼻古墳群に類例^(注6)がある。また、足側に当たる棺外の墓壇内には土師器碗(10)、須恵器の蓋杯(7・8)と直口壺(12)及び土製紡錘車(1)を検出した。この蓋杯内には、拳大の赤色顔料(巻頭図版第1)が納められていた。なお、墓壇を埋め戻した後の上面では、頭側には2点の礎、足側には小凹部に赤色顔料を置いている。

第1主体部(第5図1)は、この古墳の築造契機になった被葬者と推定され、墓壇規模は



第5図 第1・3・4主体部実測図(1/40) 梨地は赤色顔料塗布範囲

長さ5.9m・幅1.7mを測る。墓壙は、地山面まで掘り下げ、長さ4.5m・幅0.95mの箱形木棺を据える。これは小口板を溝を掘って立てた型式で、棺内には全面に赤色顔料が塗布されていた。小口溝は、長さ95cm・幅24cmを測る。棺蓋上には赤彩した土師器高杯(11)、蓋杯(1・2)、鎌(20)、玉類(2～4)が置かれていた。棺内の副葬品には鉄鏃(1～12)、刀子(17)が散乱し、小型の刀子(16)だけは中央やや西寄りの棺床にあった。刀子は、被葬者に近接して置かれた例が多いので、頭位は西向きと推定され第2主体部とは逆である。

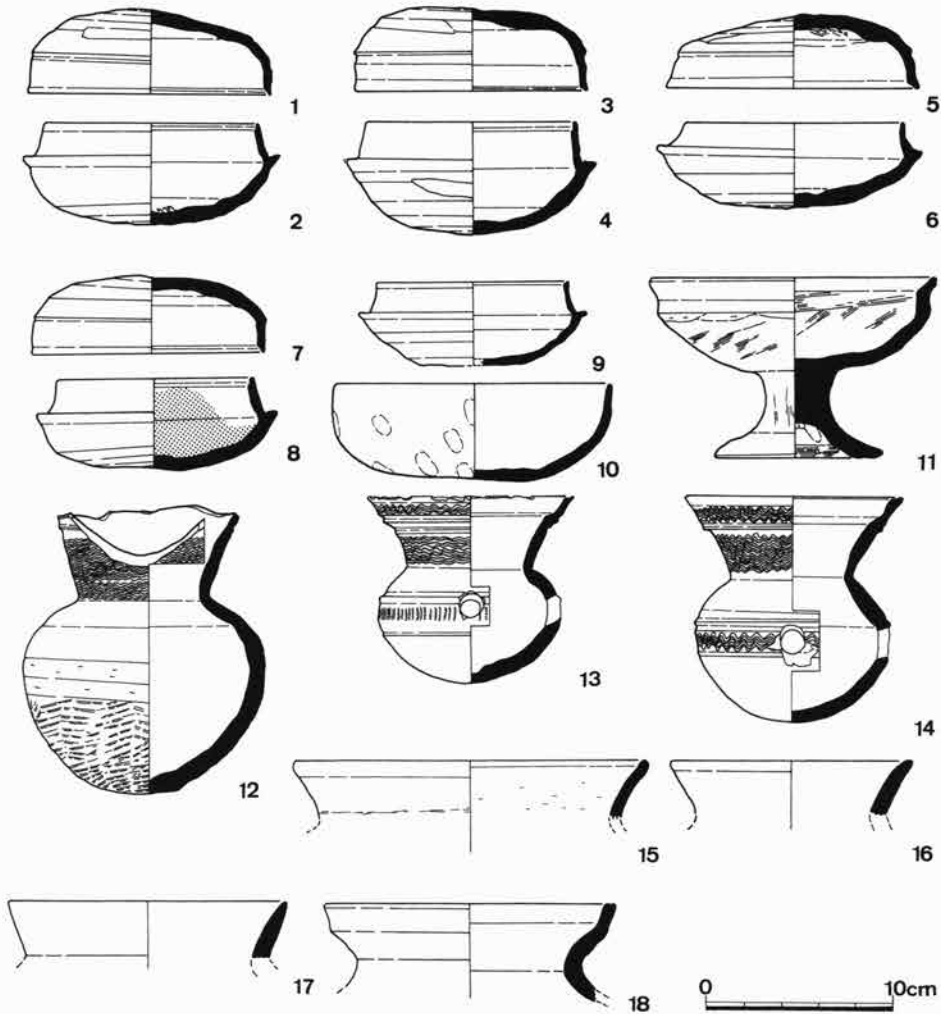
第3主体部(第5図2)は、長さ2.5m・幅0.7mの土壙墓で木棺痕跡は全くなかった。ただ、棺床に径15cmにわたって赤色顔料が散布された部分があり、副葬品はなかったが、ここに頭部を比定することができる。したがって、頭位は東向きである。

第4主体部(第5図3)は、第1～3主体部とは直交する方向に主軸をとる木棺直葬墓で、墓壙規模長2.6m・幅1.0mを測る。木棺規模は、長さ2.2m・幅0.65mの箱形であるが、詳しい型式はわからない。棺内には蓋杯(3・4)、鉄鏃(13)と拳大の赤色顔料が副葬されていた。副葬品の置かれている北側に頭部を推定したい。

これらの主体部は、土器を棺内に納める第2・4主体部と、棺内に入れない第1・3主体部に二分でき、この地域での土器の棺内副葬(特に転用枕)の開始時点をこの間に求めることができよう。

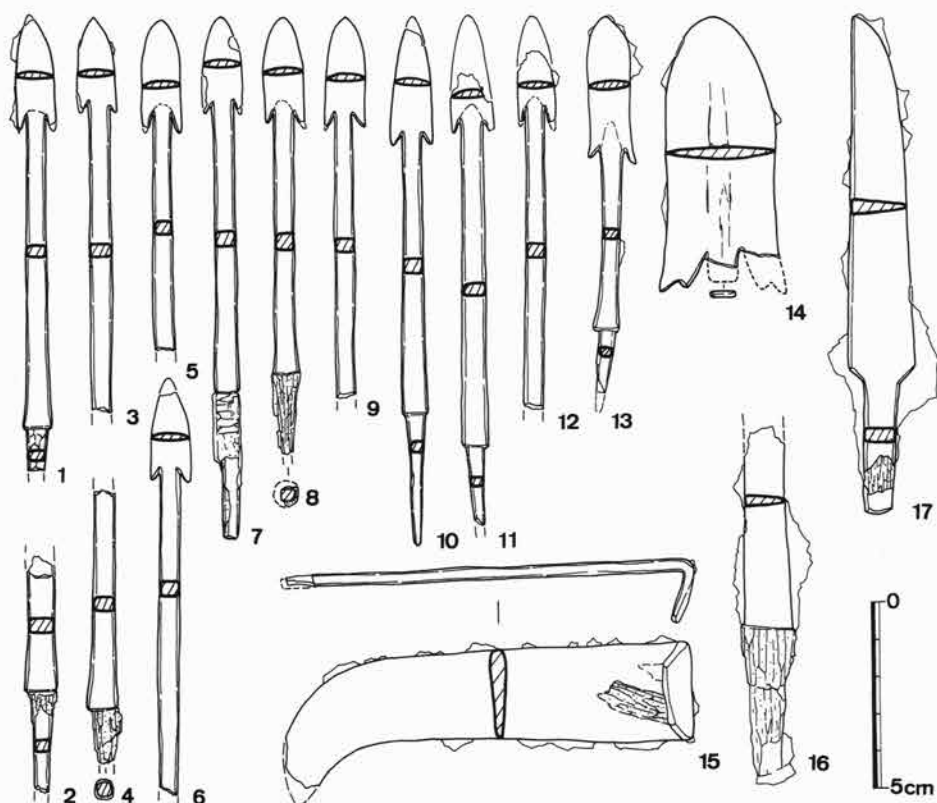
2. 副葬品

副葬品の内訳は、須恵器12(杯身5、杯蓋4、甕2、直口壺1)、土師器2(椀1、高杯1)、鉄製品(鏃13、鎌1、刀子2)、土製紡錘車1、玉類4(緑色凝灰岩製管玉2、ガラス小玉2)である。全体に、杯身は端部にあまい段を持ち、やや厚みを持った深手の作りである(第6図)。2と5は、見込み部に成形時の叩き痕が残る。色調では青灰色の一群(1～4・7・8)と灰白色の一群(5・6・9)に二分され、後者の方がやや粗雑な作りである点も、生産地の相違を示唆するかもしれない。なお、内部に拳大の赤色顔料を納めた蓋杯は、7・8であり、蓋内面にも付着している。甕は、頸部が短く、波状文及び刺突文で加飾する。直口壺は、口縁部を打ち欠き片口状に整える。口縁部を波状文で加飾し、体部下半を叩き調整したもので自然釉が付着する。土師器は、内外面が赤彩された高杯(11)がある。これは、厚手であるがシャープな作りでハケで調整されている。椀(10)は、器表が荒れて調整は不明である。鏃(第7図)は、長頸鏃(1～13)と無頸鏃(14)とに大別され、前者はさらに篋被に比べて鏃身が小さなもの(1～12)と大きいもの(13)とに細別できる。先述のように、これらの類別はおのおの主体部を異にし、型式と副葬主体部とが対応している。鎌は、小型の曲刃鎌で、長さ10.8cm・幅2.4cmを測る。折り返し部には鎌身と平行し



第6図 嗎岡南古墳出土遺物実測図(1) 1/40

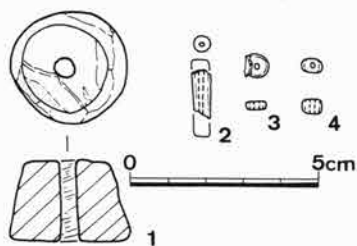
た木目が認められ、柄を装着する際に楔状の材で固定したことをうかがわせる。刀子は、ナデ肩の両関である。土製紡錘車(第8図)は、径3.0cm・高さ2.1cmで灰褐色を呈する。玉類では管玉がもろい緑色凝灰岩製で、1点は取り上げ時に崩壊してしまった。ガラス玉は水色で、土を振るったが2点のみであった。また、周溝内より鍛冶滓と判断される4点の鉄滓を検出した。



第7図 嗎岡南古墳出土遺物実測図(2) 1/2

3. まとめ

嗎岡南古墳は、副葬品から6世紀初頭に最初の埋葬が行われ(第1・3主体部)、6世紀前半にわたって(第2・4主体部)埋葬が継続している。後野地区でこの古墳が占める階層的位置は、葺石・段築・埴輪・石室を完備した後野円山1号墳を頂点として、これらから埴輪の欠落した七面山古墳が続き、いずれの要素も持たない嗎岡南古墳が底辺を占めている。



第8図 嗎岡南古墳出土遺物
実測図(3) 1/2

被葬者の社会的性格は、赤色顔料の多用がこの古墳の特徴と言え、古墳祭式を執行する集団であった可能性を考えたい。このとき、北側3kmに入(丹生?)谷の地名があることや、『延喜式』神名帳に「阿知江(温江)岩部(忌部)神社」が記されている点が注意される。

(河野一隆)

INANAKI NO OKA

(2) 嗎岡遺跡

1. 遺構の概要

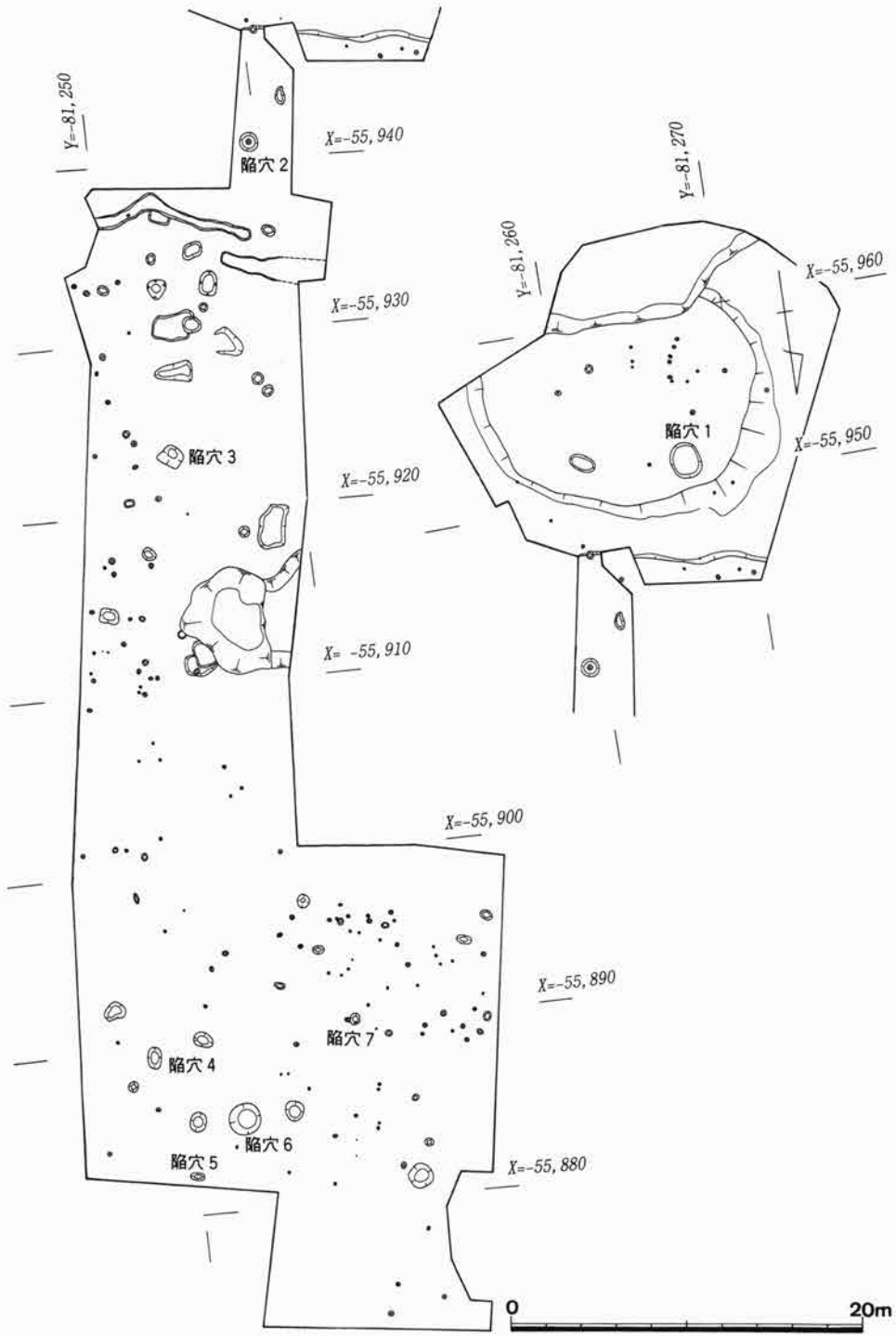
調査地は現在、シイやナラが繁茂するうっそうとした林である。ここは、標高40m前後の低平な丘陵であり、過去には畑として利用されたこともあるようだ。層位は、最上層が茶褐色の腐植土層、第Ⅱ層が灰褐色の流土で、第Ⅲ層が赤褐色のローム質土層である。この内、第Ⅱ層は中世以降の陶磁器片を含むため、現遺構面はかなり削平されたと推定される。赤褐色のロームは生成年代が不明であるが、嗎岡南古墳の下層では第Ⅱ層とした灰褐色土がなく、旧表土の直下に第Ⅲ層が続いていた。このことから、この赤褐色ローム質土層の生成は、古墳時代後期以前と考えられる。しかも、押型文土器が検出されたのは第Ⅲ層の上面であり、縄文早期に1点を押さえることができると考えている。ただし、量的には大部分が古墳封土下から出土しており、これはそれ以外の部分が後世の削平で失われたためと考えられる。

ここからは、7基の陥穴状遺構を検出した(第9図)。配列に規則性はなく、まばらに散在する。これらが縄文早期に属すると考えた理由は以下の諸点にある。

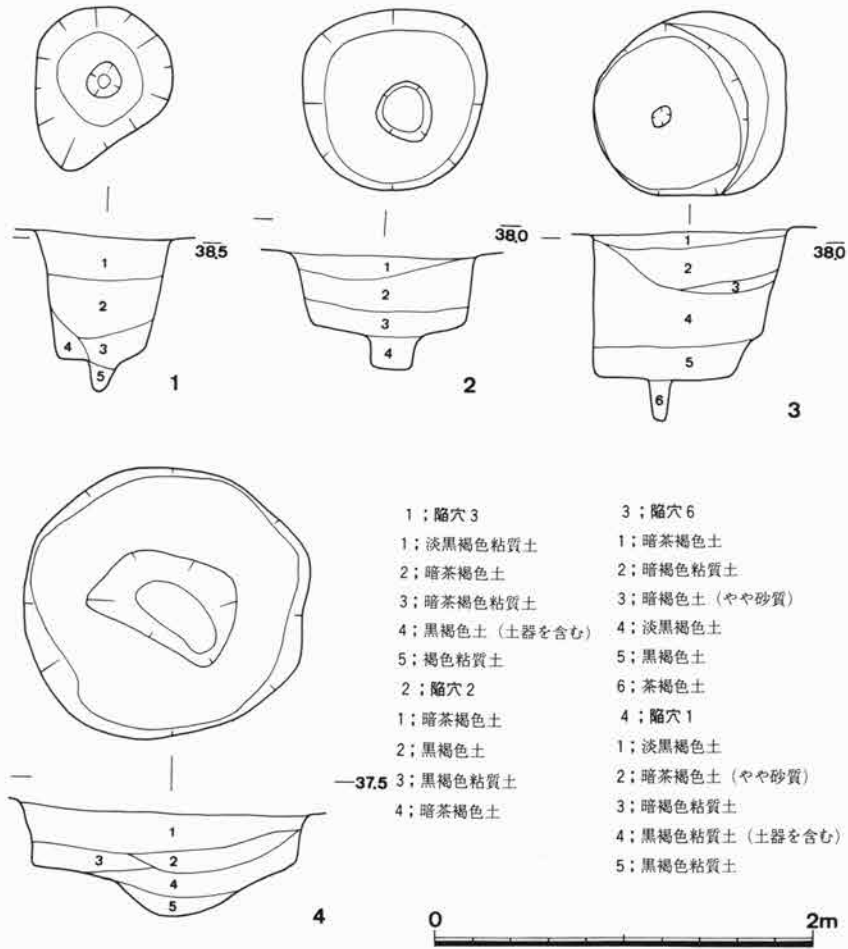
- ①陥穴1が嗎岡南古墳の盛り土で覆われた旧表土下であり、中から押型文土器が検出された。この他、陥穴3でも底面で押型文土器を検出した。
- ②すべての陥穴状遺構の埋土はしまりのある黒褐色土が詰まっていて、新しい遺構では第Ⅱ層と共通するもろい灰色土が埋土となっている。つまり、陥穴状遺構とそれ以外とは埋土が相違する。
- ③押型文土器以後の遺物は、古墳時代まで全くない。

陥穴状遺構については、陥穴かどうかという機能の問題と時期決定の方法について議論が分かれるが、嗎岡遺跡に関しては消去法によって縄文早期の陥穴と判断した。

個々の陥穴を第10図に示す。1(陥穴3)は、径0.36m・深さ0.34mで底面中央に径9cm・深さ9cmの小穴を持つ。押型文土器が出土したのは、最初に穴に流入した黒褐色の埋土中にあった。2(陥穴2)と3(陥穴6)は、押型文土器を検出していないが、1と同形態である。3は、片側に小さな平坦面があり、ワナの構造と関連するものかもしれない。4(陥穴1)は、嗎岡南古墳下層にあった最大の陥穴で、長径0.75m・短径0.7mを測る。底面中央に深さ10cmの不整形の皿状ピットを持つ。これらにどのような仕掛けが細工されていたかは全く不明である。ただし、近年、東京都多摩ニュータウンNo.182遺跡^(注7)で検出さ



第9図 嗎岡遺跡 遺構配置図



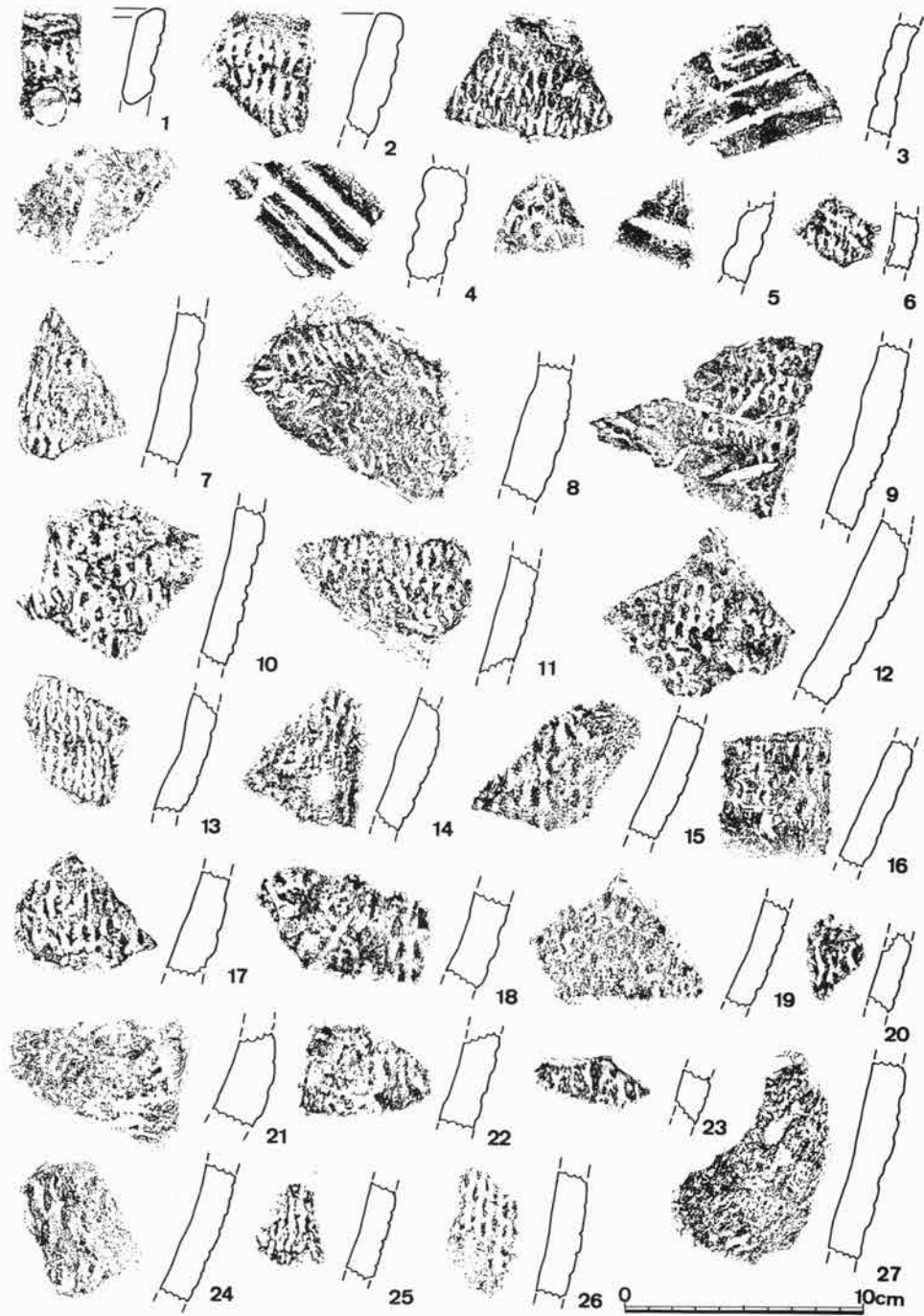
第10図 嗎岡遺跡 陥穴実測図(1/40)

れたような木を束ねて足の動きを留めるような事例も報告されているから、すべてが槍先状の杭を持っていたものとは考えられない。また、埋土については3と4が間に褐色の砂質の強い層を交えるので、次第に周囲の腐植土や流土を取り込んで埋没したのであろう。

2. 出土遺物

押型文土器が90点、石器ならびに剥片・削片が6点ある。なお、石器実測図と記述は黒坪一樹が行った。

押型文土器 近畿地方の押型文土器は、1965年の岡田茂弘氏の概説によって編年観が示された。ここでは神宮寺→大川→(尾上)→(福本)→高山寺→穂谷の押型文土器の型式組列(注8)が編まれた。その後、片岡 肇氏や岡本東三氏の論争と上述の経過によって押型文土器の編年は前半期を中心に変容した。近年では布留遺跡(豊井地区)の土器を検討した矢野健一



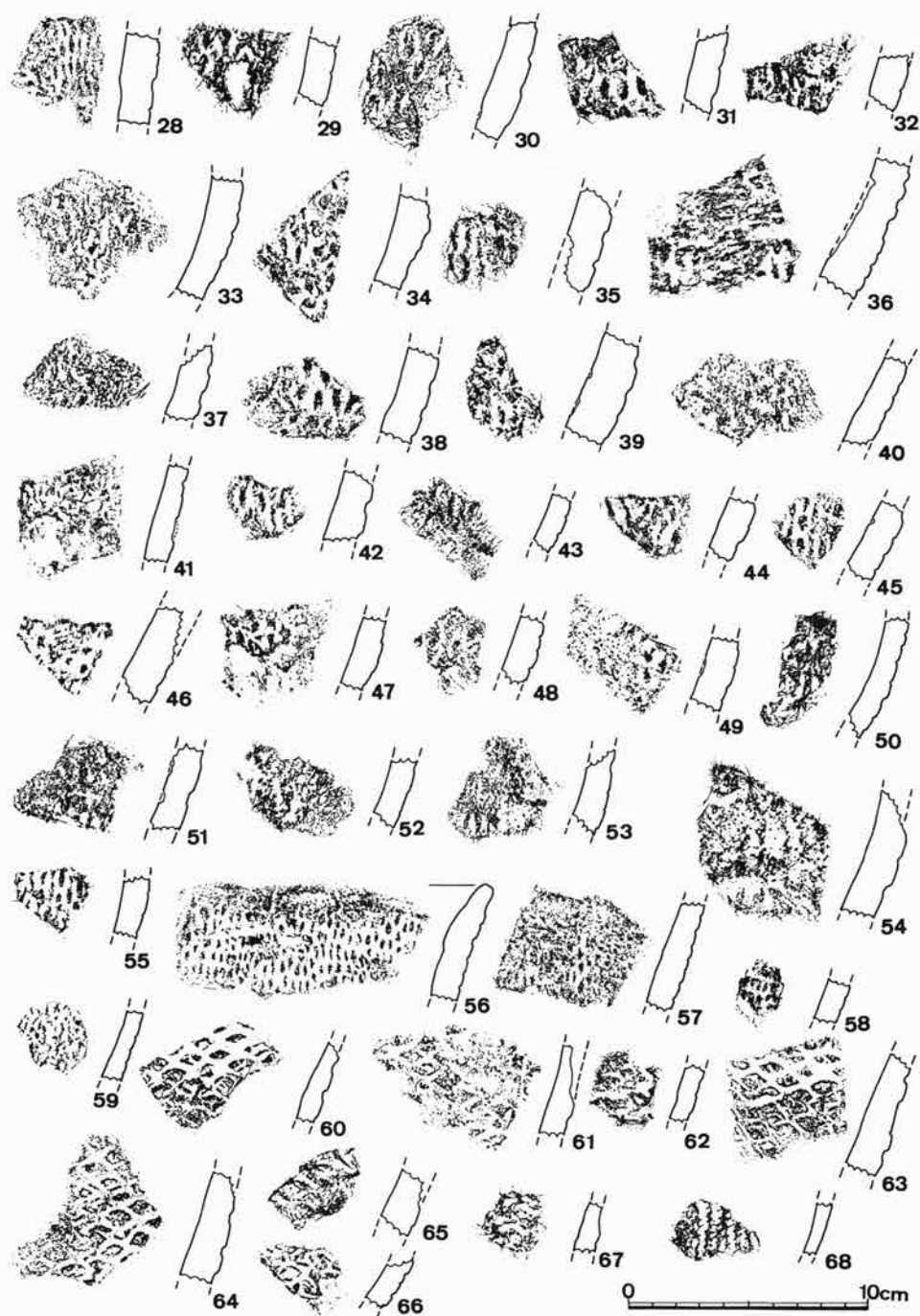
第11図 嗎岡遺跡出土押型文土器実測図(1) 1/3
(すべてA-1類)

氏によって、5期編年が提唱されている^(注9)。ここでは大鼻→大川(大鼻式を除いたもの)→神宮寺→(尾上・葛籠尾崎I式)→黄島→高山寺→穂谷とされ、この報告もそれにしたがう。

嗎岡遺跡の押型文土器は、略報でも触れたように、すべて高山寺式土器である。高山寺式土器は、浦 宏氏が紹介した和歌山県田辺市高山寺貝塚出土土器を指標とし、ポジティブの楕円形文と内面の斜行沈線が特徴である^(注10)。片岡 肇氏は、高山寺貝塚出土土器を検討し、楕円文の大きさに(1)5~7mm、(2)10~13mm、(3)20~25mmの3種があること、斜行沈線にも指頭によるものと半截竹管によるもの^(注11)とがあり、指頭の場合には沈線の間隔に(1)1cm前後、(2)3~4cm前後のものがあることを指摘した。だが、この類別が一体何を意味するものか示されておらず、分類のみにとどまった。矢野健一氏は、基本的には片岡分類を踏襲しながら、楕円文が互い違いとなり網目状を呈するものと、列状に連なるものを大別し、さらに前者を楕円文の大きさによって二細分した。嗎岡遺跡の押型文土器にはこれらでは対応できないものもあり、以下の手順で分類した。

嗎岡遺跡の押型文は、楕円形文(A類)にA-1;長軸10mm・短径2mmの細長い粒状のものと、A-2;長軸6mm・短軸1mmの米粒大の極小のもの^(注11)とがあり、網目状を呈するB類とは区別される。量的にはA-1類が58点、A-2類が4点、B類が8点であり、A類が主体となる。この2者は、施文方向が異なり、A類は器面に対して縦方向に原体が回転するが、B類は器面に対して横方向に回転させる。土器の胎土は、石英粒が目立つ粗い黄褐色で、文様に関わらず同一であり、丹後地域で製作されたものであろう。なお、これらの土器の内面はケズリの後、軽くなでて調整する。次に、第11・12図の個別の土器であるが、1と2は口縁部片ではあるが、1は端部に原体を横方向に施文する。なお、1には下端部に両側から打ち欠いた孔があり、補修孔と認められる。2~4は、内面に斜行沈線のある破片で、沈線は幅7.5mm・深さ2mmの断面「U」字形であり半截竹管状の工具を使用する。8は、原体が重複し体部下半の破片と思われる。56は、A-2類の口縁部であるが内面に斜行沈線がなく、1のように口縁端部の横方向施文もない。これらの器形は、平縁であること以外不明であるが、A-1類の中に、あまく「く」の字形に屈曲した小片もあり、頸部がくびれる可能性もある。このほか、67は重複が著しいが山形文かもしれない。68は、縄文施文の土器で、他とは異なり、灰褐色で硬質の焼きである。縄文はRLである。なお、図示しなかったが、押型文以外に外面をケズリによった無文の破片がある。これが押型文土器に共伴する無文土器か、押型文土器の無文部位かは不明であるが、口縁部の破片がないので後者の可能性を考えたい。

上述の検討の結果、外面文様の分類、斜行沈線の有無、文様帯などから次の3類型が抽出できる。



第12図 嗎岡遺跡出土押型文土器実測図(2) 1/3
 (28~55; A-1類 56~59; A-2類 60~67; B類 68; 縄文)

I類；外面は、A-1類を器壁に対し、縦方向に密接施文する。口縁端部には一条の横方向の回転施文がなされる。内面は、口縁部よりやや下った部位から頸部にかけて密な斜行沈線を施す。内面は削り後、ナデ調整し、外面も一部無文の可能性ある。器形は平縁で、頸部があまく屈曲するか？。

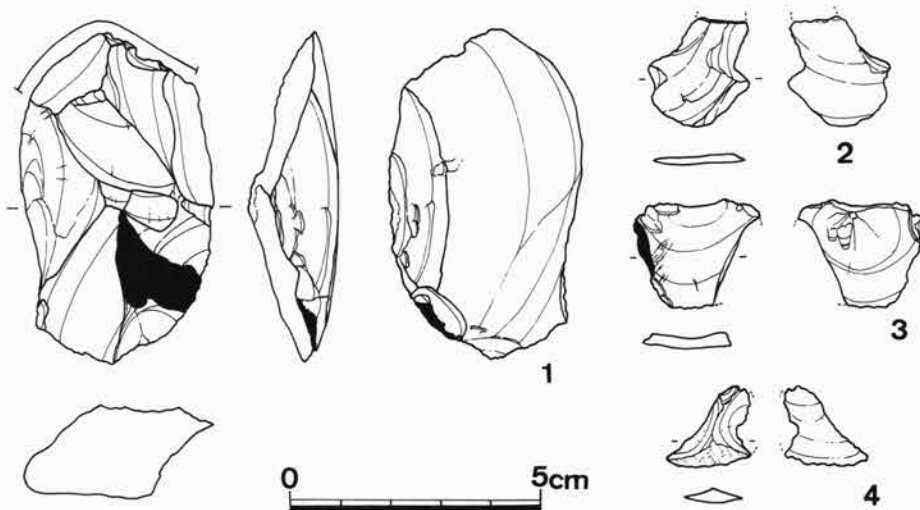
II類；外面はA-2類を器壁に対し、口縁端部まで縦方向に密接施文する。内面は、斜行沈線を持たず、削り後にナデ調整する。平縁口縁で頸部の屈曲をもたないか？。

III類；外面は、B類を器壁に対し横方向に施文するが、口縁部の状況は不明である。内面は斜行沈線を持たない可能性が高い。

なお、一土器の施文原体はすべて一種類に限られる。底部は不明であるが、大宮町谷内遺跡では高山寺式土器の底部片が検出されており、径5cm程度の尖底が復原できよう。また、図示していないが、I類の原体がうかがえる破片がある。これから長さ2.5mm・径1.3mmで一原体に少なくとも10個のA-1類楕円文が陰刻されたことがわかる。

(河野一隆)

石器類(尖頭器・剝片) 今回の調査地から出土した縄文時代の石器類は、合計6点である。このうち石器として認識できるものは、1の尖頭器のみで残りはすべて不定形剝片である。不定形剝片は片面加工のものが多く、二次的な加工などもなく、特徴的なものではないので3点のみ図化した。1は、厚みのある横長剝片を素材とする尖頭器である。ネガティブな打面を大きく残している。表面は求心的な剝離面で形成され、薄く鋭利になった先端部に刃こぼれ状の小さな剝離痕をとどめている。裏面は未加工で、蝶番状剝離により、端部はめくれ上がっている。表面の加工が求心的になされ、全体が木葉形に近く整えられ



第13図 出土石器実測図(2/3) 黒塗りは新しい剝離面

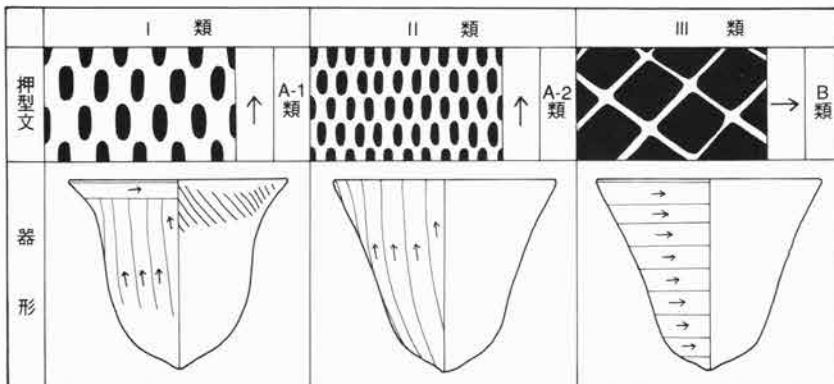
ている点から、片面加工の尖頭器と考えられる。長さ6.5cm・幅3.8cm・厚さ1.8cmを測る。石材はサヌカイト(二上山産?)を用いている。古墳の封土中から出土した。2は、表面に3面の剝離面をとどめる剝片である。上部を折損している。調整剝離の際にとられた調整剝片とも考えられるが明瞭ではない。残存長2.2cm・幅2cm・厚さ0.2cmを測る。サヌカイトを石材とする。旧表土中から出土した。3は、裏面に明確な打点を残す剝片である。表面の右側1/3を折損している。二次的な加工痕は認められない。長さ2.1cm・残存幅2.5cm・厚さ0.3cmを測る。石材は、黒曜石を用いている。肉眼的にみた色調や透明度などから隠岐産と見られる。4は、表面に1面のポジあるいは節理面をとどめる小剝片である。長さ1.5cm・残存幅1.7cm・厚さ0.3cmを測る。石材はサヌカイトである。

(黒坪一樹)

3. まとめ

嗎岡遺跡の押型文土器は、高山寺式に限定されるが、斜行沈線が半截竹管状工具で引かれている点とその間隔が短いことから、高山寺式前半代の土器群と考える。この時、三類の土器に時間差があるかどうかの問題である。層位的な証拠が必要であるが、黄島式土器を踏まえると、Ⅱ類が古くⅠ類、Ⅲ類の順で新しい属性を備えていると考える。ただ、この三類は時間的前後関係を示すものではなく、型式学的組列を意味するにすぎない。もっとも、黄島式と穂谷式の丹後での実態が不明瞭であり、押型文土器の編年は資料の増加を待つ必要がある。

現在、丹後半島内では13遺跡から押型文土器が報告されているが、すべてポジティブ押型文で黄島式、高山寺式、穂谷式に限られる。この中には、加悦町有熊遺跡のように三者が共伴する遺跡もあれば、この遺跡のように一型式に限られるものもある。出土量の多寡



第14図 嗎岡遺跡出土押型文土器復原模式図

が、必ずしも集落の継続性を意味するものではないが、ここで注意したいのは丹後地域の押型文土器が黄鳥式以降の後半期、中でも大部分が高山寺式に属する事実である。転じて、三重県の伊賀・伊勢地域では押型文前半期(大鼻・大川式)の遺跡が多く、後半期には遺跡数が減少する。また、隣接する但馬地域では黄鳥式の遺跡数が卓越している。このような事実から、縄文早期では旧国単位程度の地域間関係を構成する一方で、本来的には流動的な社会構造だったのではなかろうか。

ここで問題となるのが陥穴状遺構の存在である。陥穴猟が組織的狩猟方法の存在を意味するならば、もっと拠点的な集落が形成されてしかるべきではなかろうか。もっとも、静岡県三島市初音ヶ原A遺跡ではA T下層から13基の陥穴状遺構が検出され、^(E12) 陥穴猟と定住的集落とは分けて考えるべきものかもしれない。さらに、東日本では大規模な事例が知られており、西日本でも縄文早期段階の陥穴状遺構の確認例と集落遺跡の増加が望まれる。

なお、陥穴状遺構の埋土の最下層を花粉分析したところ、シイカシ類が卓越する一方、草地性の自然環境であったと^(E13)いう。実際どのような獲物を捕えたかは不明であるが、小動物が少なくなかったことが想像できる。これは、加悦町内の縄文早期の遺跡である嗎岡遺跡や有熊遺跡が標高40m程度の低位段丘上に位置することとも無関係ではないであろう。

(河野一隆)

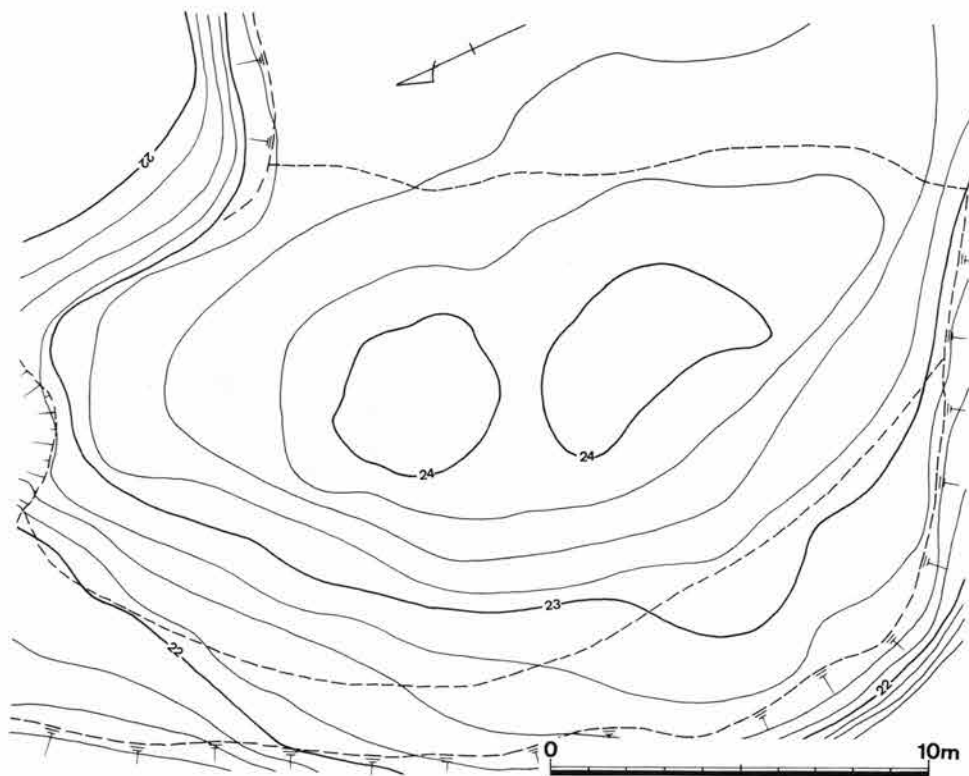


調査風景

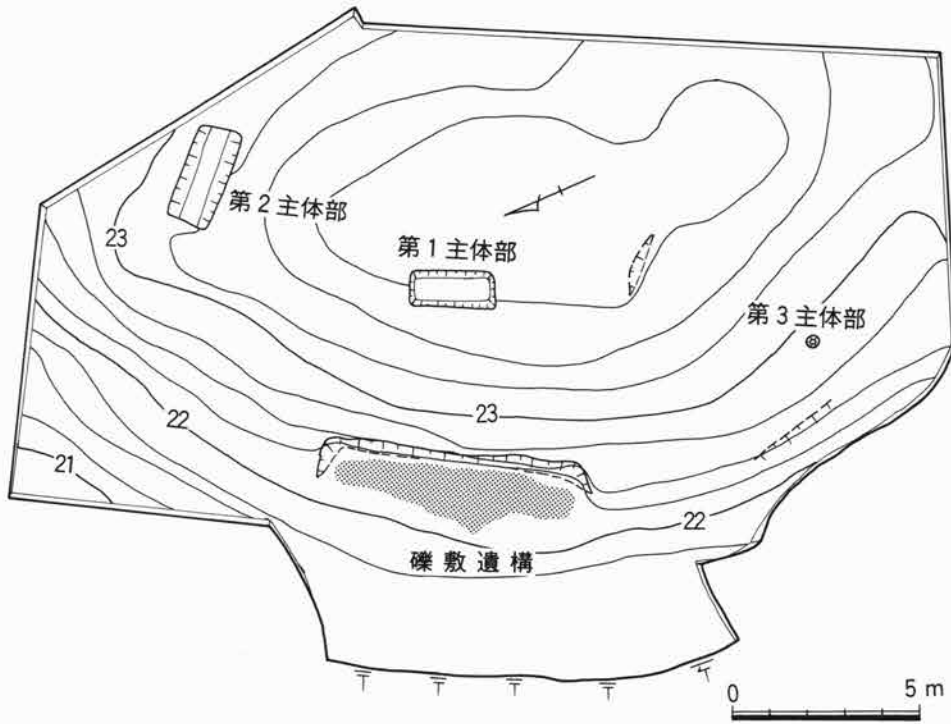
SHIRA GE YAMA KITA
 (3) 白米山北古墳

1. 遺構の概要

この墳墓は、白米山古墳からゆるやかに傾斜する丘陵端部にあり、前方部から北東40mに位置する。発掘前、ここはスギやマツの繁茂する鬱蒼とした林であった。北側と東側を一部、竹林造成によって破壊されているが、約1.5mのマウンドが確認できた。しかも、墳裾のラインがゆるやかに円弧を描いており、円墳の残骸と判断して発掘を開始した。古い地籍図によれば、ここは畑となっており凹凸が著しい。層位は、最上層が茶褐色の腐植土層、その下層に黄褐色の流土・耕土を介して地山にいたる。この黄褐色土からは近世陶磁器を検出し、開墾によってかなりの削平を受けたことが予想された。地山は、拳大の円礫を交えた灰黄色の粘質土である。墳丘は、主に平野に面した側を削り出して墓域を画する以外には区画施設を持たない。したがって、墳形に対する意識はなく、平面形は長方形に近い長軸27m・短軸14mを測る。墳丘は、現状では盛り土がほとんど見られない。埋葬



第15図 調査前地形図(1/200)



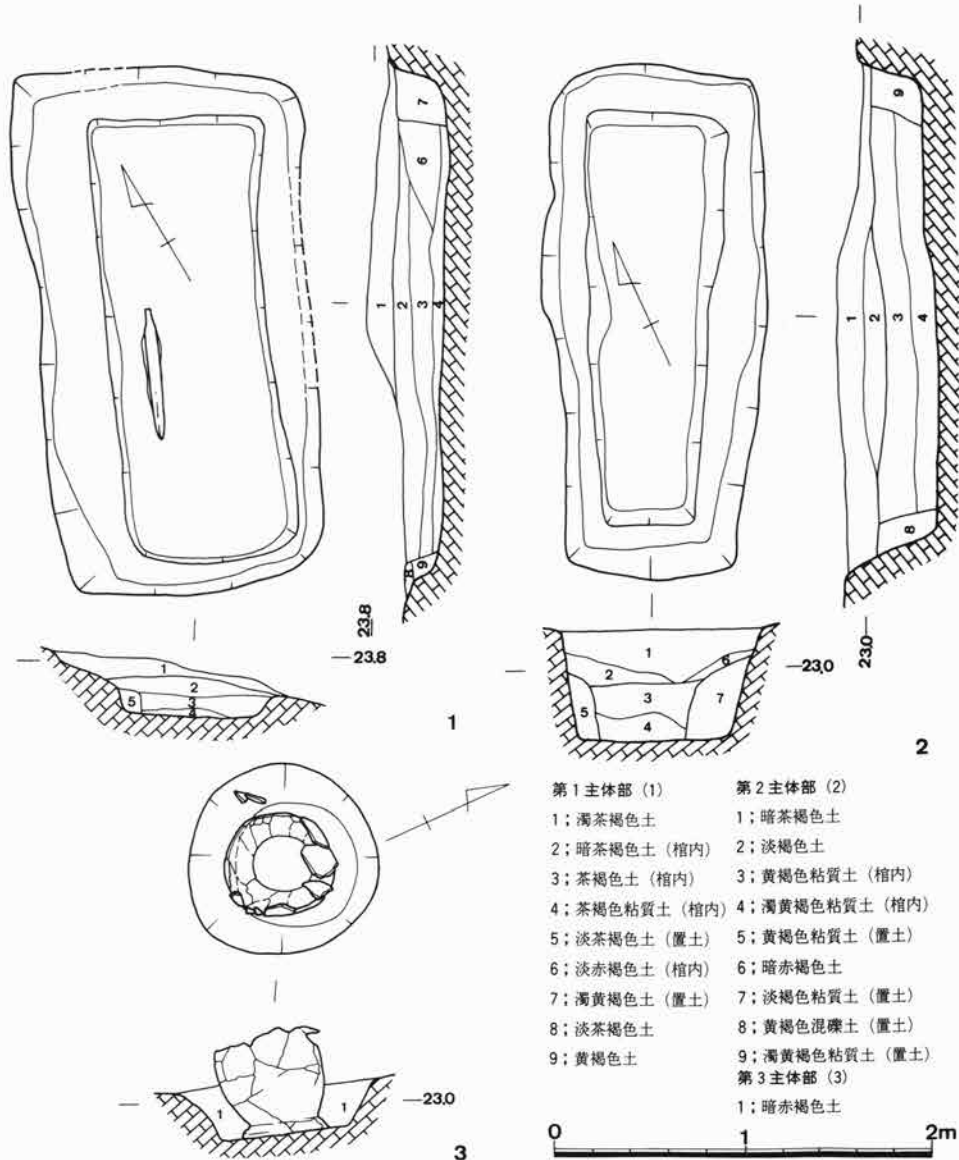
第16図 白米山北古墳 遺構配置図(1/200)

施設は、墳頂中央部に中心主体と考えられる木棺墓(第1主体)、墳頂北寄りに木棺墓(第2主体)、南西側斜面上に土器棺墓(第3主体)を検出した。さらに、西側墳裾部には墳丘を削り込んで礫敷遺構を築造していた。

2. 埋葬施設

第1主体は、長さ2.8m・幅1.4mを測る墓壇に、長さ2.3m・幅0.85mの箱形木棺を据える。木棺は地山の直上に置かれている。棺痕跡はほとんどなく、詳しい型式はわからない。副葬品は、棺床北寄りに鉄剣が切先を北に向けて納められていた。これは、抜身に布が巻かれている。これは被葬者の佩用状態と判断され、南頭位であったと推定される。なお、これ以外には墓壇内も含めて副葬品はなかった。

第2主体は、長さ2.7m・幅1.1mを測る墓壇に、長さ2.2m・幅0.65mの箱形木棺を据える。木棺は、第1主体よりも狭長な印象を与えるもので、南東側小口がやや幅広い。木棺は、地山直上に置かれるが、棺構造の詳細は不明である。副葬品は、棺内には全くなかった。ただ、墓壇内の棺蓋上面に甕の口縁部が破碎供献されていた。これは、位置的に被葬者の腹部上面である。木棺幅の相違から、頭位は南東であったと推定される。



第17図 第1・2・3主体部実測図(1/40)

第3主体は、ゆるやかに南西に傾斜する斜面を径1.0m・深さ0.25mに掘り込んで、倒立させた甕を納めた甕棺墓である。体部下半は破損し、内部に落ち込んでいた。

3. 礫敷遺構

この墳墓を特徴付ける施設は、先述の礫敷遺構である。これは、平野側の墳丘を削り込んで、長さ6.7m・幅2.5mの長方形の平坦面を造りだし、そこに円礫を一面に敷き詰めたものである。円礫は、拳大の川原石で地山に含まれるものと共通するが、量的に見れば野



第18図 碟敷遺構実測図(1/40) 梨地は土器

田川や温江川から運ばれたものもあると思われる。礫敷は、精粗があって南側ほど厚く、ゆるい孤状に集積している。これは、南側の一点で祭祀行為が行われ、それを中心として礫敷がなされているためであると考え。この礫敷遺構と墳丘築成との先後関係は、層位としてつかむことができなかつた。しかし、この円礫の間には旧表土と見られる黒褐色土が見られることから、墳丘の平野側の削り出しと並行して、この施設が築かれたと判断する。したがって、この礫敷遺構は墳頂の埋葬施設に対するものとみなしたい。

礫敷遺構からは、土器8点と鉄鏝1点が検出された。供献土器は、大きく2群に分かれるので北群・南群と呼称する。南群の土器は、貯蔵用の器種に限定され、胎土や器形から非在地系(河内産の壺1、北陸系の壺2)の土器と判断される(第20図)。いずれも破碎供献されており、壺1は頸部以上、壺2は体部下半が復原できなかった。しかも、両者は礫と混在、あるいは明らかに礫の下面からも破片が出土し、この供献行為が礫を敷くのと同時に行われたことを裏付ける。ただ、壺1は斜面上方側に、壺2は墳裾側に破片の集積が見られた。これは、土器供献が破碎し散布することを目的としたのではなく、しかるべき儀式を執行した後に、その場で土器が破碎されたことを意味している。中でも、壺1は底部が礫敷遺構を削り出した斜面中であって、礫敷遺構の上方に置かれていた土器が転落した状況を示していた。

これに対して、北群の土器は、供膳用の器種に限定され、台付鉢3(6・7・8)、高杯1(5)、器台1(10)が並置されていた(第21図)。特に、台の付いた「捧げ持つ」ことを意図した器種であることが注意される。これらは、在地の土器様式を構成するもので、丹後産の土器とみなされる。しかも、南群の土器とは異なり、礫面上に置かれていたものが土圧でつぶれた状況を呈しており、大部分が完形に復原できるものであった。したがって、これは、礫敷完了後に行われた儀式で使用された土器が、原位置で検出されたものと推定される。土器の配置は、最も外側に台杯鉢、続いて高杯と器台を求心的に配列するが、これは孤状に敷かれた礫にほぼ対応する。なお、この二群以外では遺構面で検出された土器がなく、礫敷遺構内からは煮沸用の器種である甕や甔が全く検出されなかつた。また、この北群土器と混在して、柳葉形鉄鏝が切先を下に向けて検出された。矢柄は不明であるが、土器群の上に置かれた矢が腐朽したものと考える。

以上の出土状況から、礫敷遺構においてなされた祭祀の状況を考察したい。実際には、墓前祭祀として一括される儀式であろうが、説明の便宜上、以下の3段階に分ける⁽¹⁴⁾。

第1段階；礫敷遺構が削り出されるが、礫が敷かれていない時点。河内産の壺1が、礫敷遺構の上面(墳頂ないしは斜面)で行われた儀式に、北陸系の壺2が礫敷遺構内で行われた儀式に使用される。両者に時間差があったかどうかは不明である。儀式の終了後、壺1

を下方へ崩落させ、壺2は現場で破碎する。

第2段階；磔敷遺構内に磔が配される時点。この際、第1段階で使用した土器も、磔と一緒に敷かれる。

第3段階；磔敷が完了した時点。磔の上面の南側で丹後産の土器による儀式が行われる。儀式後は土器が並置されたままである。

なお、改めて土器供献のあり方を図式化すれば、次のようになる。

(a)貯蔵容器.....非在地(河内・北陸系).....破碎供献。

(b)供膳容器.....在地(丹後)系.....並置供献。

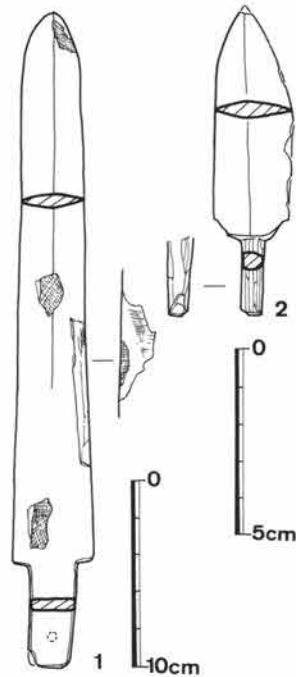
なお、この磔敷遺構の対象は不明であるが、第1主体とほぼ平行している点と、第1主体に供献土器がない点を考慮すれば、中心主体である第1主体に対するものであろう。

4. 出土遺物

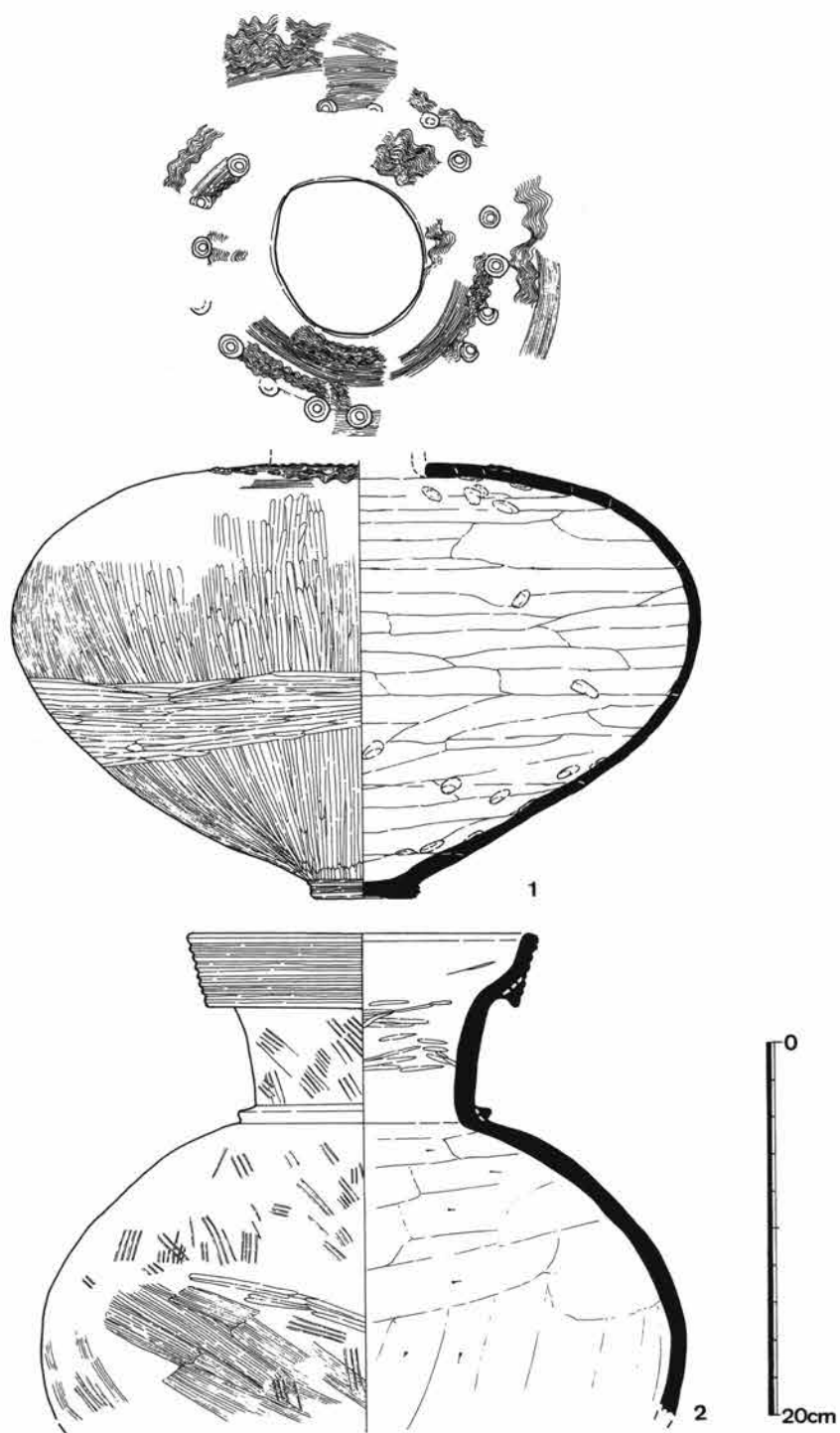
第1主体に副葬した鉄剣、第2主体の棺蓋上面に供献された甕を除けば、大部分が磔敷遺構から検出されたものである。鉄製品2(剣1、鏃1)、土器9(壺2、甕2、台付鉢3、高杯1、器台1)を数える。土器は、全般にいていねいにヘラ磨きされた精製土器が多い。

鉄製品 1は、明瞭な鑄を持たない鉄剣で、長さ34.5cm・幅4cmを測る。剣は、庄内期～古墳前期特有の茎が剣身に対して短いもので、関部が最大幅を有する。茎は、長さ5.5cm・幅2.5cmを測るが、木質の付着、目釘孔の位置とも不明である。なお、外面には目の細かい布圧痕が剣身の直上に認められ、抜身の剣を布巻きして副葬したことがわかった。しかも、圧痕は直線的に終わっており、織り綴じた布製品が使用されている。2は、鏃身中央にややあまい鑄を持つ両鑄の柳葉形鉄鏃である。鏃身長8cm・同幅2cm・茎長2cm・同幅0.6cmを測る。鏃身は、ふくらを持たない先鋭な切先とゆるやかに外湾する関部を特徴とする。特に、関部は厚くシャープに仕上げられ、刃部との境に稜をつくりだす。茎は、研磨により面取りされている。このような形態は、古墳時代の定型化した銅鏃に近い。

土器 1は、算盤玉状の胴部に突出した平底を持つ壺で河内産と判断される。現存高23cm・胴部最大幅36cmを測る。頸部より上を全く欠失して擬口縁で終わるが、二

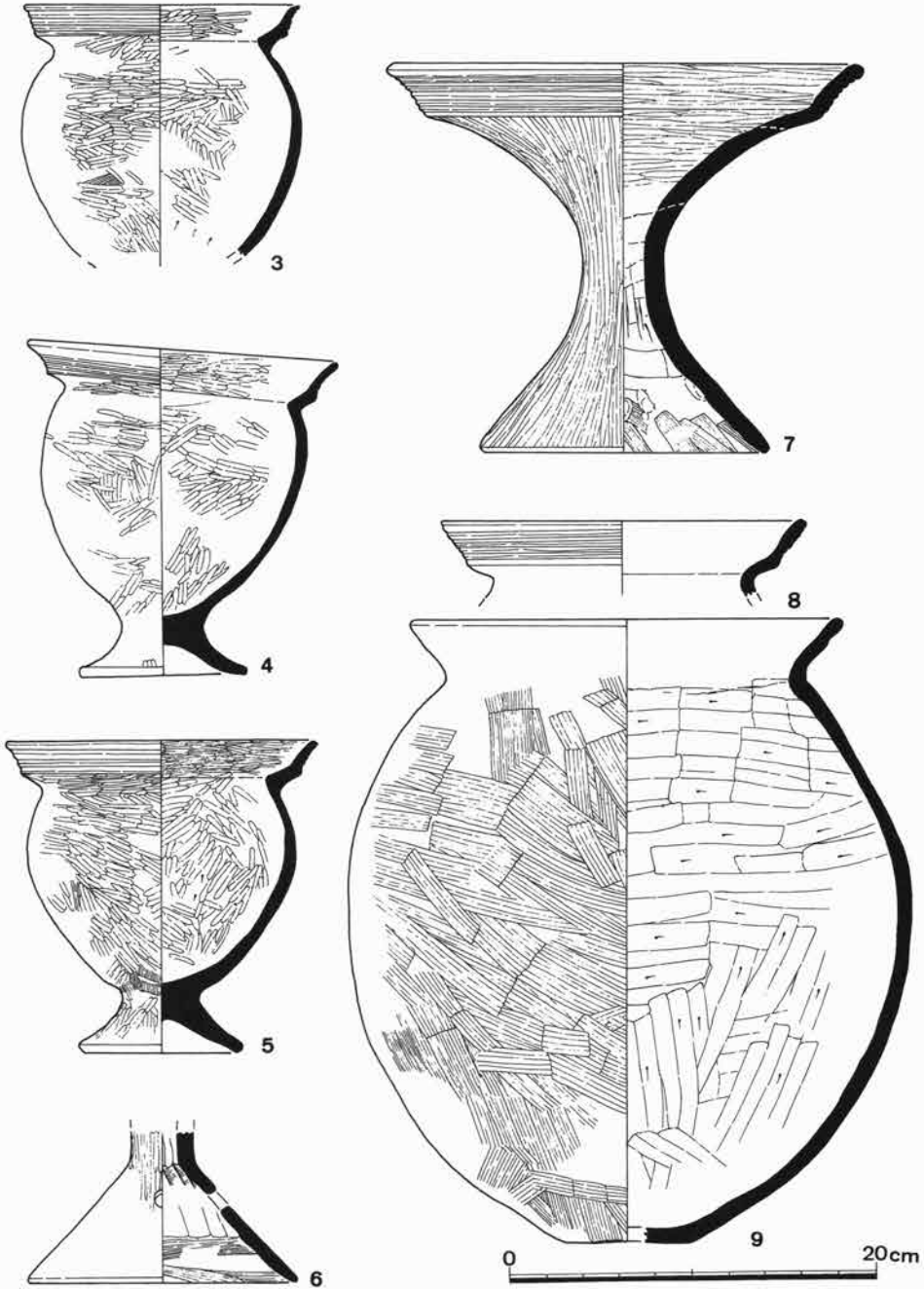


第19図 白米山北古墳出土鉄製品
(網目は布痕跡)



第20図 白米山北古墳出土土器実測図(1) 1/4

重口縁壺と思われる。後円部に櫛描きの直線文と波状文を2回繰り返してめぐらせ、その後で18個の円形浮文を貼り付ける。胴部は、下半に縦方向のミガキ、中央に横方向のミガキを基調とするが、かなり錯綜している。内面はナデがほとんどで、一部をケズリで仕上



第21図 白米山北古墳出土土器実測図(2) 1/4

げている。胎土は、暗赤褐色～茶褐色で、角閃石を多量に含み、生駒西麓で生産された土器と共通する。2は、下ぶくれの胴部に直立した口頸部が取り付く壺である。現存高26cm・胴部最大幅34cmを測り、胴部下半を欠失する。ただし、底部の小片から、突出しない平底になると推定される。口縁部は上下に拡張させて、7条のヘラ描きの凹線状の沈線を引く。頸部には断面三角形の突帯を貼り付ける。外面は、ハケ目で調整するが、胴部下半はより細かなハケで調整する。内面は、上半を横方向、下半を縦方向にヘラ削りする。胎土は、明るい橙褐色で、石英が目立つ。この壺は、明瞭な凹線を直立した口縁部に施し、肩部に突帯を持つ点から、北陸系の土器と考えられ、金沢市新南保D遺跡(A地点)などに類例がある。3～5は、精製の台付鉢である。3点ともほぼ同形、同大で、外反する口縁部に擬凹線を持つ。外面は、横を基調とするていねいなヘラ磨き、内面はヘラ削りの後、ミガキによって仕上げる。胎土は、黄褐色で在地産の土器と見られ、類例が加悦町内和田5号墳、須代遺跡にある。野田川水系に集中する器種らしい^(注15)。6は、高杯の裾部で1つの円孔がある。裾径14.8cmを測る。外面は縦方向のミガキ、内面を板状の工具でナデて調整する。胎土は、赤褐色で均質である。このような1孔の高杯は、弥栄町大田4号墳下層SX01から出土している。7は、器台で、口縁部に7条の擬凹線を持つ。器高21cm・口縁径26cmを測る。台部を縦方向のミガキで仕上げた精製土器である。赤褐色の胎土を持つ。8は、第2主体部棺蓋上面で検出された甕の口縁部で、擬凹線を持つ。胎土は、黄褐色であるが、台付鉢のものより粗い。9は、第3主体に転用された甕で、「く」の字口縁であるが、一部に抉ったようなあとがあり、二重口縁を意識しているのかもしれない。口径24cm・器高34cmを測り、径7cmの平底を持つ。口縁は厚手のつくりで、端部は肥厚しない。外面は横ハケ、内面は胴部をヘラ削り、口縁部を横ハケで調整する。胴部中央に黒斑を持つ。黄褐色の胎土で在地産の土器と判断される。

なお、これらの土器は、おおむね庄内期新段階に並行すると考えているが、丹後地域における当該期の土器編年には不明な点が多く、次節で若干の考察を加えたい。また、第3主体の甕は時期が下り、布留式中段階に並行すると考えられる。

5. まとめ

白米山北古墳は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての墳墓であり、「古墳」の名称はやや不適切かもしれない。墓葬の様式上は、鉄剣の副葬や土器の破碎供献などの点で、丹後地域の弥生墓の伝統にのるとみて差し使えないが、丹後・但馬で一貫して築かれる台状墓から、一步古墳へ踏み出した要素も認められる。例えば、円礫と土器破碎の組み合わせに限れば、弥生終末期の岡山県楯築墳丘墓や京都府芝ヶ原12号墓などで見られる。

これらは、主体部の上面に礫敷の施設を設けている。また、礫敷ではないが、墳裾に土器供献の施設を設けた例に、鳥根県順庵原1号墓がある。これは、周溝内に3つのストーンサークル状の施設を設けて甕などを供献する。弥生後期の丹後・但馬では、墓壙上面に高杯などを供献するほかに、棺上ないしは棺側に甕や火を受けた壺を破碎するのが一般的なあり方であるが、布留式土器が波及する直前から、破碎供献は衰退して墓壙上面での土器祭祀が基本となる。例えば、弥栄町大田南2号墳では、墓壙埋土上面に、台付鉢や鼓形器台などが供献されている。また、加悦町鳴谷1号墳では古墳築造後、南側の尾根に二重口縁壺や高杯を置いている。弥生時代から古墳時代へ移行するにつれて、土器祭祀の場が棺上・棺側→墓壙上→墳丘の施設という具合に、被葬者から離れていく流れが想定できる。これらを踏まえると、白米山北古墳の場合は墳裾に礫敷遺構を設けているから、加悦谷の首長墳へとつながる要素を備えている。いずれにせよ、「定型化する以前の古墳」の墓制の複雑な様相を示唆する事例と言えよう。

白米山北古墳からは、非在地系の壺が在地産の土器と共伴して検出された。加悦谷地域では、前方後円墳登場以前に畿内系土器の搬入が確認されたことになる。従来まで、この地域の土器には北陸・山陰の影響が指摘されていた。もっとも、時期を違えれば、加悦町須代遺跡では細頸壺、丹後町大山遺跡では大型壺が河内地域からの搬入土器として知られている。また、隣接する若狭では美浜町口瀬子遺跡に庄内河内型甕がある。丹後でもこの時期の畿内系土器の出土例が今後増加することが予想される。なお、中丹地域では福知山市寺ノ段1号墳の墳丘上で加飾された二重口縁壺が出土していることをつけ加えておく。

次に、白米山北古墳の土器が丹後の土器編年上いかに位置づけられるかを議論したい。ここでは、同じ水系の野田川町西谷墳墓群、加悦町内和田4・5号墳、宮津市霧ヶ鼻古墳群をはじめ、大宮町帯城墳墓群、弥栄町大田南2号墳、豊岡市鎌田若宮3号墳の墳墓資料と峰山町古殿遺跡、舞鶴市志高遺跡の集落の資料を取り上げたい。これらは、在地産の土器に加えて非在地系の土器も出土しており、後者の波及状況からいくつかの前後関係が指摘できる。そこで、以下の四段階に整理した。

第1段階(西谷墳墓群、帯城墳墓群A支群、古殿S X11)；畿内系の二重口縁壺や北陸系の装飾器台が普及しはじめる時期。甕や鉢の口縁部の擬凹線がまだ残っている。古殿Ⅱ期に対応。

第2段階(白米山北古墳礫敷遺構、内和田4・5号墳、鎌田若宮3号墳)；北陸系の高杯、器台や山陰系の鼓形器台や低脚杯などが波及する時期。特に、山陰の影響が強くなる時期で、山陰系甕が普及していく段階と推定される。擬凹線がほとんど消滅している。特に、白米山北古墳が古相、後二者が新相を占める。おおむね古殿Ⅲ期、志高弥生X期に対応。

第3段階(大田南2号墳)；山陰系の影響が強くなり、北陸系の土器が衰退する時期。この段階での畿内系土器の波及状況は不明である。志高古式土師器Ⅰ期にはほぼ対応。

第4段階(霧ヶ鼻古墳群、蛭子山1号墳などの前方後円墳、白米山北古墳第3主体)；布留式土器様式が波及し、強い影響下に置かれる時期。山陰系の土器は、鼓形器台などの一部の器種のみが残る。おおむね古殿Ⅳ期、志高古式土師器Ⅱ期に対応。

個々の遺跡ごとに相違があるから、1から4へ単系的に進むと考えることはできないが、地域色の強い丹後地域の弥生土器が斉一的な布留式土器様式に移行するまでには、このような四段階があったと考える。波及の実態については資料があまりに少ない。ただ、中丹地域では畿内系の土器が特に多く出土する遺跡(例えば綾部市三宅遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡など)を拠点として波及していったと想像される。丹後地域にそのような遺跡があるかどうかは即断できないが、当センターが発掘調査した弥栄町ニゴレ遺跡などはそうした拠点集落の候補地となるであろう。いずれにしても、墳墓資料に片寄りすぎており、集落遺跡の調査がある程度進んだ段階で、丹後地域の土器編年の見直しを迫られる時が来ると思われる。

今回の調査では、弥生後期の台状墓と大型前方後円墳とをつなぐ墓制の資料、ならびに土器や祭祀の様相を把握する上で興味深い事例を確認することができた。白米山古墳の年代を確定する資料は得られなかったが、蛭子山1号墳に先行して築かれたという可能性がやや高まったのではなからうか。白米山北古墳の調査成果は、畿内周縁部における弥生時代から古墳時代への移行という問題とも密接に触れ合うだろう。しかし、当該期の資料はまだまだ少なく、この遺跡も依然大きな問題点を投げ掛けている。

(河野一隆)

注1 これらの遺跡の概要は、1993年9月7日に両丹技師の会で発表した。また、白米山北古墳については、中川 寧氏が12月11日の京都弥生談話会で紹介した。中川氏をはじめ、ご教示をいただいた諸兄に深謝したい。

注2 石崎善久「2 嗎岡遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注3 調査に当たっては、京都府宮津土木事務所・加悦町教育委員会・京都府教育委員会など、関係諸機関に御協力いただいた。また、都出比呂志氏、佐藤晃一氏、網谷克彦氏、矢野健一氏、東高志氏、鈴木一有氏には現地並びに本報告作成時にご指導いただいた。また、下記の調査参加者にも感謝の意を表したい(敬称略・順不同)。

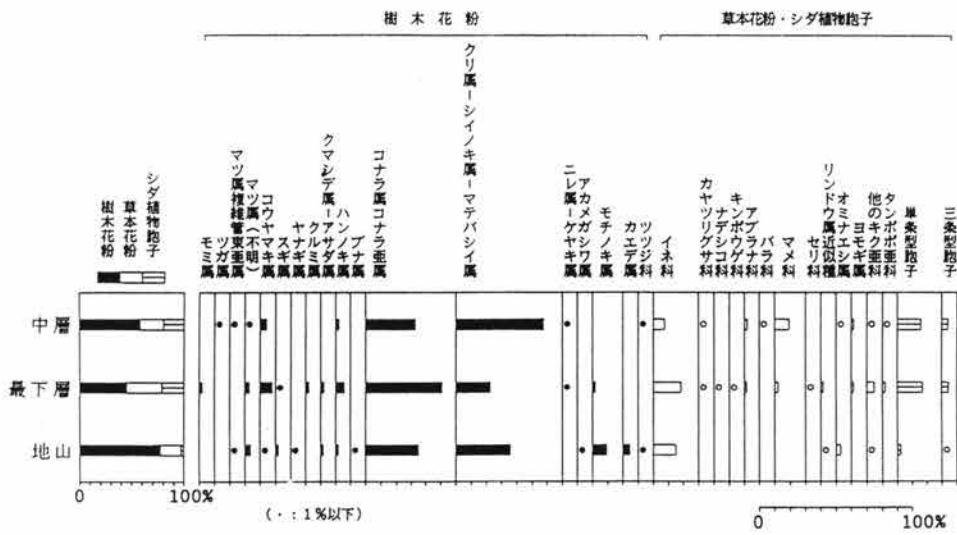
石塚真智子、杉本恵美、中川 寧、藤田 輝、宮本康治、大庭篤志、松村英之、井上智雄、越中聡、向仲美香、岩田貴之、正田季美枝、田中ゆかり、岩本みどり、唐木祐香里、野口美乃、小牧義雄、土井正一、山上初野、市田操子、森垣実夫、田中喜一、杉本利一、西原久枝、山本

むつ枝、小田静枝、香山利幸、杉本 守、川瀬孝史、小倉雄二郎、野村幸代

- 注4 浪江庸二編『後野山古墳群発掘調査報告書』加悦町教育委員会 1981
- 注5 白米山古墳は、過去に同志社大学考古学研究会によって須恵器甕が表採されている(『同志社考古』第7号 1969)が、これは周囲の円墳からのものと考え。特に、蛭子山1号墳よりこの古墳が先行するか否かで、議論が分かれている。
- 注6 なお、岩滝町赤鼻古墳にも転用杭が確認されている。
- 注7 「多摩ニュータウンNo.182遺跡」『多摩ニュータウン遺跡-昭和60年度-(第1分冊)』(財)東京都埋蔵文化財センター 1987
- 注8 岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性-近畿-」『日本の考古学』第2冊 1965
- 注9 置田雅明・矢野健一「奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査」1988
- 注10 浦 弘「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」『考古学』10-7 1939
- 注11 片岡 肇「近畿地方における押型文土器文化について」『平安博物館研究紀要』第5輯 1974
- 注12 「サルからヒトへ-最古の文化と瀬戸内-」広島県立歴史博物館 1993。写真51
- 注13 (株)パレオ・ラボに委託した。その分析結果の一部を以下に記す。

試料は、植物遺体の小片が多く、検出された花粉化石も保存状態の悪いものが多かった。地山試料では、コナラ亜属やクリーシイ類が多く、モチノキ属を含めて、これらが目立つ植生であったと予想される。埋積土試料では、コナラ亜属やクリーシイ類のほか、イネ科やアブラナ科、キク亜科やタンポポ亜科などが生育する草地的な環境の存在も予想される。これは、埋積土中層試料でも同様である。この遺跡には、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がっていたと思われる(鈴木 茂「いななき岡遺跡の花粉化石」『国道176号関係遺跡(嗎岡)花粉化石業務報告書』1994より一部改変して抄録)。

- 注14 福田 聖「方形周溝墓と儀礼」『埼玉考古学論集』1991
- 注15 この器種は、大山墳墓群周辺17主体墓壙上面から出土したものが初見であり、加悦町内和田5



第22図 検出花粉化石比率分布

付表1 検出花粉化石一覧表

和名	学名	中層 最下層 地山		
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	-	2	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	-
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	-	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	3	4
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	6	8	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	1	2
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	1
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	2	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	2	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	3	6	2
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	49	51	38
クリ属-シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanea-Castanopsis-Pasania</i>	85	23	39
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	1	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	-	1
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	2	10
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	5
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	1	-	1
草本				
イネ科	Gramineae	19	41	21
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-
キンボウゲ科	Ranunculaceae	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	5	3	-
バラ科	Rosaceae	1	-	-
マメ科	Leguminosae	24	5	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-
リンドウ属近似種	cf. <i>Gentiana</i>	-	3	1
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	1	-	4
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	3	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	11	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	4	-
シダ植物				
単条型孢子	Monolete spore	41	38	3
三条型孢子	Trilete spore	10	10	1
樹木花粉	Arboreal pollen	148	101	108
草本花粉	Nonarboreal pollen	58	74	27
シダ植物孢子	Spores	51	48	4
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	257	223	139
不明花粉	Unknown pollen	48	70	50

号墳、須代遺跡、宮津市桑原口遺跡、弥栄町大田南2号墳、福知山市論田2号墳などにある。

2. 堀坂神社古墳群発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都府土木建築部が計画・推進している「網野久美浜線道路改良事業」の工事に先立ち、依頼を受けて行ったものである。

堀坂神社古墳群は、京都府熊野郡久美浜町字長野小字五反田に所在し「長野ノ古墳」として、金環1・銀環5・刀1・鉄斧1・土師器12・須恵器40余りの出土遺物と石室の形態に関し、1923年に報告されている^(注1)。しかし、古墳の明確な位置や石室及び出土遺物の実測図などが欠けており、今回の工事計画が起因となり、その範囲を発掘調査することで記録の補足を行うこととなった。調査は、平成5年7月7日から9月8日まで行った。掘削面積は180㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同調査員岡崎研一が担当し、本報告の執筆は岡崎が行った。現地での調査及び整理作業にあたって地元有志ならびに学生諸氏、久美浜町教育委員会、長野区をはじめ多くの方々の協力を得た^(注2)。記して謝意を表したい。なお、調査に係る経費は京都府土木建築部が負担した。

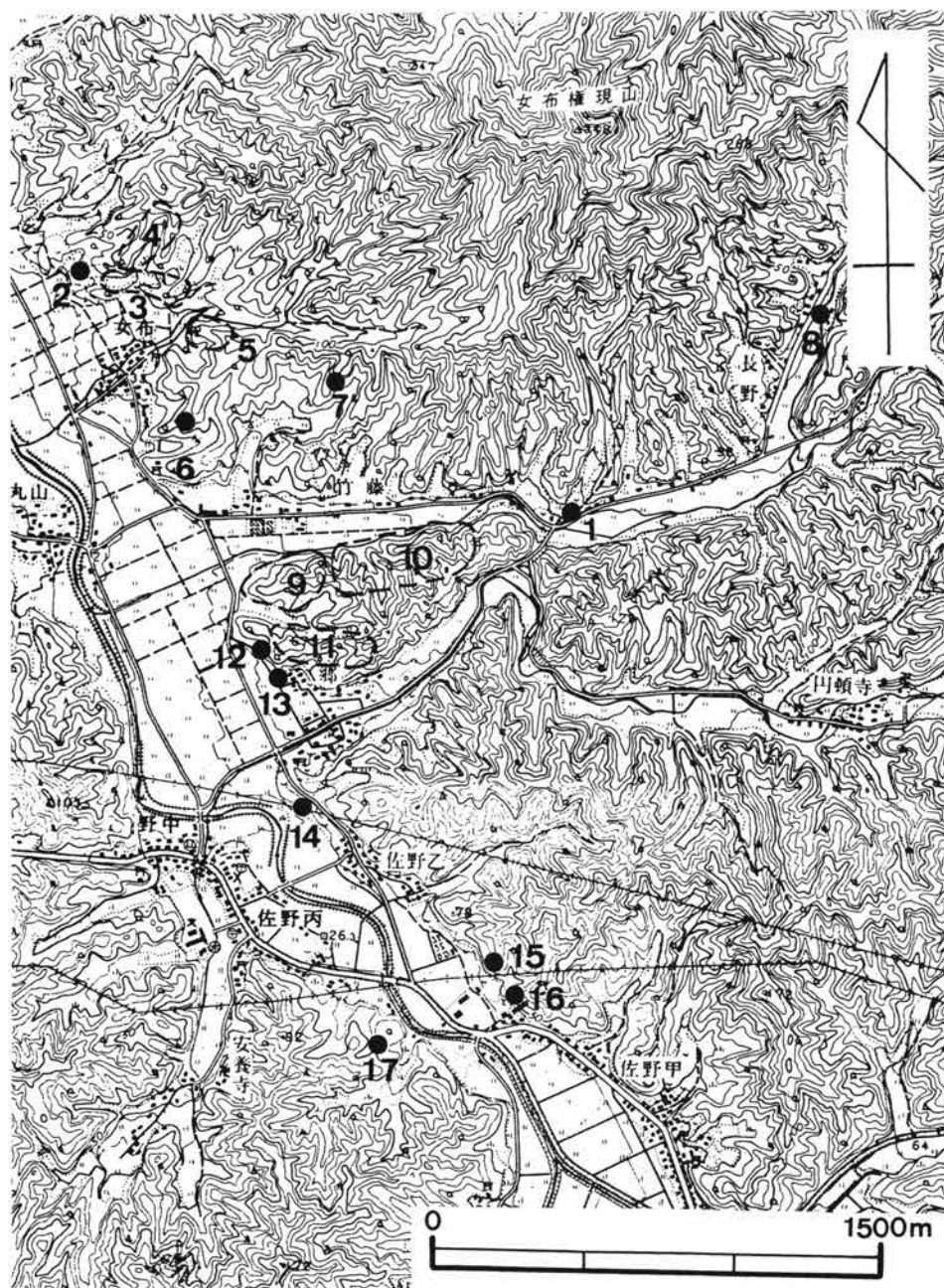
2. 位置と周辺の遺跡

久美浜町は、京都府北西部に位置し、町北部には久美浜湾があり、湾に注ぐ主な河川として東側から佐濃谷川・川上谷川・栃谷川・久美谷川がある。これらは、いずれも久美浜町南側の但東町や豊岡市の山間部から北流する。堀坂神社古墳群は、佐濃谷川中流域右岸の谷筋に位置する。佐濃谷川沿いには幅約800mの沖積平野が形成され、丘陵上に古墳群や城跡が、丘陵裾部から平地にかけて集落跡や散布地など、多くの遺跡が確認されている^(注3)。

縄文時代の遺跡としては、函石浜遺跡^(注4)や浦明遺跡^(注5)など、主に日本海に面した遺跡から縄文土器が出土しているが、遺構に伴うものはない。今回の調査地内からも黒色土が一部に見られ、ここから数点であるが縄文土器片が出土した。久美浜町内において、内陸部での縄文土器の出土は非常にめずらしいものといえる^(注6)。

弥生時代のものである、弥生時代中期から古墳時代後期に至る竪穴式住居跡などの遺構を検出した浦明遺跡や、弥生時代中期から古墳時代中期の集落跡である橋爪遺跡などがある。これらは、久美浜町の数多くある遺跡の中でもこの時代の代表的な遺跡とされている^(注7)。

古墳時代になると、築造年代が4世紀後半頃と考えられている島茶白山古墳がある。前



第23図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図

- | | | | |
|-----------------|-------------------|------------|-----------|
| 1. 堀坂神社古墳群(調査地) | 2. 鶏塚古墳 | 3. 薬師古墳群 | 4. 北谷古墳群 |
| 5. 大堀地古墳群 | 6. 呑谷古墳 | 7. 高蓮寺古墳 | 8. スベリ石古墳 |
| 9. 卯谷古墳群 | 10. 山部古墳群 | 11. 家の奥古墳群 | 12. 郷古墳 |
| 13. 堂垣古墳 | 14. 下村岡古墳(千鳥ヶ岡古墳) | 15. オカガヒ古墳 | |
| 16. 親王の森古墳 | 17. 山本古墳 | | |

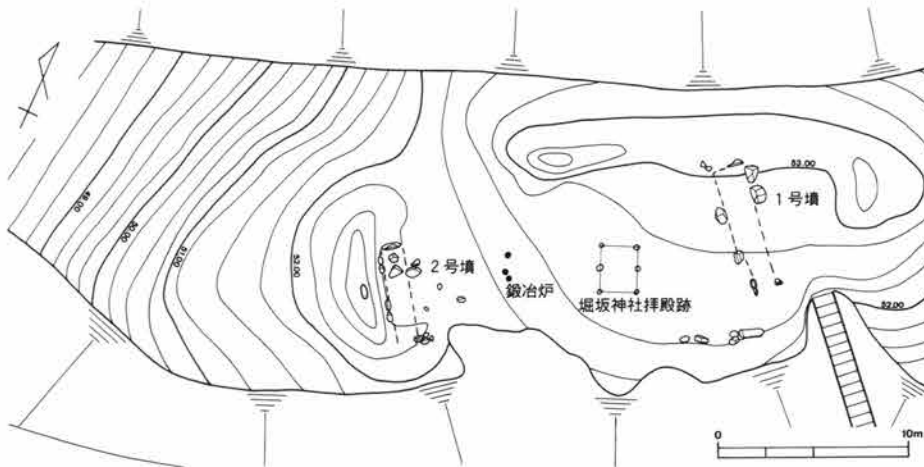
方後円墳で全長は約40mを測る。中期になると、前方後円墳の岩ヶ鼻古墳や芦高神社古墳がある。いずれも全長は、40～50mを測る。また、昭和57年に発掘調査された権現山古墳は、最大級の方墳で5世紀前半と考えられている。後期になると、蒲井古墳群や大明神古墳群などのように丘陵上に多くの古墳を構築するようになる。主体部は木棺直葬墳や横穴式石室の二者があるが、6世紀中頃をさかいに、埋葬形態は変わる。^(注8)

古墳時代後期になると、川上谷川東岸、須田の伯耆谷付近に約70～80基の古墳が群をなしている。これは、この地域が中心的地域であったことを物語る。

堀坂神社古墳群は、この地域から離れ、佐濃谷川沿いに開けた平野部につながる狭小な谷奥の丘陵先端に構築された古墳で、総数は2基である。崖面に石室の一部が露出し、また大正時代の調査記録などから、2基とも6世紀後半頃の横穴式石室を主体部とする古墳と調査前からわかっていた。この付近には主要な遺跡はなく、佐濃谷川沿いの字佐野に下村岡古墳または千鳥ヶ岡古墳と呼ばれる石室が畑の中に存在する。やや大きめの石を積み上げて築いた石室は、一部石材を抜かれ、墳丘はすべてない。また、国営農地団地造成に先立ち同年に調査が行われた字女布の鶏塚古墳がある。いずれも群をなさず1～2基程度を基本として構築されている。これは川上谷川東岸などに見られる様相と反しており、この時代におけるこの地域は、いくつかの小さな集落が営まれていたところと考えられる。

3. 調査概要

堀坂神社古墳群は、2基からなる。古墳の名称は、大正時代の調査時の名称をそのまま踏襲した。すなわち、丘陵先端側の古墳を2号墳、尾根基部側の古墳を1号墳とした。2号墳は、調査前から側壁ならびに奥壁の石材が見えており、石室の規模をほぼ知ることが



第24図 堀坂神社古墳群地形測量図

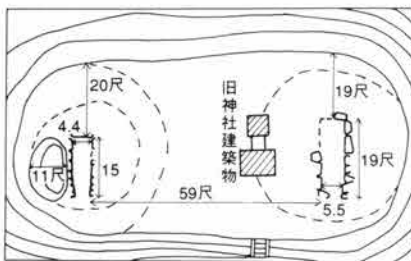
できた。これを基準に墳丘の調査を実施した。1号墳は、位置を確認できず、試掘調査で確認することにした。その結果、今回の工事範囲には1号墳は羨門部がかかることがわかり、その部分調査を実施し、2号墳はほぼ全部がかかるため、全面調査を行った。

遺跡名称からもわかるように、古墳が位置する丘陵上には、後世に堀坂神社が建設されており、1号墳から2号墳の墳丘にかけて拝殿が建っていた。明治期から大正期にかけてこの神社付近は地元の子供たちの遊び場となっていたようで、地面を掘れば器や刀が出てくると、掘り出しては拝殿の付近に置いていたと言われる。その後、道から拝殿までの石段の付け替え工事が行われ、神社も自然に崩壊してしまい、掘り出した土器類は、この時によく残っているものだけに限り、長野区ならびに地元の学校で保管したようである。現在、須恵器・土師器計約17点が長野区で保管されている。また、刀については神社に放置していたため、壊れたようである。今回調査を行うにあたって、保管されている土器を快く借用することができた。これらの土器についても、出土遺物の項で触れることにしたい。

このように、堀坂神社古墳群は、後世にかなりの削平を受けており、墳丘の大半はなかった。かろうじて2号墳の西側に石室床面付近から約1mの残丘を確認した。1号墳においても墳丘はすべて無く、今回の調査範囲が羨門付近に限られたことから、古墳の規模などについては明らかにできなかった。

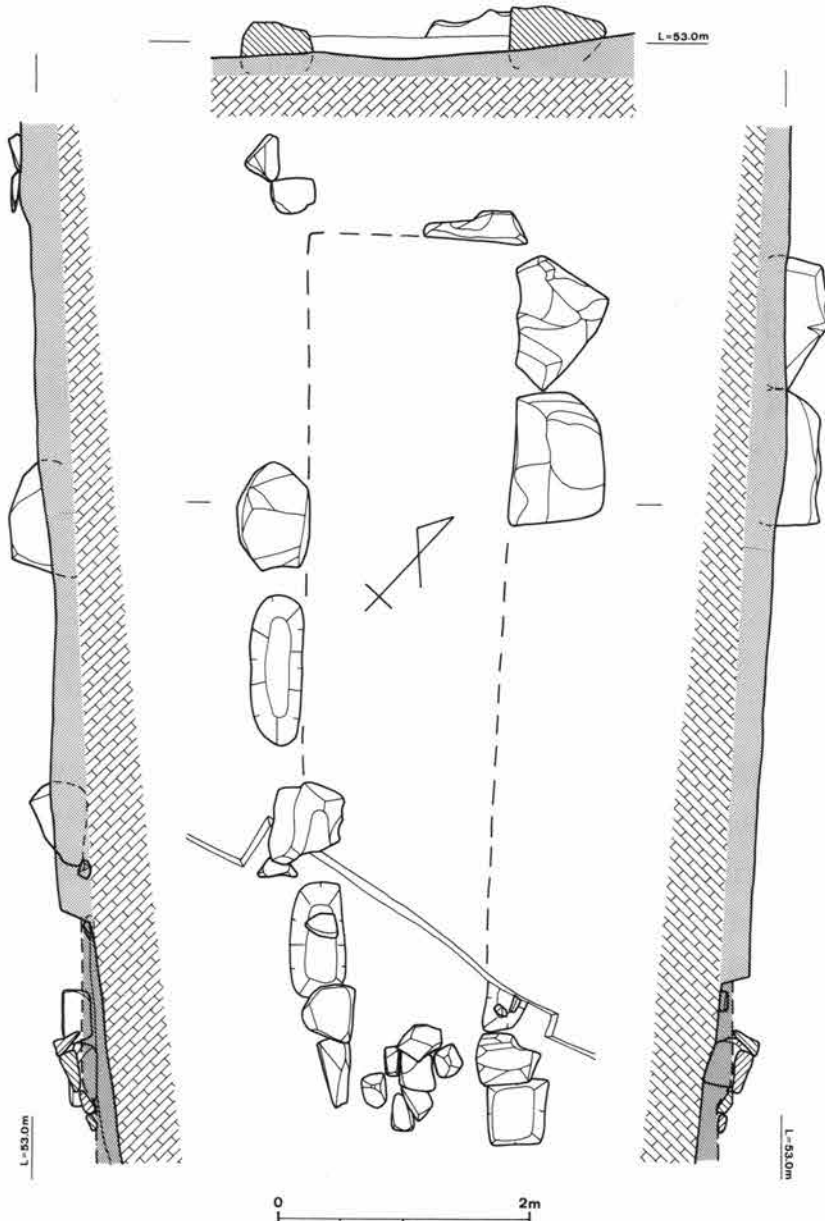
4. 検出遺構

1号墳 大正時代の発掘調査記録によると、2号墳から北東に約18mのところにある右片袖の横穴式石室である。石室の基底石が残っていたにすぎず、確認するかぎりでは、玄室長約5.7m・玄室幅約1.6mを測る。当時の図面を見るかぎりでは、羨道部の調査はされておらず、石室の長さについては不明であった。今回の調査は羨門部付近のみの調査となった。石室は南東方向に開口しており、5～6石の閉塞石を検出した。二つの調査記録を合わせると、今回調査を行う際に奥壁と見られる石が残っていたことから、石室確認長約7.3m、羨門部での幅約1.1mを確認することができた。羨門付近からの出土遺物はなく、



第25図 長野ノ古墳外形図(1923年測量図)

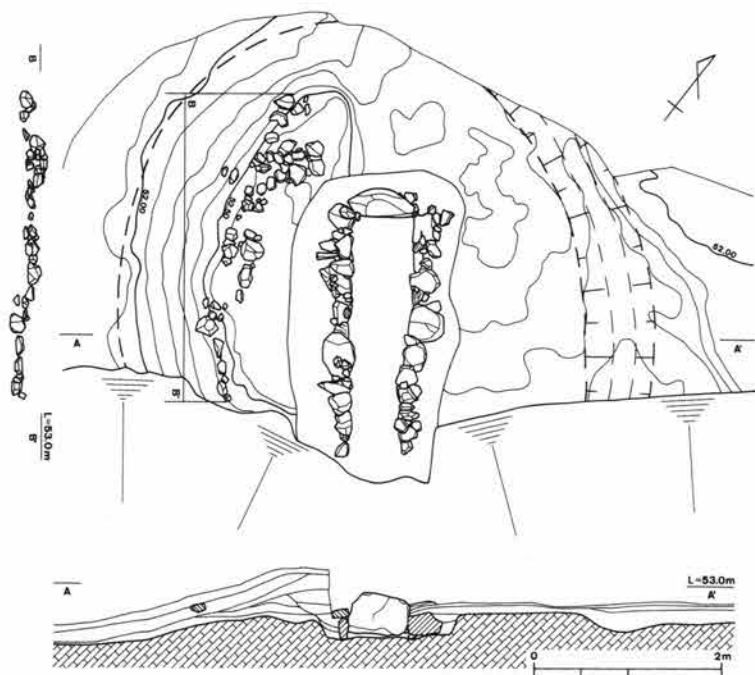
時期については不明である。また、羨門南側において墳丘の確認は試したが、崖までのわずかな面積で確認はできなかった。列石などの施設も見られなかった。羨門部付近での地山面の傾斜から、現在見られる玄室内の奥壁ならびに両側壁の石は、基底石の可能性が濃く、大正時代から現在に至るまでの間に側壁



第26図 堀坂神社1号墳石室実測図

の石2～3石が抜き取られたようである。これらの石材なのか、1号墳付近には比較的大きな石が散在していた。

2号墳 無袖の横穴式石室を主体部とする古墳で、道に面した崖面に羨門付近が露出していた。この古墳も人頭大からやや大きめの石十数石を用いて閉塞しており、図化作業を行ったが、崖の際であるため崩落するおそれがあり、また作業上危険であると判断したた

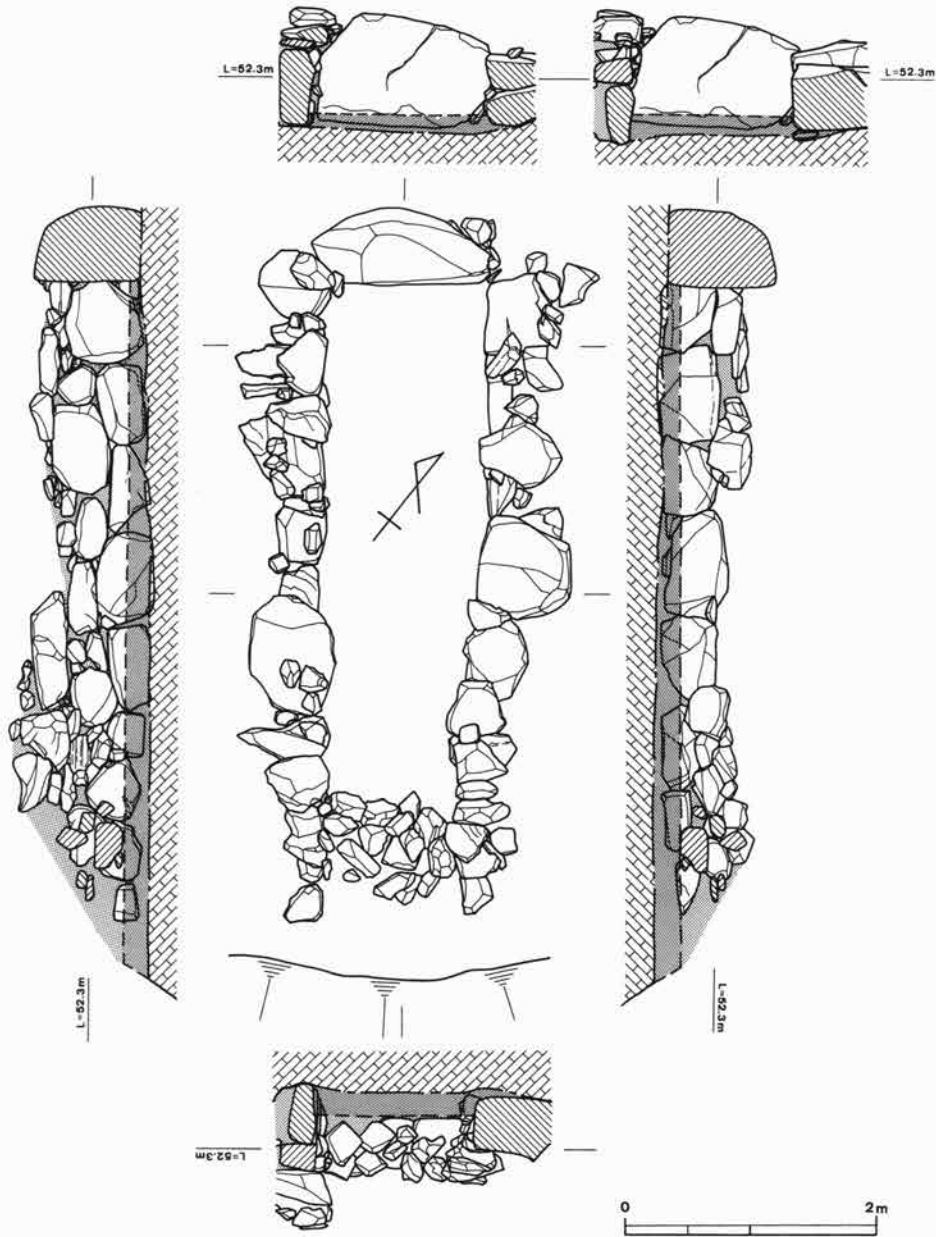


第27図 堀坂神社2号墳墳丘測量図

め、図化作業終了後に羨門部の一部を崩すことにした。また、石室内を掘り下げたが、凹凸の激しい地山面を確認した。これは、大正時代の調査の際に床面を掘り下げているものとする。出土遺物としては、土器片数点と鉄鏃2点を確認した。しかし、以上のような状況を見るかぎり、これらの遺物は、大正時代の調査時に動いていると考える。調査の結果、わずかに墳丘が残る右側壁では、基底石を含めて2～3石の高さまで残っており、かなり削平を受けている左側壁では1～2石分しか残っていなかった。石室の規模は、奥壁での幅約1.3m、羨道部での幅約1.1m、石室の確認長約5.2mであった。石室に使用されている石の大きさならびに積み方などから、玄室長は約2.4mであるとする。

石室東側では、地山を約30cm掘り下げた溝がめぐることを確認した。しかし、石室西側にはこのような痕跡はなく、丘陵山手側にのみ溝を設けている古墳であったと思われる。確認した溝から、古墳は径約11mを測る円墳であった。

また、今回の調査で新たに列石が見つかった。石室西側の羨門部から奥壁付近で二重にめぐらしていた。検出状況から見るかぎり、墳丘の半ばをめぐらせ、石室東側では後世に削平されたのか、痕跡を確認できなかった。残念ながら、羨門付近の列石については、崖際であり、危険であることから、図化することはできなかった。これらの石は、墳丘中に埋設されており、石室を構築する際に土砂の流失を防ぐためにめぐらせたものとする。

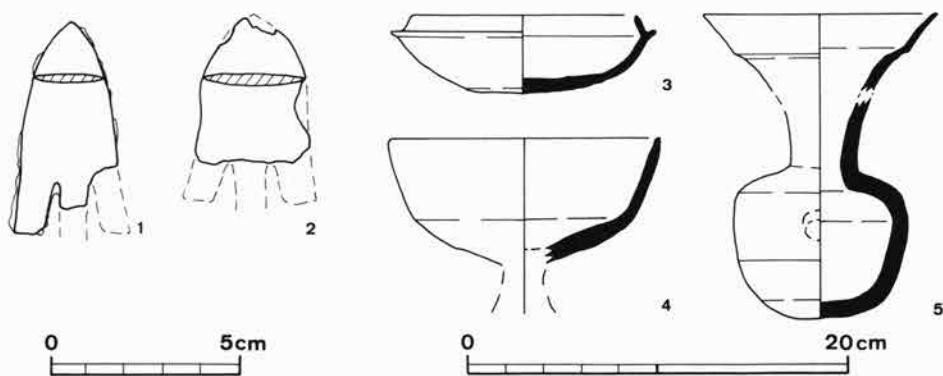


第28図 堀坂神社2号墳石室実測図

5. その他の遺構

2号墳東側をめぐる周溝が埋まった頃に、周溝付近から鍛冶炉3基を確認した。非常に残りは悪く、20~30cmのものであった。中世の土師皿の破片が出土する土層に構築されていたことから、中世ならびに中世以降の遺構と見られたが、時期は限定できなかった。

また、1号墳と2号墳の間で堀坂神社の拝殿跡を確認した。拝殿北側には石垣が東西方



第29図 堀坂神社2号墳出土遺物実測図

向にめぐっており、拝殿より一段高くなっていた。この石垣を造る際に古墳の石を抜いたと思われる、拝殿付近を整地した際に墳丘が崩されたと思われる。

6. 出土遺物

今回出土した遺物は、すべて2号墳のものであるが、前述したように大正時代の調査によって埋葬時の位置から動いており、また少量の土器片しか出土しなかったことから、古墳の時期ならびに追葬が行われたかなどの問題を明らかにすることはできなかった。2号墳の石室内や周溝内から出土したわずかな遺物は次のとおりである。石室玄室内からは、鉄鎌2点(第29図1・2)、杯身片(第29図3)、土師器片で、周溝内からは杯身片、甕(第29図5)、高杯片(第29図4)、土師器片などが出土している。時期のわかるものとしては数点であった。

鉄鎌(第29図1・2)は、非常に残りが悪く、広根の鉄鎌であるが、鎌身は不明である。

杯身(第29図3)は、平坦な底部より外上方に立ち上がり受け部に至る。立ち上がりは、内上方に上がる。平坦な底部を簡単にヘラ削りし、その他はロクロナデ整形している。

高杯(第29図4)は、杯部のみで脚部は出土していない。全体に厚手の作りで、杯部半ばで大きく「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸い。

甕(第29図5)は、樽状の体部上方から逆「ハ」字状に大きく開き、外上方に屈曲する。

石室内のわずかな出土遺物の中で、唯一時期を判定できるものとしては杯身1点だけであった。その形態からTK209に該当するものと考えられる。周溝内出土の高杯は、杯身と比べて時期差が認められることから、今後検討を要するところである。

7. 長野区保管遺物

今回の調査で出土した遺物は若干であったが、地元長野区で保管されていた堀坂神社古

墳群出土の遺物17点をここに紹介する。保管されていた遺物は、須恵器杯蓋・杯身・有蓋高杯・有蓋高杯の蓋・土師器高杯である(第30図1～14)。これらの土器は、1・2号墳のどちらから出土したか、今となっては知るすべはないが、土器の形態を見る限り、いくつかの時期に分けられるようである。

杯蓋(第30図1・4)は、丸味を帯びた天井部から外下方に立ち上がり口縁部に至る。天井部は、ヘラ削りが施されている。

杯蓋(第30図2・3)は、平坦な天井部から外下方に立ち上がり、口縁部付近で屈曲して端部に至る。天井部は、ヘラ切り後粗雑なナデを施す。

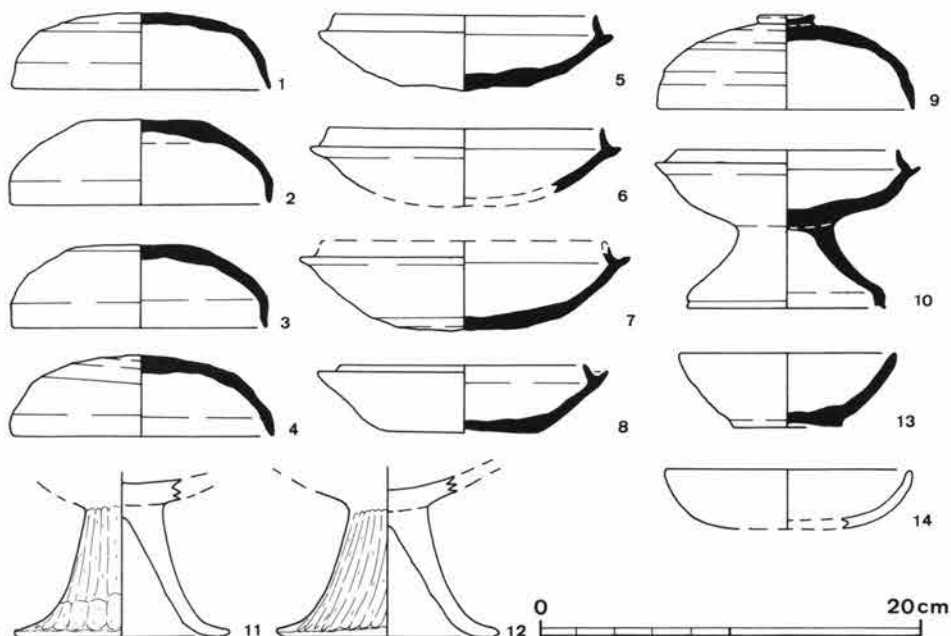
杯身(第30図5～7)は、丸味を帯びた底部から外上方に立ち上がり受け部に至る。立ち上がりは、内上方に上がる。底部は、ヘラ削りを施しその後粗雑なナデを施すものもある。

杯身(第30図8)は、平坦な底部から外上方に立ち上がり、受け部に至る。立ち上がりは、内上方に短く立ち上がる。底部は、ヘラ切り後粗雑なナデを施す。

有蓋高杯(第30図9・10)は、杯身(5)に短く大きく開く脚部を付したもので、脚端は、下方に屈曲する。蓋は、天井部から口縁部まで大きく丸味を帯び、扁平なつまみが付く。

土師器高杯(第30図11・12) 脚部のみ出土した。「ハ」の字状に開き、端部は横方向に屈曲する。脚部は、細かくヘラ削りされていた。

杯(第30図13) 平坦な底部から外上方に立ち上がる。底部に糸切り痕が残る。



第30図 長野区保管遺物実測図

土師皿(第30図14) 平坦な底部から丸味をおびながら外上方に立ち上がる。

以上の土器のうち、古墳時代のものは、1～10である。これらの土器の形態から大きく二時期に分けることができる。これらの土器のうち、古い様相を持つものは、杯蓋(1・4)と杯身(5～7)ならびに有蓋高杯である。杯蓋の削りの範囲や杯身の立ち上がりなどから、TK209に該当すると思われ、杯蓋(2・3)や杯身(8)は、それに次ぐ時期のものと考える。

6. ま と め

久美浜町の後期古墳が、川上谷川流域に集中することは、すでに指摘されてきているが、今回の調査で佐濃谷川中流域の谷奥において後期古墳2基を確認することができた。出土遺物については、出土位置が不明である点に問題があるものの、久美浜町での古墳時代の様相から、1・2号墳は6世紀後半に埋葬され、その後6世紀末に追葬がなされたと考えられる。その後、この古墳の位置する丘陵は、平安時代に何らかの形で利用され、中世以降には鉄生産が行われ、近代に至っては、堀坂神社が建てられたようである。いずれにせよ、今回の調査は、大正時代の発掘調査の記録補足をを行ったことによって佐濃谷川中流域での一資料を提示したといえよう。

(岡崎研一)

注1 梅原末治「長野ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 京都府) 1923

注2 小野久一・岡田桂子・岡田正吉・岡所文之・小國サダ美・小森トミ枝・山口五郎・土田昌人・岩田英樹・金保真由美・田中美恵子・谷辻絹代・松村和美

注3 久美浜町誌編纂委員会『久美浜町誌』 京都府熊野郡久美浜町役場 1975

注4 梅原末治「湊村函石浜石器時代ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府) 1920、梅原末治「湊村函石浜石器時代ノ遺跡(補遺)」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第三冊 京都府) 1922

注5 松井忠春「浦明遺跡」(『京都府久美浜町文化財調査報告』第3集 久美浜町教育委員会) 1980

注6 縄文土器片は5点であったが、小破片であり、時代について検討中であるため、別の機会に譲ることにした。

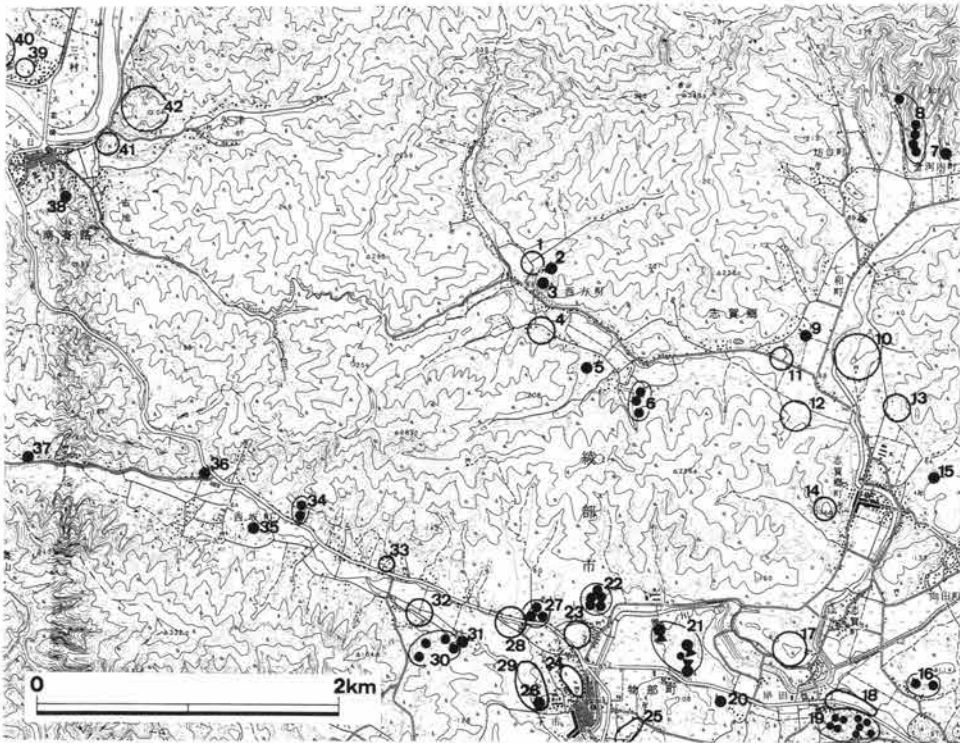
注7 高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』 京都府教育委員会) 1968、石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981

注8 奥村清一郎他「湯舟坂2号墳」(『京都府久美浜町文化財調査報告』第7集 久美浜町教育委員会) 1983

3. 桜遺跡発掘調査概要

1. はじめに

桜遺跡は、綾部市西方町桜に所在する遺物散布地である。地元塩見 均氏によって、表面採取された須恵器片の型式から古墳時代後期の住居跡など、集落に関連する遺構の存在が考えられた。今回の調査は、綾部市西方町における府営ほ場整備事業に伴い、京都府農



第31図 調査地と周辺の遺跡(1/50,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 1. 桜遺跡 | 2. 扇ヶ奥古墳 | 3. にわとり塚古墳 | 4. 藤内遺跡 | 5. 長岡古墳 |
| 6. 長尾池古墳群 | 7. 八幡古墳 | 8. 山尾古墳群 | 9. 金鶏塚古墳 | 10. 北野城跡 |
| 11. 松木呼遺跡 | 12. 縄文土器散布地 | 13. 土師器散布地 | 14. 天王山城跡 | 15. 志賀古墳 |
| 16. 白道路古墳群 | 17. 物部城跡 | 18. 五反田遺跡 | 19. 五反田古墳群 | 20. 岸田古墳 |
| 21. 岫山古墳群 | 22. 上市古墳群 | 23. 西ノ宮遺跡 | 24. 物部城跡 | 25. 高屋遺跡 |
| 26. 物部北前田古墳 | 27. 大熊座古墳群 | 28. 岡ノ後遺跡 | 29. 物部北前田遺跡 | 30. 浄土寺古墳群 |
| 31. 十三墓 | 32. 亀ヶ迫遺跡 | 33. 段ノ岡遺跡 | 34. 西坂古墳群 | 35. 高倉古墳 |
| 36. 枯木坪古墳 | 37. 赤目坂古墳 | 38. 長橋寺古墳 | 39. 三ヶ村遺跡 | 40. 北有路城跡 |
| 41. 引地城跡 | 42. 南有路城跡 | | | |

林水産部の依頼を受けて実施した。発掘調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、調査員野島 永が担当した。調査期間は平成5年6月7日から7月15日までである。

調査経費は、すべて京都府農林水産部が負担した。また、調査にあたっては、京都府教育委員会森 正氏及び、綾部市教育委員会近澤豊明氏に協力いただいた。悪天候の中にもかかわらず、作業に従事していただいた調査参加者にも感謝したい。なお、本概要報告は野島が執筆した。^(註1)

2. 調査地と周辺の遺跡

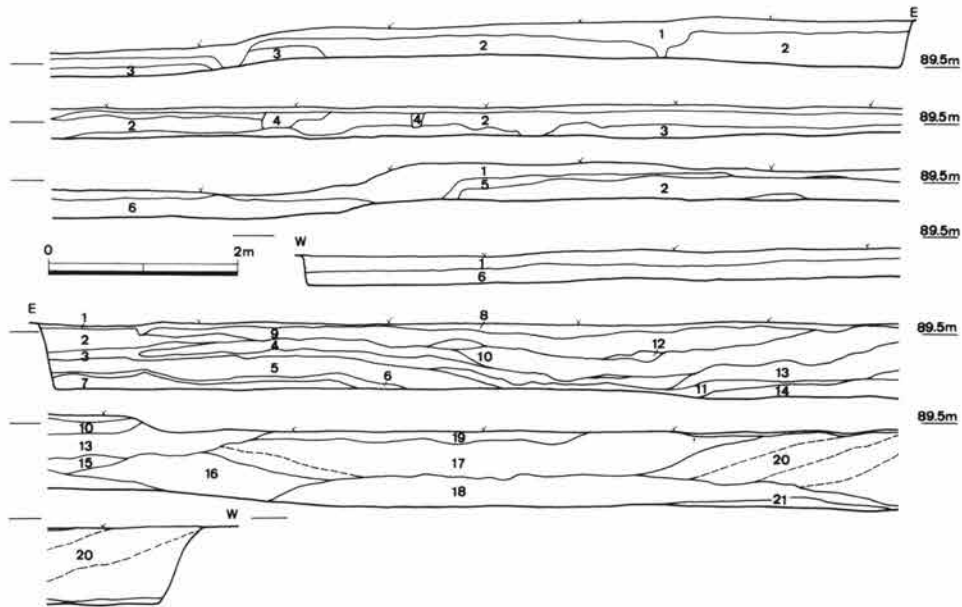
桜遺跡の所在する綾部市は、由良川が市域南部を西流しており、北から支流の犀川、八田川、上林川の三河川が合流する。その中でも、犀川は綾部市域の西端に位置しており、由良川との合流点の河岸段丘面には弥生時代前期にさかのぼる館遺跡^(註2)がある。古墳時代初頭には、後漢末の飛禽文鏡が出土した成山2号墳^(註3)が出現しており、弥生時代以来、生産基



第32図 調査地位置図(1/20,000)

盤の安定化と地域社会内部のある程度の階層分化が進んでいた結果と思われる。古墳時代中期には、私市円山古墳^(注4)や三宅1号墳(荒神塚)^(注5)など墳丘規模や副葬品が中丹地域において卓越した内容を持つ盟主墳の存在や、殿山1号墳、沢3号墳^(注6)などの前方後円墳の導入が始まり、中期末頃には、前方後円墳3基を含む岫山古墳群^(注7)(第31図21)が犀川上流域の物部町に営まれる。後期にも犀川左岸、由良川に南面する丘陵には以久田野古墳群^(注8)を代表とする後期群集墳が集中しており、この地に福知山市域を含んだ由良川流域を統括する首長層の形成がなされた拠点的な集落の存在を考えてよい。

桜遺跡は、この由良川と犀川の合流地点から上流約8kmの志賀郷地区西方町に位置している。調査地標高は89.5m前後で、二河川が合流する狭小な谷あいの、南東方向にゆるやかに傾斜した扇状地上に立地している。北方、東方、西方を標高368mの岳山から派生した尾根にさえぎられており、わずかに南方、下流域に開けた地形を呈している。このため、



第33図 第1トレンチ北壁セクション図・第2トレンチ南壁セクション図

- 第1トレンチ北壁セクション図：1. 暗灰色粘質土(耕作土) 2. 灰色粘質土
 3. 橙褐色粘質土(礫含む) 4. 灰色粘質土 5. 淡青灰色粘質土
 6. 青灰色粘質土
- 第2トレンチ南壁セクション図：1. 青灰褐色粘質土(床土) 2. 灰褐色砂礫土 3. 灰色粘土
 4. 褐色砂礫土 5. 褐色砂 6. 灰色粘土
 7. 橙褐色円礫土 8. 褐色砂礫土 9. 灰色粘質土
 10. 灰色粘土 11. 灰色粘土 12. 黄褐色砂礫固結土
 13. 灰褐色砂 14. 橙褐色砂 15. 褐色礫土
 16. 円礫 17. 褐色砂 18. 赤褐色砂 19. 黒褐色礫土
 20. 暗赤褐色砂礫土 21. 灰色粘土

調査地は上流二河川の河川堆積による粘土層、砂層、砂礫層の互層が観察されている(第33図第2トレンチ南壁セクション)。

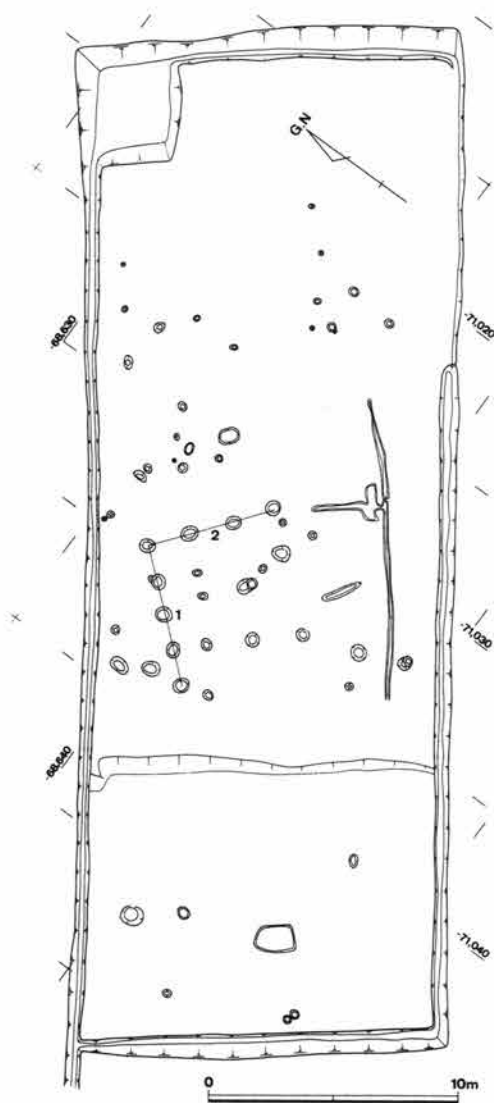
3. 調査概要

調査に先立って、京都府教育委員会及び、綾部市教育委員会による試掘調査が行われた(第32図参照)。それによると、現在の耕作区画に沿って、重機による耕作土の除去を行い、

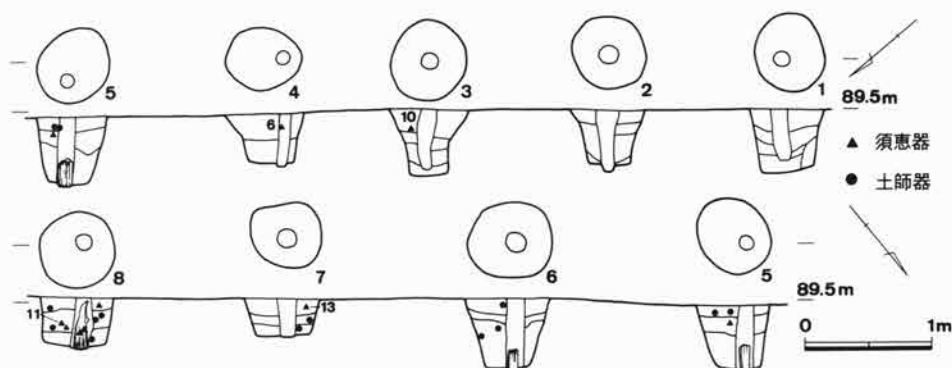
遺構・遺物の有無を確認した。北東側の試掘トレンチでは耕作土直下で砂礫層が確認され、遺構の存在は期待できなかったが、南西側の試掘トレンチ北半では須恵器片などが耕作土中より出土し、ピットが検出された。このため、本調査では、南西側の試掘トレンチを南東に拡張して、第1トレンチを設定した。また遺構の拡がりを把握するために、第1トレンチの南東側に第2トレンチを設定した。

①検出遺構

遺構が検出できたのは第1トレンチのみで、柱穴列1・2及び、ピット・土坑などである。柱穴列は2列確認でき、柱穴5を共有して、約92°の角度で交差する(第34図)。柱穴は、長軸60cm・短軸50cmほどのやや卵形に近いプランを呈している。柱穴列1は、座標北から西へ約140°振り、柱間距離170cmから120cmと一定しない(第35図上)。柱穴列2は、座標北から東へ128°振り、柱間距離が170cmから180cmとほぼ一定している(第35図下)。梁間3間・桁行3間の掘立柱建物跡の可能性も考えられるが、柱間距離に隔差があり、断定はできない。柱穴には柱根の遺存している例もあり(第35図



第34図 第1トレンチ遺構図(1/300)
(数字は柱穴番号)



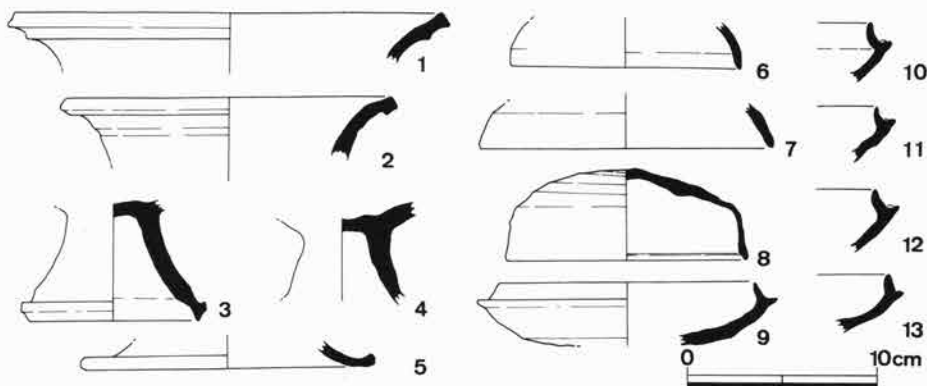
第35図 柱穴列1・2実測図(1/60)
(ドット番号は土器実測図番号に対応)

5・6・8)、直径12cmほどの柱が立てられていたものと推測できる。

第2トレンチでは、先述したように、河川堆積による砂層、礫層の互層が形成されている。砂礫層からは古墳時代後期の土器細片も検出され、古墳時代以降の土砂堆積であることが判明したが、地表下3mまで一部深掘りを行った結果、青灰色、白色の粘土層が厚く堆積していたため、安定した遺構面の存在は確認できなかった。

②出土遺物

出土遺物の大半は、反転復原によってかろうじて図示できる資料であり、以前に採集されたものとともに図化した(第36図)。2・5・7・13は、第1トレンチ柱穴7から出土。6は柱穴4、10は柱穴3、11は柱穴8から、それぞれ検出した。また、4・9は第1トレンチ遺構精査時、1は第2トレンチ遺構精査時、他は試掘及び、採集によるものである。8は、塩見 均氏の採集品である。口縁端部内側に段をもち、天井部分のヘラケズリが3分の2以上施されている点からすれば、若干古くなるものであるが、ほぼ6世紀後半の資



第36図 土器実測図

料であり、遺構の時期を示す可能性が高い。

4. ま と め

今回発掘調査を行った桜遺跡は、由良川支流の犀川最上流域に位置し、6世紀後半の遺物が主体的に出土することが判明した。古墳時代後期を上限とする掘立柱跡の明確な性格は不明であるが、少なくともこの地域に古墳時代後期の集落が存在していたことはほぼ疑いのないところであろう。遺物包含層から出土する土師器の多くは磨耗しており、二次的堆積であるため、地形的に北西のより上流を中心に古墳時代後期の集落が存在していたとみたい。

また、先にみた犀川下流の由良川との合流地点に想定された拠点集落から北上して、日本海若狭湾にむかう蛇行した由良川に到達する最短路を考えた場合、桜遺跡はその峠越え直前の通過地点にあるといえる。調査地点や付近の藤内遺跡(第31図4)からは古墳時代後期の須恵器が採集されており、横穴式石室を持つ扇ヶ奥古墳、古墳時代終末期の鶏塚古墳(第31図2・3)が調査地点の南西側丘陵先端部に出現することからすれば、調査地付近の犀川最上流域が古墳時代後期になって、交通路として開発された可能性も否めない。

(野島 永)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

大槻綾子・大槻典代・大槻美美子・大槻光枝・大槻八重・佐々木勝・塩見治信・塩見治良一・塩見テル・関口アツエ・関口 保・千原芳枝・波部 健・松宮チエ・松本幸子・村上ミヨ子

注2 中村孝行・近澤豊明「館遺跡」(『京都府綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会) 1989

注3 堤圭三郎「成山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要(1966)』 京都府教育委員会) 1966

注4 鍋田 勇ほか「私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注5 岩田 実「荒神塚古墳調査報告」(『綾部史談考古資料集』第2輯 綾部史談会) 1962

注6 常盤井智行他『丹波の古墳Ⅰ－由良川流域の古墳－』 山城考古学研究会 1983

注7 注6文献

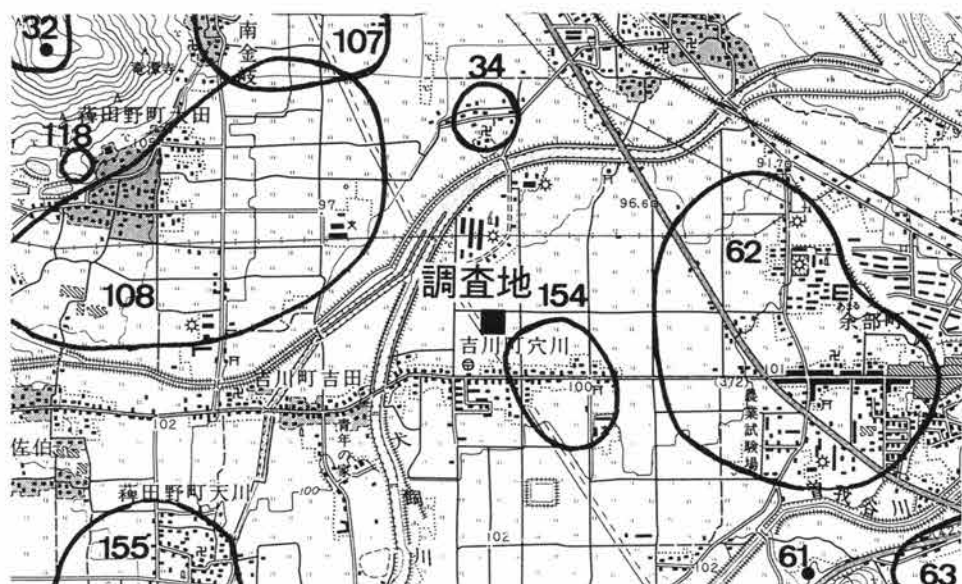
注8 注6文献

4. 穴川遺跡発掘調査概要

1. はじめに

穴川遺跡は、京都府亀岡市吉川町穴川小字替田22ほか^(注1)に所在する。遺跡は、亀岡盆地を南北に貫流する大堰川に流れ込む犬飼川と曾我谷川とによって形成された沖積地内に広がる標高100m程度の微高地上に立地している。付近では国道9号バイパス路線内の条里跡調査により、溝状遺構・土坑・ピットなどが検出され、弥生時代後期及び平安時代末の遺物などが出土している^(注1)。また、弥生時代中期の土器も採集され、中期に成立し後期まで断続的に営まれた遺跡として周知されている^(注2)。

穴川遺跡の調査は、府営住宅穴川団地(仮称)建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施したものである。今回の調査は、第1期工事分の9,870m²について、約800m²の試掘調査を実施した。現地調査は、平成5年12月9日～平成6年1月21日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村



第37図 調査地位置図(1/25,000 亀岡-「京都府遺跡地図」第3分冊1986より抜粋-)

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 32. 鹿谷古墳群 | 34. 野寺廃寺 | 61. 狐塚古墳 | 62. 余部遺跡 | 63. 安加塚遺跡 |
| 107. 南金岐遺跡 | 108. 太田遺跡 | 118. 太田城跡 | 154. 穴川遺跡 | 155. 天川遺跡 |

清一郎、同調査員三好博喜が担当した。本概要の執筆は三好が行った。

現地調査及び整理事業にあたっては、地元有志ならびに亀岡市教育委員会・亀岡市吉川町自治会をはじめとして多くの方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。

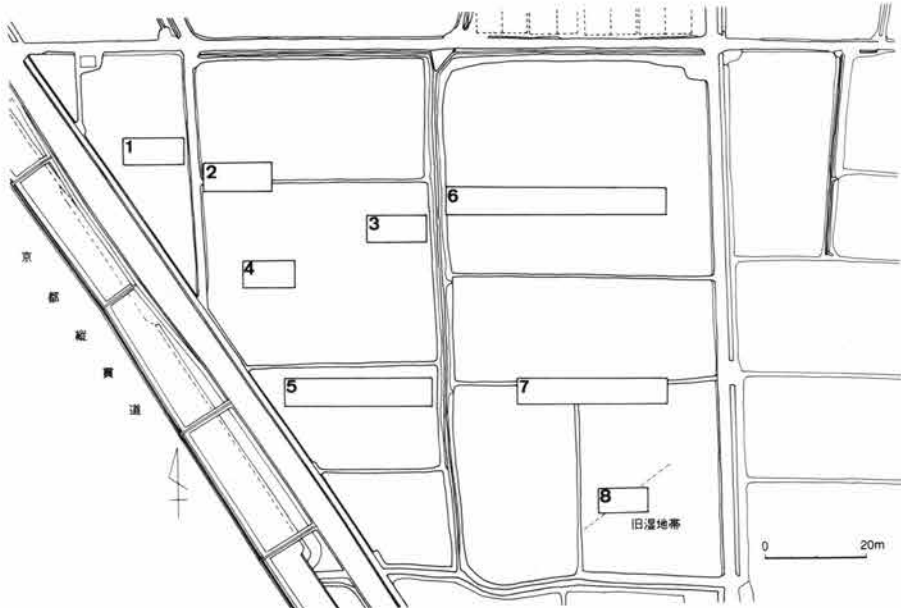
なお、調査に係る費用は、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査の概要

試掘トレンチの設定に当たっては、建物建設予定地及び浄化槽などの位置を重点的にを行い、総計約800㎡の試掘を行った。現地調査は、まず重機による表土掘削を平成5年12月9日・10日の両日で行い、13日から人力掘削を行って、遺構・遺物の検出に努めた。基本的な層位は、表土直下が黄褐色粘質土となっており、遺物包含層はほとんどのトレンチで確認することはできなかった。また、遺構についても暗茶褐色の土色変化を何か所かで検出したものの、遺物の出土もなく、明確な遺構と積極的に判断することはできなかった。これら人力による掘削作業は、平成6年1月21日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、1月26日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。

1 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘性砂質土となる。ピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分が若干あったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。

2 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘質土となる。溝状やピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分があったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。



第38図 トレンチ配置図

3 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘質土となる。ピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分が若干あったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。

4 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘質土となる。ピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分が若干あったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。

5 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色砂質土となる。西端では礫層が露出してきていた。近代攪乱のほか、土坑状に暗茶褐色の土色変化を示す部分が4か所あったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。なお、暗茶褐色土内からサヌカイト製の石鏃(第40図8)が出土している。

6 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘性土となる。暗渠排水路や近代攪乱のほか、土坑状やピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分があったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。また、一部明茶褐色の幅の広い土色変化が存在したが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。なお、耕作土から須恵器の小片がわずかに出土した。

7 トレンチ 約20cmの耕作土直下が黄褐色粘質土となる。ピット状に暗茶褐色の土色変化を示す部分が若干あったが、掘削した結果、遺構とは認められなかった。

8 トレンチ 約20cmの耕作土直下で暗灰色粘質土となり、西端にのみ黄褐色粘質土が認められた(第39図)。掘削の結果、暗灰色粘質土は黄褐色粘質土の上に堆積していることが分かり、沼状もしくは流路状の地形を示している。東端の堆積状況は、耕作土(20cm)・鉄分マンガング粒を含む灰色砂質土(25cm)・鉄分マンガング粒を含む暗灰色粘質土(30cm)・炭化物を含む暗黒灰色粘質土(40cm)・黒灰色粘質土(100cm)・砂礫層?(未確認)という順である。また、西端の堆積状況は、耕作土(20cm)・黄褐色粘質土(80cm)・砂礫層という順である。暗黒灰色粘質土内に古墳時代中期の遺物が多量に包含されていた。出土遺物は、遺存状態が比較的良好で、流れ込みとは考えにくい状況にある。

1・2は、口縁部内面を肥厚させる布留式土器の系譜をひく甕である。3は、二重口縁の甕で、口縁部内面を肥厚させている。体部の調整は布留式土器の系譜をひく甕に似るが、器壁は厚い。4は、頸部を「く」の字状に屈曲させ、口縁部が短く外反する甕である。5は高杯の杯部、6は小型丸底壺である。7は、灰色砂質土から出土した須恵器の杯身である。

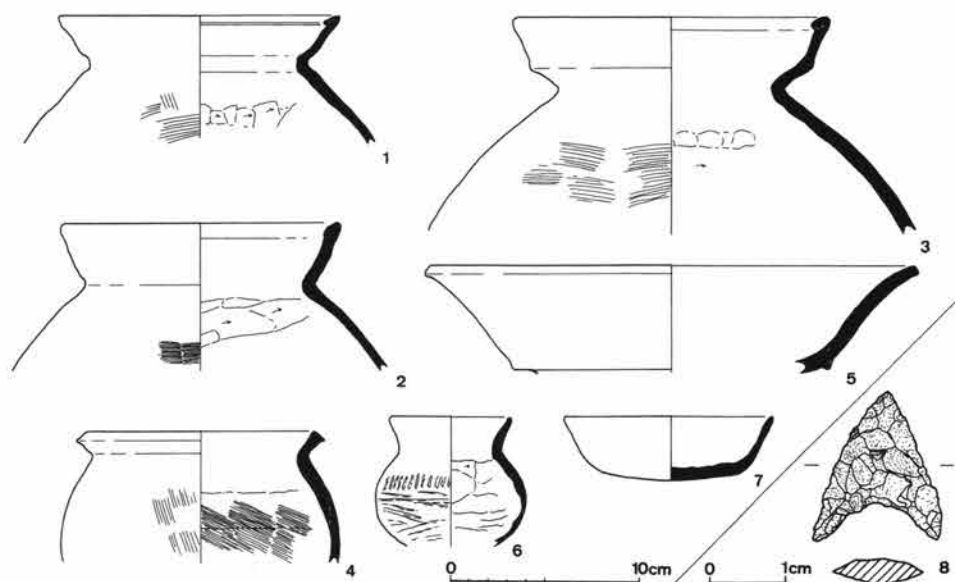
3. まとめ

今回の調査では遺跡範囲を確定することはできなかった。



第39図 8トレンチ南壁土層柱状図

- 1. 耕作土
- 2. 灰色砂質土
- 3. 暗灰色粘質土
- 4. 暗黒灰色粘質土
- 5. 黒灰色粘質土
- 6. 砂礫
- 7. 黄褐色粘質土



第40図 出土遺物実測図

た。調査地内には遺構面に適した黄褐色粘質土が広範囲にわたって広がっていた。しかし、明確な遺構は検出できなかった。遺物には石鏃や古墳時代中期の遺物が認められ、新たな知見を加えることができた。

遺構が全く検出できなかったことについては、周辺に認められる条里状の地割りと関係が考えられる。調査地周辺には碁盤目状の地割りが認められ、条里制の痕跡を留めているとされている。施行された時期は不明確であるが、およそ奈良・平安時代に施行された可能性が高い。こうした条里制の施行に伴い、当時微高地であった調査地周辺が削平されたことも考えられる。さらに、綿密な調査を続けることによって、穴川遺跡の実体や亀岡盆地の条里制の施行時期などが明確にされていくであろう。

(三好博喜)

- 注1 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要 (2)穴川遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注2 村尾政人・田代 弘「亀岡市穴川遺跡の表採遺物について」(『京都府埋蔵文化財情報』第16号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注3 現地調査参加者(順不同・敬称略)
 菊島 嘉・奥村サカエ・石田正子・広田おる・法貴ひろ子・法貴浩治・野原興利・金城竜成・小宮康仁・村嶋みよ子・石田としゑ・東前とよ子・東前一子・石田初美・原田浩年・石山良男・天野里美
- 注4 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要 (1)亀岡条里制跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

5. 名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の慢性的な交通渋滞解消のため、走行車線の拡張工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い影響を受ける遺跡(名神高速道路関係遺跡)の事前調査である。

名神高速道路の走る京都市西南部は、京都市南区・伏見区、向日市、長岡京市、乙訓郡大山崎町の行政区にわたり、地形的には、南に桂川、宇治川、木津川の3河川の合流地点、西には、天王山を頂点とする西山の峰々が南北に連なる。調査地の大半は、低位段丘面及び沖積平野を横切って走り、ほぼ全域が長岡京域に含まれている。さらに、該当地域には長岡京以外の遺跡も数多く分布している。

調査は、昭和63年度から開始し、本年度で5年目となる。調査対象地は、工事工区の区分に従い、天王山トンネルの東から大山崎工区、下植野工区、長岡京工区、向日工区、桂川PA工区、京都工区となり、長岡京の東京極をぬけ桂川、京都南インターへと続く。

調査を開始した昭和63年度は、長岡京工区で長岡京の八条～六条までの7地点で合計4,200㎡の調査を行い、その一部では、下層の調査を次年度に繰り越している。平成元年度には、同工区の六条～四条までで15地点の3,350㎡、向日工区で四条の2地点300㎡、大山崎工区の試掘1,000㎡を含め合計4,650㎡の調査を行った。平成2年度には、向日工区で四条～三条までの11地点3,420㎡、長岡京工区で1地点200㎡、大山崎工区の百々遺跡4地点の4,050㎡、さらに下植野工区では九条の7地点2,060㎡の調査を新たに加え合計9,730㎡の調査を行った。平成3年度には、向日工区で三条～二条までの6地点で1,620㎡、大山崎工区で4地点3,520㎡、下植野工区で5地点5,080㎡の調査を加え合計10,220㎡の調査を行った。

今年度の調査対象地は、長岡京の条坊復原によると、左京では、南一条四坊十・十一・十五町にあたり、右京では、九条二坊四・五・十二・十三町と、九条三坊の南接地が想定される地点である。さらに大山崎町では、百々遺跡・下植野南遺跡が、調査対象地内に含まれている(条坊はすべて旧呼称で、必要に応じて()で新呼称を付した)。

このうち、京都工区は、長岡京跡左京第286次調査、下植野工区は、右京第368・395次調査とし調査を実施した。また、大山崎工区は、長岡京の右京九条大路推定地を含みこの

南で接するため右京第367・394次調査とした。

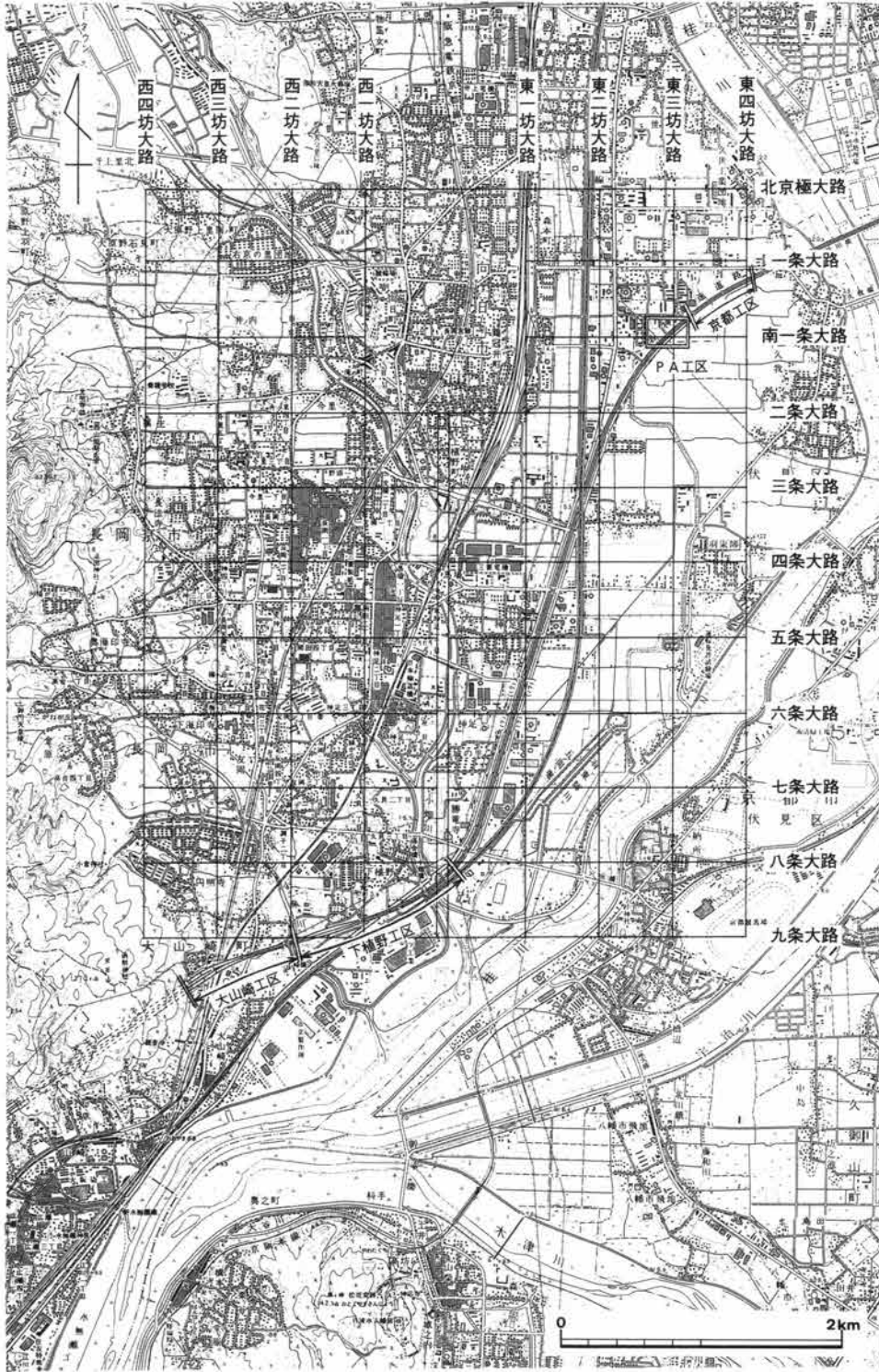
検出した遺構の番号は、各地区ごとの連番とした。現地の発掘調査は、平成4年4月8日～平成5年3月5日を要した。調査面積は、延べ約12,427m²となった。本調査に係る経費は、日本道路公団大阪建設局による。

調査には、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同主任調査員戸原和人、同調査員竹井治雄・石尾政信・岩松保・中川和哉・鍋田勇があたった。本書の執筆については、1. 京都工区を戸原・竹井・石尾、2. 下植野工区を竹井・岩松・中川・鍋田、3. 大山崎工区を石尾・岩松が担当した。

調査を行うにあたっては、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関をはじめ、各大学の学生諸氏の協力^(注1)を得た。紙面をかり、謝辞を述べたい。(戸原和人)

付表2 調査地一覧表

工区	地区名	次数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	面積	開始	終了
京 都	B-1地区	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	南一条条間大路 東四坊第二小路	751	12/9	3/2
	B-2地区	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	南一条条間大路 東四坊第二小路	695	1/7	3/2
	C-2地区	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	東四坊大路	441	1/18	3/2
	小計					1,887		
下 植 野	A地区	R395	7ANSID-4	大山崎町円明寺壱町田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	2,000	7/1	3/5
	B地区	R368	7ANSID-3	大山崎町円明寺壱町田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	1,820	4/8	10/21
	C-1地区	R368	7ANSID-3	大山崎町円明寺壱町田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	350	4/8	5/26
	C-2地区	R395	7ANSMD-6	大山崎町円明寺松田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	1,600	4/24	9/11
	C-3地区	R368	7ANTGT-3	大山崎町下植野五条本	同九条二坊・下植野南遺跡	1,500	4/7	8/7
	C-4a地区	R395	7ANTTD-3	大山崎町下植野寺門	同九条二坊・下植野南遺跡	750	9/21	12/18
	C-4b地区	R395	7ANTTD-3	大山崎町下植野寺門	同九条二坊・下植野南遺跡	350	12/10	3/5
	D-2地区	R395	7ANTGT-3	大山崎町下植野五条本	同九条二坊・下植野南遺跡	200	9/25	11/25
	小計					8,570		
	大 山 崎	C-4地区	R394	7ANSDD-6	大山崎町円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	750	6/9
D-3地区		R394	7ANSIR-4	大山崎町円明寺井尻	百々遺跡・第三次山城国府	220	1/7	3/5
E地区		R367	7ANSIR-3	大山崎町円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	1,000	4/8	6/6
小計						1,970		
合計					12,427			



第41図 調査地区位置図(長岡京全体図)

(1) 長岡京跡左京第286次調査 京都工区

(7ANWSA-2地区)

1. はじめに

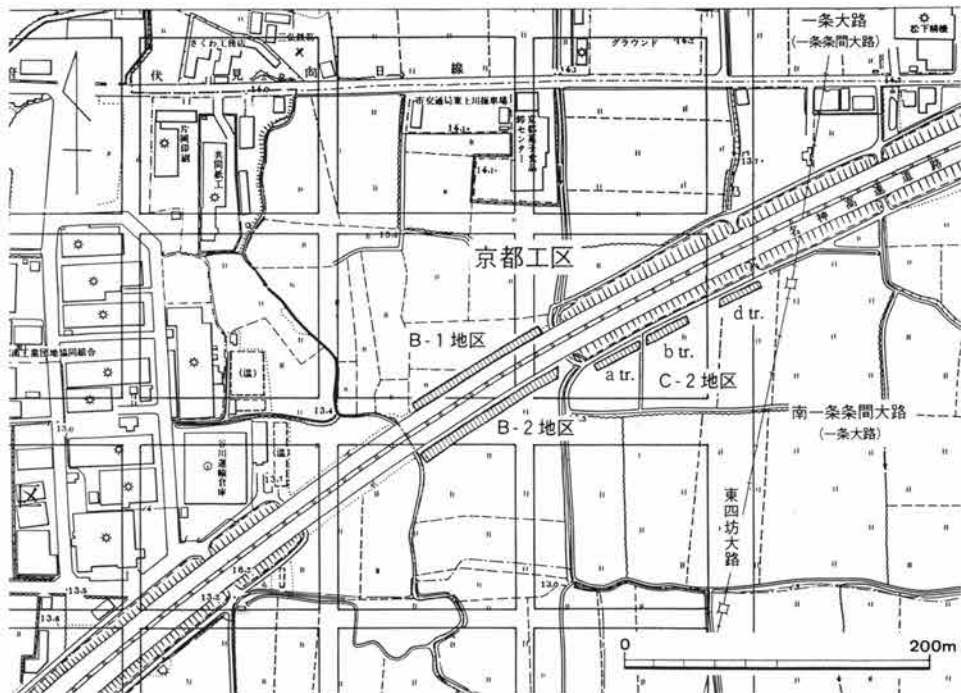
京都工区での調査は、本年度から開始した。調査地は、京都市伏見区久我本町の名神高速道路沿いである。

長岡京の条坊復原によれば、左京南一条四坊十・十一・十五町(平城京型復原による)にあたり、南北道路では東四坊第二小路と東四坊大路、東西道路では南一条条間大路などの条坊が想定される地点である。

2. 調査の概要

① B-1地区(第42図、図版第23)

東四坊第二小路と南一条条間大路の検出を目的とした調査区で、遺構面を3面確認した。検出した遺構は、縄文時代の遺物包含層、弥生時代の流路・溝や、長岡京期の溝・掘立



第42図 調査トレンチ配置図

柱建物跡などがある。また、上層では、平安時代から近世の素掘り溝群を検出した。

上層で検出した素掘り溝群は、平安時代から近世のものまでを通じて東西、南北に数多く重複して検出した。

中層では、調査地の中央寄りで掘立柱建物跡を検出した。柱穴は、南北に3基検出しており、その柱間の寸法は約1.8mを測る。

東四坊第二小路と考えられる側溝は、調査地の東寄りで検出したが、各時代の素掘り溝によって大きく削られており、若干の痕跡を留めるものの明確なものではなかった。

下層では、弥生時代と考えられる溝や、縄文時代の遺物包含層を確認している。

②B-2地区

東四坊第二小路と南一条条間大路の検出を目的とした調査区である。

この調査区では、B-1地区同様3面の遺構面を確認した。

検出した遺構は、上層で、平安時代から近世の素掘り溝群や土坑などである。

検出した素掘り溝群は、B-1地区同様でその一部を掘削した。素掘り溝は、中・近世のものが大半で、その内の南北溝はB-1地区に続く一筆の水田のものと思われる。

③C-2地区

東四坊大路(東京極大路)の検出を目的とした調査区である。

この調査区では、現在の水路や生活道路を確保するためa～dトレンチを設定した。今年度については、その内工場進入路にあたるcトレンチを除いた3か所の小さなトレンチを設定して調査を行った。各トレンチでは中世遺構の水田耕作に伴う溝群が南北に掘られている状況が観察された。このうちbトレンチでは、長岡京期の可能性がある掘立柱建物跡の南西隅を検出している。柱穴は、東西2間・南北1間を検出しており、この東西の柱列の南には柱列に並行して途中で「L」字状に曲がる溝を検出している。

3. まとめ

今年度の調査は、調査期間の終了に伴い、各トレンチとも次年度調査に繰り越した。そのため、来年度に改めて概要を報告する。

①B-1地区では、弥生時代の溝や、縄文時代の遺物包含層を確認した。

②B-2地区では、東四坊第二小路と南一条条間大路の交差点が想定されており、B-1地区で不明瞭であった東四坊第二小路の側溝をも含め遺構の検出が期待される。

③C-2地区では、東四坊大路(東京極大路)の検出が期待される調査である。

(戸原和人)

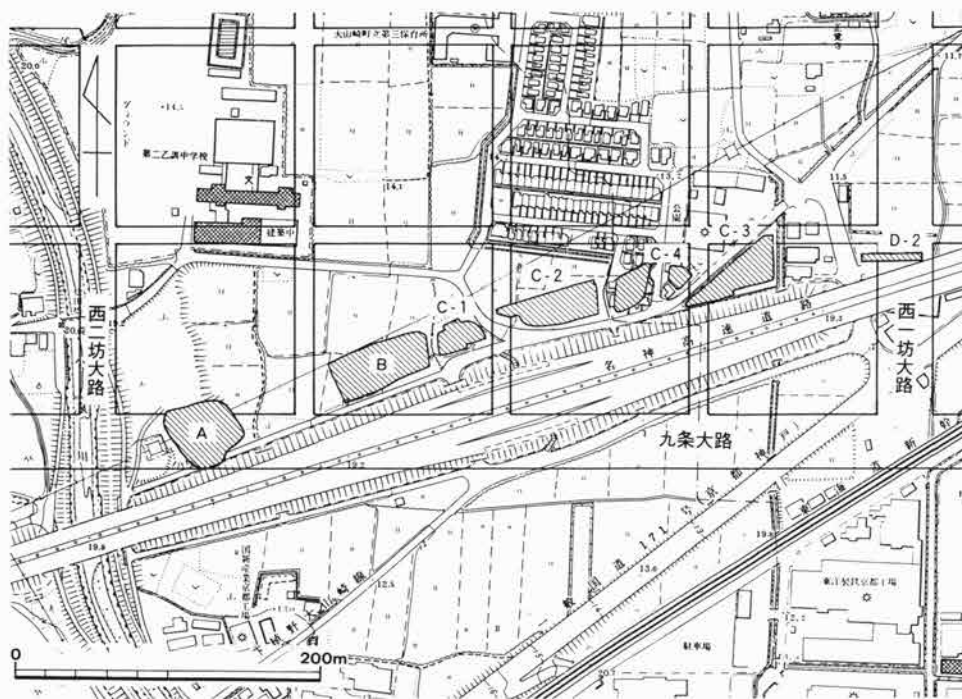
(2) 長岡京跡右京第368・395次 下植野工区

(7ANSID-3・SID-4・TGT-3・TTD-3地区)

1. はじめに

下植野工区で今年度調査を行ったのは、従来の長岡京の復原案によると、右京九条二坊四・五・十二・十三町に位置する(第43図)。しかし、最近の山中氏の説によると、長岡京全体を二町分北にあげるため、大半が京外に位置することとなる。一方、同工区は縄文時代～近世の複合遺跡である下植野南遺跡、松田遺跡としても周知されている。

下植野工区は、91年度から本格的な発掘調査に着手し、同年度にはB地区、C地区の1～3トレンチ、D・E地区の調査を実施した。このうち、B地区では主として、西半分の調査を行い、平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代後期の竪穴式住居跡や祭祀遺構、古墳時代の掘立柱建物跡や流路など数多くの遺構が検出できたが、D・E地区では顕著な遺構は検出できなかった。C地区は、調査に着手したものの、本格的な調査は次年度に実施するといった状況であった。今年度は、A地区、B地区(東半部)、C地区の1～4トレンチ、



第43図 下植野工区 調査トレンチ配置図

D-2地区の調査を実施した。これらのうち、B地区(東半部)、C地区の1・3トレンチは昨年度からの継続調査であるため、昨年度と同様、長岡京跡右京第368次調査とし、A地区、C-2地区、C-4地区、D-2地区は今年度からの新しい調査地であるので、長岡京跡右京第395次調査として行った。

(岩松 保)

2. 調査の概要

① A地区(第44～46図)

(1) 基本土層

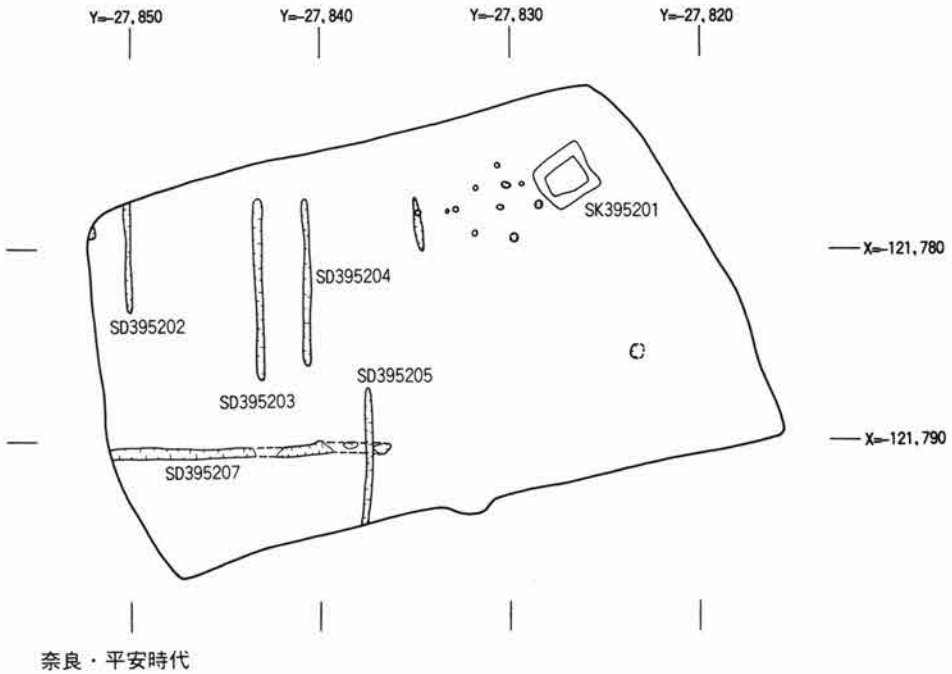
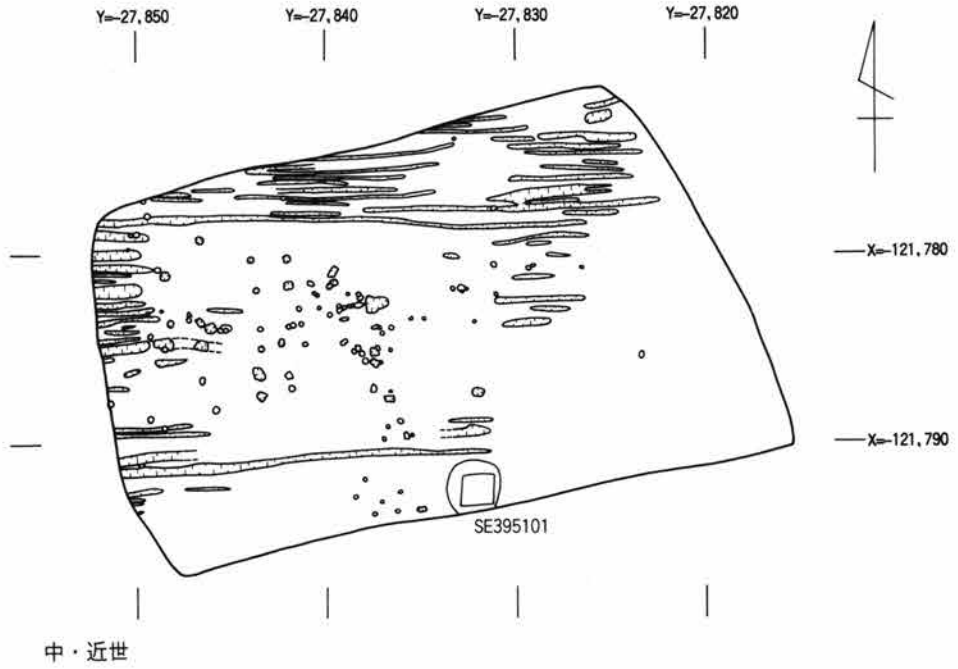
A地区は、長岡京域の条坊を従来の平城京型で復原した場合、推定九条大路が検出できる調査区である。また、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である下植野南遺跡にも調査区は含まれている。調査区内で検出できた遺構面は、合計5面であった。トレンチは、天井川である現在の小泉川の堤防に近接し、この川が供給したと考えられる水成の堆積物によって厚く覆われていた。遺構面間の間層は、厚いところでは30cmほど認められた。遺構面は上層から、中・近世、奈良・平安時代、古墳時代Ⅰ期、古墳時代Ⅱ期、弥生時代中期である。以下で、遺構検出面ごとに主要な遺構・遺物を中心に説明していきたい。

(2) 調査概要

a. 中・近世(第44図上)

東西方向の素掘りの溝群と井戸を検出した。柱穴と思われたピット群は、ベースとなる土色と著しく異なる色調を持っていた。柱痕などの痕跡や明確な掘形の底部、ベース層の土質との違いも認められなかったことから、遺構である可能性は極めて低い。溝群は、いわゆる中世の素掘り溝と呼ばれるものであろう。出土遺物には、瓦器・白磁・青磁片がある。出土した白磁の中には、碗の見込み部分に墨書による花押の認められるものもある。

井戸 S E 395101 掘形を円形に掘り、方形の枠を持つ井戸である。井戸枠は3段によって構成されている。検出面からの深さは、約2.9mを測る。最下段は、幅20cm程度の板を立て円形にめぐらし、ちょうど桶の底を抜いた状態で設置されていた。上・中段は、四隅に太い柱を立て、横棧をほぞによって留め、その間には細い丸太材を隙間が空かないように多く立て、土止めの枠として用いている。井戸枠と掘形の間には拳大の礫が多く含まれていた。井戸の埋土からは、染め付けの碗と土師皿が出土している。これらの遺物から近世の遺構と考えられる。農業用の水利施設と考えられる。



第44図 下植野工区A地区 遺構平面図(1)

b. 奈良・平安時代(第44図下)

遺構の遺存状態が非常に悪く、遺物は包含層を含めても非常に少ない。

溝 S D 395202・203・204・205 浅い南北方向の溝で農耕に関連した遺構と考えられる。上層の溝群とは方向を90°変えた状況で検出している。

溝 S D 395207 1条のみ検出した東西方向の溝で、上記の南北方向の溝に比べ、幅が広く土地を区画する溝である可能性が指摘できる。溝には杭跡と考えられるピットが認められる。遺構の切り合い関係から S D 395207が先行する遺構であることがわかる。

S X 395201 方形にめぐる浅い溝である。この遺構の西隣りには、建物としてまとまる可能性がある柱穴群があるが、両者の関係や性格は遺物が少ないため不明である。

この遺構面で検出できた遺物は少なく、時期を決定する根拠に乏しいが、須恵器の底部などから、おおむね奈良から平安時代と考えられる。遺物の中には縄目のたたきを持つ平瓦も含まれており、遺跡の性格を考えていく必要があるが、直接九条大路や長岡京期の宅地に関するものは検出できなかった。

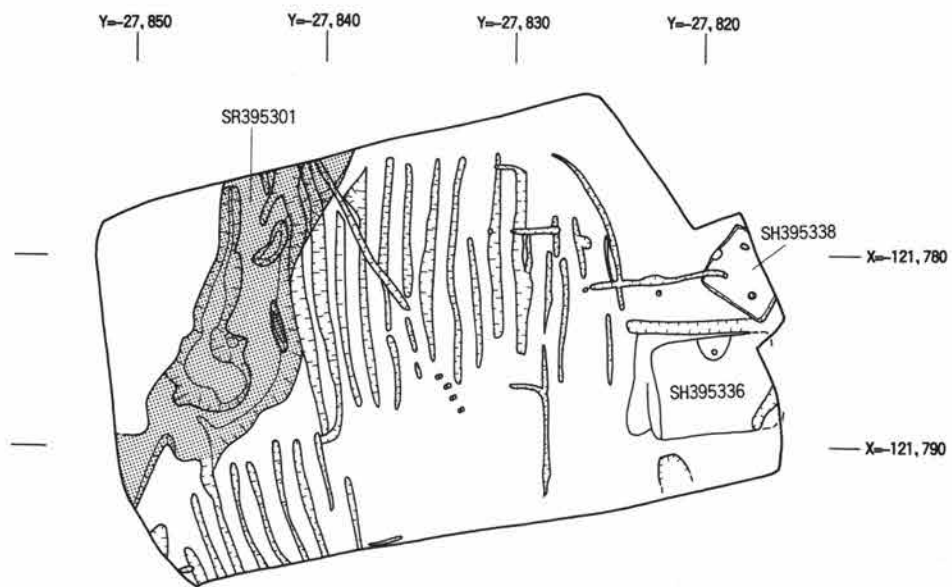
c. 古墳時代Ⅰ期(第45図上)

この遺構面は、洪水性の堆積物で一時に埋められたため、遺構の残りが相対的に良好なものが多かった。また、遺物も完形に近いものが多く、残存状態が良好であった。

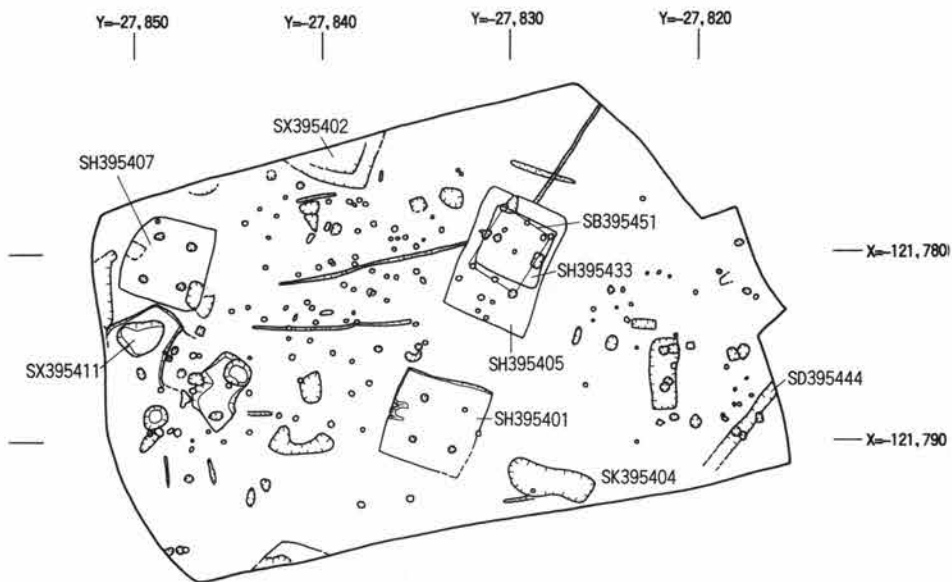
旧河道 S R 395301 遺構面を埋める洪水を引き起こした自然流路で、北東から南西に流れていたものと考えられる。流路内の遺物には、弥生土器・須恵器・土師器などの下層及び同一遺構面の遺物を多く含んでいた。流水によって掘り込まれた自然流路の底部からは、流路以前の土坑が数か所検出できた。S R 395301の東方に見られる南北方向を主体とする溝群は、洪水性の堆積物によって満たされていた。中でも流路に近い部分では、溝に沿って粗粒の堆積物が認められ、流路の氾濫との同時期性が指摘できる。溝と溝の間の頂部は、丸く蒲鉾状の断面を示すことから、畑の畦溝と考えられる。溝は2群に分かれ、古墳時代の畑の単位がわかる。

竪穴式住居跡 S H 395338 北西辺の中央に竈をもつ竪穴式住居跡である。約4m四方の規模をもち、4本の支柱を検出した。検出面からの深さは約20cmを測る。竈内には自然石を使用した甕の支柱穴が認められた。出土遺物には、第47図18の長脚1段透かしの須恵器の高杯がある。

竪穴式住居跡 S H 395336 北辺中央部に竈をもつ竪穴式住居跡である。残存状況が悪く、竪穴の立ち上がり部分は、ほとんど痕跡しか認められなかった。竈の内部からは第47図8・13を含め数点の土器が出土している。床面からは、滑石製の白玉が1点出土している。包含層からではあるが、滑石製の有孔円板も出土している。



古墳時代Ⅰ期



古墳時代Ⅱ期

第45図 下植野工区A地区 遺構平面図(2)

畔溝に比べて、住居跡の残りが著しく悪く、洪水以前に削平されていたと考えられることから、住居跡は溝に比べて古いものと想定できる。

d. 古墳時代Ⅱ期(第45図下)

竪穴式住居跡 S H395401 住居跡の西辺中央に竈を備え、約4.8m四方の規模を持つ竪穴式住居跡である。検出面からの深さは、約20cmを測る。支柱穴は、4か所検出することができた。柱穴のうち1か所の掘形内から、土師器のミニチュアの土器が出土している。竈内からは灰、炭、骨片などとともに土師器の甕が出土している。住居跡の床面からは、方向性を持つ藁状の炭化物が認められた。縦方向にまとまる部分、円を描くようにまとまる部分などがあつた。焼失家屋の屋根材の可能性もあるが、炭化物は床面の全面に分布するのではなく偏在化しており、床面に焼土が認められないことや木材の炭化物がないことから焼失家屋の可能性は低い。床面における出土遺物も極めて少なく、土器などが持ち去られているようすがわかる。第47図の1が竈内から出土している。

竪穴式住居跡 S H395405 短辺約4.8m・長辺約6.5mの規模をもつ長方形プランの竪穴式住居跡である。検出面からの深さは約5cmで、残存状態は良好ではなかった。竈は、北辺の中央からやや西にずれた部分にあり、縦に長い円礫が支柱として残されていた。竪穴部分では縦横に炭化した柱材と考えられる木材が認められ、屋根の一部と考えられるものも検出でき、焼失家屋と考えられる。

竪穴式住居跡 S H395407 一辺約4.3mの規模で、周壁溝を持つ竪穴式住居跡である。検出面からの深さは、約10cmを測る。竈は西辺の中央部に認められた。支柱穴は4か所検出でき、その内の1か所の柱掘形内からは、第47図10の土師器の壺が胴部が完形の状態で出土している。住居跡床面で竈の北側に近接して直径約50cmの土坑が検出できた。この土坑内からは、第47図2の甕が下半部を打ち欠かれた状態で正位置で据えられていた。底部の破片や同一個体の破片も認められないことから、元来下半部が欠損した状況で据えられていたと考えられる。共伴遺物には第47図の3・4で示した製塩土器がある。何らかの作業に伴う土坑と考えられる。S H395407及びS X395411の上層には、人頭大の火を受けた破碎角礫と炭化物、数十個体の完形土器群を検出した。出土土器の主体となるものは、須恵器杯身・杯蓋であるが、甕、口径が約25cmの大形の須恵器の杯身、装飾付き須恵器の脚部などの一般集落などでは特殊な須恵器が含まれていた。S H395407の輪郭は、古墳時代Ⅱの遺構面で初めて検出できたが、住居床面及び竈の土器と詳細に検討する必要がある。

竪穴式住居跡 S H395433 S H395407の床面で検出した竪穴式住居跡である。一辺の長さが約3.3mの小形の竪穴式住居跡で、検出面からの深さは約15cmを測る。住居跡の立ち上がりから床面にかけて埋土との間に薄く炭化物が認められた。北西辺中央に焼土が認

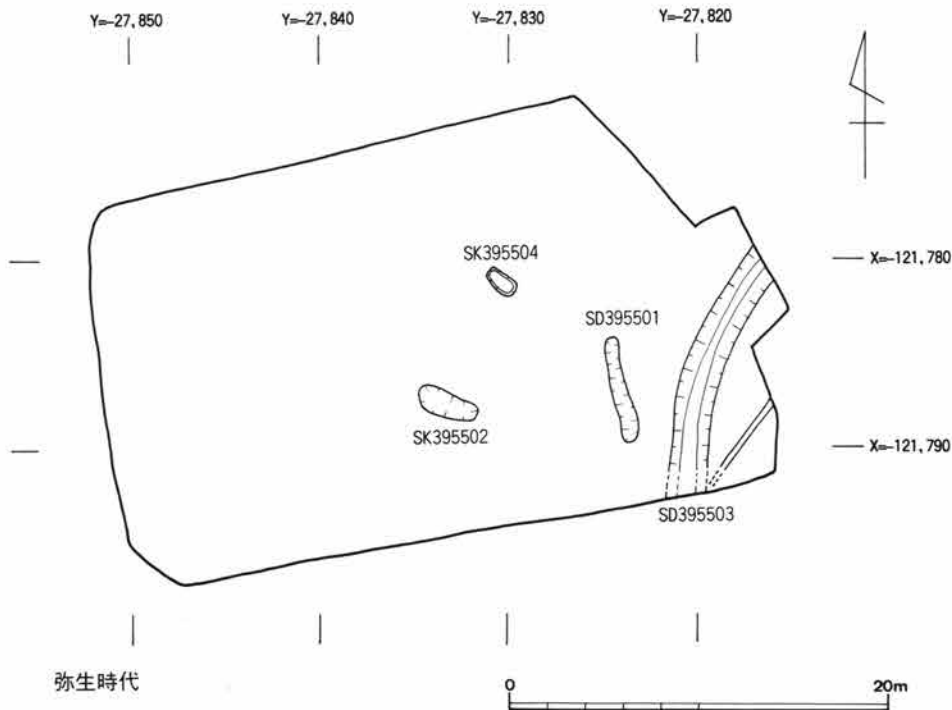
められた。S H395407によってつぶされた竈跡の可能性が指摘できる。S H395407の中に軸を同一にして内包されることからなんらかの関連があるものと考えられる。

掘立柱建物跡 S B 395455 柱間が南北約1.7m・東西約1.5mで2間×2間の規模を持つ総柱の倉庫と考えられる建物跡である。遺構の切り合い関係から、S H395433に先立つ建物跡であることがわかる。詳細な時期は、出土遺物がほとんどないことから不明である。

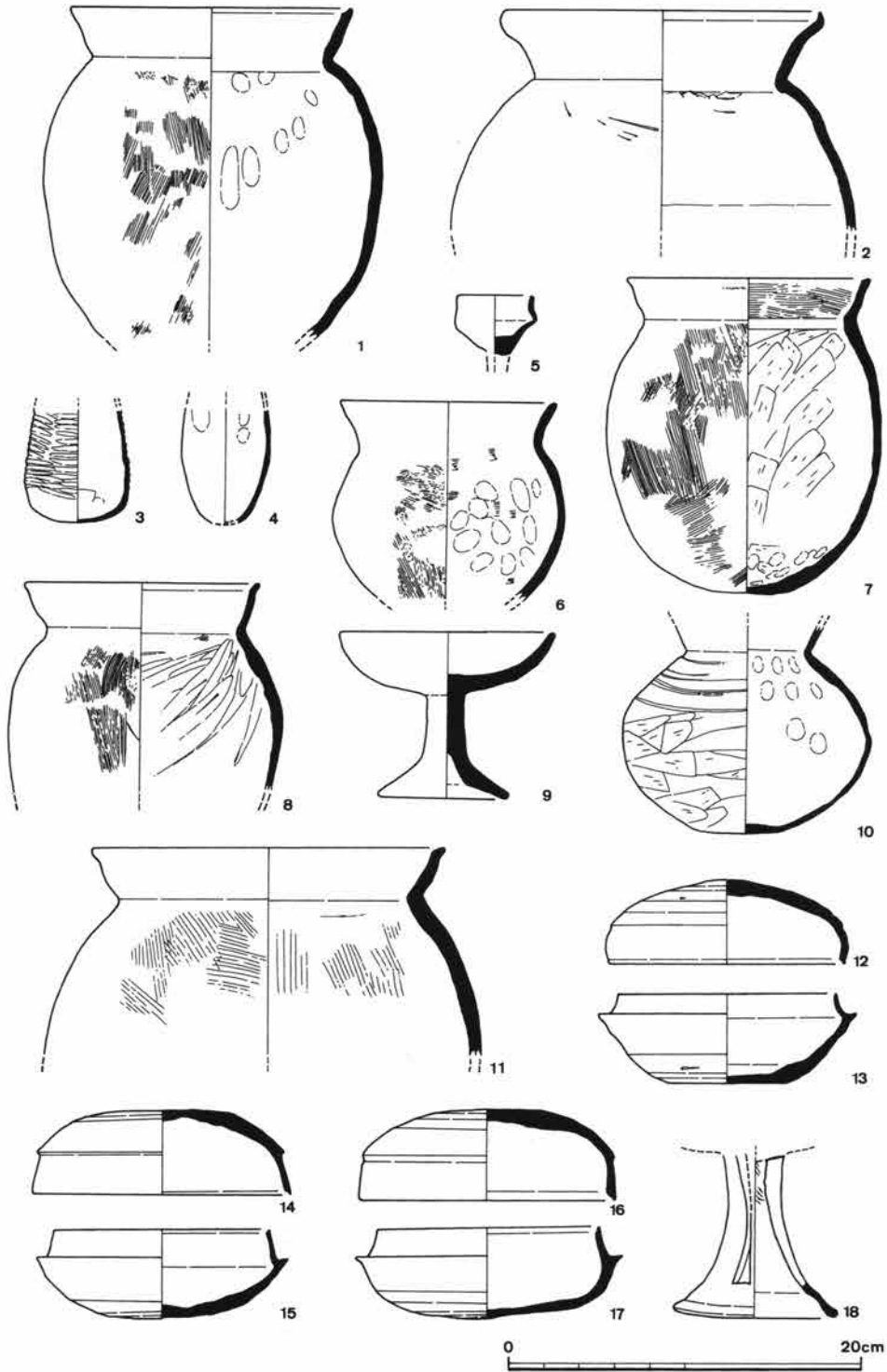
土坑 S K 395404 長楕円形を呈する土坑である。長径約4.5m・短径約1.6m、検出面からの深さ約20cmを測る。内部からはT K216並行期と考えられる土師器・須恵器などの一括遺物が出土している。須恵器には、第48図15の樽形甕や格子目タタキを持つ軟質の韓式土器片などの珍しい器種が含まれている。東隣りに近接する1991年度調査のA地区からは、革袋形の須恵器が出土している。また、南に約300mの算用田遺跡からは鳥形甕が出土しており、この地域は、5世紀段階の特殊な須恵器が出土する地域として注目できる。

S X 395411 不定形の土坑である。埋土の上層では、大形の材を含む炭化物が多く見られたが、底部では炭化物を含まない鮮やかな赤褐色の焼土層が約30cmほど堆積していた。この遺構の上層で検出した焼け礫と完形土器群との間に関連があるかは不明であるが、これまでに整理された出土遺物を見る限り、時期差はほとんど認められない。

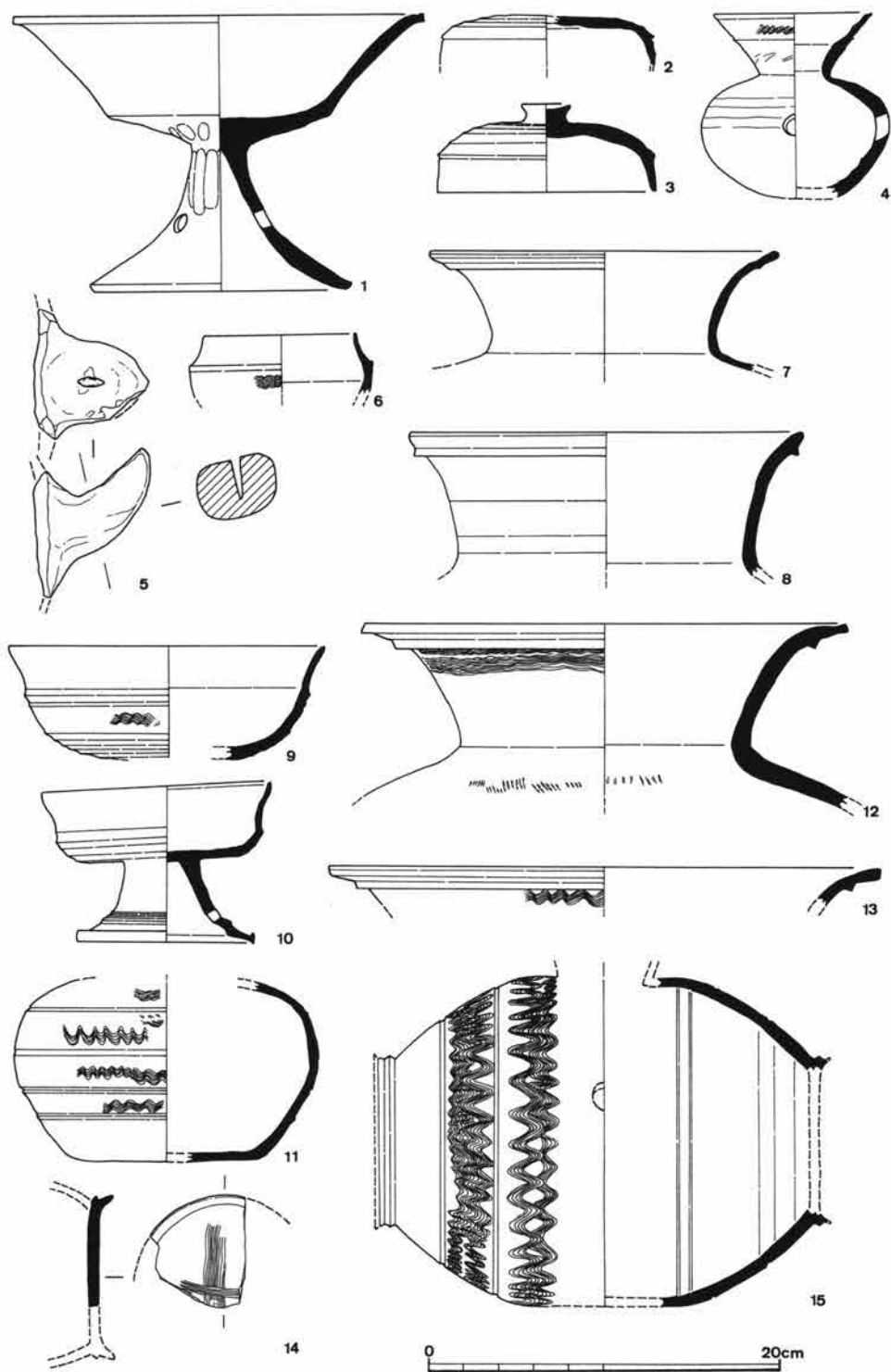
S X 395402 トレンチ内で南東隅のみを検出した遺構である。遺構の方位が他の堅穴



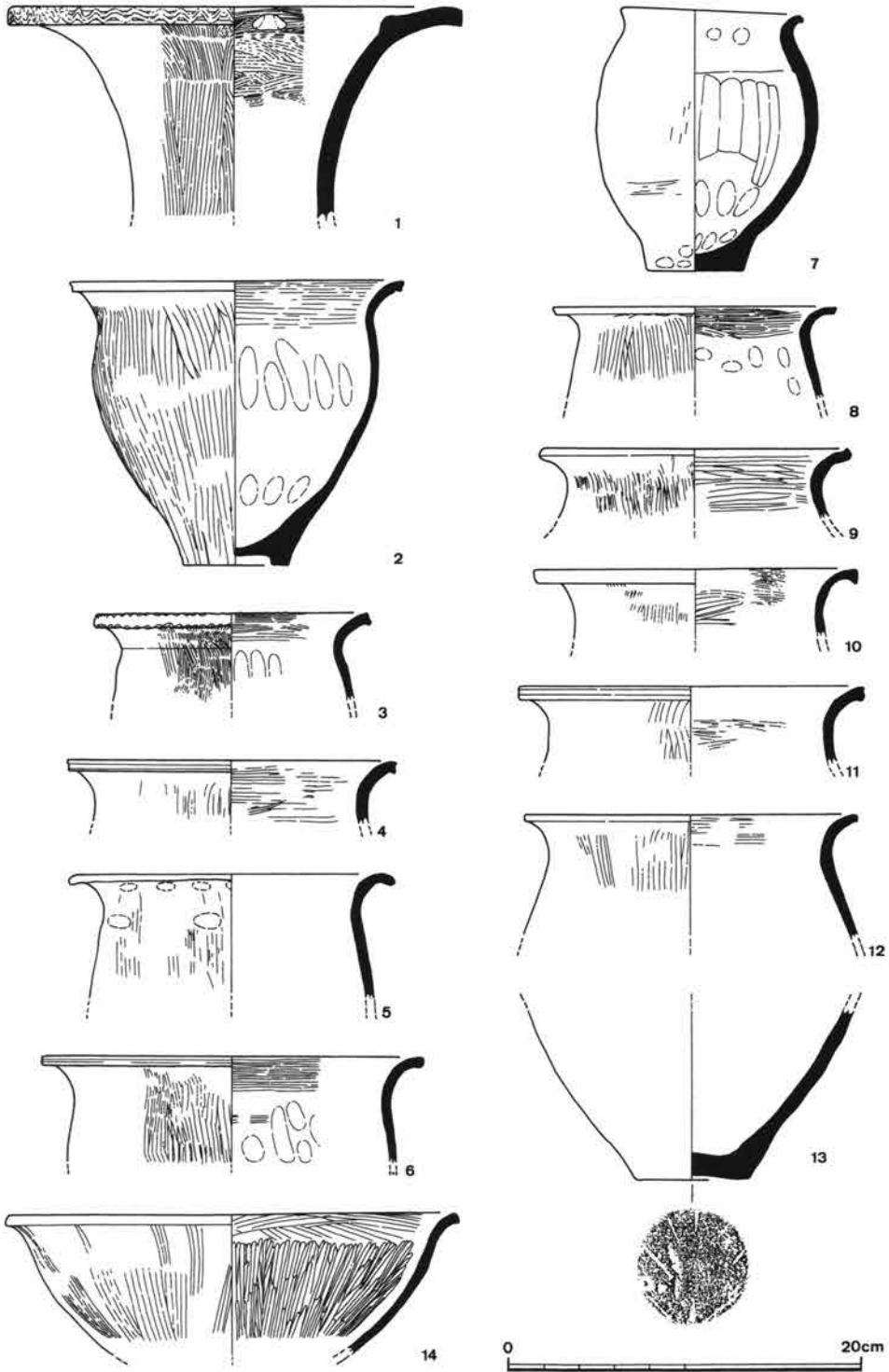
第46図 下植野工区A地区 遺構平面図(3)



第47図 下植野工区A地区 出土遺物実測図(1)



第48図 下植野工区A地区 出土遺物実測図(2)



第49図 下植野工区A地区 出土遺物実測図(3)

式住居跡と方向を一にすることから、竪穴式住居跡と想定できる。時期は不明である。

溝 S D 395444 トレンチ内を横切る、幅約70cm・深さ約7cmの溝である。溝内からは布留式土器が検出でき、この遺構面ではもっとも古い遺構の1つである。

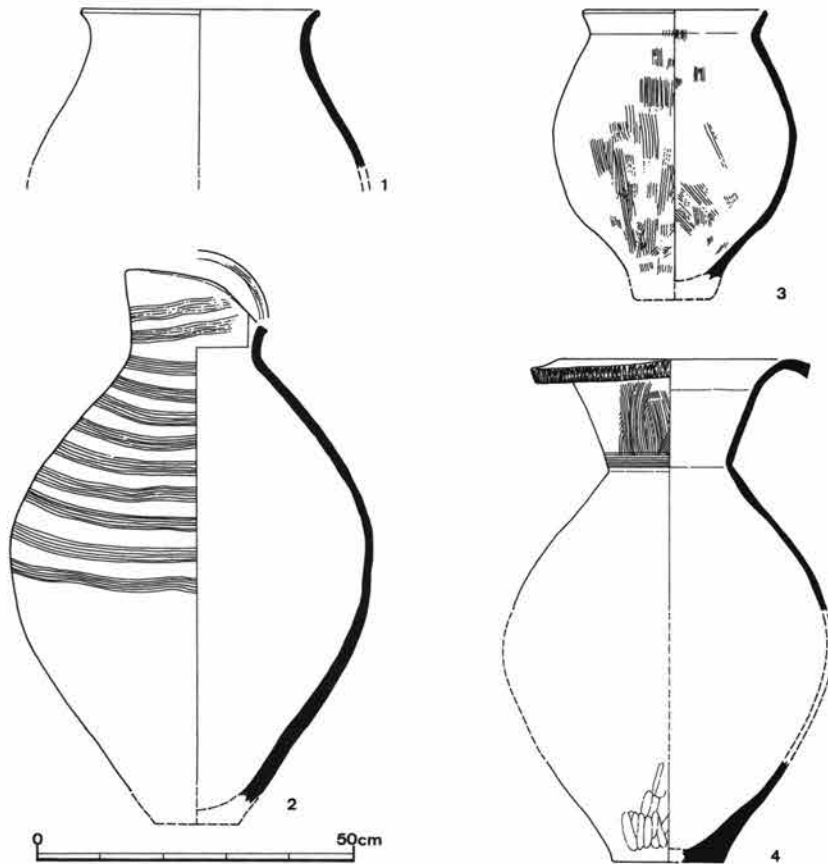
柱穴群 S H 395401・S H 395433の西側には柱穴群が認められる。遺物などの詳細は検討中であるが、焼土を埋土中に含む特徴的な柱穴が数か所あり、出土遺物にはT K 216と考えられる須恵器の甕が出土している。

包含層から出土した遺物には、初期須恵器・甕の把手に刺突が施された土師器をはじめ、鉄鏃や直刃の鉄鎌がある。

e. 弥生時代(第46図)

弥生時代の遺構・遺物は、すべてが畿内第Ⅱ様式に属すると考えられる。包含層中からは緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧やサヌカイト製の石槍の未製品などが出土している。

溝 S D 395501 全長約5.6m・幅約70cm、検出面からの深さが南部の浅い部分で20cm、北部の深い部分では80cmである。出土遺物には第50図の2の水差し形土器があり、北部の



第50図 下植野工区A地区 出土遺物実測図(4)

一段深くなった土坑状の部分から1個体分出土した。

土坑 S K 395502 S H 395401の床面で検出した土坑である。検出面からの深さは約40cmを測る。埋土は、有機物の影響を受けたと考えられる黒灰色のシルトであった。出土遺物には、弥生土器の破片と横長剥片を利用したサイドスクレイパーがあった。

溝 S D 395503 トレンチ南方部を南北に弧状を描きながら貫く溝である。埋土は、径5cm程度の礫を多く含む砂礫である。検出面からの深さは約1mを測る。出土遺物には第49図14がある。S D 395503の西肩で小規模な土器溜まり状に数か所で弥生土器が出土した。

土坑 S K 504 S H 395405及びS H 395433の床面で検出した土坑である。検出面からの深さは25cmを測る。

(中川和哉)

②B地区

(1)調査経過と基本土層

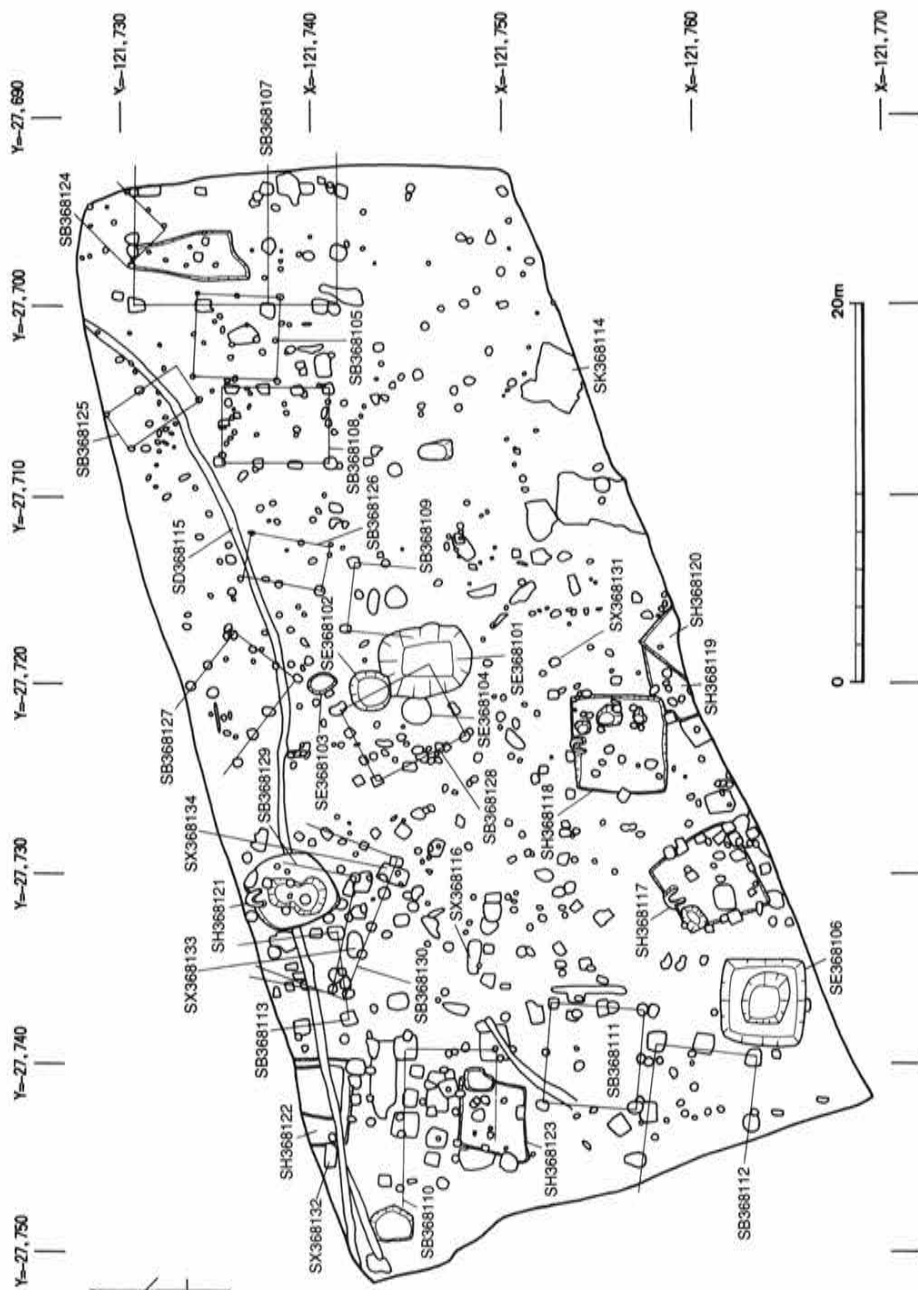
平成2年度の試掘調査を受け、平成3年度から下植野工区B地区の発掘調査が行われている。昨年度にはB地区西半の調査が終了したが、東半部は第一遺構面(平安時代以降相当面)の調査が実施されただけであった。本年度は、東半部の第二遺構面より下層の調査を実施した。B地区東半部の調査面積は、約1,820m²である。

調査地東半部の基本的な層位は、灰白色砂礫(大石を含む：平安時代洪水堆積層)－褐色砂層(平安時代包含層)－黒褐色砂礫土層(古墳時代後期包含層)－黄褐色土(地山)である。灰白色砂礫層上面では、中・近世の遺構が主として確認されており、前述のように平成3年度に調査を行っている。黒褐色砂礫土層上面(第二遺構面)では近世・平安時代前期・古墳時代後期の遺構が、黄褐色土層(地山)上面(第三遺構面)では主として古墳時代以前の遺構が確認できた。黒褐色砂礫土層を除去すると、部分的に灰褐色砂礫が堆積しており、これは自然流路及びその氾濫原と認められた。

(2)調査概要(第51図)

検出した遺構は井戸跡・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝など数多く、時代も古墳時代前期から近世に至る。ここでは、時期ごとに遺構を整理して概略を述べる。

各遺構の説明をする前に、掘立柱建物跡の時期認定の方法について述べておきたい。調査地内では掘立柱建物跡が多数復原されるが、これらの柱掘形からはそれぞれの時期を決定しうる遺物の出土は皆無である。そこで、次のように推定して時期区分を行った。掘立柱建物跡は大きく二タイプに分けられた。一は、大形の方形掘形を有し、建物跡方位がほ



第51図 下植野工区B地区 遺構平面図

ほぼ北を向くもの、二は小形の円形柱掘形を有し、方位が不定方向のものである。前者の埋土は灰褐色系統の砂礫で、後者は淡褐色～茶褐色土で、この点からも各タイプの建物跡の時期が異なるものと推定される。これらの柱穴は、確実に中・近世の井戸に切られることから、それ以前であることは間違いない。また、S B 368105は確実に瓦器を伴っており、この埋土とも異なる。一方、この調査地内出土の遺物は、近世以外では古墳時代後期と長岡京期～平安前期の二時期のものが大部分であり、この二時期にそれぞれが相当すると考えて大過なからう。昨年度報告のS B 36837・38(平安時代前期)がほぼ北を向き、柱穴の平面形が方形を呈していることから、前者のタイプの掘立柱建物跡に長岡京期～平安時代前期の時期区分を与えたい。そして、西半検出のS B 36853～55が円形の柱掘形を有し、確実に古墳時代後期の竪穴式住居跡より層位的に下層である事実から、後者のタイプを古墳時代後期と考え、以下の説明の時期区分としたい。

a. 中・近世

井戸 S E 368101 第二遺構面で検出した近世後期の井戸で、内部から染め付け片や唐津焼片が出土した。内部には井戸枠(井戸側)があり、隅柱縦板組横棧止めである。坑は、深さ2.6m・長辺4.8m・短辺3.8mである。野井戸であろう。

その他に、S E 368102～104の3基の素掘りの井戸を検出しているが、径1～2m・検出高1m程度の規模である。

掘立柱建物跡 S B 368105 東西2間・南北2間の掘立柱建物跡で、柱間は南北2.35m・東西2.3mを測る。柱穴内から瓦器片が出土している。

b. 長岡京期～平安時代前期

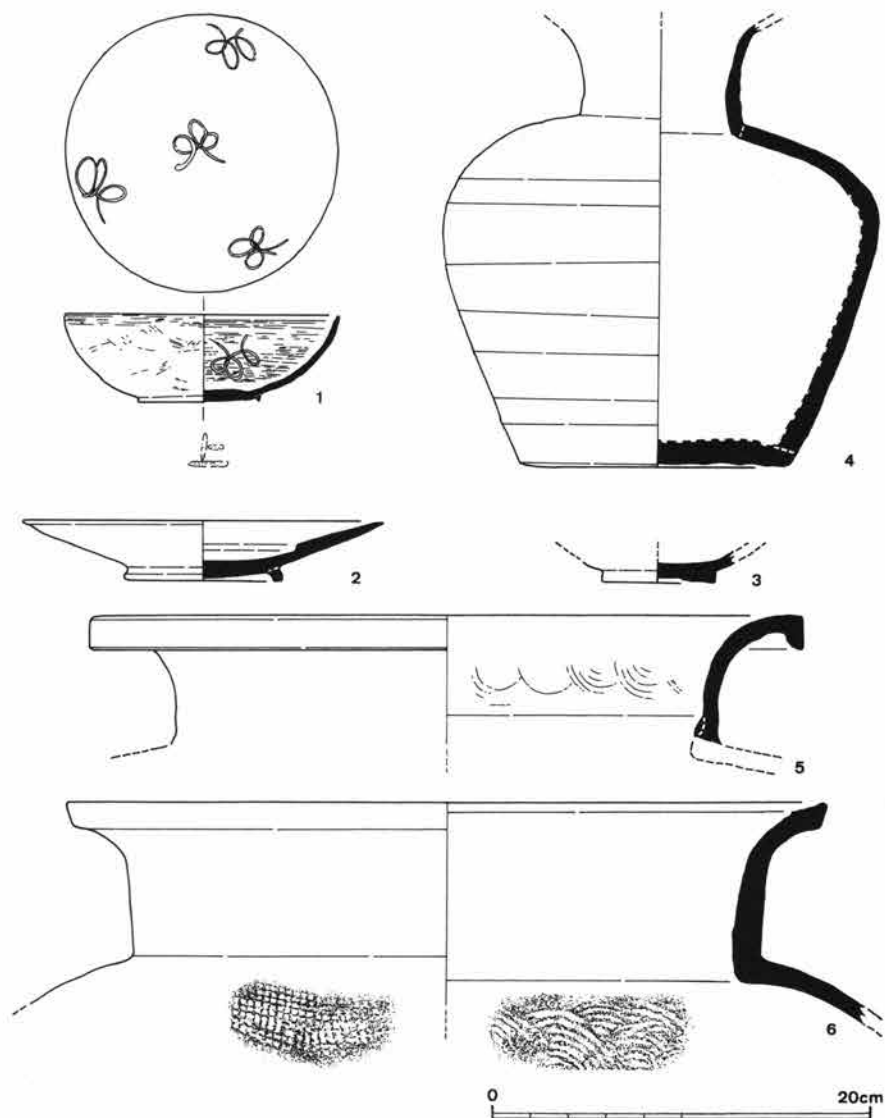
井戸 S E 368106 井戸の掘形の平面形は、一辺4.5mを測る正方形である。二段に掘られ、二段目の掘形の平面形は上辺2.2m×1.9mで、検出面からの深さは3.2mである。ほぼ真北を向いて造られている。井戸側は横板井籠組で、三段分が残存していた。井戸側の内法は65cmで、一段の横板は高さ40～50cmで、総高1.35mである。上部の埋土中から、平城宮式6133D-b型式の瓦当が出土している。埋土中の緑釉土器から、9世紀後半から10世紀前半に廃棄されたものと判断される。

溝 S D 368115 昨年度調査の平安時代の路面(S F 368136：昨年度報告)の南側溝の掘り残し部分である。調査地の北側で東西に約55mにわたって、やや蛇行して検出した。埋土は黄褐色砂質土で、古墳時代の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の埋土に近似する。しかし、埋土からは古墳時代の土器片が出土しているが、一点のみ平安時代の須恵器壺片が出土しており、昨年度の路面・側溝S F 368136の断ち割り内の土層観察によって、一連のものであると確認されている。また、この溝は、掘立柱建物跡の柱穴を切っている。壁面の観察

では上位の層から掘り込まれ、掘形は逆三角形で、高さ50cm程度を測る。

S X 368116 土壙墓状の遺構で、0.8m×1.9m・検出高約50cmの土壙である。ほぼ真東西に造られており、内部からは土師器・須恵器の小破片と炭が比較的多く出土した。

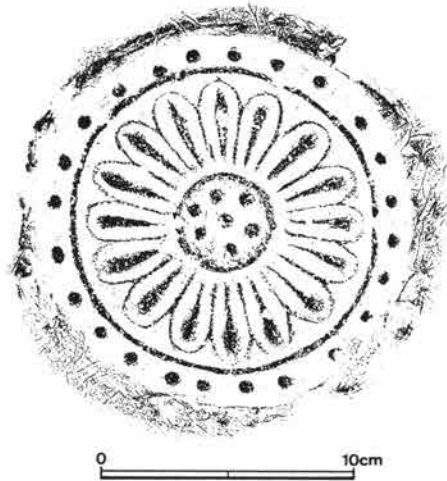
S K 368109 調査地東南部で検出した平面不整形の土坑である。底面は舟底状を呈する。この土坑内からは後述のように、長岡京期と判断してよいような土器が比較的多く出土した。土器はすべて小破片で、接合しても一個体になるものはなかった。S B 368107・108の南側に位置していることから、これらの建物跡群と何らかの関連を想定したい。



第52図 下植野工区B地区 出土遺物実測図(1) S E 368106

掘立柱建物跡 S B 368107 南北2間・東西2間以上の建物跡で南側に廂を持つ。柱穴の掘形は一辺が60～80cm程度と大きい。後述の S B 368108と南辺が一致する。ほぼ真北方向を向く。

掘立柱建物跡 S B 368108 S B 368107の西側で検出した東西2間・南北3間の掘立柱建物跡である。S B 368107の南辺の柱筋とこの建物跡の南辺の柱筋がそろうことから、同時期に存続していたものと推定される。そのほかに、建物跡の方位と柱掘形から S B 368110～113の掘立柱建物跡も平安時代前期頃のものとして推定される。



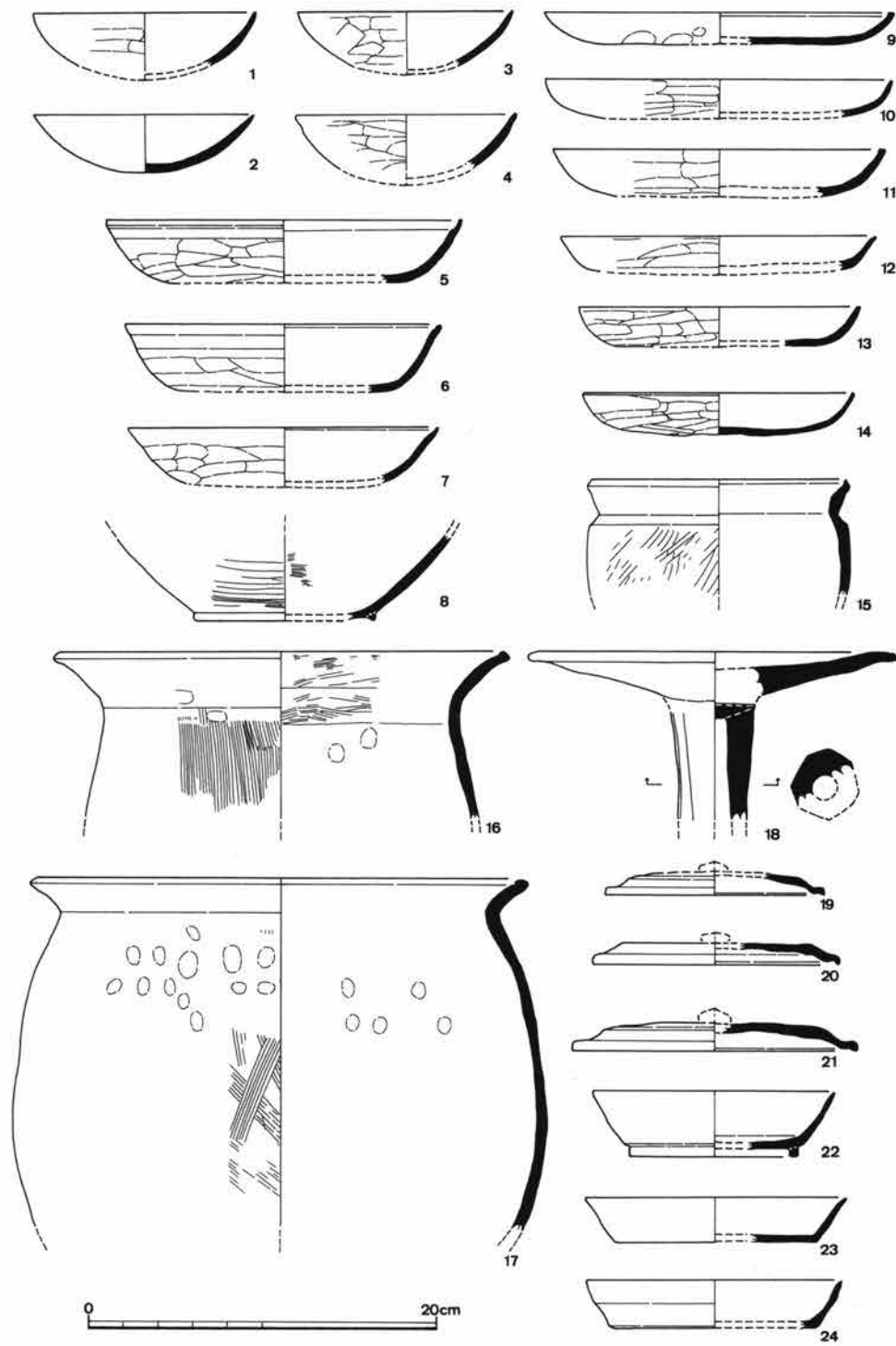
第53図 下植野工区B地区 出土遺物・拓影
S E 368106

c. 古墳時代

竪穴式住居跡 S H 368123 竈状の焼土中に須恵器杯身・高杯(杯部)・壺体部片と土師器片が出土した。これらの土器は火を受けていない。土器群の周囲には焼土がめぐっているが、西北部は焼土が途切れていた。検出した表面だけ火を受けており、明瞭な竈とは認められなかった。また、B地区西半の S X 36820～22と同様の祭祀遺構かと丹念に調査したが、周辺からは玉類の出土はなかった。この北側には竪穴式住居状の方形の遺構があり、3.55m×3.75m・検出高約10cmであった。おそらく、竪穴式住居跡と竈の残欠であろう。

竪穴式住居跡 S H 368121 円に近い隅丸方形の竪穴式住居跡で、短辺4.0m・長辺4.25m、竈は北東隅に造られていた。住居跡の深さは、検出面から約35cmを測る。支柱穴は、4か所を検出した。中央部床面には、長径3.1cm・短径2.2cm・深さ10cm程度にくぼんでいる。竈は比較的よく残存しており、幅100cm・長さ110cmを測る。竈内部には、土師器甕を倒立させて中に据えたまま天井部を壊した状態であった。土器は、竈燃焼部から須恵器甕片が、床面中央部やや西寄りのところからは須恵器甕片が出土した。竈右に貯蔵穴状の土坑(60cm×115cm)を検出したが検出高8cmと浅く、内部から顕著な土器の出土はなかった。

竪穴式住居跡 S H 368122 調査地西北部にあって、平面形が方形竪穴式住居跡の南半部分と判断する遺構で、東西4.7m・南北は3.1mを確認した。埋土は、淡黄褐色砂質土が堆積していた。床面で遺物や柱穴などの遺構は確認できなかったが、埋土が S H 368121に似ていることや平面形態・規模から住居跡と判断される。埋土内から焼土・炭などは検出されていない。この住居は建て替えられたようで、西側に一段低く遺構の掘り込みを確認した。

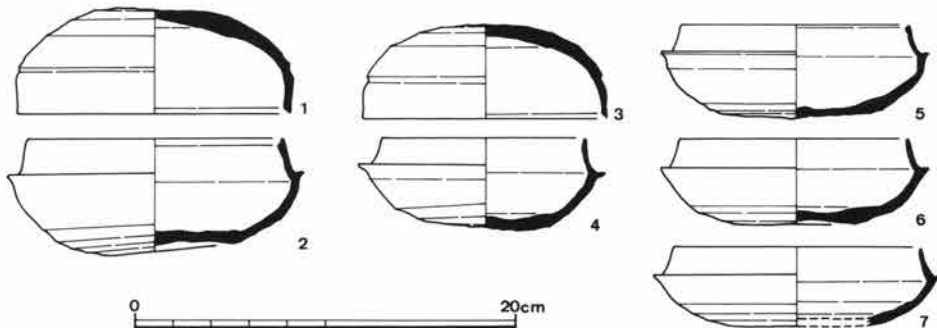


第54図 下植野工区B地区 出土遺物実測図(2) S K 368114

竪穴式住居跡 S H368118 S H368119・S H368120に切り勝っている。平面プランは、4.9m×5.1mの隅丸方形を呈する。検出高は約25cmを測る。主柱穴は4か所で検出した。北辺の中央部に竈があり、S H368121とともに、比較的よく残存していた。幅1.1cm・長さ1.1cmを測る。竈燃焼部内には支柱石が残っており、土師器甕が壊された状態で検出された。竈の前面には、幅80cm・長さ50cmの範囲で焼土が広がっている。竈本体より住居跡の外側に向けて、煙道部が約40cmにわたり残存していた。S H368121で認められた竈廃棄に伴う土器祭祀は認められなかった。しかし、焚き口部で完形の杯身と杯蓋各1点が出土し、通常に竈を使用する際には不都合であるので、竈廃棄に際してここに置かれたと推定される。そうすると、これもまた竈廃棄に伴う祭祀の一貫と理解してよからう。竈の東側には貯蔵穴が掘られており、長辺85cm・短辺75cmの隅丸方形である。

竪穴式住居跡 S H368117 平面プランは、一辺4.3m×4.3~5.1mの隅丸方形を呈している。住居跡の深さは、検出面から約15cmを測る。主柱穴は4か所を検出した。竈は、北壁のほぼ中央付近に造り付けられており、幅105cm・長さ115cmを測る。竈の本体から住居跡の外側に向けて、煙道部が約30cmにわたって残存していた。竈の燃焼部の天井部分は、後世の土坑によって一部が削平されていた。竈の西側には貯蔵穴が掘られており、長径125cm・短径80cmの楕円形で、深さは40cmを測る。貯蔵穴底面より、須恵器杯身・杯蓋、鉄片が出土している。杯蓋は完形であるが、杯身は2つに割られており、内面と外面がそれぞれ上になった状態で検出された。土器は、竈内から土師器甕と須恵器甕が、竈周辺部からは須恵器杯蓋が出土している。

土器埋納土坑 S X368131 須恵器甕を埋納した土坑で、土坑の規模は長径80cm×短径70cm・深さ45cmである。甕は、埋納の際に割られたようで、バラバラの破片が納められており、据えられた状況ではなかった。出土した破片を接合するとほぼ完形になったが、体部や口縁部の一部がなかった。



第55図 下植野工区B地区 出土遺物実測図(3)

この時期の掘立柱建物跡として、S B 368124～130の7棟が復原できる。これらの掘立柱建物跡は、調査地の北半で検出されており、S H 368121を除いて、竪穴式住居跡との重複はなく、それぞれが場所を違えて建て分けていたのかもしれない。また、土壇墓状の遺構——長辺1.5～2.0m・短辺0.7m程度の土坑を数基検出しているが、これらはS X 368132～134のように東西・南北に主軸を向けていない。顕著な遺物の出土はないが、おそらく古墳時代後期のものであろう。

自然流路 中央部より西で、地山面で二条の自然流路を検出した。東側の流路内から土師器小片が出土したが、時期の決定は困難である。竪穴式住居跡(S H 368117)が流路肩に近接していることから、同時並存は不可能と想像されるため、竪穴式住居跡以前——古墳時代後期以前のものとして推定される。このB地区の東に近接したC-1地区では、布留期の竪穴式住居跡が検出されているが、B地区では布留期の遺構は確認されていない。その理由として、この流路が存続していたために、住居地として不適であったとも想定される。

(3)出土遺物(第52～55図)

第52図は、S E 368106から出土した遺物で、1が黒色土器、2・3が緑釉陶器、4～6が須恵器である。このうち、1・4の土器は、井戸側内ではほぼ完形で出土しており、井戸廃棄の際の祭祀用の土器と考えられる。4は、口縁端部が全周にわたって打ち欠かれている。2・3・5・6は、井戸の埋め戻し土の中から出土している。第53図は、第52図と同じく、S E 368106の埋め戻し土の内から出土した軒丸瓦である。瓦当面は、ほぼ完存しており、平城宮式6133D b型式に相当する。第54図は、S K 368114から出土した遺物の実測図である。おおむね、長岡京期の一括遺物と考えてよい資料と考える。第55図は、竪穴式住居跡から出土した須恵器杯身・杯蓋の実測図である。1・2はS H 368117、3・4はS H 368118、5～7はS H 368121から出土している。

(4)小 結

長岡京期～平安時代前期にかけての遺構をまとめて検出した。昨年度分を含めると、東西約100mの間に10棟の掘立柱建物跡が極めて整然と建ち並んでいたことが復原できる。特に、一辺1mの柱掘形を有する掘立柱建物跡や、一辺4.5mの掘形を有する井戸などを検出し、予想をはるかに超える成果を得た。柱掘形内から明瞭な土器の出土がなく、その時期決定は困難であるが、S E 368106の井戸廃棄に伴う土器群の年代観とS K 368114内出土の長岡京期と認定し得る土器群が、先の建物跡群の時期決定を行う資料と考える。それらによると、長岡京期または、長岡京期直後から平安時代前期頃と捉えられる。また、今

回の建物跡群が長岡京期だとしても、条坊関連遺構が確認されていないので、長岡京がここまで施工されていたとは言えない。京外における宅地とも考えられるからである。

今年度の調査で、平城宮式瓦が1点出土し、B地区では昨年度にも平城宮式瓦が出土しており、量は少ないが、上述の建物跡群の性格や周辺の歴史的環境を考える上で意義深い。今回の調査で平城宮式瓦が移動したルートを推定するに、二つの可能性が考えられる。一つは、平城京から直接に下植野南遺跡に移設された場合で、他方は、平城京→長岡京→下植野南遺跡と移動した場合が考えられる。前者の場合は、平城京廃都と長岡京遷都を契機として、何らかの施設が設けられたためであり、後者の場合は、長岡京廃都と平安京遷都を直接の契機とするものであろう。どちらにしても、平城宮式の瓦を使用していることから、きわめて「官に近い施設」または「官の施設」と推測される。

また、この地が久我畷に近接した地点であることも重要な点である。久我畷は、平安京遷都と同時に、山崎津と平安京とを結ぶ直線道路として計画されたと考えられている。中川和哉は、乙訓郡内の平安時代の瓦が出土する遺跡を「長岡の南」に移された第3次山城国府と関連させて捉えているが、この下植野南遺跡一帯もその候補地となろう。平安京との交通の便や山崎津の存在を考えあわせると、下植野南遺跡は水陸交通の要衝地として有力であろう。

9世紀後半には、下植野南遺跡におけるこれらの建物の廃棄、さらに西国街道の整備、河陽離宮の国府への転用など、乙訓郡南部の大山崎町は大きく変貌するようである。これらがどういった要因で生じたのかは、周辺の調査の進展をまって考えたい。

(岩松 保・岡本一秀)

③C-1地区(第56図)

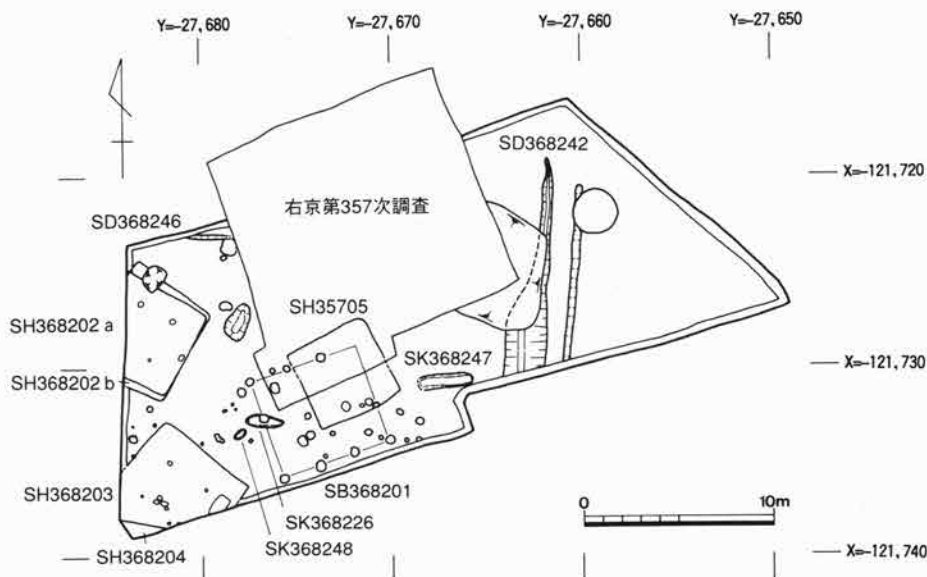
(1)調査経過

C-1地区は、平成2年度に調査を実施したC-1トレンチ(右京第357次調査)を東西及び南側に拡幅した調査地区である。調査は、平成3年度に機械掘削及び遺構検出作業まで行い、平成4年度に継続して実施した。機械掘削は、平安時代の遺物包含層の堆積する北東部を除き地山面まで行い、同一面で遺構検出を行った。この地区では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。以下、主要な遺構について概要を報告する。

(2)調査概要

a. 弥生時代 中期(第Ⅲ様式～第Ⅳ様式)の土壌などを検出した。

土壌 S K 368226 東西方向に主軸を有するやや不定形な土壌である。長軸2.1m・短軸



第56図 下植野工区C-1地区 遺構平面図

0.8mを測る。土壌の東側ではほぼ完存する水差形土器(第57図1)が出土した。この水差形土器は、生駒西麓産の胎土を有し、櫛描き列点文と簾状文が施されている。

土壌 S K 368248 S K 368226の南西に近接して位置する。長辺0.75m・短辺0.3~0.4m、検出面からの深さ0.1mを測る小形の土壌である。土壌内には広口短頸壺(第57図2)が納められていた。壺は、体部の中央付近で一度分割したものを再び組み合わせたもので、その際、上半部を逆さにして(口縁部を下にして)体部下半と組み合わせ、横にした状態で埋納されていた。以上の状況から、小児用の土器棺墓と考えられる。

土壌 S K 368247 長軸現存2.8m・短軸0.6~0.8m・深さ0.2mを測り、東西方向に主軸を有する土壌である。横断面は、ゆるやかな「U」字状を呈する。土壌の中央部及び東側から土器がまとまって出土した(第57図3・4)。土壌墓である可能性が高い。

b. 古墳時代 竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡1棟を検出した。

竪穴式住居跡 S H 368202 a S H 368202 bの下層に位置する方形の竪穴式住居跡である。南東辺が4.8m、深さは約25cmを測る。建物跡の方向は、上層のS H 368202 bとほぼ同じである。埋土は、暗青灰褐色~暗青灰色粘質土である。主柱穴は、2か所しか確認できなかった。北辺及び東辺には、周壁溝が存在する。

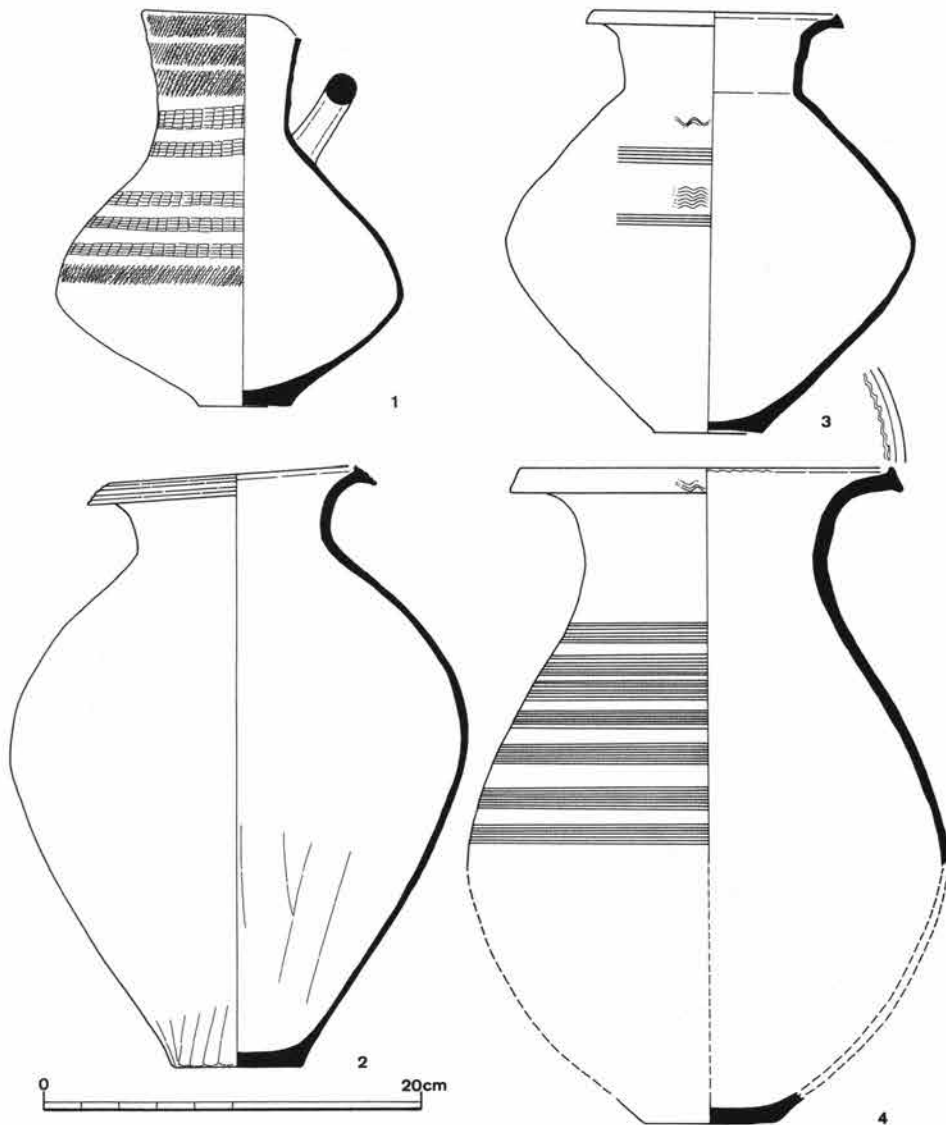
庄内式~布留式土器のほか、石庖丁1点が出土している。

竪穴式住居跡 S H 368202 b S H 368202 bは、下層のS H 368202 aの建て替えと考えられる方形の竪穴式住居跡である。検出面で北東辺4.65m・南東辺5.2m・深さ約20cmを

測る。埋土は、暗灰褐色粘質土及び黄褐色砂質土で、1～5cm大の礫を多く含む。主柱穴は、3か所で検出したが、もう1か所は調査地区外に存在すると考えられる。

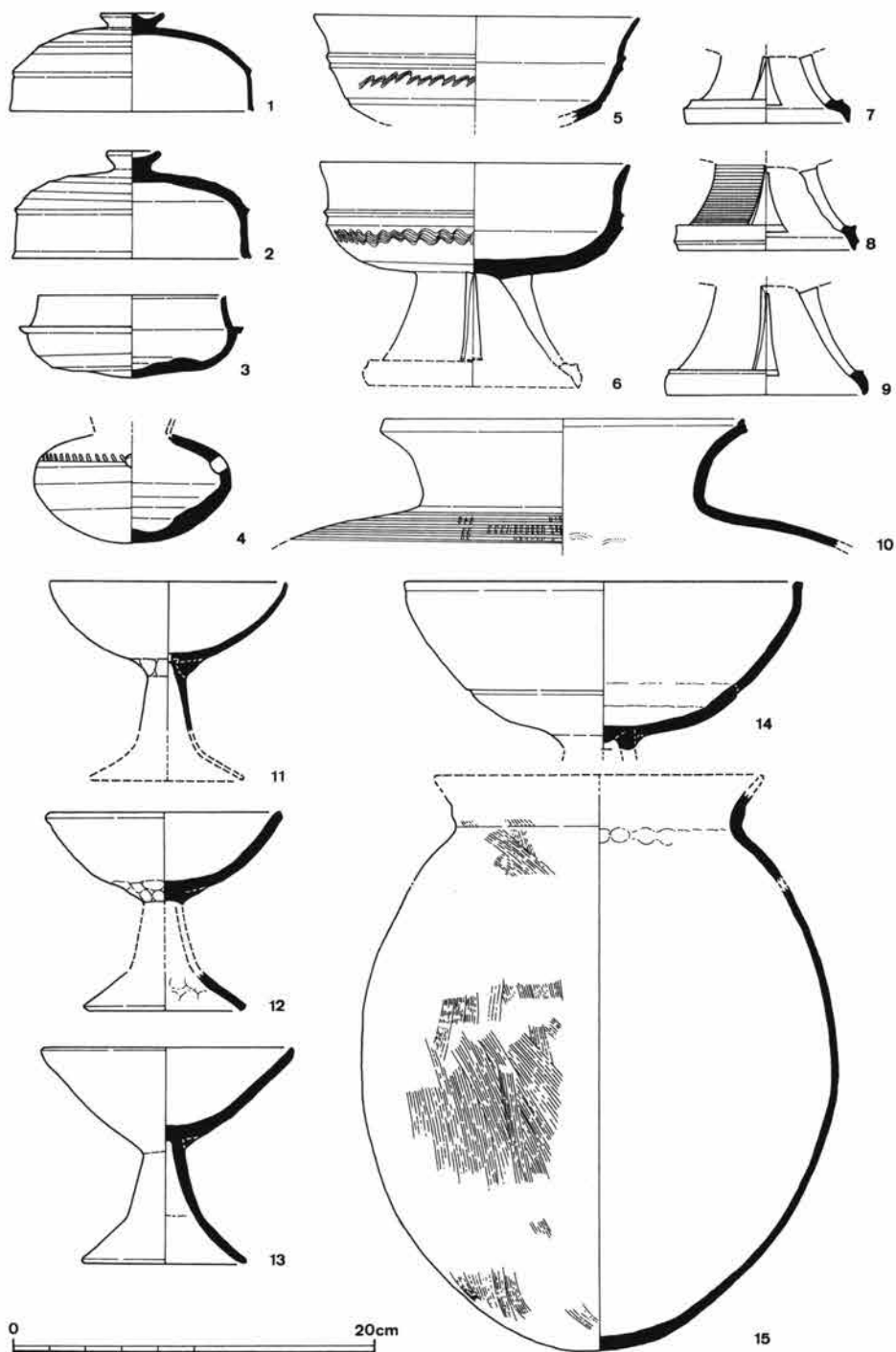
布留式土器が出土した。

竪穴式住居跡 S H368203 調査区の南西部で検出した方形の竪穴式住居跡である。北東辺で長さ約5.6mを測るが、他の三辺については不明である。深さは、検出面から15～20cmを測る。主柱穴は、4か所で検出した。各柱間とも約2.3m、各壁面からは1.6～1.7



第57図 下植野工区C-1地区 出土遺物実測図(1) 弥生土器

1. S K368226 2. S K368248 3・4. S K368247



第58図 下植野工区C-1地区 出土遺物実測図(2) S H368203

mの位置で規則的に配置されている。北東壁の東コーナー付近では、竈に伴うと思われる焼土塊を確認したが、平面形については確定できなかった。

住居跡の埋土内には、広範囲で炭が確認され、半焼もしくは全焼した後廃棄された住居である可能性が高い。

出土遺物(第58図)は、土師器・甕3点、高杯5～7点、須恵器・蓋杯(蓋2点、身1点)、高杯5点以上、甕1点、甕2点である。須恵器は、陶邑編年TK208前後に比定される。

竪穴式住居跡SH368204 SH368203の床面精査時に、調査区の南西隅において検出したもので、底が平らであり、ほぼ垂直に立ち上がる壁面を有することから竪穴式住居跡と判断した。少量の土師器・須恵器が出土した。

竪穴式住居跡SH35705 平成2年度の調査で検出された竪穴式住居跡の南側約半分を確認した。平面形は、ほぼ正方形で、一辺4.4～4.6mを測る。

掘立柱建物跡SB368201 3間×3間の規模をもつ掘立柱建物跡である。桁行6.0m・梁間5.4mを測り、わずかながら東西に長い。東西辺は、N-20°-Wの振れをもつ。3か所の柱穴から少量の土師器片が出土したが、時期は確定できない。SH35705の廃絶後、あまり時間を隔てずに建てられたものと推定しておきたい。

c. 奈良～平安時代 南北・東西方向の溝などを検出した。

溝SD368242 N-3.5°-Eの振れをもつ南北方向の溝である。南側では、幅2.1m・深さ0.4mの規模を有するが、北側では、平安時代に削平を受け、幅が狭くなり途切れる。また、北側では、溝の中心が東へややずれている。埋土は、一部青灰色シルトを含む暗褐色粘質土である。古墳時代の土師器・須恵器とともに、須恵器杯A・杯B・蓋・壺・平・丸瓦(布目・縄目)の各破片が出土した。

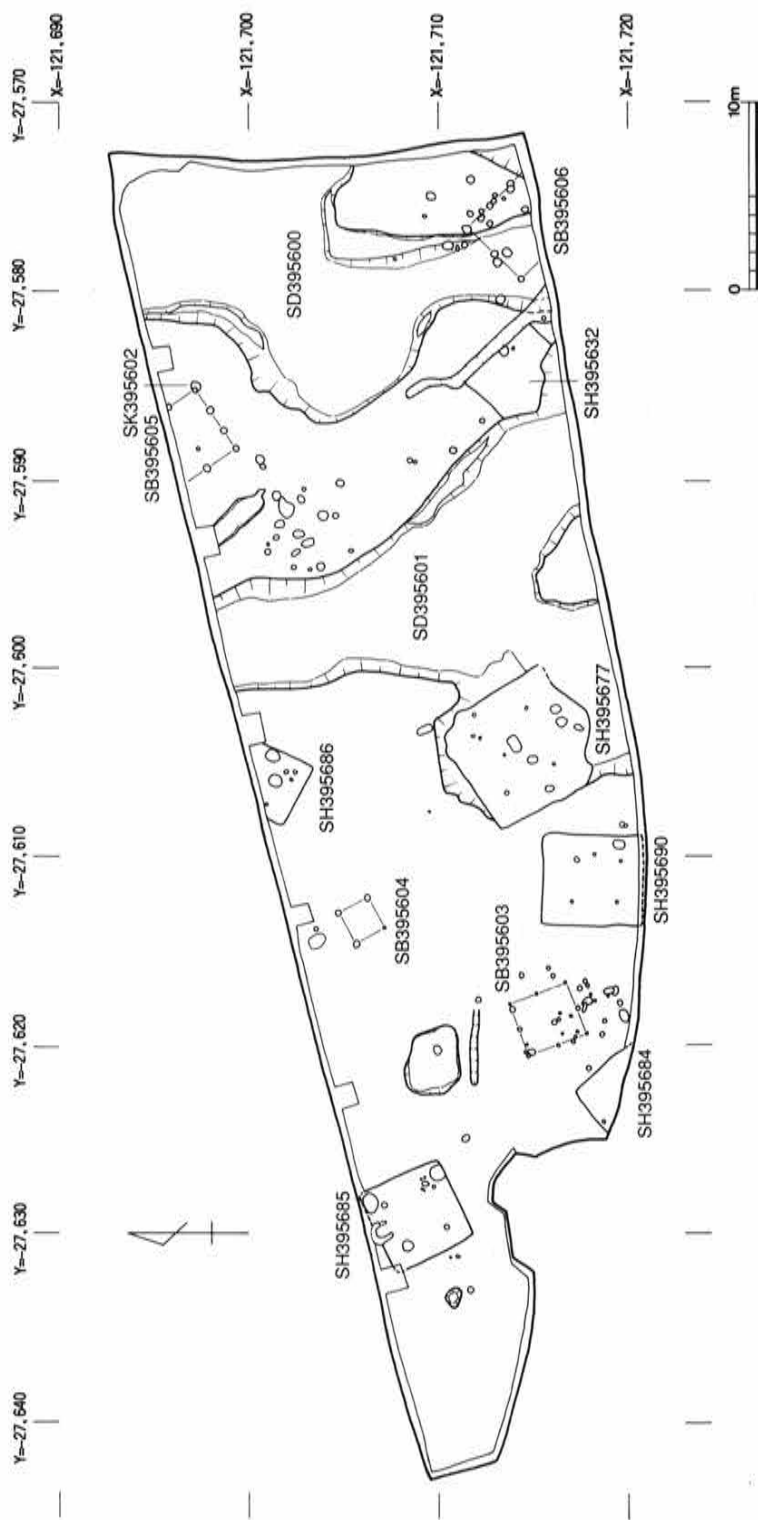
溝SD368246 幅0.3m・深さ約0.2mで、ほぼ東西方向にのびる溝である。東側は、後世の遺構により削平される。須恵器甕体部片、土師器片が少量出土した。

(鍋田 勇・尾関真二)

④C-2地区(第59図)

(1)調査経過

C-2地区は、平成2年度に調査を実施した試掘トレンチを南側に拡幅した調査地区である。調査は、機械掘削により旧耕作土を除去し、上層の遺構検出を行った。この時点で東半部は地山面となり、下層遺構も同時に検出したが、西半部は再度機械掘削を行い下層の遺構を検出した。上層では中～近世の、下層では縄文～古墳時代に至る遺構・遺物を確認した。以下、下層で検出した主要な遺構について概要を報告する。

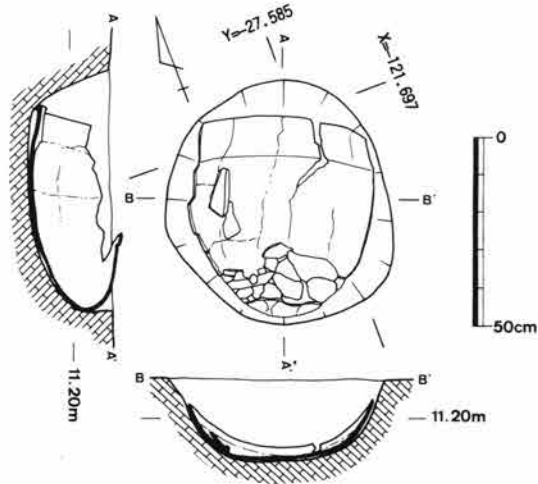


第59図 下槿野工区C-2地区 遺構平面図

(2)調査概要

a. 縄文時代 晩期の土器棺墓1基を検出した。

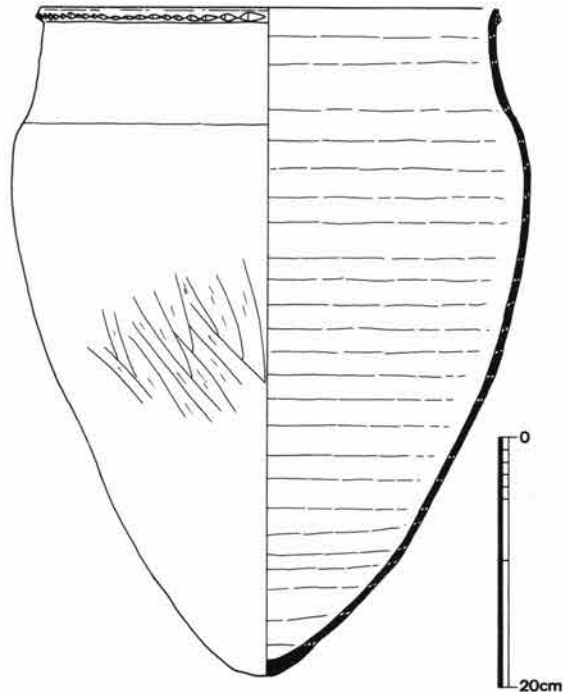
土壙 S K 395602(第60図) 大形の深鉢(第61図)を使用した土器棺墓である。土壙の規模は、検出面で長軸0.65m・短軸0.58m・深さ0.22mを測る。平面形は、ややいびつな楕円状を呈する。深鉢がようやく入る程度の大きさに土壙を掘削し、土壙内にはほぼ横にした状態で深鉢を収めていた。土器の大きさから上部は20cm以上削平を受けていると思われる。深鉢は、滋賀里Ⅳ期に比定される。



第60図 下植野工区C-2地区 土壙 S K 395602実測図

b. 古墳時代 竪穴式住居跡6棟、掘立柱建物跡4棟以上、流路状遺構2条を検出した。

竪穴式住居跡 S H 395690 調査地の南部で検出した。方形の竪穴式住居跡である。東西5.0m・南北5.6m前後と推定される。主柱穴は、4か所で、各主柱穴間とも約2.3mの間隔で配置されている。東壁沿いの主柱穴間には浅いピットが存在するが、性格は不明である。また、南東隅主柱穴の東側、東壁沿いに貯蔵穴が設置される。貯蔵穴は、70cm×50cmのいびつな方形の平面形で、深さは約25cmを測る。周壁溝はない。



第61図 下植野工区C-2地区 出土遺物実測図(1)
縄文土器 S K 395602

遺物は、少量の布留式土器が出土したが、細片化したものが

多く、土器類は住居の廃絶時に持ち去られたものと考えられる。

竪穴式住居跡 S H395677 一辺約6.6~7.0mを測る大形の住居跡である。ほぼ方形の平面形を呈するが、南東辺はやや外側に膨らんでいる。主柱穴は、4か所で検出した。主柱穴の北-東・西-南間は約2.9m、北-西・東-南間は約3.2mを測り、長方形に配置される。住居跡の中心と南東壁沿いのほぼ中央に貯蔵穴が設置されている。周壁溝はない。

土器(第62図)は、10cm内外の石とともに各主柱穴を結んだ内側(内区)に特に集中して出土した。これらは、床面に近い位置から出土しているものの、その出土状況から住居の廃絶後に投棄された可能性が強い。土器は、布留式中段階であり、S H395690のものと近似することから、あるいはS H395690の使用時に廃棄されたものか。

竪穴式住居跡 S H395685 調査区の西部で検出した。一辺4.6~4.7mを測り、ほぼ正方形の平面形を呈する。深さ約20cmを測る。4か所の主柱穴は、各間隔が2.4~2.5mで、ほぼ正方形に配置されている。北辺中央に竈が設置され、北東隅に浅い土坑が付設される。この土坑内には、多量の灰・炭が入っていた。貯蔵穴は、竈と反対側の南東隅に設置されている。出土遺物(第63図)は、土師器(甕・杯・高杯)・須恵器(杯蓋・杯身・甕)などで、後者は陶邑編年TK10前後に比定される。

掘立柱建物跡 S B395603 S H395684の北東に位置する掘立柱建物跡である。2間×2間の規模を有する。柱間は、東西1.45m・南北1.6mを測る。3か所の柱穴から土師器片が出土した。

掘立柱建物跡 S B395604

1間×1間の規模の特殊な建物跡である。柱間は、1.8m前後を測る。出土遺物はない。

掘立柱建物跡 S B395605

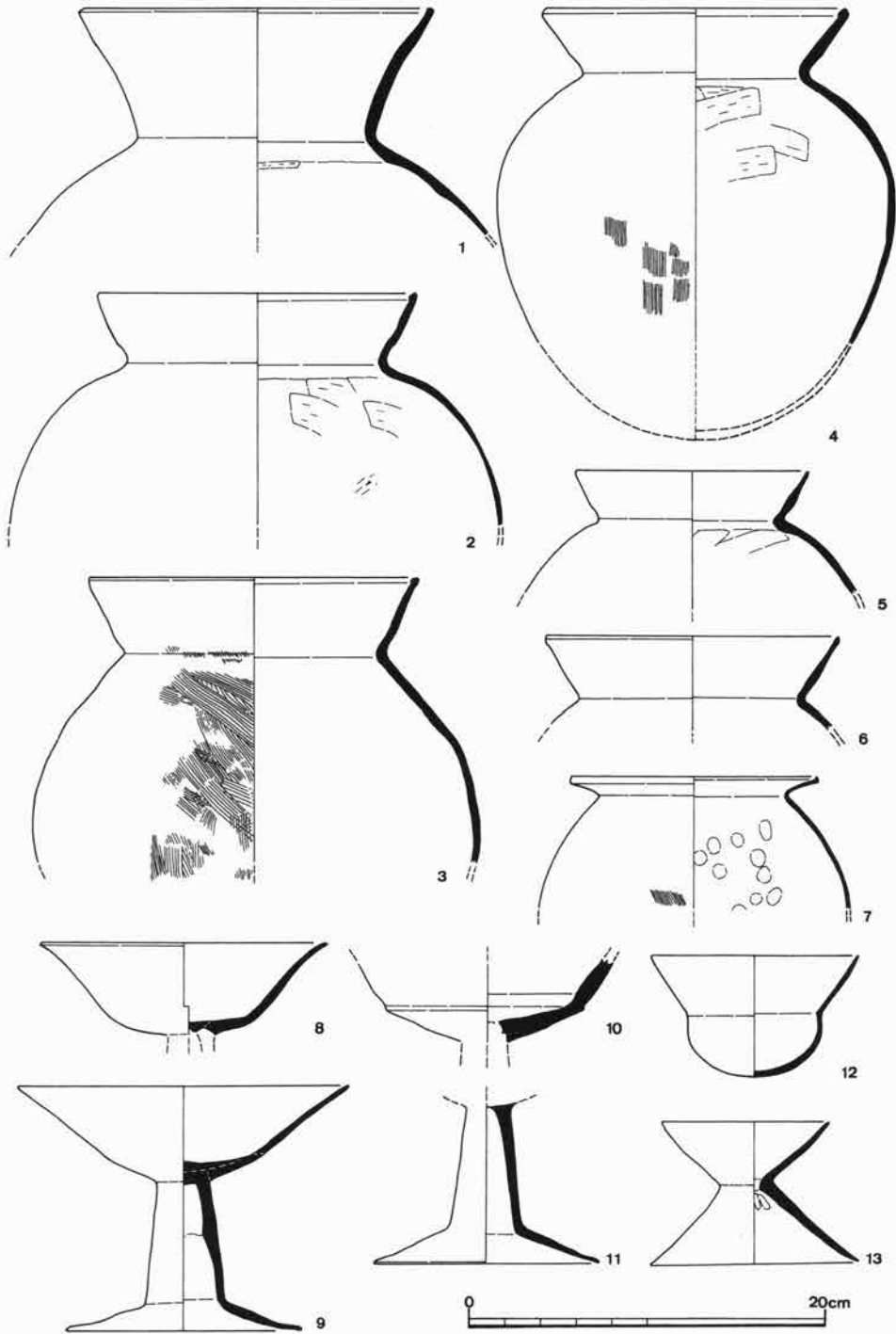
3間×1間以上の規模を有する。柱間は、東西1.15~1.3m・南北1.7~1.8mを測る。1か所の柱穴から土師器片が出土した。

掘立柱建物跡 S B395606

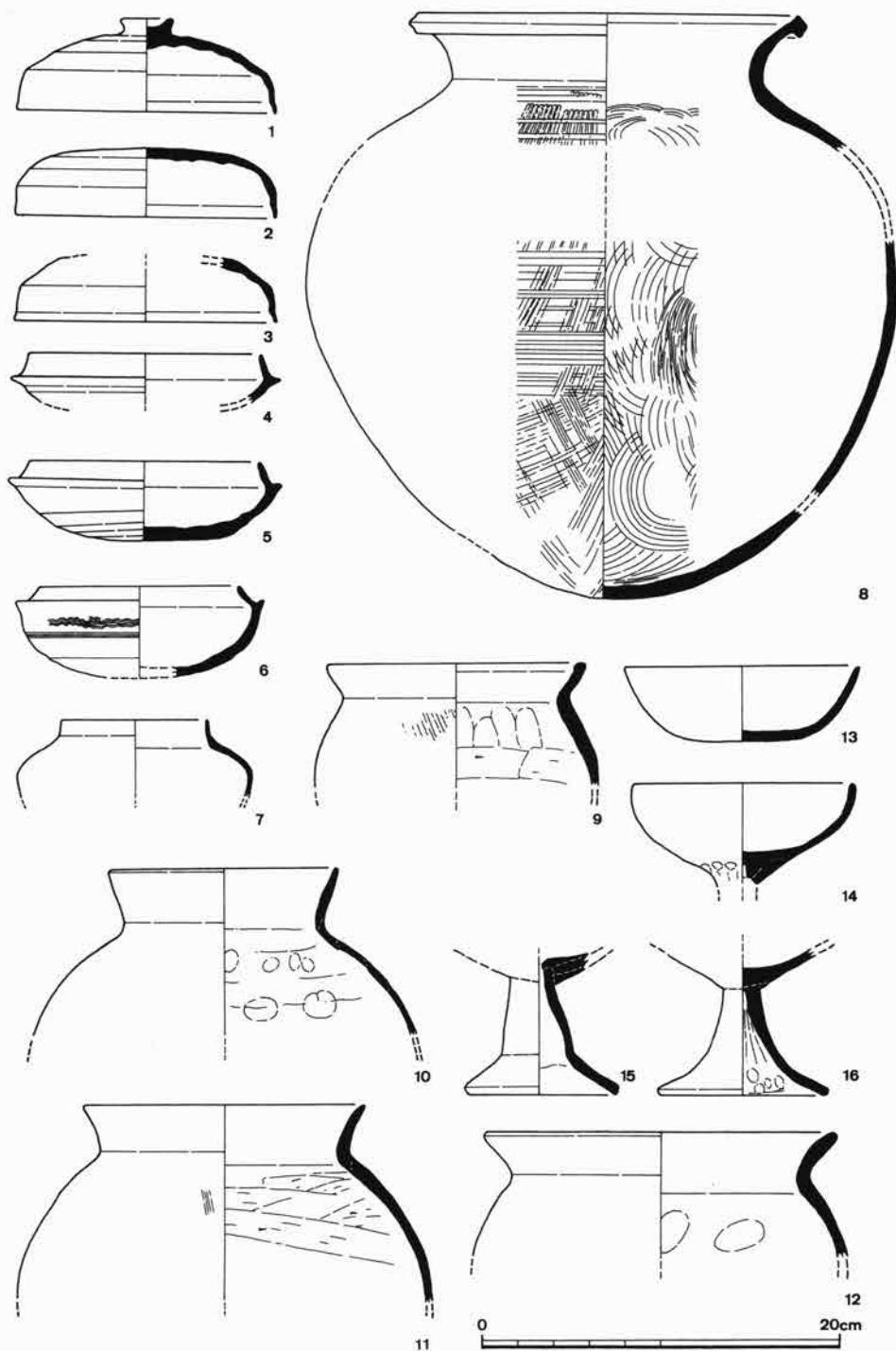
S D395600がほぼ埋没した段階で構築された建物跡である。2間×2間以上の規模を有する。ほとんどの柱穴内から土師器片が出土した。近接したピット内からは、須恵器杯身なども出土している。

S D395600・395601 ともに流路状の遺構であるが、大部分は恒常的な流水を伴うのではなく、旧地形の形成時に窪地化したものと考えられる。ただし、S D395600の東側は、C-4地区で検出した流路S D395702に接続し、一部に流水による堆積も確認される。出土遺物(第64図)から、古墳時代後期にほぼ埋没し、平坦化したと考えられる。

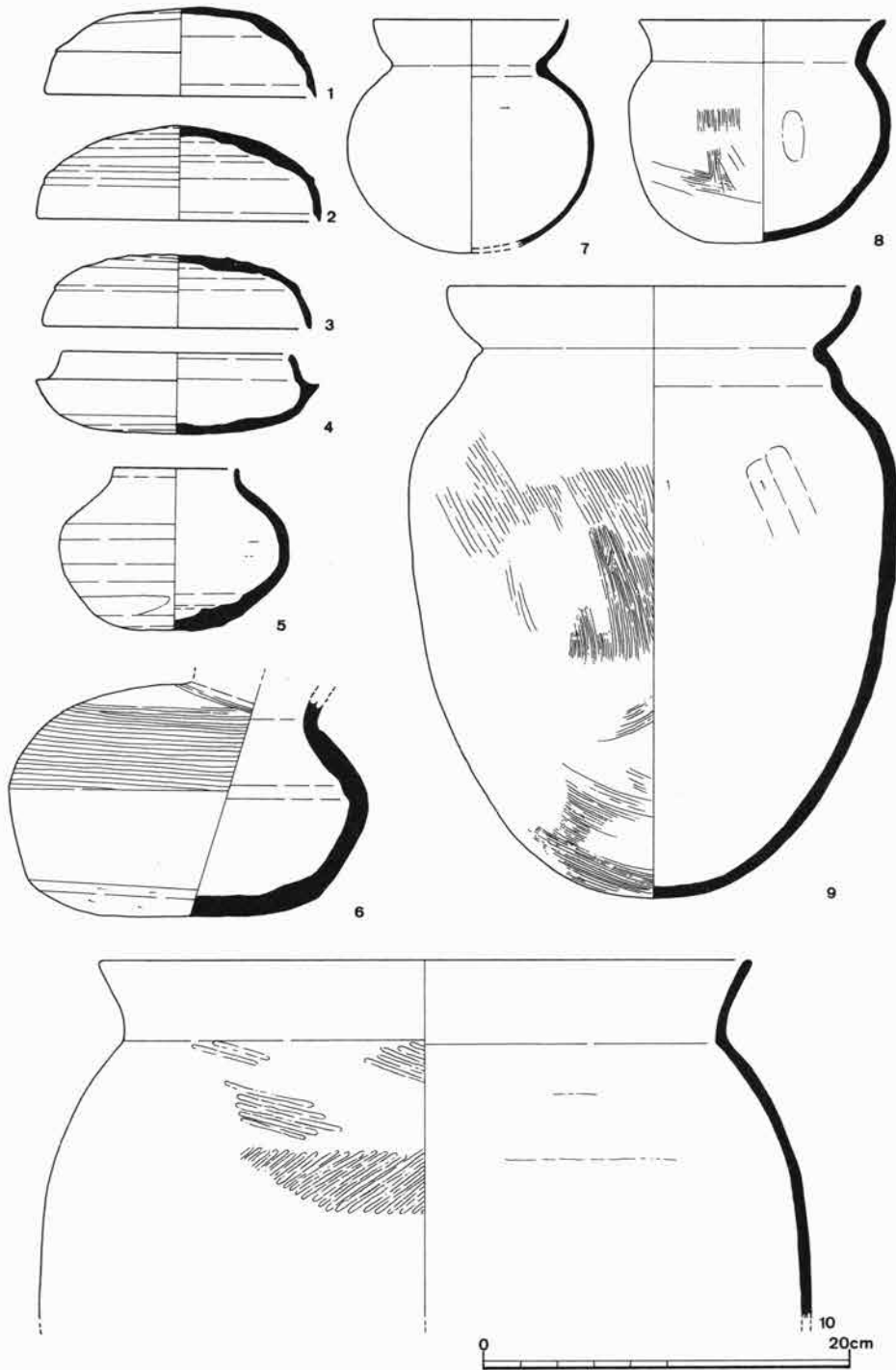
(鍋田 勇)



第62図 下植野工区C-2地区 出土遺物実測図(2) SH395677



第63図 下植野工区C-2地区 出土遺物実測図(3) S H395685



第64図 下植野工区C-2地区 出土遺物実測図(4) S D395600

⑥ C-3 地区(第65図)

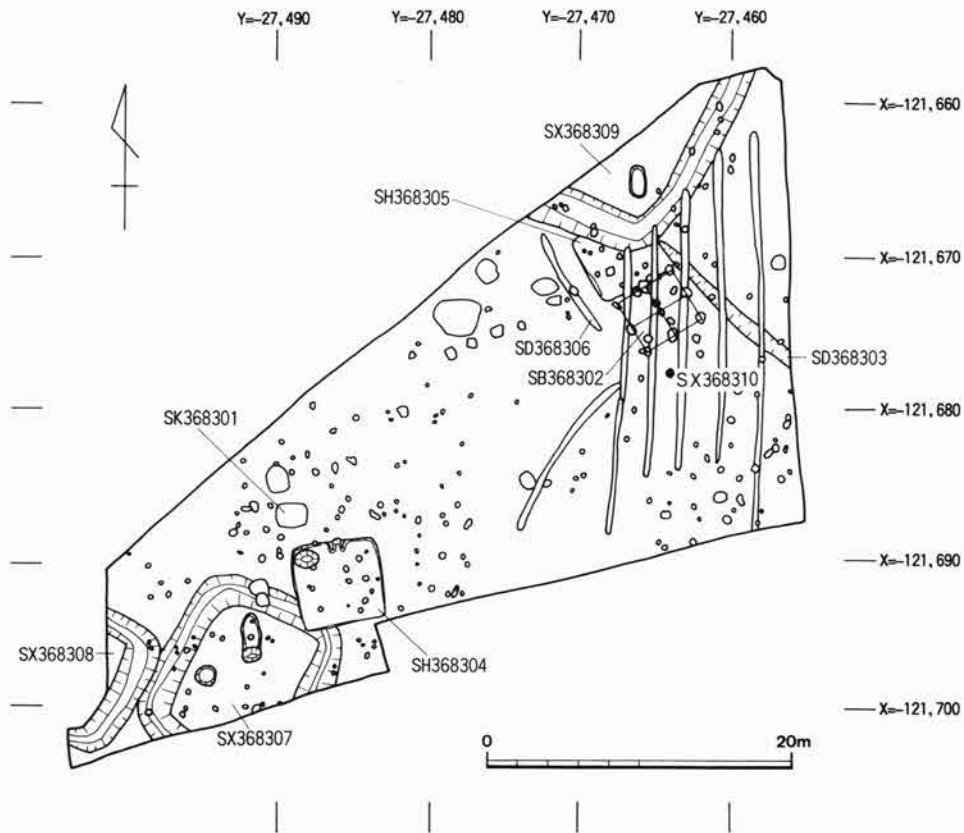
(1)はじめに

今回の調査で検出された遺構は、土坑・素掘り溝・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡などがある。出土遺物では、土師器、須恵器、縄文時代晩期の深鉢・石鏃などがある。調査地は下植野南遺跡に該当するが、縄文時代から近世に至る複合遺跡と見ることができる。

(2)調査概要(第65図)

素掘り溝群 長さ約20m・幅0.2~0.4m・深さ0.3mを測る溝群である。方位は、座標北にはほぼ向くものと、北で東へ4°ほど傾くものと2種ある。溝群の間隔は、1.6~2.4mと不ぞろいであるが、水田あるいは畑地に伴うものである。時期は中世・近世に属する。溝群のうち北側で途切れているのは、久我畷の路端が接していたものと考えられる。

土坑 S K 368301 長辺2.1m・短辺1.6m・深さ0.3mを測る。断面は皿状を呈し、灰色泥土が堆積する。出土遺物は、土師皿(第66図3・4)がある。



第65図 下植野工区C-3地区 遺構平面図

小柱穴群 直径0.2～0.4mの円形の柱穴がトレンチ全域にあった。柱穴内には灰色泥土が堆積し、中世・近世の耕作土と類似する。柱穴は、3～4個がー列に2.3～3.0m間隔に並び、稲を干す稲木の跡ではなからうか？

掘立柱建物跡 S B368302 S H368305の南側で検出された2間×2間の総柱の建物跡である。柱間寸法は1.8mのほぼ等間である。柱穴は、方形のものが多く、暗褐色土が堆積する。時期については、S H368302より新しい。

竪穴式住居跡 S H368304 一辺5.8m×5.7m・深さ0.15mを測り、ほぼ正方形の住居跡である。床面には円形の支柱穴が4個配され、壁溝は、北辺・東・西辺の北半で幅10cmの小溝が確認できた。竈は北壁中央部に接して設けられ、貯蔵用の穴は北東隅に穿たれている。竈は、上半部が削平を受けているが、基部では長さ0.8m・幅1.0mを測り、赤褐色の馬蹄形を呈する。煙り出し部は北壁より10cmほど外に出る。竈内には、焼土・炭化物が残り、甕(第66図10)が1個体分中央に遺存していた。時期は、須恵器杯蓋(第66図6)が古墳S X368307の上層より検出されているので、古墳時代後期と考えられる。

竪穴式住居跡 S H368305 長辺5.3m・短辺5.3m・深さ0.1mを測る方形の住居跡である。床面には支柱穴がない。

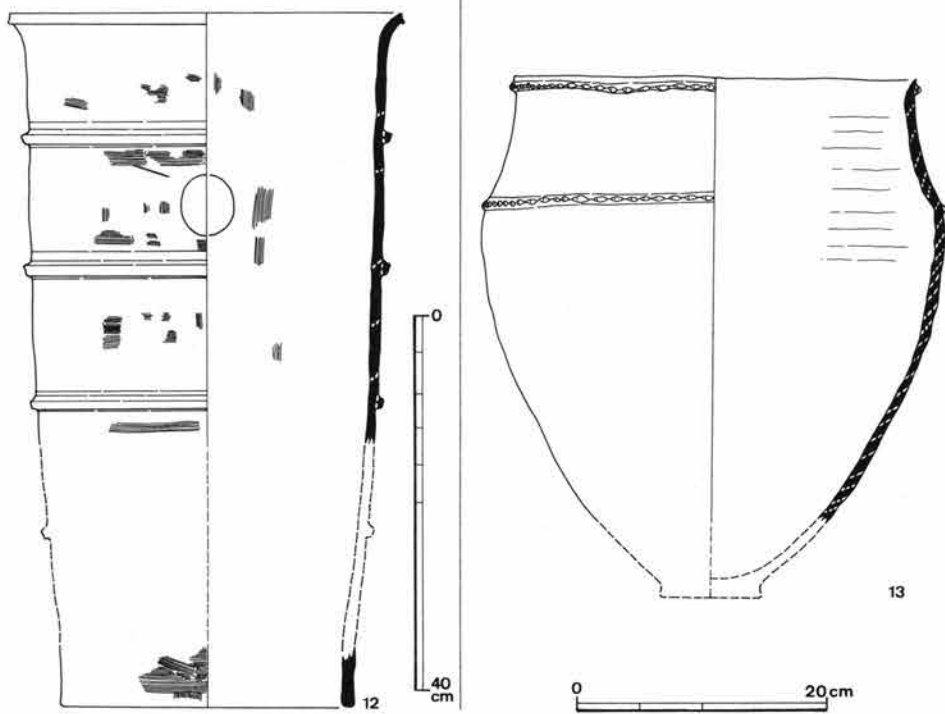
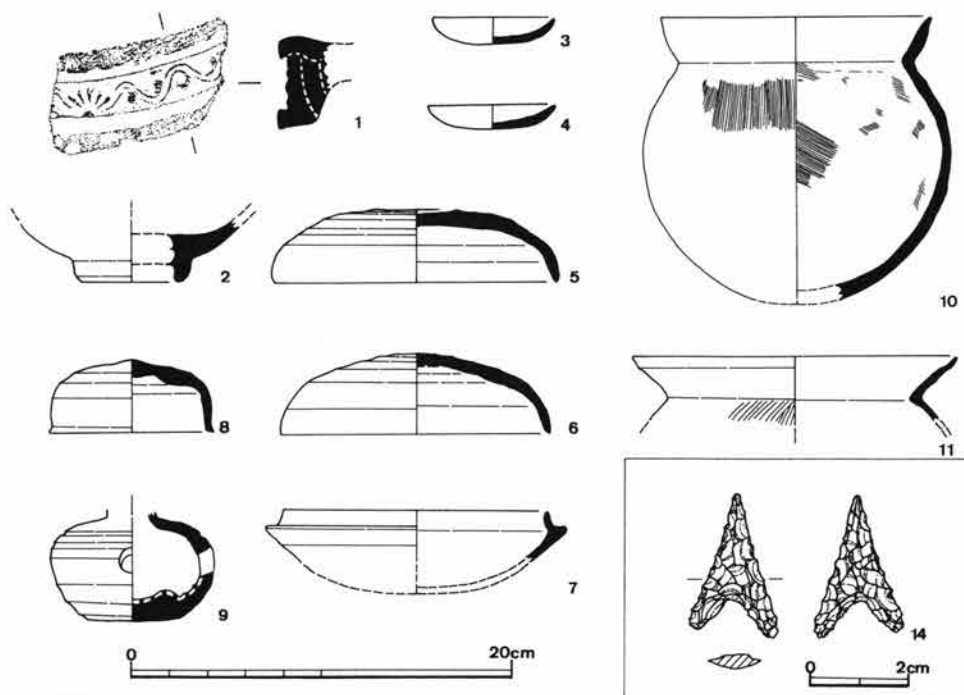
溝 S D368306 竪穴式住居跡S H368305の西辺から1.3mの位置に平行して検出されたもので、長さ7.7m・幅0.4m・深さ0.15mを測る。これは、形態・位置関係・堆積土などから、S H368305の屋根の端(軒先)にあたる雨落ち溝であると考えられる。

古墳 S X368307 古墳S X368308の東側で接するように検出された。墳丘部の規模は長辺9.7m・短辺7.4m、濠の幅は1.8～2.4m・深さ0.8mを測る。濠の断面は、「V」字状を呈し、上層では茶褐色土、下層では砂礫・砂層が堆積する。濠の底は、墳丘部の四隅でやや浅くなり、中央部は深い。墳丘部は大きく削平を受け、主体部の遺構などはなかったが、西側の濠の最上層では、円筒埴輪(第66図12)が出土した。この出土状況は、狭い範囲の中で横に据え置かれているものの、中世の耕作土から検出されており、原位置をとどめていない。出土遺物には、先述の円筒埴輪(川西編年Ⅳ期)、土師器甕(第66図11)がある。

古墳 S X368308 古墳S X368307の濠の上層から検出された。墳丘部の規模は、一辺6m強、濠の幅は2.3m・深さ0.6mを測る。濠の断面は、「U」字状を呈し、上層では暗褐色土礫混じり、下層では砂礫・砂層が堆積する。時期はS X368307より新しい。

古墳 S X368309 トレンチ北東隅で検出された。濠の幅は1.7～2.4m・深さ0.5～0.7mを測る。濠の断面は、東南の濠では「V」字状、西南濠では皿状を呈している。堆積土は、上位にわずかな暗褐色土があり、大半は砂礫・砂層の互層である。

溝 S D368303 溝の規模は、長さ13m以上・幅0.7m・深さ0.3mを測る。北側の竪穴



第66図 下植野工区C-3地区 出土遺物実測図

式住居跡付近で立ち上がり途切れる。溝の断面は椀状を呈し、上層は暗褐色粘質土、下層は茶褐色砂質土が堆積する。古墳の残欠かと考えられる。

土壌 S X 368310 掘立柱建物跡 S B 368302の南西部で検出した。直径45cm・深さ10cmを測り、縄文土器・深鉢(第66図13)が出土した。出土状況は、土壌内に深鉢が直立して遺存していた。土器は、2個体分が重なり、1個体分の口縁部が陥没している。なお、この遺構の基盤層は、砂礫層からなるが、この砂礫層中から石鏃(第66図14)1点が出土した。

(3)小 結

トレンチ北側を南西から北東にはしる道は、平安京遷都後の山陽道と考えられている古道で、現在は久我畷と呼ばれている。調査地での中世・近世の水田、畑地の素掘り溝群は検出したものの、同時期の久我畷の道に伴う側溝は検出しなかった。

古墳時代において、古墳から竪穴式住居、掘立柱建物への移行は、墓域・集落の変遷を考える上で重要な資料である。

(竹井治雄)

⑥C-4 a 地区(第67図)

(1)調査経過

この調査地区は、南西部で竪穴式住居跡の一部を検出した以外は、大部分が流路跡によって占められ、近接する地区とは異なった様相を呈している。調査は、現代の盛り土から旧耕土及び流路の一部について機械掘削を行った後、ほぼ同一面で遺構を検出した。

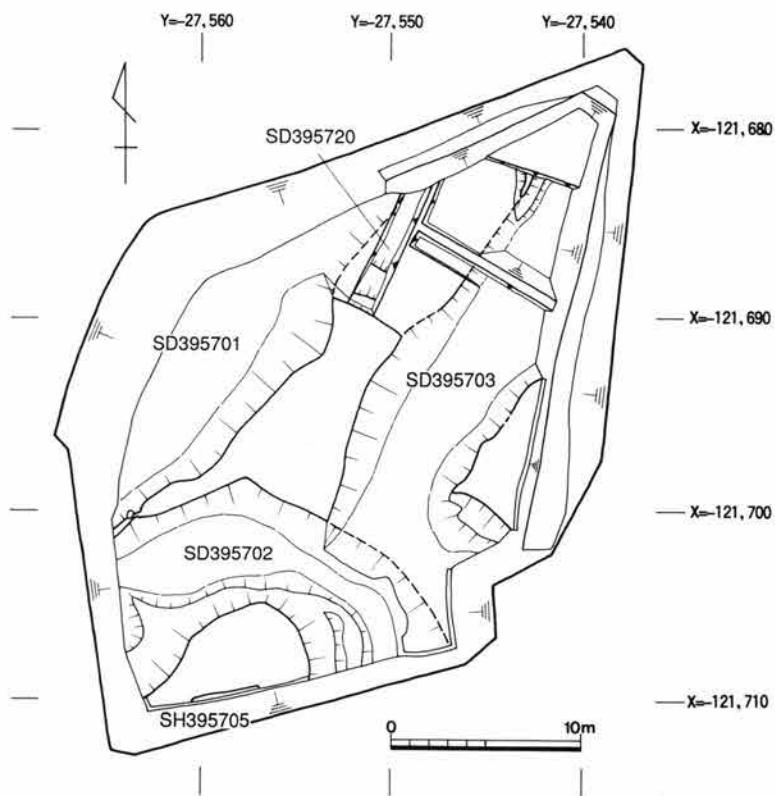
(2)調査概要

古墳時代 竪穴式住居跡1棟、流路跡を検出した。

竪穴式住居跡 S H 395705 調査区の南西、S D 395702によって囲まれた部分に位置している。方形住居跡の北辺を確認したのみである。一辺3.2m・深さ約0.1mを測る。北辺沿いに一部周壁溝を有する。遺物は、出土していない。

流路跡 S D 395701 北東→南西方向に流れた流路である。一方の肩は検出できなかったため規模は不明であるが、7m以上の幅を有している。埋土は、灰色系の砂礫である。調査の都合上、流路埋土の大部分を機械掘削によって除去した。少量の土器が出土した。

流路跡 S D 395702 C-2地区のS D 395600東部の延長部分と考えられ、埋土の堆積状況から、西→東方向に流れたものと推定される。幅約5m・深さ約1.5mを測り、断面形はゆるやかな弧状を呈する。シルト・砂・礫の流入によって埋没している。土師器



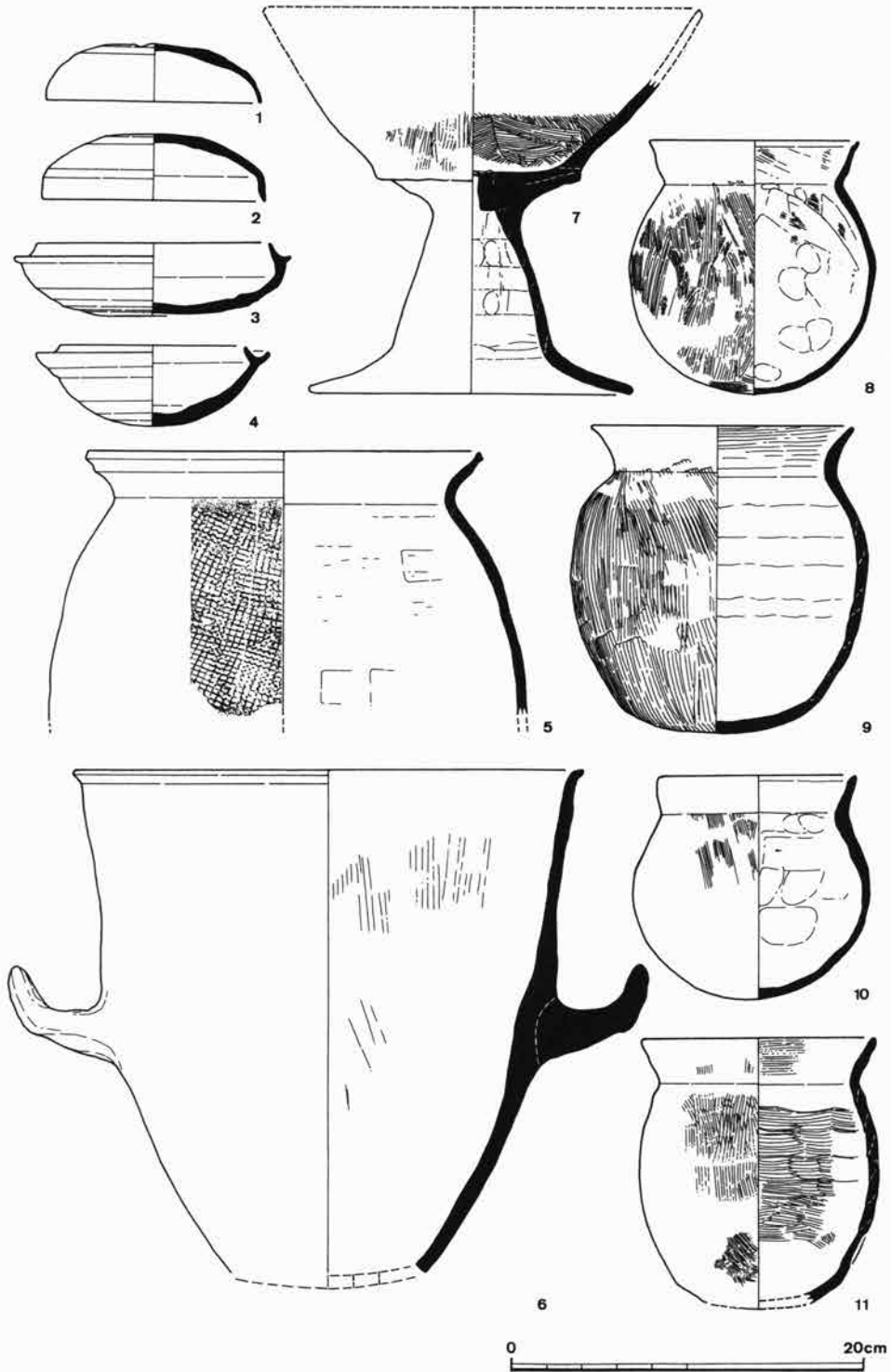
第67図 下植野工区C-4 a地区 遺構平面図

(壺・甕・甑)、須恵器(杯身・蓋・高杯・壺・甕)など古墳時代後期の土器が多量に出土した(第68・69図)。最上層の出土遺物から飛鳥時代には埋没したと考えられる。

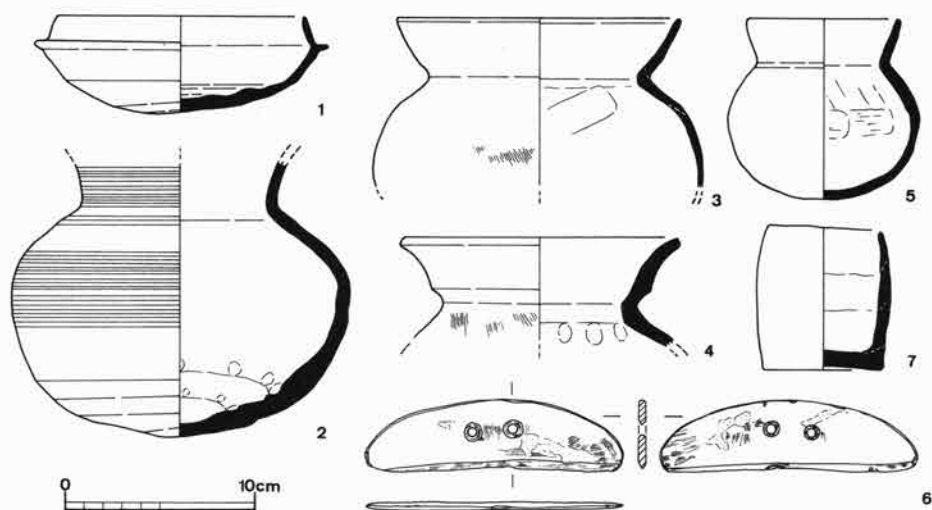
流路跡 S D 395703 北東→南方向に流れた流路跡で、幅約6.5m・深さ約1.5mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は、細～中礫を主体とする。縄文土器・弥生土器・土師器(布留式)・須恵器のほか、石庖丁が出土した(第69図6)。

以上の流路は、出土した遺物や遺構の切り合い関係から、S D 395703→S D 395701→S D 395702の順に形成されたものと推定される。なお、断ち割りでも一部しか確認できていないが、これらの流路形成以前に、北西→南東方向の流れをもつS D 395720が存在しており、この地区では長期間にわたり、流路の存在したことが確認される。

(鍋田 勇)



第68図 下植野工区C-4 a地区 出土遺物実測図 S D395702



第69図 下植野工区C-4 a・4 b地区 出土遺物実測図
1~6. S D395703 7. S H395803

⑦C-4 b地区(第70図)

(1)調査経過

C-4 b地区は、C-4 a地区の東側に隣接するが、流路跡が大部分を占める前者とは様相が異なり、安定したベース上で古墳時代～中世の遺構が検出された。遺構のベースは、C-1・C-2地区同様、黄褐色粘質土であるが、東部では砂礫となり、C-3地区へと広がっている。調査は、旧耕作土までを機械掘削し、同一面で遺構を検出した。以下、主要な遺構について概要を報告する。

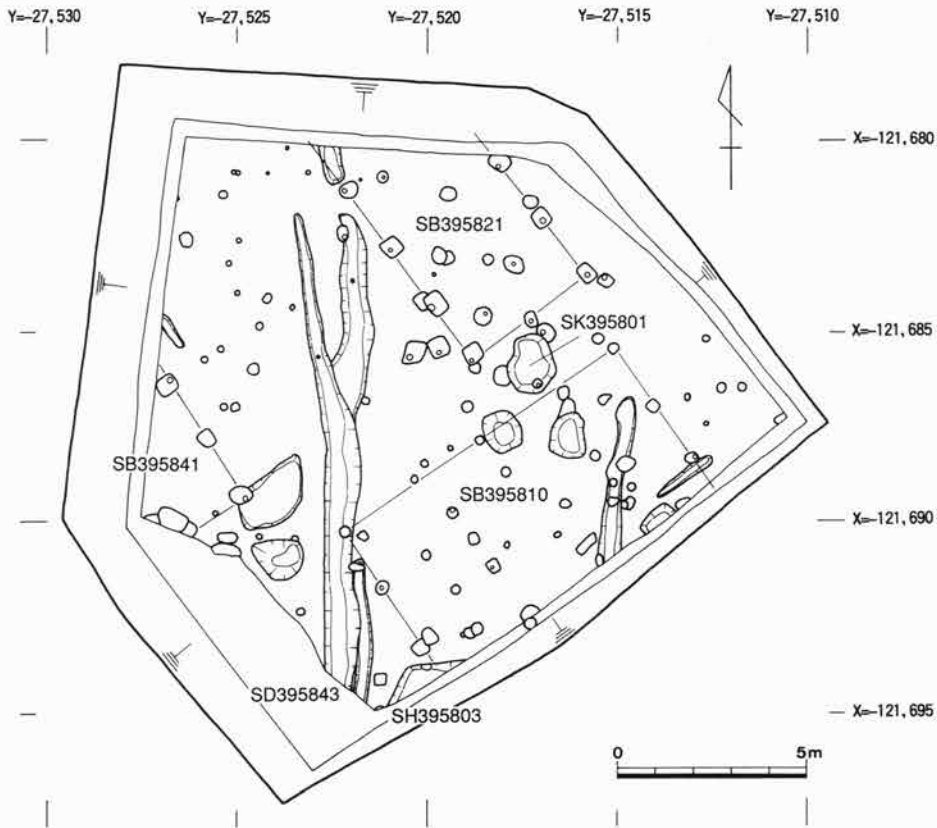
(2)調査概要

a. 古墳時代 竪穴式住居跡1棟、掘立柱建物跡3棟を検出した。

竪穴式住居跡 S H395803 コーナー付近の一部しか検出していないため、大形の土坑である可能性もあるが、方形の竪穴式住居跡と考えておく。検出面からの深さは、約30cmを測る。周壁溝はない。布留式土器のほか、筒状の椀形土器(第69図7)が出土した。

掘立柱建物跡 S B395821 2間×3間以上の規模をもつ掘立柱建物跡。南北棟と考えられ、N-37°-Wの振れをもつ。方形の柱掘形を有する。柱間は、梁間・桁行とも1.85m前後を測る。ピット内から、少量の土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期の建物跡であると推定される。

掘立柱建物跡 S B395841 一部しか検出できていないが、S B395821と同様の規模をもつと考えられる建物跡である。建物跡の振れはN-33°-Wで、S B395821とややずれが



第70図 下植野工区C-4b地区 遺構平面図

あるが、南辺をそろえているため、同時期に規則的に配置された建物跡と推定される。

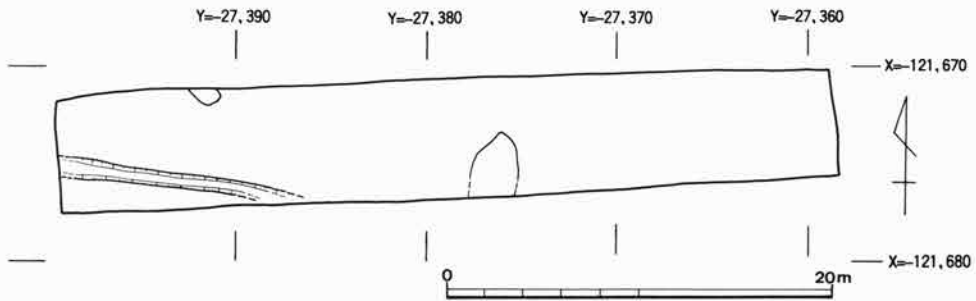
掘立柱建物跡 S B 395810 2間以上×4間の規模をもつ掘立柱建物跡である。東西棟と考えられ、E-35°-Wの振れをもつ。柱間は、梁間方向が1.80mの等間であるが、桁行方向はやや不規則であり(1.7~2.5m)、平均で2.15mを測る。ピット内から土師器・須恵器片が出土している。S B 395821・S B 395841と同時期に存在した可能性がある。

b. 平安時代~中世 土坑・溝などを検出した。

溝 S D 395843 南北方向の溝であり、中央部分で幅0.9m・深さ0.2mを測る。北半部では2条の溝であるが、途中で合流する。布目瓦(丸・平)片が出土した。

土坑 S K 395801 不定形な楕円状を呈する土坑である。1.6m×1.3mの規模を有する。深さは約10cmを測る。土師皿・羽釜・平瓦などが出土した。15世紀の所産か。

(鍋田 勇)

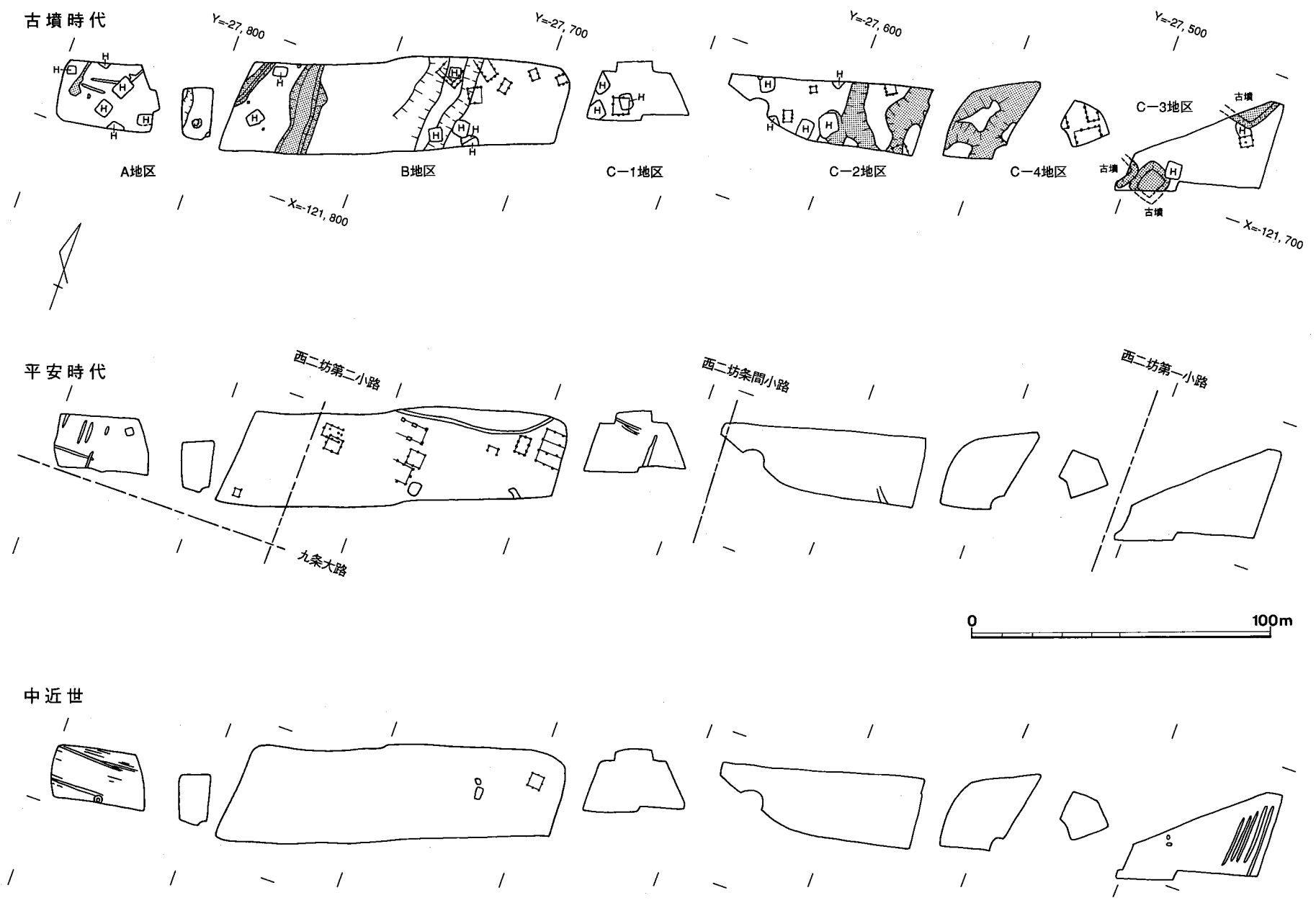


第71図 下植野工区D-2地区 遺構平面図

⑧D-2地区(第71図)

調査地は、下植野南遺跡内にあつて、北西から南東方向の砂礫を主体とした谷状に立地する。調査の結果、中世・近世を通じて水田耕作が営まれていた。中世以前は、水田の痕跡は認められず、湿地帯であつた。部分的に漑木が茂り、大木の痕跡もあつた。下層の青灰色粘土には縄文土器が一片あつた。最下層の砂層は無遺物層と思われる。

(竹井治雄)



第72図 下植野工区 主要遺構変遷図

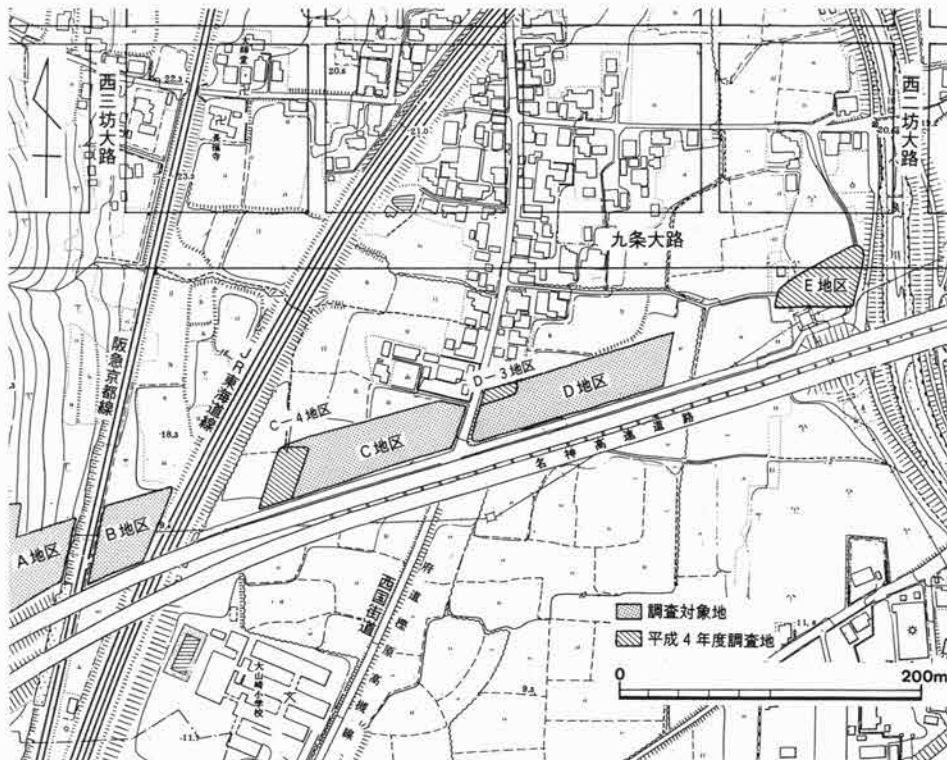
(3) 長岡京跡右京第367・394次 大山崎工区

(7ANSDD-6・SIR-3・SIR-4地区)

1. はじめに

大山崎工区の発掘調査は、平成元年度から実施している。初年度に17か所の試掘調査を行い、大山崎工区のほぼ全域で遺構・遺物が包蔵されていることが判明した。この工区は、天王山から小泉川まで、約600mの路線長があるため、便宜上、次のように地区の表示を行うことにした。西からA～Eの5地区に分け、A地区は天王山トンネルから阪急電車の間の山腹部、B地区は阪急電車とJR西日本鉄道の間の丘陵裾部、C地区はJR西日本鉄道以東、府道桎原高槻線(通称西国街道)以西、D・E地区は西国街道から小泉川の間とした。D地区とE地区の間は試掘調査で沼状の地形となることが判明しており、この沼状地形より東側をE地区、西側をD地区とした(第73図)。

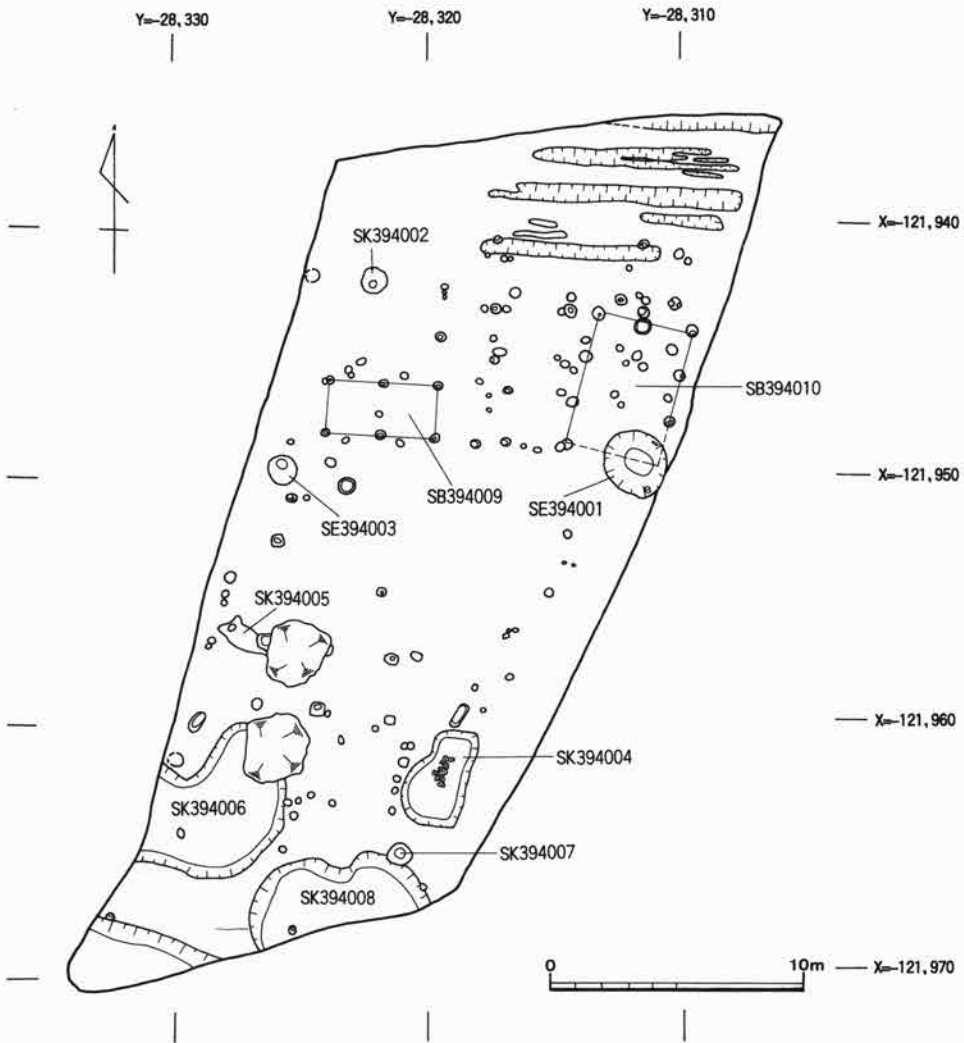
大山崎工区の平成2年度以降の本格的な調査で以下のことが判明した。A・B地区では



第73図 大山崎工区 調査トレンチ配置図

後世の削平のため、顕著な遺構・遺物は認められなかった。C地区では古墳時代後期の竪穴式住居跡、平安時代の西国街道西側溝及び掘立柱建物跡、井戸跡、中世の掘立柱建物跡及び井戸跡などが検出された。D地区では弥生時代後期の竪穴式住居跡、平安時代前期の西国街道道路路面及び東側溝、掘立柱建物跡などを検出している。

平成4年度にはC地区で1か所、D地区で1か所の調査を実施し、またE地区では昨年度に引き続いて下層の調査を実施した。調査では日本道路公団が設置した国土座標の明らかな基準点をもとに測量を行い、遺構相互の関係を示すため、遺構平面図には国土座標を表示した。なお、C-4地区ではトータルステーション(「てづかやま」)を試験的に使用し、作図を行った。(石尾政信)



第74図 大山崎工区C-4地区 遺構平面図

2. 調査の概要

①C-4地区(第74図)

C-4地区は、昨年度調査したC-3a地区の西隣りである。今年の調査で中世の素掘り溝群・掘立柱建物跡群・井戸跡・土坑、平安時代の掘立柱建物跡・埋め甕遺構、古墳時代末期～飛鳥時代の土器が出土した不定形土坑などを検出した。以下に主要な遺構・遺物について記述する。

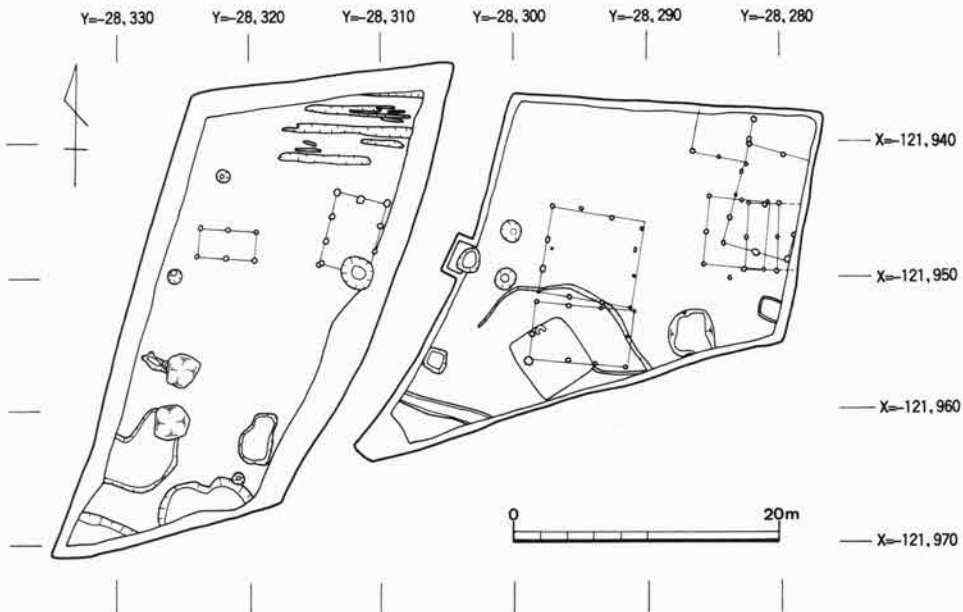
(1)検出遺構(第74・76図 図版第52・53)

井戸跡 S E 394001(第76図上) トレンチ東隅で検出した、平面がほぼ円形の素掘り井戸跡である。井戸跡は直径約2.5m・深さ約1.9mを測り、壁面に2か所の窪みが認められた。埋土から土師器・瓦器・瓦片や加工木製品が出土した。曲物などは認められなかった。

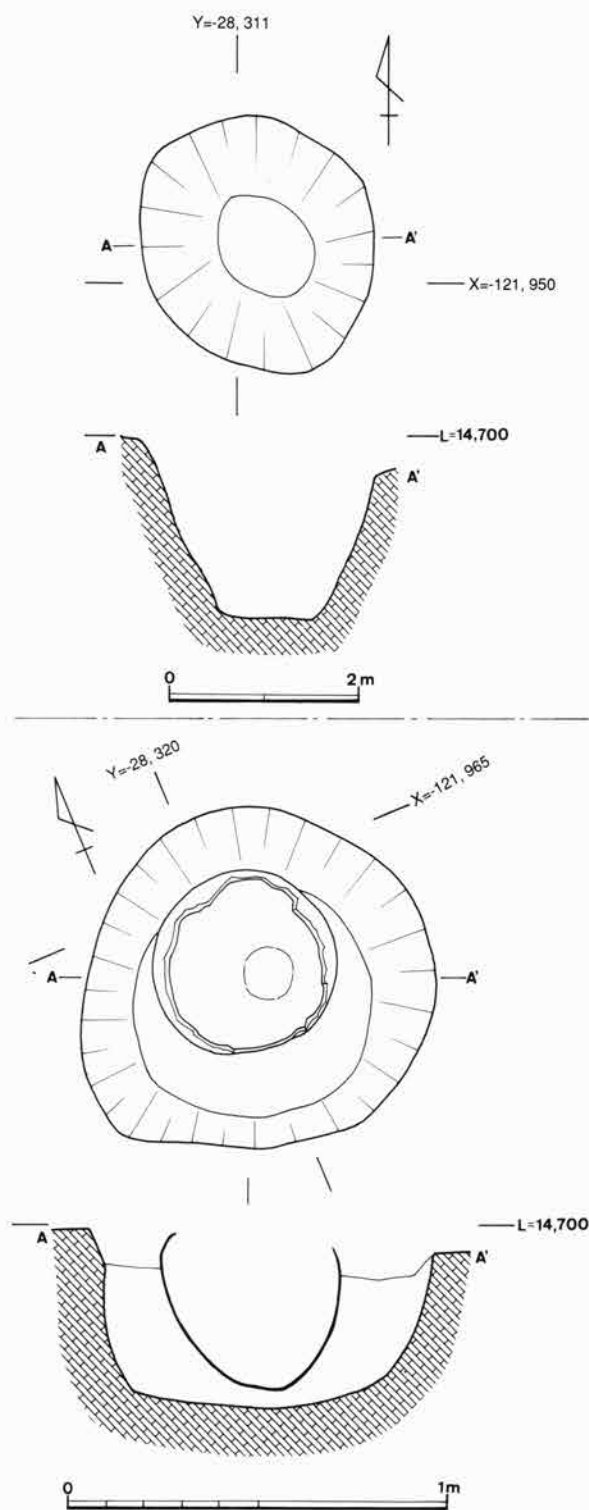
井戸跡 S E 394003 トレンチ西端で検出した、平面がほぼ円形の素掘り井戸跡である。井戸跡は直径1.2m・深さ約1.3mを測る。埋土から土師器・瓦器などが出土した。曲物などは認められなかった。

土坑跡 S K 394004 南方が西側に張り出した長方形の土坑である。長辺約3.8m・短辺約1.6～2.0m・最大幅約2.6m・深さ0.3m前後を測る。中央付近に人頭大の石が置かれていた。埋土から土師器・瓦質土器の鍋などが出土した。

土坑跡 S K 394006 東側で北方に曲がる不定形の土坑である。この土坑は、屈曲部分で幅約4.5mを測り、検出面から最も深い部分で10cm前後と浅い。埋土から土師器・須恵



第75図 大山崎工区C-4地区 主要遺構平面図



第76図 大山崎工区C-4地区 (上)井戸S E 394001実測図
(下)土坑S K 394007実測図

器の細片が出土した。須恵器片は7世紀後半のものである。

埋め甕遺構 S K 394007 (第76図下) トレンチ南部で検出した、甕を埋めた円形の土坑である。土坑は直径0.9m前後、検出面からの深さ約45cmを測る。土坑の中央に頸部から上が欠損する須恵器甕を置く。甕内部には土砂が落ち込んでおり、土砂以外は何も残存していなかった(第78図)。

土坑跡 S K 394008 トレンチ南端で検出した不定形の土坑である。深さ約20cmを測る。埋土には土師器・瓦器の細片がわずかに混じる。

掘立柱建物跡 S B 394009

トレンチ中央部で検出した2間×1間の東西方向の建物跡である。柱掘形は直径35~40cmの円形で、深さ30~40cmを測る。柱痕跡が明瞭に残り、掘形内から瓦器片がわずかに出土した。柱間は約2.1m(7尺)等間である。柱筋は西で約6°北に振る。

掘立柱建物跡 S B 394010

井戸跡S E 394001に先行する南北方向の建物跡である。井戸によって柱掘形の一部が消滅しているが、2間×3間と推定される。柱掘形は、直径45cm前後

の円形または隅丸方形で、S B394009より一回り大きい。掘形内から土師器片が出土し、瓦器は含まない。柱筋は、北で約14°東に振っている。西国街道沿いで検出された平安時代の建物跡に近似する方位を示す。

(2) 出土遺物(第77・78図、図版第56・57)

この調査では、飛鳥時代の土器、平安時代の須恵器甕(第78図)、中世の土師器・瓦器と木製品などが出土した。このうち遺構に伴うものを中心に記述する。

第77図の1～5・7は、井戸跡S E394003から出土した。1～5は土師器の皿、7は瓦器椀である。6・9～11は、土坑S K394004から出土した。6は瓦器椀、9～11は瓦質土器の鍋である。8は、柱掘形の一つから出土した白磁椀である。

12～15は、井戸跡S E394001から出土した。12は、鉄製刃を装着した鎌である。ゲタ鎌は、把部から約115°の角度で直線的にのびる。鎌刃は、刃部の最大幅が約3cm・最大の厚さ0.3cmを測る。柄は、長さ3.63cm・幅約2.6cmを測り、鎌刃を装着した長さは42.3cmとなる。

13は、長辺17cm・短辺7.6cm・厚さ0.8cmを測り、短辺が上下に組み合わせる箱様のものである。長辺の一方(底部側)には密に目釘穴があり、他方には3か所に目釘が打ち込まれている。短辺にも目釘及び穴がある。同形のを4枚組ませ、底板を付けると内法15cm前後・高さ7.6cmの柵に復原できる。これで容積計算をすると約1,700ccとなる。

14は、直径17.7cmを測る曲物底板である。側面に目釘穴がある。

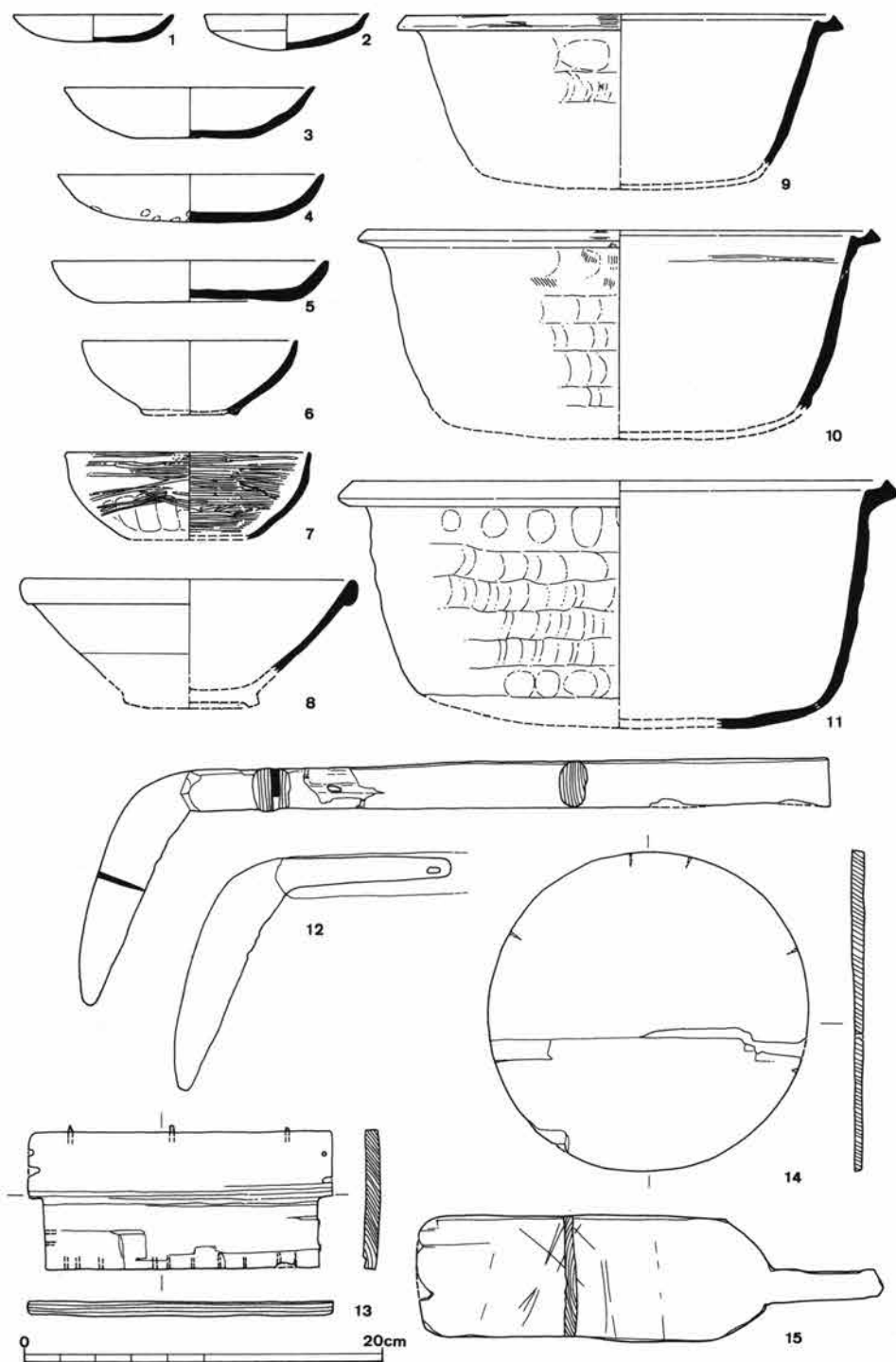
15は、長方形の板材の短辺の一方を切り取り、柄を作り出す。長さ26.2cm・最大幅7cm・厚さ0.7cmを測る。羽子板またはタタキ板と推定される。

(3) 小 結

この調査地は、北西から南北方向にゆるやかに傾斜する地形で、北端部では平安～中世の柱穴などは削平されているようすである。そこでは、素掘り溝がわずかに残っていた。中央付近では多数の柱穴群が検出され、現段階で柱筋が北で東に約14°振る平安時代の掘立柱建物跡S B394010、中世の建物跡S B394009が復原できる。S B394009の柱筋に平行する柱穴列がみられることから、他にも中世の建物があったと推定できる。中世の遺構には、井戸跡S E394001・03、土坑S K394005があり、西国街道から約100mのこの付近まで集落が広がっていたことが判明した。平安時代前期までさかのぼる遺構はなかった。

また、古墳時代末期から飛鳥時代の遺物が出土する溝状土坑S K394006が存在するので、削平されていない場所ではその時期の遺構があるものと推定される。

埋め甕遺構S K394007は、名神大山崎工区では1か所の検出で、内容物も不明のため埋



第77図 大山崎工区C-4地区 出土遺物実測図(1)

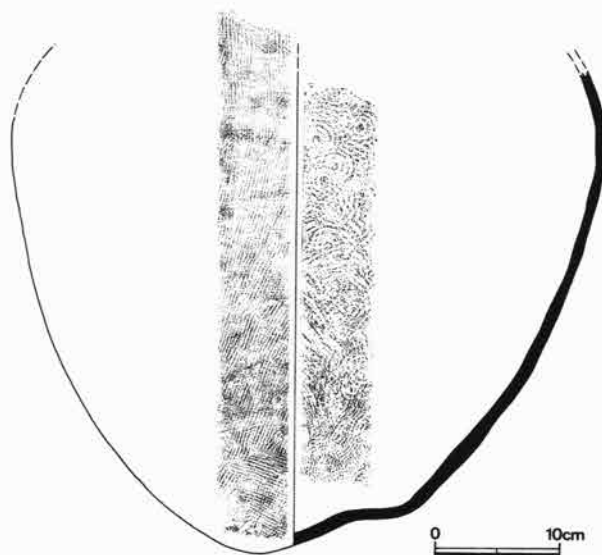
葬施設か貯蔵施設かは判断できないが、貯蔵施設の場合は深く埋め込む例がほとんどないので、貯蔵施設の可能性はきわめて少ない。

(石尾政信)

②D-3地区

(1)調査概要

今回の調査のD-3地区の南側にあたるD-1地区では、平安時代の西国街道路面S F 34913、同東側溝S D



第78図 大山崎工区C-4地区 出土遺物実測図(2)

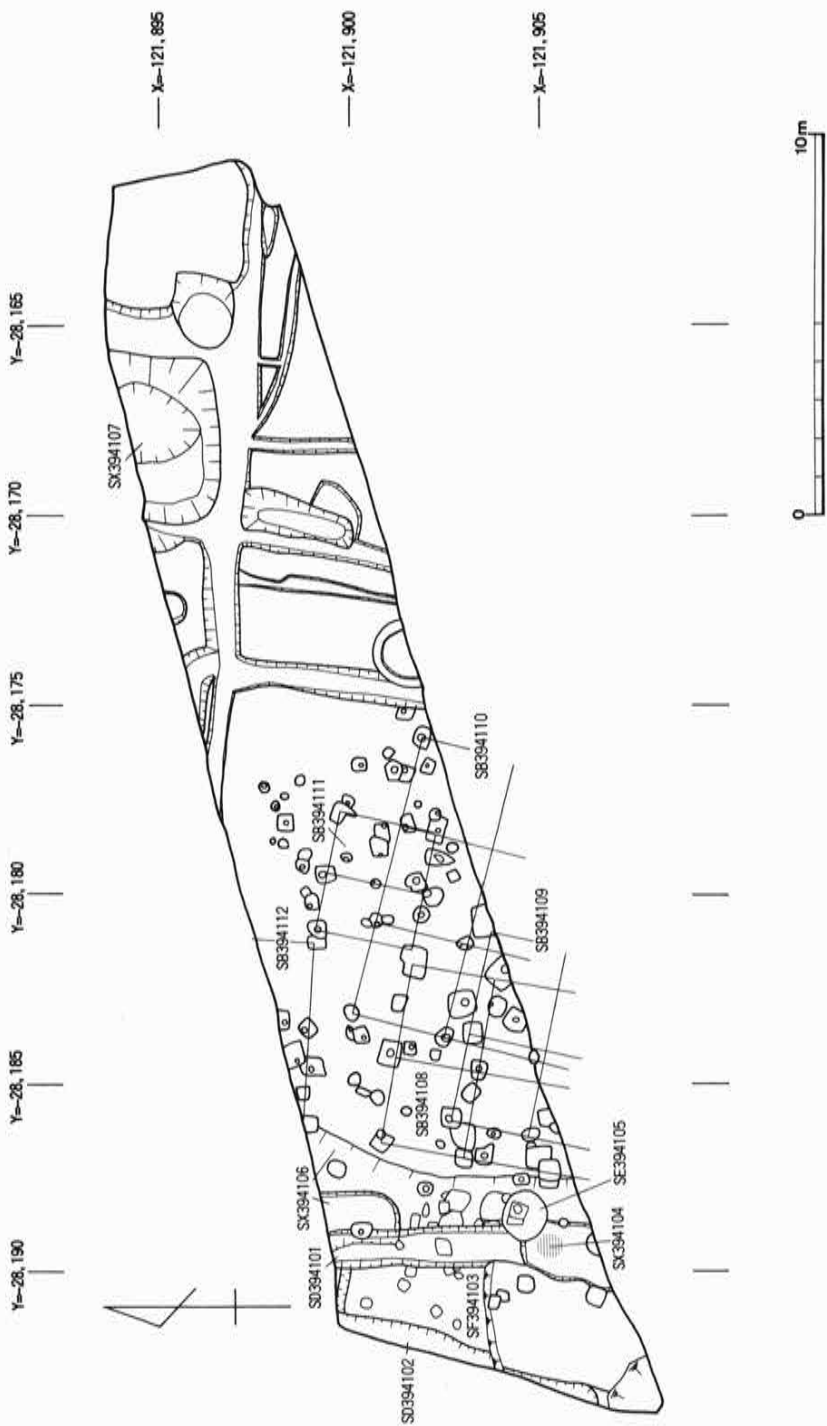
34914、掘立柱建物跡S B 34918・19・58・59、土坑S K 34915・16などを確認しており、その関連遺構を検出できることが期待された。

調査は、重機によって宅地の造成土を除去し、以後、人力による掘削に切り替えて調査を行った。調査トレンチの東半分は、田畑の造成のために地山面が一段低くカットされており、そこには明治以降に盛り土がなされていた。そのため、平安時代にさかのぼる遺構は削平のためか、トレンチ東半では全く検出できなかった。今回の報告は、調査地西半で検出した奈良時代から平安時代前期頃の遺構を中心に概略を述べる。

S D 394101 西国街道東側溝と判断する南北方向の溝で、検出長10m・幅23m・検出高約20cmである。一昨年度に調査をしたD-1地区のS D 34914の延長部に相当するものと考えられる。南半部は大きく攪乱を受けており、溝の肩は検出できなかった。今回の調査地内では、ほぼ真北を向く。この溝内からの出土遺物は小片が多く、実測しうるものは少ないため、今回は報告していない。

溝S D 394102 調査地の西辺で、S F 394103を切って検出した南北方向の溝で、S D 394101の西側1.5mで検出した。西肩は、調査地外にあり検出できなかった。南端は、浅くなりつつ、やや西に振って調査地外にのびる。ほぼ、現在の西国街道に平行する調査地内では溝底は確認できず、北壁で確認できた深さは30cm以上である。その位置関係や方向、出土遺物からS D 394101に後出する西国街道東側溝と判断される。検出幅60cm・検出長9mである。D-1地区では調査地外のためか、この溝に対応する溝は検出されていない。

路面跡S F 394103 西国街道の路面と判断される遺構で、S D 394101を東側溝とする



第79図 大山崎工区D-3地区遺構平面図

路面である。拳大の石が混じる造成土で形成されており、土層断面の観察では、約20cmの厚さを確認できた。轍や足跡が検出できなかったので、ある程度は上部が削平されているものと考えられる。路面内には若干の土器が混じっていた。路面に相当する造成土を除去すると、下面で柱穴などの遺構を検出した。路面検出面の上からは柱穴などの遺構は認められなかったが、D-1地区の調査を参考にすると、路面の上から切り込まれていたものと推定される。

S X394104(図版第54) S D394101の南部が幅3.3m・長さ5.0m、深さ最深部で遺構面から約30cmの攪乱を受けていて、その埋土を除去すると、S D394101の溝の掘形は削平されて確認できなかったが、溝の延長上で完形の土器や破片が石礫とともに廃棄されているのが検出できた。この土器群に伴う土坑などの掘形は確認できなかった。検出したレベルは、S D394101の溝底より約20cm下位に位置しており、もし、S D394101が傾斜を大きく強めて掘削されていないとするならば、これらの土器はS D394101に直接関連しないものと考えられる。

井戸 S E394105 径1.4mの井戸で、残存高20cmである。内部からは近世以降の陶磁器片が出土している。この遺構に切られて柱穴を検出している。

S X394106 S D394101に切られた落ち込みで、ほぼS D394101に平行した範囲が、全体として徐々に傾斜して落ち込んでいく。北端部が2.7m×3.6mの土坑状になっている。検出した深さは20cmである。内部からは、第82図6～11の土器が出土している。

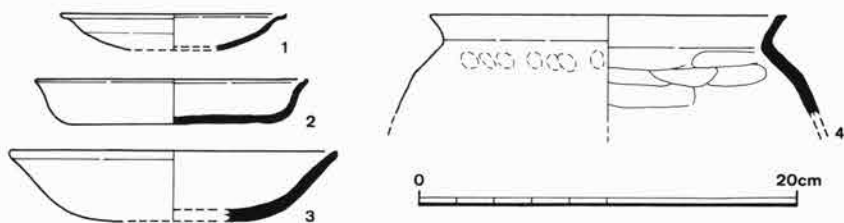
S X394107 東西8.7mの掘形を持ち、検出高約1.5mを測る、二段に掘られた井戸状の土坑で、北半は調査地外にのびる。内部には井戸側の残欠も含めて全く認められなかった。木質を多く含む暗灰色粘質土層より上からは近世の陶磁器片が多く出土した。それより下層では近世陶磁器片を含まず、平安時代以前の須恵器・土師器が出土しているが、この遺構自体は平安時代にさかのぼるものではなからう。

掘立柱建物跡 S B394108～112 N-11°-E前後の方位で復原されるが、調査範囲が狭いため、全貌は不明である。D-1地区では2間×2間程度の倉庫風の建物に復原できたことから、同様に倉庫風に復原できるものと考えが、確証はない。

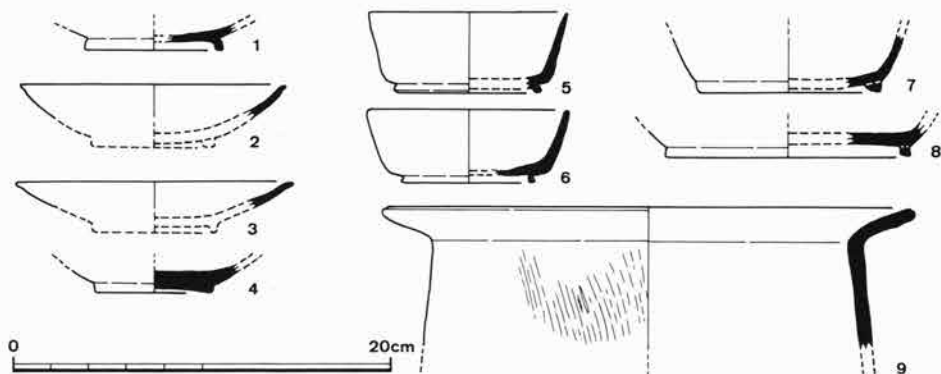
(2)出土遺物(第80～82図)

第80図は、西国街道東側溝と推定されるS D394102内から出土した遺物の実測図である。1は、土師器皿で、内外面ともに横ナデで調整を行っている。口径6.0cm・器高1.9cmを測る。2・3は土師器杯で、2は内外面ともに横ナデで、口縁部内面を強くナデた沈線を有している。口径14.4cm・器高2.4cmである。3は、口径17.3cm・器高3.8cmで、内外面とも

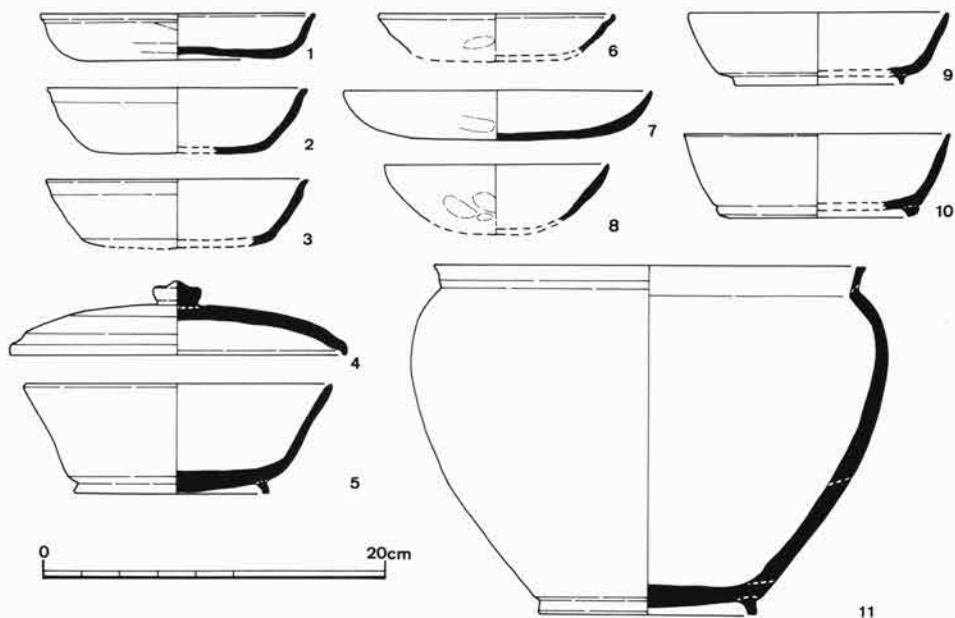
に横ナデで器壁を仕上げている。2はおそらく8世紀代の、3は9世紀中～後半頃のものと判断されるが、1の皿は10世紀中葉から後葉にかけての年代観を得る。2・3を混じり



第80図 大山崎工区D-3地区 出土遺物実測図(1) S D394102



第81図 大山崎工区D-3地区 出土遺物実測図(2) S F394103・柱穴内



第82図 大山崎工区D-3地区 出土遺物実測図(3) S X394104・S X394106

込みと判断すると、S D394102の年代観は10世紀中～後葉と考えられる。第81図はS F394103と柱穴内から出土した遺物で、1はS F394103の造成土中から出土し、2～9は柱穴内から出土した土器である。1～4が緑釉陶器、5～8が須恵器、9が土師器である。おおむね9世紀中～後葉頃の土器である。第82図1～5は、S X394104で検出した土器群で、一括性の高いものである。1～3が土師器杯で、4・5がそれぞれ須恵器杯蓋・杯身である。1は、外面下半部がへら削り、内面及び外面口縁部が横ナデで、口縁部内面に沈線がめぐる。口径14.5cm・器高2.55cmである。2・3は、内外面ともに横ナデ調整で、口縁部外面を強くナデている。2は口径13.5cm・器高3.5cmで、3は口径13.9cmである。4は口径17.9cm・器高3.85cm、5は口径16.1cm・底径10.4cm・器高5.9cmである。これらの土器群は、おおむね8世紀中葉の様相を示している。6～11は、S D394101の下層で検出した土坑・落ち込みS X394106から出土した。6が土師器杯、7が土師器皿、8が土師器碗で、9・10が須恵器杯身、11が須恵器鉢である。6の杯は、口径12.4cmで、内外面横ナデで、外面下半は指押さえて調整を行っている。7は、口径16.3cm・器高2.8cm、8の土師器碗は、外面に指押さえがあり、口径11.8cmである。9・10の須恵器杯身は、9が口径13.6cm・器高3.8cm、10が口径14.0cm・器高4.4cmである。11は、口径22.7cm・器高18.4cm・底径11.6cmである。これらの土器の年代観は、おおむね9世紀後半頃の遺物であり、今回は良好な資料に恵まれなかったが、S D394101の上限の年代を示すものである。

(3)小 結

西国街道の東側溝の続きが検出できたが、S X394106の年代観から9世紀後半代であり、S D39414の年代観と矛盾しない。その方向がD-1地区ではやや東に振っていたのが、D-3地区ではほぼ真北を向いている。また、10世紀中葉以降の東側溝(S D394102)が、S D394101の西側約2mで確認でき、D-1地区やC-2地区で推定されていたように、西国街道が数mではあるが、東→西へ造り替えられていることが明らかとなった。また、この段階では、現在の西国街道とはほぼ平行して掘削されている。

奈良時代後期の遺物がまとまって出土したのは、百々遺跡では今回が初めてである。大山崎町には、奈良時代に行基が山崎橋を造っており、当時でも交通の要衝地として位置づけられていたことは間違いない。しかも、山崎院や鞆岡廃寺と現在の西国街道沿いには、白鳳瓦が出土する寺院跡が分布しており、現在の西国街道は古くからの道路であったという考えもある。今回のS X394104は、そういった状況証拠的であった考えに、具体的に考古学的な資料を提供したといえよう。今後、周辺地域の調査が進むと、奈良時代の集落や、奈良時代の「西国街道」の側溝や路面が確認できるかもしれない。(岩松 保)

③ E 地区(第83図)

(1) 調査経過

E地区は、大山崎工区の東端で小泉川の西隣りである。E地区の西側は、試掘調査で沼地形となることが判明しており、大山崎工区のうちではC・D地区とは異なる遺構が予想される場所である。小泉川下流域は、乙訓地方ではよく知られた天井川で、調査地(E地区)の低い場所と、小泉川の河底はほぼ同じ標高である。

小泉川より東側の下植野南遺跡や南方の算用田遺跡との関連が注目された。昨年度から継続して調査を実施した。

(2) 調査の概要(第83図、図版第58・59)

調査は、現地表から3.0~2.5m下、ほぼGL=12.2mの古墳時代後期の須恵器・土師器が出土する遺物包含層まで重機によって掘削し、その後は人力による手掘り作業を行った。

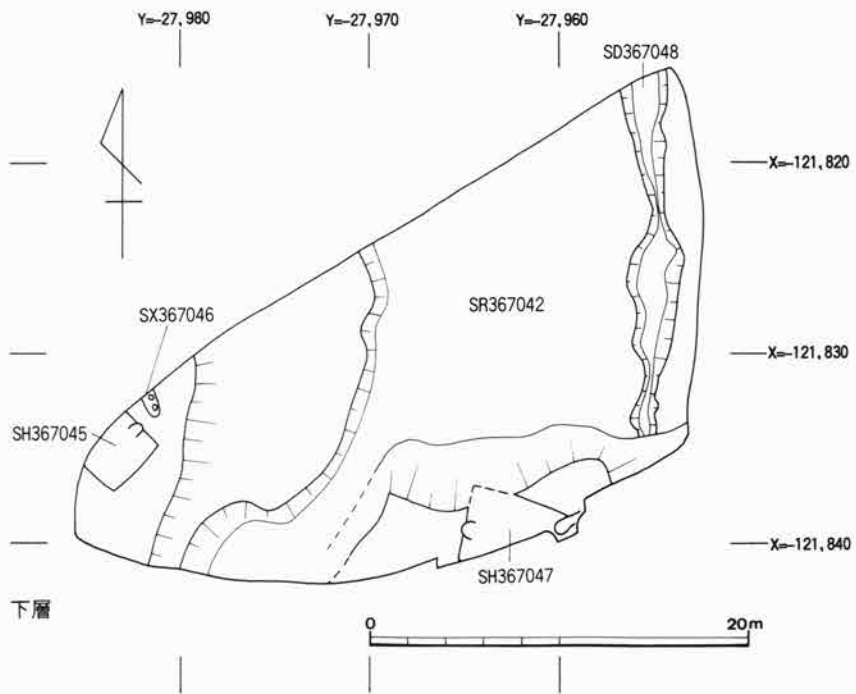
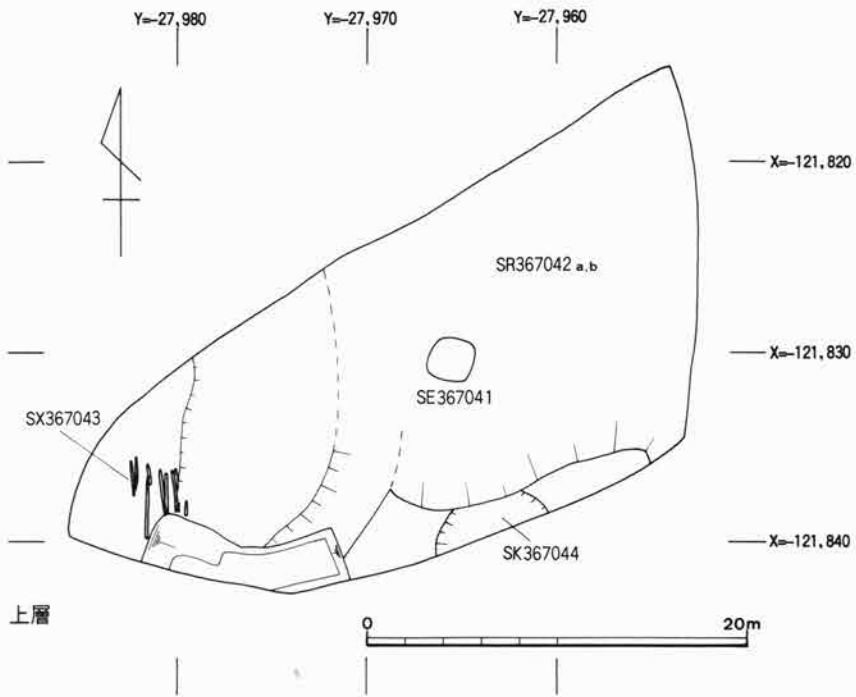
古墳時代後期の遺物を包含する層は、調査区域の西側と南側に認められた。この遺物包含層を削り込んで粘砂土層・粘質土層・礫層が広がっており、北から南西方向の流路跡SR367042と判明した。SR367042は、主に粘質土層が堆積したところをa、礫層の堆積をbとした。粘質土層には時期のわかる遺物は出土しなかったが、砂礫層には平安時代以降の遺物を若干含んでいた。この流路跡は、確認できた範囲でも幅20m以上あり、一時期の小畑川の流路跡と判断される。そして、南側の古墳時代後期包含層に土坑状の砂礫層堆積SK367044があることから流れの方向にも変化のあったことがうかがえる。

流路跡埋土の上面で井戸跡SE367041を検出し、トレンチ西側で轍SX367043、竪穴式住居跡SH367045、南側で竪穴式住居跡SX367047などを検出した。以下に、主な遺構・遺物について記述する。

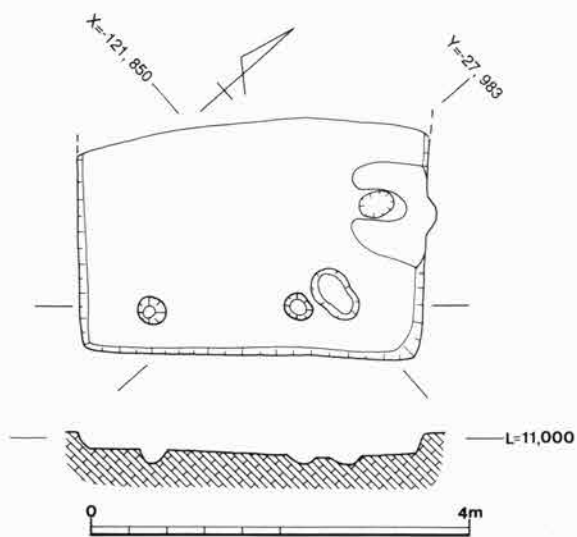
(3) 検出遺構(第83図、図版第58・59)

井戸SE367041 流路跡埋土上面で検出した隅柱横棧止めの井戸跡である。平面形が一辺2.0~2.2mの隅丸方形で、検出面からの深さ約1.6mを測る。井戸底は、流路跡の砂礫層に到達している。棧の外側に丸杭を並べ、掘形の裏込めには礫を充填する。水田耕作(灌漑用)に伴うものであろう。埋土から棧瓦・漆器椀・陶器(底部に墨書)などが出土した。

轍群SX367043 西側の古墳時代後期遺物包含層の上面で検出した南北方向の轍状遺構である。轍は3組以上あり、その心々間は140~150cmを測る。幅10cm前後・深さ約3cmを測り、轍内には砂質土・砂が入っていた。この埋土からの出土遺物はなく、時期を決定するには至らないが、轍が切り込んだ包含層(古墳時代後期)より新しく、轍を覆っていた



第83図 大山崎工区E地区 遺構平面図



第84図 大山崎工区E地区 竪穴式住居跡 S H367045実測図

土層の時期(平安時代)より古いものといえる。

竪穴式住居跡 S H367045(第84図) トレンチ西端の轍群より下層で検出した竪穴式住居跡である。北西部は未調査であるが、一辺約3.6mの方形で、検出面からの深さ約20cmを測る。住居跡の主軸は真北から東に約42°振れ、北東辺に竈を造り付ける。壁溝はみられない。支柱穴は東側に2か所検出し、柱穴の直径は約30cm・深さ15cm前後

を測る。竈に向かって右側に土器がまとまって出土した。出土した須恵器杯身は、須恵器編年(田辺氏)のMT15・TK10に平行するもので、6世紀前半の所産であろう。

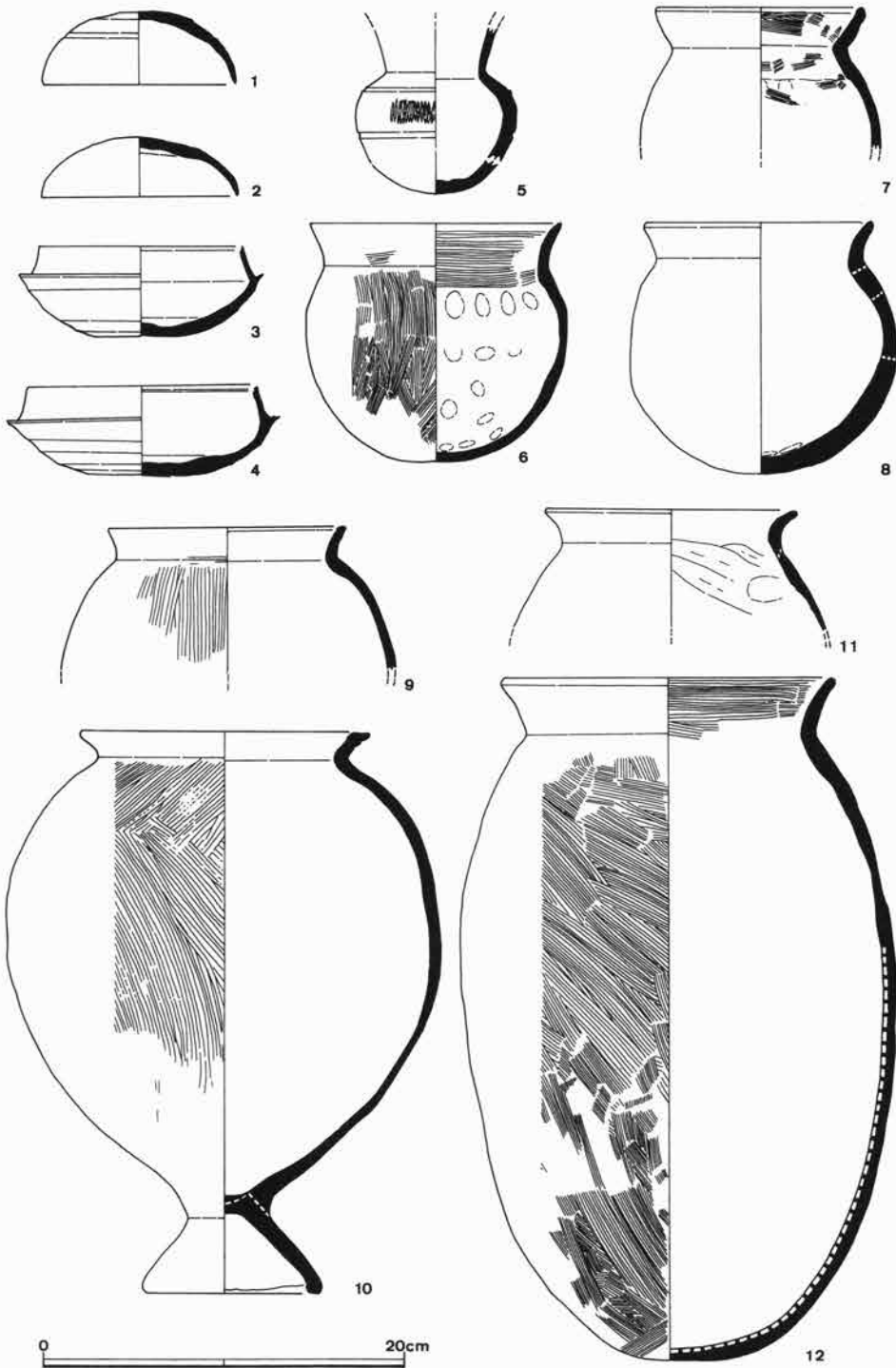
竪穴式住居跡 S H367047 トレンチ南端の土坑状砂礫堆積 S K367044の下層で検出した竪穴式住居跡である。北西隅は流路に削られ、南東部は未調査であるが、一辺が約5.8m、検出面からの深さ約15cmを測る。住居跡の主軸は真北から西に約88°振れ、西辺に竈を造り付け、北東隅にも竈状の施設を設けている。壁溝はみられない。竈内に土師器長胴甕が壊された状態で見つかり、竈に向かって右側に土器がまとまって出土した。出土した須恵器杯蓋は、須恵器編年(田辺氏)のTK209に併行するもので、7世紀前半の所産であろう。

埋納遺構 S X367046 住居跡 S H367045の北東で検出した埋め甕遺構で、明確な掘形はみられない。調査地壁面に1個体が見つかり、合計3個体がほぼ並んで発見された。甕内部に土砂が落ち込んでいただけである。

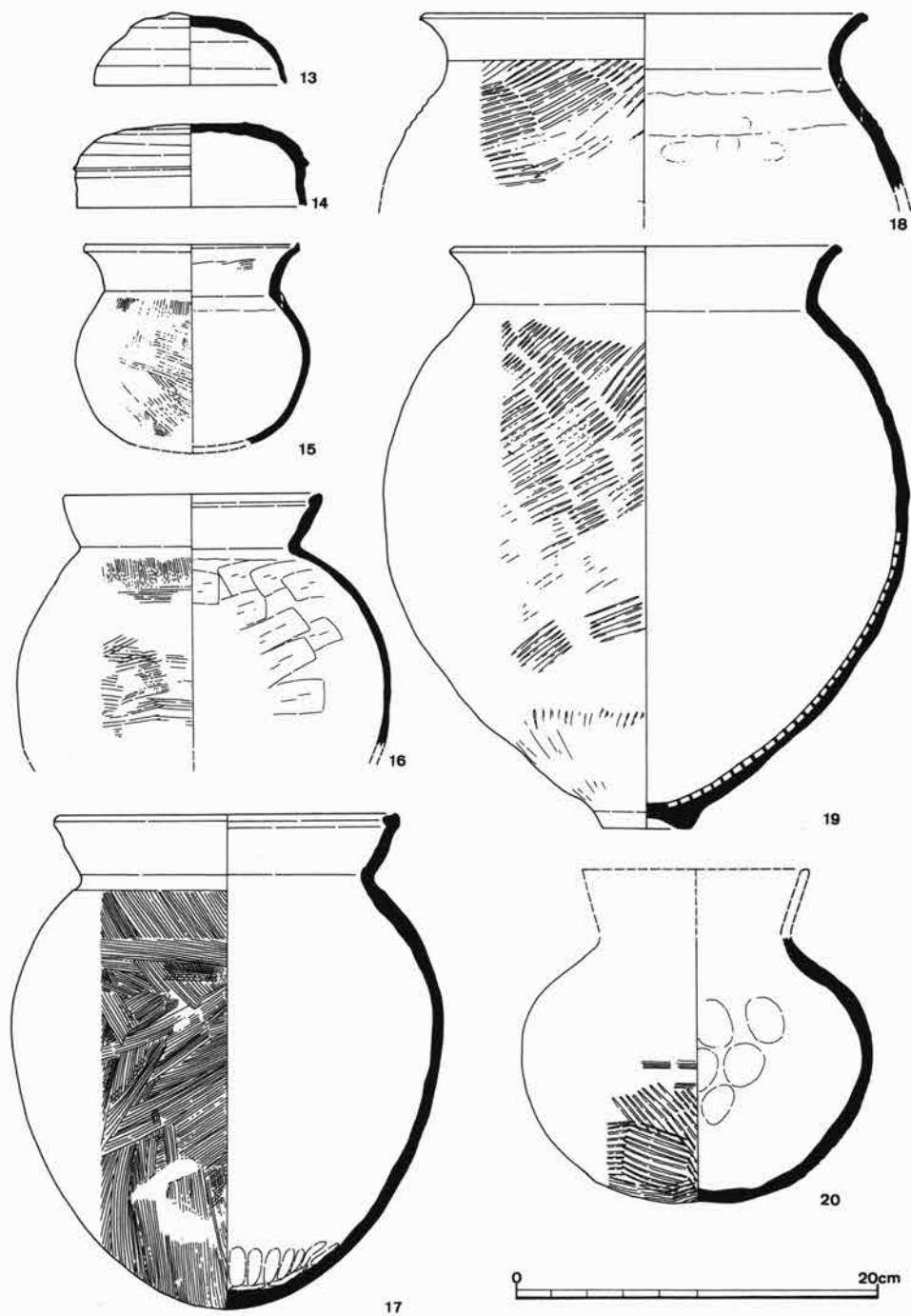
溝跡 S D367048 流路跡 S R367042の礫層を除去した後の下層で検出した溝跡である。ほぼ南北方向に走る溝跡で、粘土層を削り込んで砂礫が堆積していた。幅0.7~3.5mを測り、中央付近が最も深く、南端は粘土層で止まっている。小泉川が激流となった時に造られたのであろう。砂礫層には磨滅した土器細片がわずかに混入していた。

(4)出土遺物(第85・86図、図版第60)

この調査区では、弥生土器、古墳時代前期~後期・平安時代~近世の遺物が出土した。第85・86図は主要な遺構から出土した遺物である。以下に簡単に記述する。



第85図 大山崎工区E地区 出土遺物実測図(1)



第86図 大山崎工区E地区 出土遺物実測図(2)

1・2・6・8・11・12は、住居跡S H367047から出土したもので、1・2は須恵器杯蓋、6・8・11・12は土師器甕である。12は、住居跡の竈内で出土した長胴甕で完形に復原できた。口径約15.7cm・胴部最大径24.3cm・器高31.5cmを測る。

3～5・7・9・10は、住居跡S H367045から出土したもので、3・4は須恵器杯身、5は須恵器甕、9・10は土師器甕である。10は、脚台が付くもので、東海系の影響がみられる。口径18.6cm・胴部最大径24.4cm・器高37.9cmを測る。

13・15は、住居跡S H367047上面で出土したもので、13は須恵器杯蓋、15は土師器甕である。

14は、流路跡S R367042の西肩部で出土した須恵器杯蓋である。口径13.1cm・器高4.6cmを測る。須恵器編年(田辺氏)のTK47に併行するものであろう。

16は、住居跡S H367045の南側で暗青褐色土の遺物包含層から出土した。19は、埋納遺構S X367046から出土した弥生時代後期の壺である。17・18・20は、流路跡S R367042の西肩部分で出土した。17は、布留式土器壺である。

(5)小 結

調査地の約3分の2が平安時代以降に小畑川の氾濫によって削られ、大きく地形変貌したことが判明した。氾濫の影響が小さい場所では、轍群や古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出し、新たな知見を得ることができた。

轍群については、それが残された時代を決める資料は得られなかったが、古墳時代後期から平安時代の、この地が安定していた時期には、道路として利用されたことを証明するものである。また、轍の方位から道は南北方向に走り、西国街道(古山陽道)に平行することから、乙訓地域の交通を考える上で貴重な資料といえる。

住居跡の竈は、遺残状態が良好で、竈の造り方、使われ方や住居を廃棄したときのようなすがわかる好資料である。また、この住居跡は、小畑川左岸の下植野南遺跡や、下流(南方)の算用田遺跡の広がりを考える上で注目できるものである。

(石尾政信)

3. まとめ

大山崎工区の現地調査は平成4年度で終了し、今後は調査成果を報告書にまとめる整理作業が予定されている。ここでは大山崎工区全体の成果を概観し、まとめにかえたい。

縄文時代 今までの概要報告では触れていないが、その後の整理作業によって、数点の土器片がC-2地区で出土しているようである。

弥生時代 D-1地区において、数棟の後期～庄内期の竪穴式住居跡を検出している。南に広がる算用田遺跡との関連であろう。

古墳時代 前期のものとして、D-1地区、C-2地区の埋め甕があるが、竪穴式住居跡は確認できていない。後期には、E地区やC-3 a地区で竪穴式住居跡が確認されている。E地区の竪穴式住居跡は、下植野南遺跡の広がりの中で捉えられるものであるが、C-3 a地区の竪穴式住居跡はその周辺で古墳時代の遺構が検出されておらず、この北側に未知の集落が包蔵されているのかもしれない。

奈良時代 今回報告した、D-3地区のSX394104が唯一のものである。

平安時代 広範囲にわたって、掘立柱建物跡や井戸跡が検出されているが、第3次山城国府とは時期的に若干ズレ、また建物跡の配置・規模なども国府を推定せしめるものではない。また、西国街道の路面や側溝を確認し、少なくともこの道路が9世紀後半にさかのぼることが明らかとなった。

中世 西国街道西側のC地区において、掘立柱建物跡や井戸跡などを確認した。

(岩松 保)

おわりに

今年度で名神関係遺跡の調査は5年度目になる。今年度から開始した京都工区での調査では、過去の長岡京の調査で確認されていない東四坊大路(東京極大路)の検出が最も大きな課題である。現在までに進められている長岡京の調査の中で京極を決定できる調査は、わずかに北京極大路と考えられる遺構の一部を確認したのみである。昨年度報告した二条条間大路の調査が二町南にあるはずの二条大路の路面幅をもつと考えられる結果を得たこととあわせ、長岡京の条坊解明の資料を提供してくれるものと考えられる。

下植野工区での調査は、全体で9割以上を終了した。この地区での出土遺物や検出した遺構は、縄文時代後期から近世までのもので、資料的に膨大かつ多岐にわたるものである。今年度の成果からその一部をまとめると以下の点が挙げられる。

①A～C地区で検出した遺構群から、下植野南遺跡全域に古墳時代後期の集落が広がっていることが確認できた。

②B地区で検出した遺構(土坑)は、推定長岡京内で見つかった長岡京期の最も南の遺構となる。近年問題になっている長岡京の条坊を二町あげる説をとると、京外に位置し、京の南限を考える上で重要な遺構となる。ちなみに、名神高速道路関係遺跡の内、大山崎・下植野工区の調査では、条坊関連遺構は全く検出されていない。

③C地区で検出した主な遺構は、5世紀前半から6世紀代に属するものである。さらに各遺構の先後関係や出土遺物のあり方から細分すると、古墳→竪穴式住居→掘立柱建物の順になる。遺構の分布をみると、トレンチの東・西部分で古墳、竪穴式住居、掘立柱建物とが順に構築される。また、C-4地区での調査では、西側のC-2地区よりも標高が少し低く、C-3・4地区は下植野南遺跡集落の東側縁辺付近と考えられる。

大山崎工区の調査は、今年度をもってすべて終了した。平成元年度の試掘調査から開始し、4年間を費やした調査であった。この工区の調査では、第三次山城国府推定地や平安京と西国を結ぶ古代山陽道の調査など、長岡京外であるにもかかわらず、古代国家に係わる遺跡の調査をすることとなった。今年度の成果から、その一部をまとめると以下の点が上げられる。

①平安・中世の宅地の配置がわかる資料としてまとまるものである。

②西国街道の西側で調査を行ったC-2地区の調査結果と同じく、路面が西側に造り替えられていくことが確認できた。課題として、西国街道の東側溝内で検出した奈良時代の土器群と遺構の関係をみると、西国街道とは別の遺構が存在した可能性も含めて検討しなければならない。

③E地区での調査結果は、下植野工区A・B地区での調査結果に連続するもので、古墳時代の集落としては、一連の単位の中で考えられるものである。

(戸原和人)

注1 現地調査に参加していただいた方々は、以下のとおりである(敬称略・順不同)。

赤木 香・江口正孝・岡本一秀・小笠原健二・小島真木子・尾関真二・片山普美子・門脇秀典・兼島美帆・河合弥生・北岡里絵・木下いづみ・小島孝修・小村美香・島田豊彰・首藤有里・進木和美・飛田浩一・永見真知子・針尾周吉・広瀬時習・溝口博士・宮本純二・八津谷都・柳井みずえ・山門芳江・山本恵子・吉田絵里・四塚笑子・脇村有美・青山恵子・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・河野晶子・倉辻万里子・高山英美・竹内千賀子・田村重野・内藤チエ・長尾美恵子・西村敏子・長谷川マチ子・久平喜美子・村上優美子。

参考文献

「長岡京跡左京第162次(7ANEKD地区)～左京二条二坊十五町、二条条間大路・東二坊大路交差点～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1989

戸原和人・三好博喜ほか「長岡京跡左京第216・右京第343次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

小山雅人・石尾政信・土橋 誠・戸原和人「長岡京跡右京第285・310・335次調査(7ANITT・GSN地区)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

戸原和人・竹井治雄ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号 1992.3

中川和哉「第3次山城国府跡に関する新提言—平安時代の瓦が出土する遺跡」(『長岡京古文化論叢』II 三星商事印刷) 1992

戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

現地指導者 京都文教短期大学名誉教授 中山修一氏、京都大学大学院人間・環境学研究科教授 足利健亮氏

6. 若林遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

若林遺跡は、平成2年度に宇治市教育委員会によって第1次発掘調査が行われ^(注1)、弥生時代後期の溝や古墳時代後期の集落跡や古墳が検出されている。今回の第2次発掘調査は、建設省「伊勢田職員宿舎A棟新築工事」に先立ち、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。発掘調査は、平成4年度に宇治市教育委員会によって約150㎡の試掘調査が行われ、若干の遺物と堅穴状遺構・溝・土坑などが検出された^(注2)。以上の結果を受けて、今回当調査研究センターが本調査を実施した。調査期間は平成5年5月6日から6月29日まで、調査面積は約400㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長小山雅人・同調査員岸岡貴英が担当し、本概要の執筆は、位置と環境を矢野祐介、それ以外を岸岡貴英が行った。なお、挿図上の北は、すべて座標北を示す。

調査を進める上で、宇治市教育委員会・宇治市文化財愛護協会をはじめ、関係諸機関の方々から多くの御協力を得た。記して感謝の意を表したい^(注3)。なお、空撮図化作業については、スカイサーベイに依頼した。

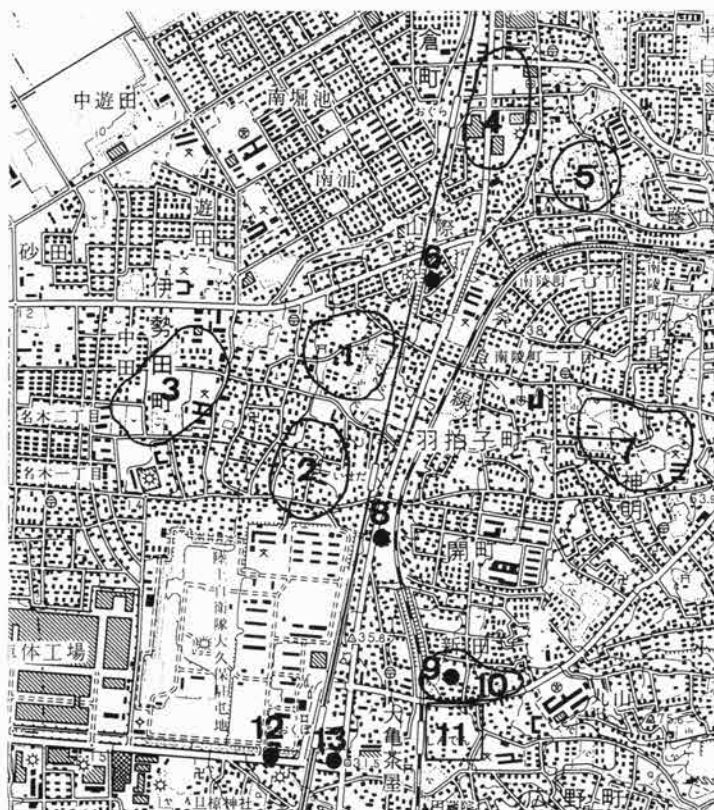
調査に要した費用は、全額建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所が負担した。

2. 位置と環境

若林遺跡は、旧巨椋池の南、宇治丘陵の西北端部に位置している。この丘陵は、東から西へなだらかに傾斜している丘陵で、この西方には木津川によって形成された沖積地が広がる。当遺跡は、その丘陵部と平野部のほぼ境付近、平野部との比高4～12mほどの丘陵裾部に立地している。この遺跡の周辺地域は、弥生時代から中世までの遺跡がみられる^(注4)。

弥生時代の遺跡は、旧巨椋池の周辺部及び台地上に散在して見られる。旧巨椋池の東岸微高地上に位置する神楽田遺跡では、弥生時代後期の土器が出土している。この遺跡の北700mほどのところにある巨椋神社東遺跡からも、扁平片刃石斧、石鏃とともに弥生時代中期にあたる土器が出土している。また、野神遺跡、石塚遺跡でも畑、粗地などから石鏃が採集されており、弥生時代の集落跡の存在が予想される。

古墳時代の遺跡としては、若林遺跡と同じ伊勢田町内の中山遺跡、井尻遺跡で広範囲の土器の散布が認められる。中山遺跡では、古墳時代中・後期の杯、有蓋高杯などの須恵器



第87図 調査地周辺の遺跡

- | | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 若林遺跡 | 2. 中山遺跡 | 3. 井尻遺跡 | 4. 神楽田遺跡 | 5. 蔭山遺跡 | 6. 西山古墳 |
| 7. 石塚遺跡 | 8. 伊勢田塚古墳 | 9. 一里山古墳 | 10. 一里山遺跡 | 11. 広野廃寺 | 12. 北山古墳 |
| 13. マメ塚古墳 | | | | | |

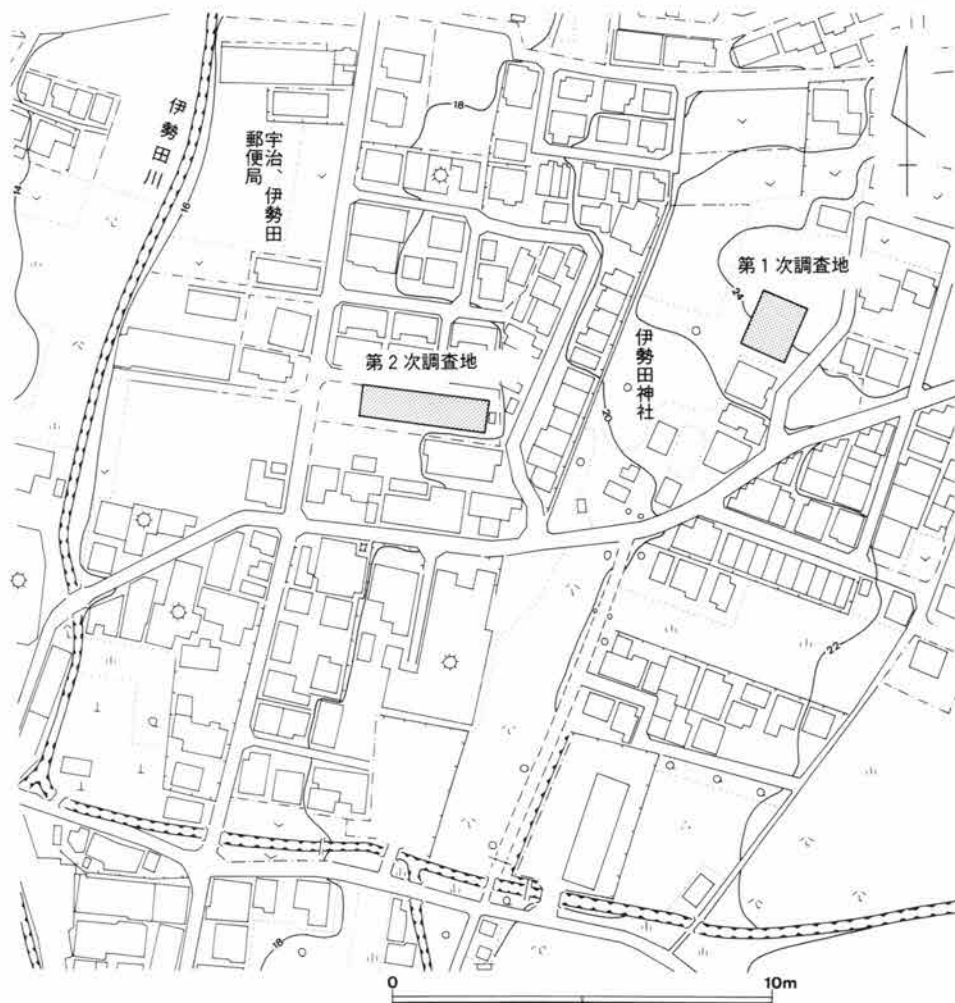
が出土している。古墳では、西山古墳と伊勢田塚古墳がある。西山古墳は、直径12mほどの円墳で、かつては横穴式石室が開口していたと伝えられており、古墳時代後期の古墳である。伊勢田塚古墳は、宇治市開町に所在する古墳であるが、棺底を持たないことを特色とする四柱式家形陶棺が出土している。この陶棺は、全国でも1例しか類例がみられず注目に値するものである。

飛鳥時代～奈良時代の寺院跡には、広野廃寺がある。瓦の堆積層が確認されており、また窯跡の存在も伝えられている。また、春日神社旧地の伝承を持つ小倉町春日森では、単独出土ではあるが、平安時代後期の唐草文鏡が見つかっている。

中世の遺跡として、安田町・小倉町・大久保町で環濠を持つ防御集落が確認されている。

3. 調査概要

調査は、表土下約40cmを重機により掘削し、盛り土と包含層の大部分を除去した。その



第88図 調査地位置図

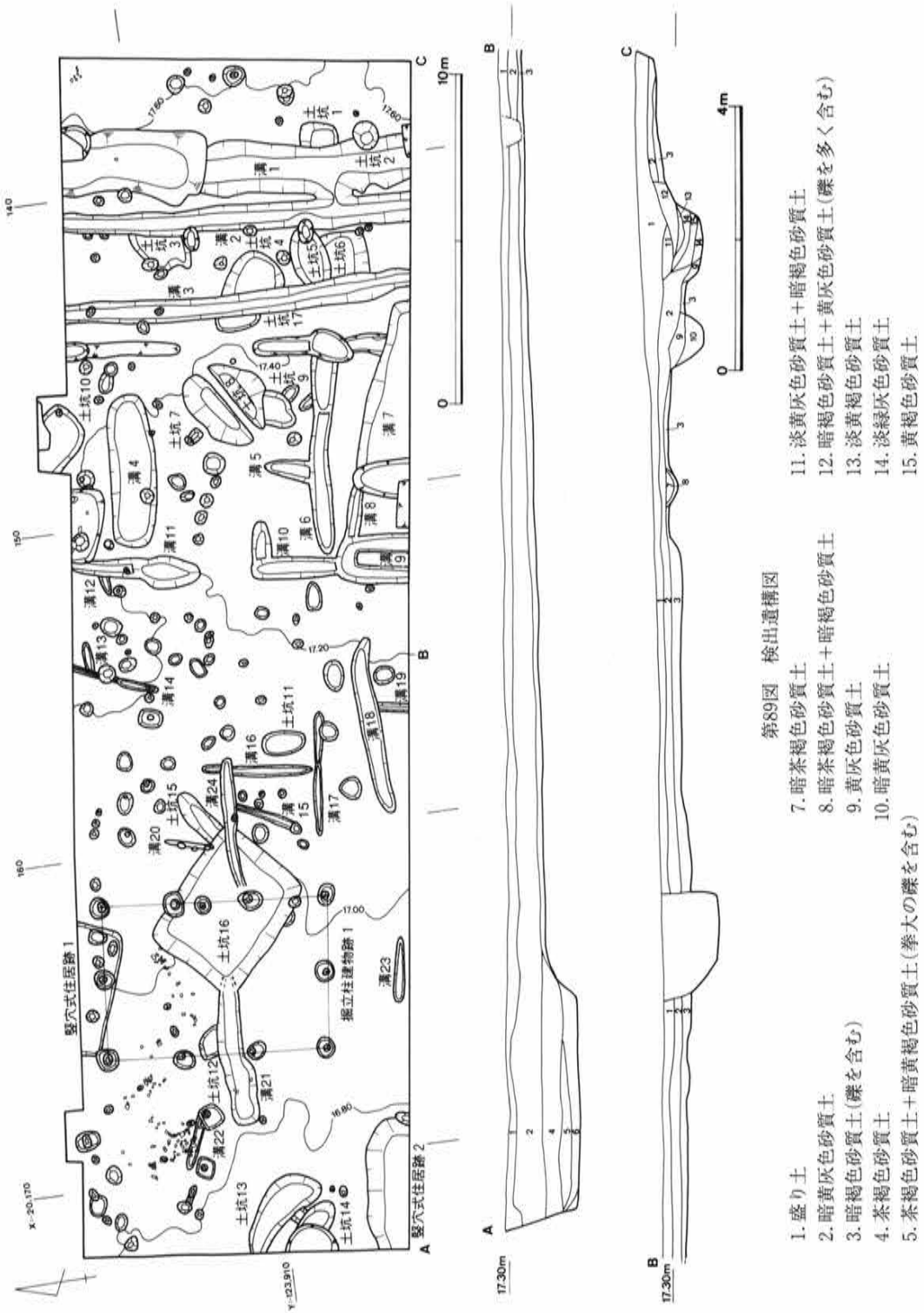
後、手掘りによる掘削を行い、全体のベース層である暗黄褐色砂質土層(地点により拳大の礫を多量に含む)の面で、遺構検出に努めた。

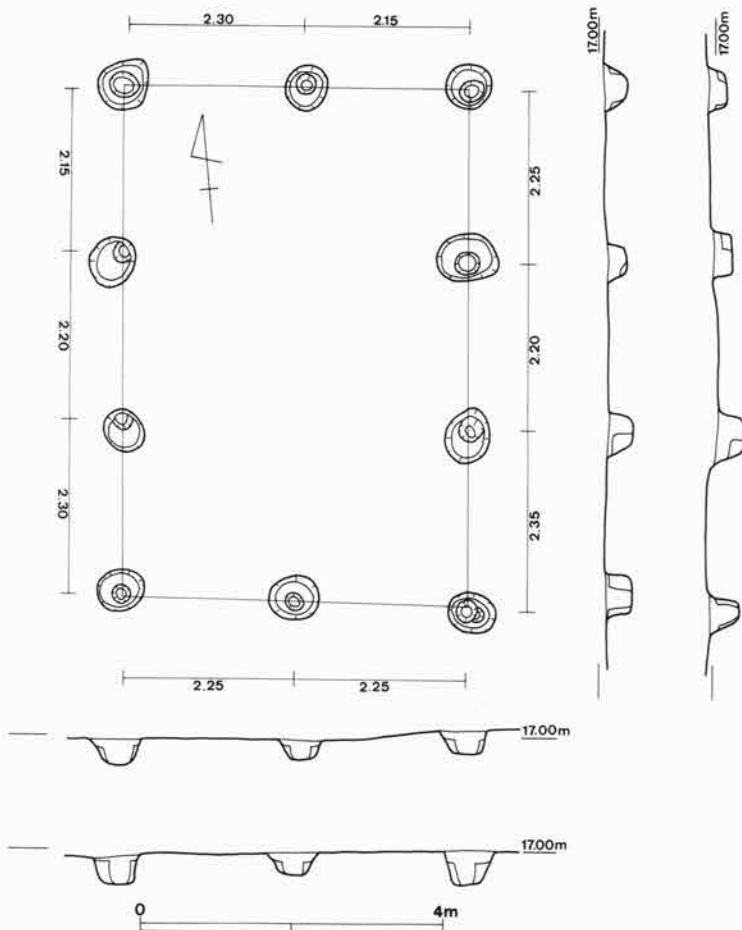
以上の結果、調査区のはほぼ全面から、奈良時代から近世にわたる遺構・遺物がみられた。主な遺構としては、掘立柱建物跡1棟、竪穴式住居跡2棟、多数の溝・土坑・ピットが検出された。また、調査終了時に、1m近く暗黄褐色砂質土層を断ち割ったが、層位の状況に変化はなかった。

(1) 検出遺構

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1 2間×3間の掘立柱建物跡である。その規模は、約4.5m(東西)×約6.7m(南北)を測る。柱掘形は径50~60cmで、その形状は楕円形及び隅丸方形を呈する。



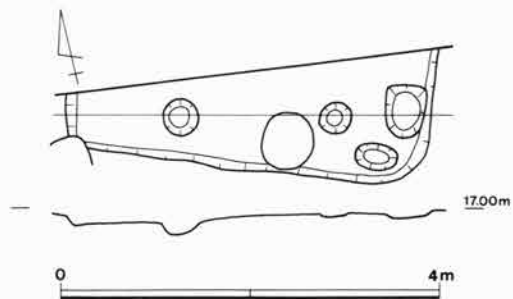


第90図 掘立柱建物跡1実測図

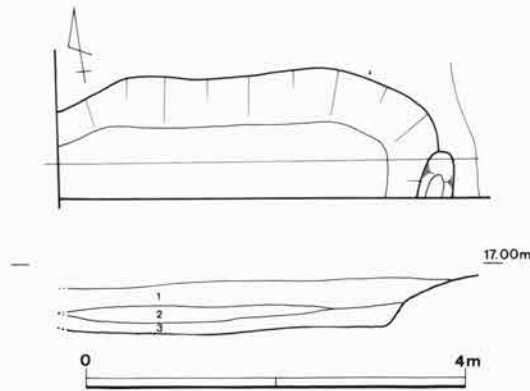
柱穴は、すべての掘形で確認しており、25～30cmを測る。柱間距離は、2.15m～2.35mの間におさまる。主軸はN-6°-E傾く。柱穴と竪穴埋土の切り合いにより、竪穴式住居跡1→掘立柱建物跡1の前後関係が成り立つ。南辺付近の包含層中から円面硯が出土している。

②竪穴式住居跡

竪穴式住居跡1 一辺3.7mを測る方形の住居跡である。南辺のみ竪穴の約1/3を検出した。主軸はN-11°-E傾く。竪穴の深さは、約7～8cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面で支柱穴を2か所検出した。周壁溝・焼土・炭などは認められなかった。竪穴の埋土中から



第91図 竪穴式住居跡1実測図



第92図 竪穴式住居跡2 実測図

1. 茶褐色砂質土 2. 茶褐色砂質土+暗黄褐色砂質土
3. 暗黄褐色砂質土

土器の細片が出土した。

竪穴式住居跡2 一辺3.7mを測る隅丸方形の住居跡である。北辺のみ竪穴の約1/3を検出した。主軸は、N-7°30'-E傾く。竪穴の深さは約30~40cmを測り、壁はわずかに外傾する。埋土は3層に分かれるが、埋土の最上層から、奈良時代前半~中頃の須恵器が数点出土した。床面で小さなピットと、北辺中央で周壁溝を検出したが、焼土・炭などは認められなかった。

付表3 溝一覧表 ()は検出長

溝	検出長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	断面形状	方向・形状	出土遺物
1	6.4	1.4	0.40~0.50	船底状	南北・直線的	すり鉢
2	10.3	0.7~1.0	0.50~0.60	浅いU字状	南北・直線的	土器細片
3	10.3	0.6~0.8	0.20~0.30	U字状	南北・直線的	須恵器甕
4	4.5	1.4	0.20~0.30	深い皿状	東西・直線的	なし
5	1.4	0.4	0.10	レンズ状	南北・直線的	なし
6	5.8	0.6~0.8	0.10	レンズ状	東西・直線的	なし
7	4.8	(1.1)	0.20	皿状	東西・一	なし
8	1.4	0.4	0.07	レンズ状	東西・直線的	なし
9	2.1	0.6	0.10	レンズ状	南北・直線的	なし
10	5.8	0.4~0.6	0.09	レンズ状	L字形に曲がる	なし
11	3.8	0.3~1.0	0.50~0.60	一部V字状	南北・直線的	なし
12	0.5	0.2	0.07	皿状	東西・直線的	なし
13	0.9	0.2	0.04	皿状	東西・直線的	なし
14	2.7	0.1~0.2	0.04	皿状	南北・直線的	なし
15	2.2	0.2	0.13	深い皿状	南北・直線的	なし
16	3.1	0.3	0.03	レンズ状	南北・直線的	なし
17	3.7	0.3	0.03	レンズ状	東西・直線的	なし
18	5.3	0.6	0.04	レンズ状	東西・直線的	なし
19	0.8	0.2	0.03	レンズ状	南北・直線的	なし
20	1.4	0.1	0.05	U字状	南北・直線的	なし
21	4.2	0.8	0.20	船底状	東西・直線的	なし
22	1.5	0.3	0.07	皿状	東西・直線的	なし
23	1.9	0.3	0.03	U字状	東西・直線的	なし
24	3.9	0.4	0.10	逆台形状	東西・直線的	なし

③溝

溝は、東西・南北方向にのびるものを24例検出した。幅20cm程度から幅1.5m程度のものであり、断面の形状が浅い皿状を呈するものから船底状に近いものがある。このように、溝の形態は多種多様で、また遺物がほとんど出土しないことから時期及び性格の確定は困難である。すべての溝の検出長・幅・深さ・形状などは一覧表に掲載した。以下、主な遺構を紹介する。

溝1 南北方向にのびる溝である。断面はゆるやかな逆台形状を呈し、検出長約6.4m・幅約1.4m・深さ約50cmを測る。溝埋土の状況から、溝が掘削されて以降、何度か改修されている可能性がある。埋土中からは、播り鉢が出土した。

溝2 南北方向にのびる溝である。断面はゆるやかな「U」字状を呈し、検出長は約10m・幅70～90cm・深さ約40cmを測る。溝2は、溝1の一部の埋土から掘り込んでおり、溝1とはほぼ平行に南北に走っている。さらに、同じような形状・深さであることから考えると、ほぼ同様の機能を有していた可能性が高い。

溝3 南北方向にのびる溝である。断面は、「U」字状を呈し、検出長約10m・幅60～80cm・深さ20cmを測る。埋土中からは、須恵器甕の破片が出土している。掘立柱建物跡1とはほぼ軸をそろえることから、関連する遺構になる可能性が高い。

④土坑

土坑は、17基検出されている。その平面・断面形態、及び規模などは多種多様であり、その性格は一様でないと思われる。さらに、出土遺物はほとんどなく、埋土の状況も変化に富み、時期の確定も困難である。以下、主な土坑について説明する。

土坑4 溝3に一部が切られている南北20mを測る土坑である。断面は船底状を呈する。埋土は一層である。遺物は出土していないが、溝3との切り合い関係から奈良時代以前にさかのぼる可能性が高い。

土坑5 検出長でいえば、南北1.2mを測る長楕円形を呈する土坑である。断面は船底状に近い。遺物は出土していないが、一部を溝3に切られていることから、奈良時代以前にさかのぼる可能性が高い。

土坑6 断面船底状を呈する土坑である。遺物は出土していないが、西辺を溝3に切られていることから、奈良時代以前にさかのぼる可能性が高い。

土坑7 1.0m×2.7mを測る楕円形の土坑である。深さは約60cmである。断面は「U」字状を呈する。埋土は、2層に分かれ、遺物は出土していない。

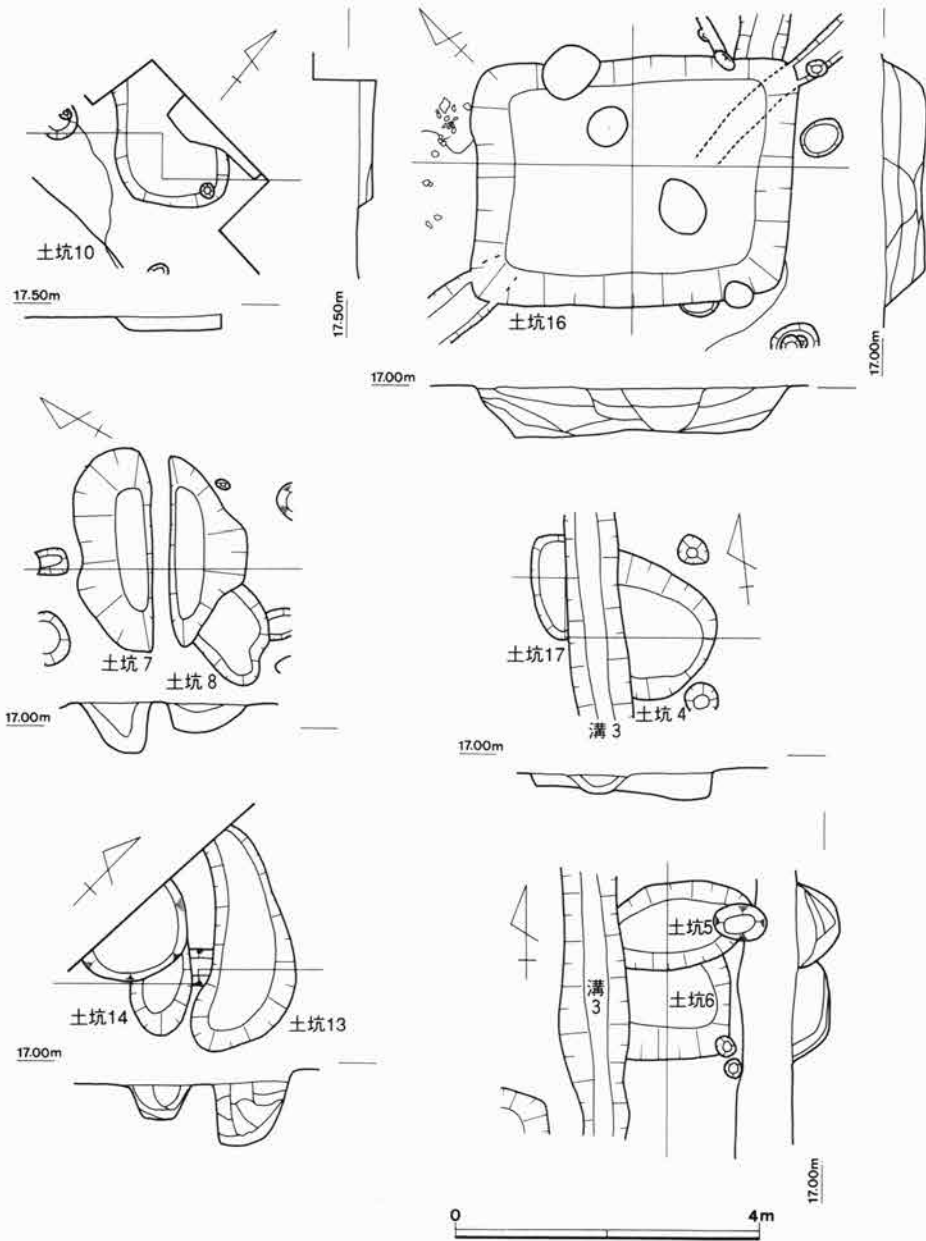
土坑8 1.1m×2.4mを測る不整形の土坑である。深さは約40cm、断面は船底状に近い。埋土は、2層に分かれ、遺物は出土していない。

土坑10 隅丸方形の土坑である。検出長は約1.9m×約1.5mを測る。深さは約20cmである。埋土中からは奈良時代の須恵器が出土した。埋土は、暗黒褐色砂質土を呈し、掘立柱建物跡1の柱穴埋土や竪穴式住居跡1・2の埋土とはほぼ同一である。

土坑13 検出長2.9m×1.3mを測る長楕円形を呈する土坑である。断面は「U」字状を呈する。埋土の状況から判断すると、何度か掘り返されている可能性がある。遺物は出土していない。

土坑14 北側が大きく攪乱されており、全体像はつかめない。断面は逆台形状に近い。遺物は出土していない。

土坑16 約3.3m×約4.4mを測る隅丸長方形の土坑である。竪穴状に近い形状を呈する。深さは60~70cmを測り、壁はわずかに外傾する。埋土は10層に分かれる。平面では検出できなかったが、中央部に別の時期の土坑があったかもしれない。埋土中からは、少量



第93図 主要な土坑集成図

の土器片が出土している。

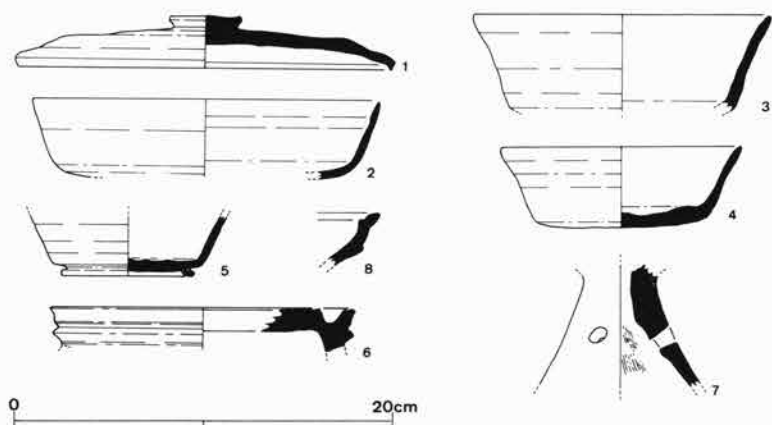
土坑17 溝3に一部が切られている南北1.3mを測る土坑である。断面は、逆台形状を呈する。埋土は一層である。遺物は出土していないが、溝3との切り合い関係から奈良時代以前にさかのぼる可能性が高い。

(2)出土遺物

出土遺物は、ほとんどなく、コンテナ2箱程度である。しかも細片が多く、図化できるものをできるだけ掲載した。1は、須恵器蓋である。平らに近い天井部に中央凸状のつまみをもつ。口縁端部は凹状をなして、直下に下る。内外面ともていねいな回転ナデを施す。口径は19.6cm、器高は2.8cmを測る。胎土は普通、焼成は良好、色調は灰色である。2～4は、須恵器杯Aである。2は、体部・口縁部が上外方に直線的にのび、口縁端部は丸くシャープにおさめる。口径は18.3cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟らかい、色調は、淡灰色を呈する。3は、体部・口縁部が斜め上方にわずかに外反気味にのび、端部は丸い。底部は深い。口径は15.8cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は灰白色を呈する。4は、体部・口縁部が斜め上方に直線的にのび、端部は丸い。底部は深く、平らに近い。内底面は回転ナデによる起伏に富み、外底面はヘラ切り未調整である。口径12.8cm・器高14.2cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。5は、須恵器杯Bである。体部・口縁部は上外方に直線的にのびる。底部は平らで、底部脚に「ハ」の字形の高台を付す。高台端面は、外方に肥厚し、外側で接地する。胎土は普通、焼成は良好、色調は暗青灰色をなす。6は、須恵器円面硯である。台部を消失し、硯部のみ残存している。陸部は海部より一段高く、海陸の区別は明瞭である。外堤は上外方に突出し、端面はわずかに内傾する。外堤下端には断面三角形の突帯をめぐらす。透しを持つが、その形状は不明である。口径は16.2cmを測る。胎土は密、焼成は堅致、色調は青灰色をなす。7は、土師器

付表4 土坑一覧表 ()は検出長

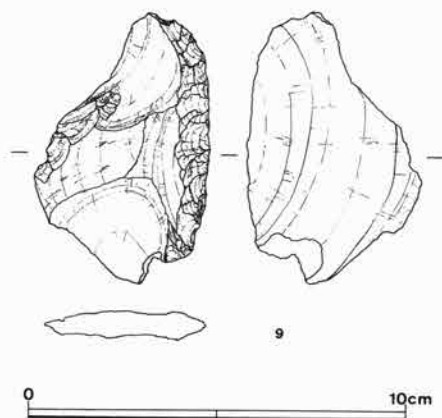
土坑 S K	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	平面形状	断面形状	出土遺物	時期
1	0.8	(0.9)	0.6	隅丸方形	船底状	土器細片	近世以前
2	0.8	0.8	0.4	円形	船底状	—	近世以後
3	1.5	(0.9)	0.4	不整形	逆台形状	—	近世以前
4	2	(1.2)	0.3	隅丸方形	逆台形～船底状	—	奈良以前
5	(1.2)	1.9	0.6	長楕円形	逆台形状	—	奈良以前
6	(1.3)	(1.5)	0.5	—	U字状	—	奈良以前
7	1	2.7	0.6	楕円形	船底状	—	—
8	1.1	2.4	0.4	不整形	船底状	—	—
9	(0.7)	1.2	0.5	不整形	皿状	—	—
10	(1.9)	1.5	0.2	隅丸方形	船底状	須恵器	奈良
11	1.2	0.5	0.8	楕円形	皿状	—	—
12	(0.5)	1	0.1	不整形	船底状	—	—
13	(2.9)	1.3	0.8	長楕円形	U字状	—	—
14	(1.8)	1.1	0.5	—	船底状	—	—
15	(1.7)	0.7	0.4	長楕円形	U字状	—	奈良以前
16	3.3	4.4	0.5	隅丸長方形	逆台形状	土器細片	奈良以前
17	1.3	(0.5)	0.1	隅丸方形	U字状	—	奈良以前



第94図 出土土器実測図

1~6.須恵器 7.土師器 8.陶器

1・3・4・7. 竪穴式住居跡 2 土坑10 5・6. 包含層



第95図 削器実測図(包含層)

高杯脚部である。透し孔を3孔穿つ。胎土はやや粗く、焼成はやや軟らかく、色調は淡褐色を呈する。8は、播り鉢の口縁部である。残りが少ないため、口径は不明である。9は、サヌカイト製の削器である。横剥ぎにより剥離された剥片を、一方からのみ連続的に片面調整を行うことにより、刃部を作り出している。光沢痕などは見られなかった。

4. まとめ

今回の調査成果は、若林遺跡の奈良時代の集落跡の一端を明らかにしたことである。また、今回出土した円面硯は、その出土位置からみて、掘立柱建物跡1に伴う可能性が高く、この遺跡を考える上で興味深いものである。

飛鳥～奈良時代、南山城地域においては、多くの古代集落で円面硯が出土している。類例をあげると、宇治市隼上り瓦窯跡^(注5)、宇治市寺界道遺跡^(注6)、宇治市東中遺跡^(注7)、宇治市広野廃寺遺跡^(注8)、城陽市正道官衙遺跡^(注9)などがある。ただ、これらの遺跡は生産遺跡や官衙、寺院跡関連遺跡、及びそれらと関係が深いものが多く、円面硯の共伴をこの時期の一般的な集落のあり方と考えるには早計であろう。若林遺跡は、今のところ奈良時代には一般的な集落であったと考えられる。今回の円面硯の出土は、官衙・寺院などに付随していたと思われる識字層の広まりを考える上で重要な資料となろう。

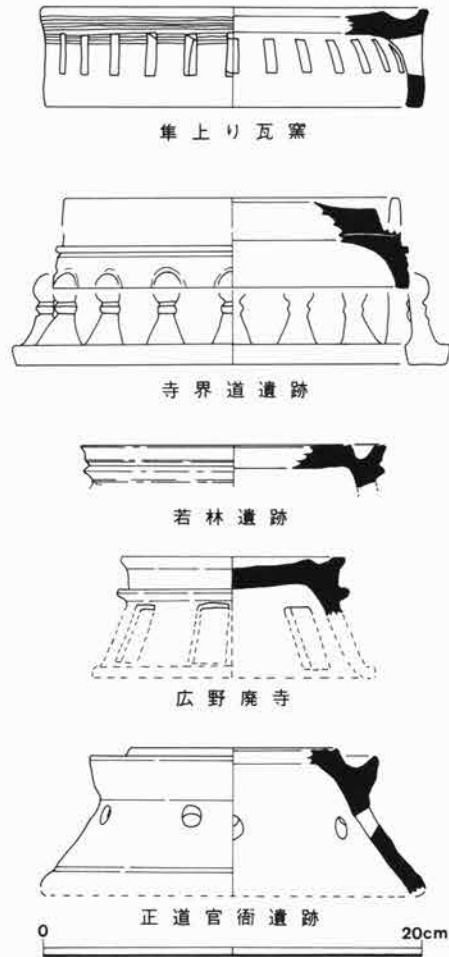
ここで、南山城地域で出土した円面硯と比較検討することにより、若林遺跡出土の円面硯の大まかな時期の推定、については若林遺跡の奈良時代集落の中心の時期を推定しようと思う。右に提示したものは、南山城地域出土の代表的な円面硯である。以下順に紹介していくことにする。

7世紀にさかのぼる円面硯としては、宇治市隼上り瓦窯^(注10)跡で数例みられる。硯径は20cm前後のものとは12cm前後の二者みられるようであるが、ともに陸部と海部の境界を明瞭にしたものは多くない。また、外堤下端に突帯をめぐらすものではなく、外堤より硯面の方が低い。寺界道遺跡^(注11)のものは、陸部が海部より一段高く、外堤下端には、突帯をめぐらしている。また、外堤端部はシャープに仕上げる。これは、6世紀後半と8世紀初頭～前半の遺物群に分かれる包含層から出土したが、後者に共伴すると考えられる。広野廃寺^(注12)の資料は、確実に8世紀後半の資料である。陸部と海部の境は、硯部外端に断面三角形の鈍い突帯がめぐる。外堤下端の突帯や外堤端部は、鈍く仕上げ

ている。正道官衙遺跡^(注13)のものは、外堤より硯面が高く、外堤下端の断面三角形の突帯も消失している。この資料を官衙廃絶に近い時期とすれば、少なくとも8世紀末～9世紀前半のものである。このように、南山城地域における円面硯の変遷を、隼上り瓦窯跡出土の資料(7世紀)→寺界道遺跡出土の資料(8世紀初頭～前半)→広野廃寺出土の資料(8世紀後半)→正道官衙遺跡出土の資料(8世紀末～9世紀前半)と大まかにとらえることができる^(注14)。

以上のことから考えると、今回出土した若林遺跡の円面硯は、8世紀前半～中頃のものと思われる。その結果、若林遺跡の掘立柱建物跡1もその時期に相当する可能性が高い。

(岸岡貴英)



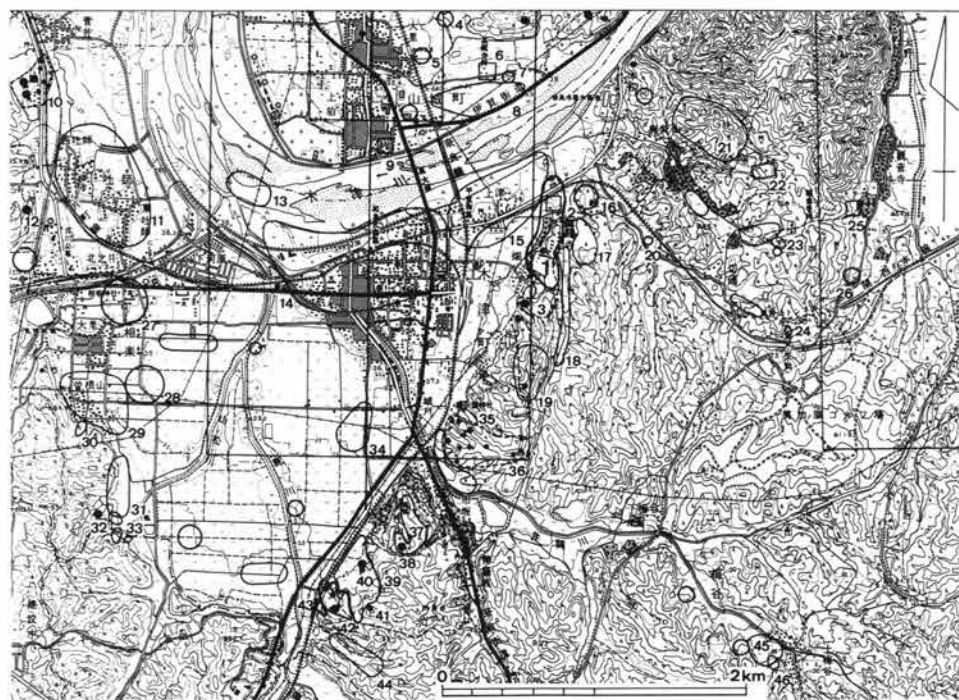
第96図 円面硯変遷図

- 注1 杉本 宏他「若林遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集 宇治市教育委員会) 1992
- 注2 この試掘調査の成果については、宇治市教育委員会の荒川 史氏より、資料を提供していただいた。
- 注3 特に、宇治市教育委員会の杉本 宏氏、荒川 史氏を始め、北川純三氏、角田博一氏、若原英武氏には、さまざまな点で御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。また、調査に参加していただいた方々は以下の通りである。
矢野祐介・永井正勝・辻川哲朗
- 注4 『宇治市遺跡地図(改訂版)』 宇治市教育委員会 1986
- 注5 杉本 宏他「隼上り瓦窯跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983
- 注6 杉本 宏他「寺界道遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会) 1987
- 注7 杉本 宏他「東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会) 1987
- 注8 杉本 宏他「広野廃寺平成2年度発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集 宇治市教育委員会) 1991
- 注9 近藤義行他「正道官衙遺跡」(『城陽市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 城陽市教育委員会) 1993
- 注10 注5の文献の図版第44陶硯・土製品・特殊品実測図273を転載した。
- 注11 注6の文献の第27図陶硯実測図95を転載した。
- 注12 注8の文献の第24図遺物実測図(4)46を転載した。
- 注13 注9の文献の第20図遺物実測図(土器-1)27を転載した。
- 注14 円面硯の変遷図は、あくまでも若林遺跡出土の円面硯の時期を考えるための試案であり、型式組列を意図したものではない。なお、飛鳥時代における円面硯の考察については、杉本氏の著作がある(杉本 宏「飛鳥時代の初期の陶硯」『考古学雑誌』73-2 1987)。

7. 燈籠寺遺跡第7次発掘調査概要

1. はじめに

燈籠寺遺跡は、京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山に所在する。この遺跡は、木津川が形成した木津町の平野部を馬蹄形に取り囲む丘陵の東側で、木津城跡を擁する城山から北方にのびる尾根状丘陵の先端に位置する。この地点は、尾根筋とはいっても平坦な台地状の地勢を示し、現在はその大半が府立木津高等学校の敷地として利用されている。



第97図 調査地周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 燈籠寺遺跡 | 2. 燈籠寺廃寺 | 3. 内田山古墳群 | 4. 高井手窯跡 | 5. 野寺芝遺跡 |
| 6. 高麗寺跡 | 7. 高麗寺瓦窯跡 | 8. 上粕東遺跡 | 9. 泉橋寺跡 | 10. 吐師七ツ塚古墳群 |
| 11. 土師遺跡 | 12. 白山古墳 | 13. 木津北遺跡 | 14. 木津遺跡 | 15. 上津遺跡 |
| 16. 白口遺跡 | 17. 赤ヶ平遺跡 | 18. 釜ヶ谷遺跡 | 19. 木津城跡 | 20. 鹿背山瓦窯跡 |
| 21. 鹿背山城跡 | 22. 鹿山寺跡 | 23. 巾ヶ谷窯跡群 | 24. 鹿背山不動窯跡 | 25. 観音寺跡 |
| 26. 節匂田窯跡 | 27. 相楽遺跡 | 28. 八ヶ坪遺跡 | 29. 曾根山遺跡 | 30. 大仙堂遺跡 |
| 31. 大畠遺跡 | 32. 音乗谷古墳 | 33. 音如ヶ谷瓦窯跡群 | 34. 八後遺跡 | 35. 大谷窯跡 |
| 36. 天神山古墳群 | 37. 西山遺跡 | 38. 西山塚古墳 | 39. 瓦谷遺跡 | 40. 瓦谷古墳 |
| 41. 幣羅坂古墳 | 42. 上人ヶ平遺跡 | 43. 市坂瓦窯跡 | 44. 瀬後谷遺跡 | 45. 中ノ島遺跡 |
| 46. 梅谷瓦窯跡 | | | | |

この遺跡については、1958年に、校地の北端部で農場造成工事が行われ、この際多量の土器(弥生・古墳・奈良時代)や埴輪資料が出土したのを機に、その存在が知られるようになった。これ以降、学校関連施設の増改築のたびに発掘調査を実施しており、その調査年次数も6次を数えるに至っている。

今回の調査は、平成4年度に実施した6次調査の後半期分、すなわち体育館・体育振興施設の改築に伴う事前調査(6-2次)を受けたもの(以下、A地区と記す)と、食堂改築に伴う調査(以下、B地区と記す)である。前者(A地区)は、6-2次調査で体育館建設用地に5か所の試掘トレンチを設けて調査を実施したが、大半が戦後の造成工事で遺構面が削平され失われている状況であった。しかし、最も南西に設定した調査区で弥生時代の土器が出土する溝状遺構(今回の調査で方形周溝墓の周溝の一部と判明)が検出され、これにより西方に遺構面が残されていることが判明した。つまり、旧管理棟が建てられていた一段高い土堤状の部分に遺構面が削平されずに保護されており、これより東側のグラウンドや旧体育館敷地付近は、旧地形が相当削られて造成されていることがこの調査で判明した^(注1)。

こうした6次調査の成果を受けて、今回は遺構面が確認された調査区を西方に約400㎡にわたって拡張して、遺構の検出にあたった。一方、食堂改築部分については、建物基礎の影響を受ける地点を中心に約200㎡のトレンチを設けて調査を行った。

調査期間は、A地区が平成5年4月9日から5月28日まで、B地区が同年6月10日から6月28日までである。現地調査は、京都府教育庁管理部の依頼をうけて、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人・同調査員森正哲次・伊賀高弘が担当した。また、調査に係る経費は京都府教育庁管理部が負担した。

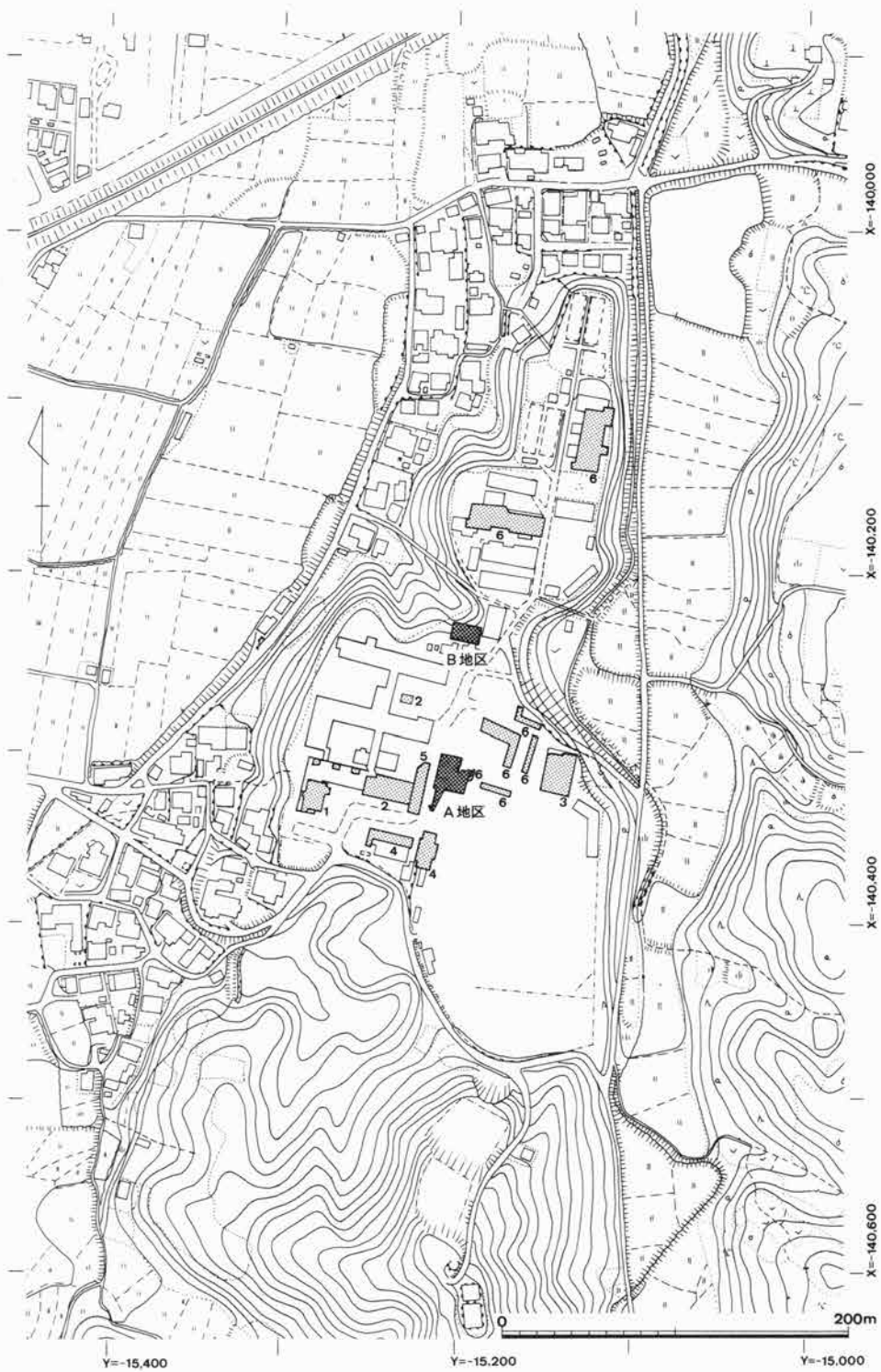
なお、京都府立木津高等学校、京都府教育委員会、木津町教育委員会、京都府立山城郷土資料館など関係諸機関からご協力・ご教示いただいた。また、現地作業には作業員・整理員・学生諸氏の協力があつた^(注2)。感謝の意を表したい。

2. 検出遺構

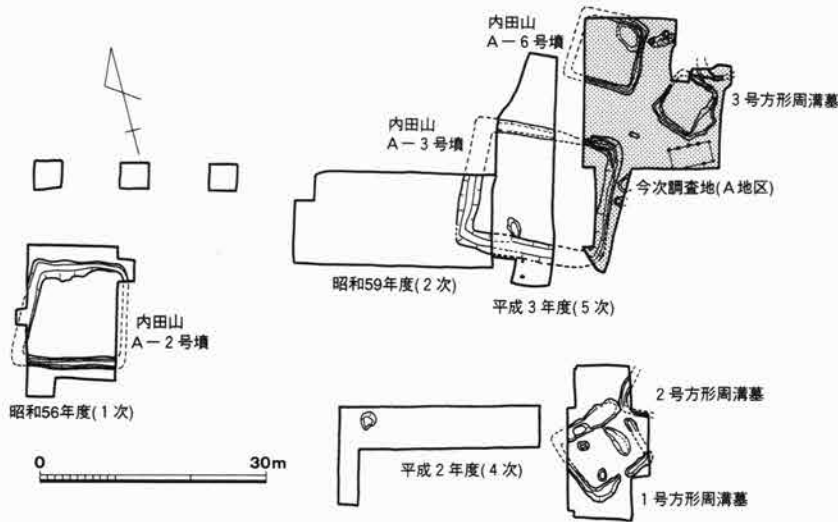
①A地区の遺構

調査で検出された主要な遺構は、弥生中期に属する方形周溝墓1基・掘立柱建物跡1棟・土坑数基、古墳時代中期の小方墳2基・埴輪棺1基・土坑数基、そして伴出遺物の少なさから時期を特定できないものの、掘形の規模や形態、これを覆う包含層資料などから奈良時代に属する可能性の高い柱穴状土坑数基などである。

A地区の基本層序は、上位から、旧管理棟の基壇となる盛り土層(層厚0.4~0.6m)、管理棟建設以前の旧表土(層厚0.1m)、奈良時代の遺物を若干含む暗黄灰色粘質砂土(層厚



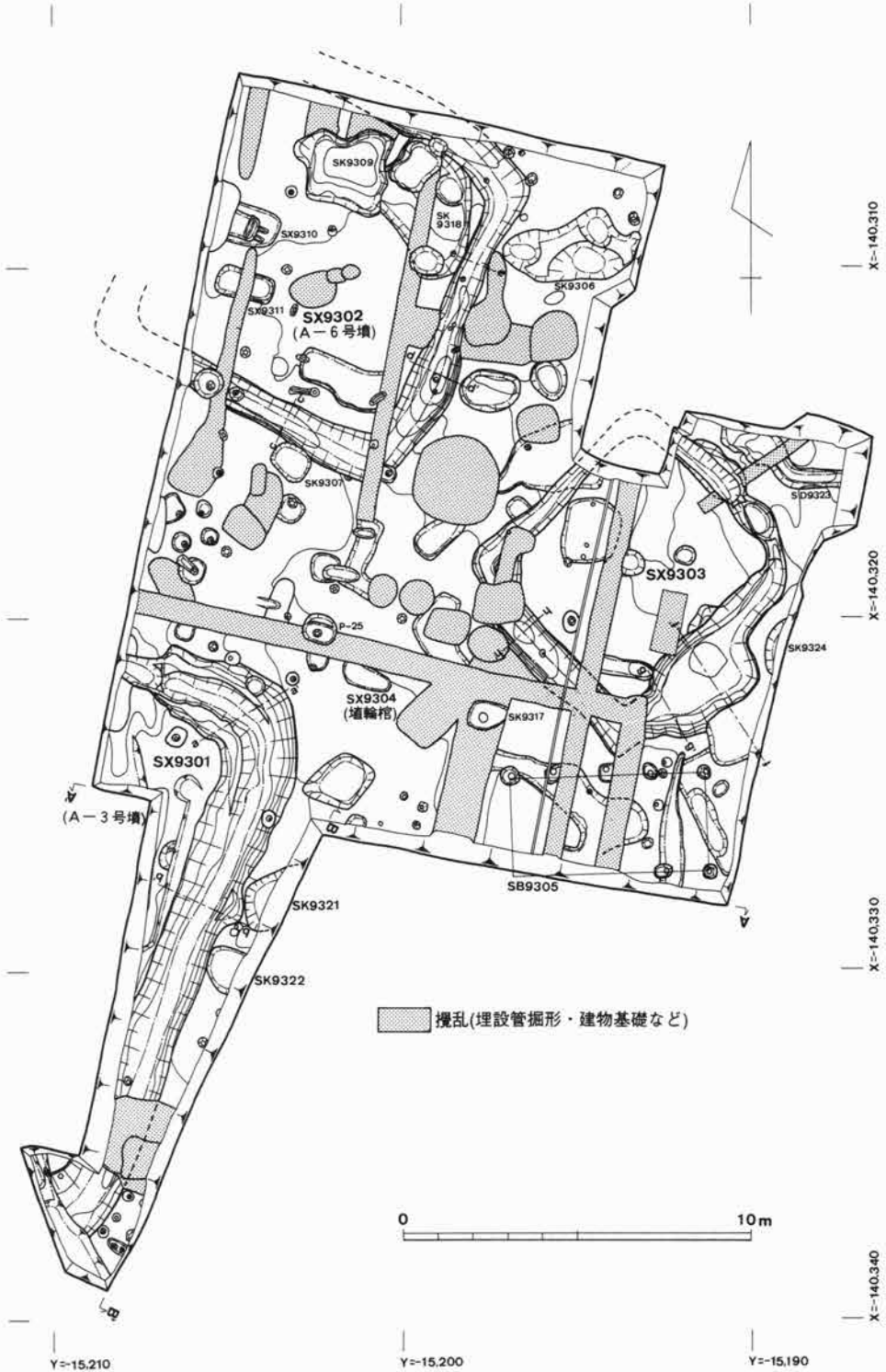
第98図 トレンチ配置図(図中の数字は調査次数を示す。)



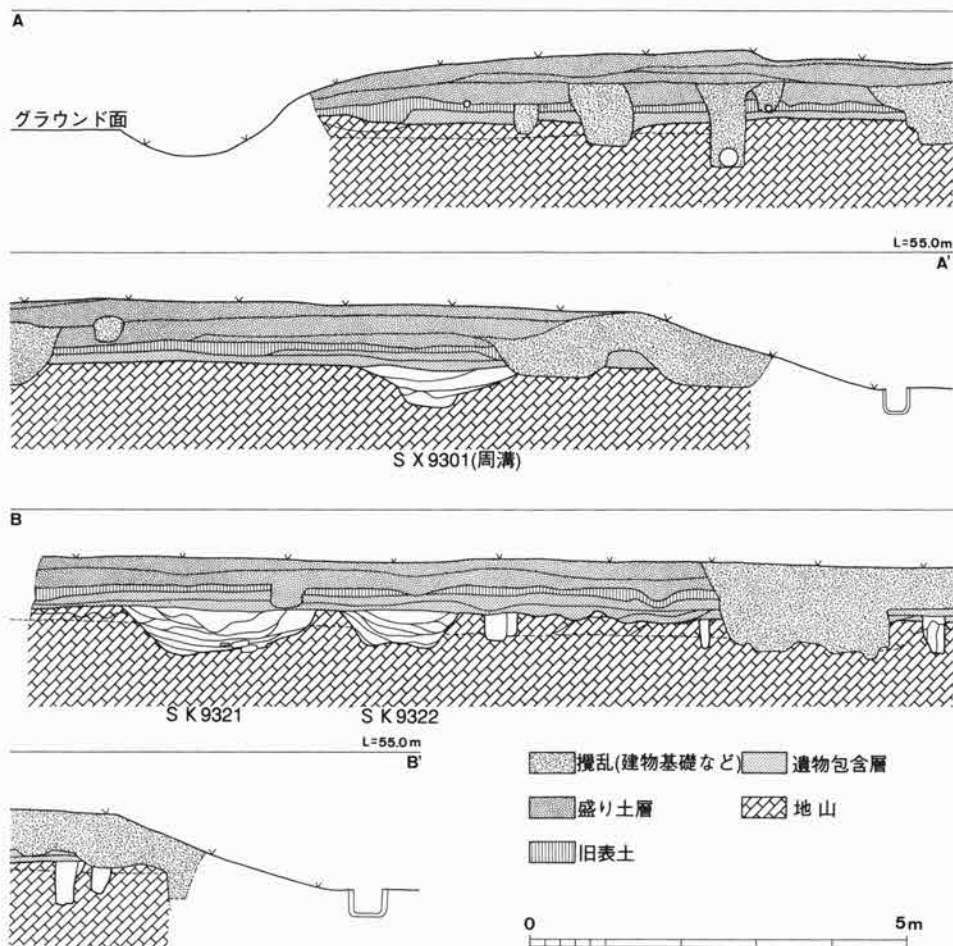
第99図 燈籠寺遺跡 調査地周辺主要遺構配置図

0.1~0.3m)の層順で堆積し、現地表下0.6~0.9mで白っぽい黄褐色粘質土(部分的に同色粗砂礫土に変化するか所もある)の地山となる。すべての遺構は、その時期の先後に関係なく、この地山面で検出された。

S X 9301 調査区の南西部と、そこから南にのびる拡張区で検出された溝状遺構で、第2次調査で南西隅部を確認し、第5次調査で南・北辺周溝を追認した小方墳の内田山A-3号墳の東辺部に相当する。今回検出したのは、同古墳の東辺周溝のすべてと、その南北両端で、西方に屈曲する南・北辺周溝の一部である。調査時点の現状では、周溝の内外におけるレベル差はなく、周溝の内側にあたる墳丘部分は、過去の調査事例と同じく、外部の検出面(地山面)まで削平されている。調査区内における検出面の高低差は、ほとんどないが、周溝の規模をみると、東辺は、現状での上縁幅1.5~2.0mとほぼ一定値を保つ。それに対し、北辺周溝は、屈曲部でやや規模を拡大(幅2.5m)した後、屈曲線から3.2mの間は、東辺と同規模を保つが、これより西方で急に規模を縮小(上縁幅0.6~0.9m)する。このように、周溝が狭く浅くなる状況は、本調査区の西側にあたる第5次調査区でも認められ、ここでは、削平がより進行して、より浅く不明瞭になっている。周溝の横断面形は、基本的には下縁にやや明瞭な屈折を残す逆台形状を呈するが、北東コーナー付近から狭部を除く北辺部分は、下底部をさらに横断面「U」字形(上縁幅0.9m・深さ0.2m)に掘り込む2段構造を呈する。ただ、この下段部の南界は、東辺周溝内でゆるやかに1段掘りへと移行する。周溝内埋土は大別して4層に分けられる。第1層は、茶灰色系粘質土で、周溝



第100図 燈籠寺遺跡 A地区遺構平面図

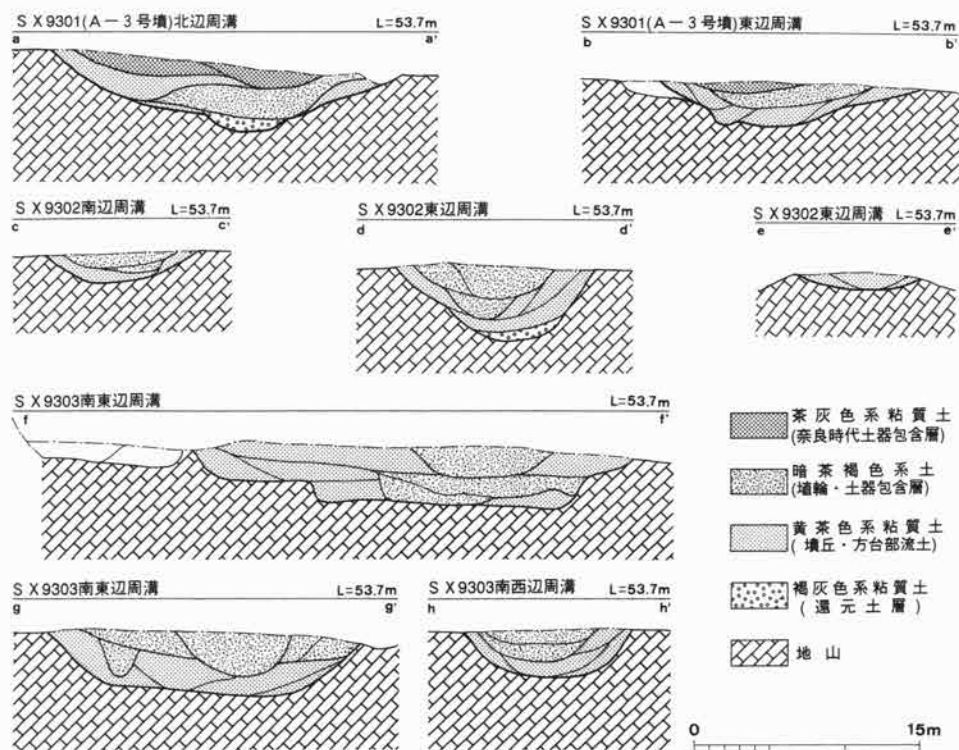


第101図 燈籠寺遺跡 A地区トレンチ断面図

の中軸線より外周側に薄くレンズ状に堆積し、埴輪類と奈良時代の土器類の小片がともに少量出土する。第2層は、暗茶褐色土で、多くが第1層に覆われるが、墳丘側に偏して検出面に露呈する。同層から、埴輪類が他の遺物を混じえず、ややまとまって出土する。第3層は、黄茶色系の粘質土で、墳丘外傾斜面直上を覆うように墳丘側のみ堆積するが、出土遺物はほとんどない。同層は、墳丘流土と解される。第4層は、2段掘りの下段部分の堆積層で、褐灰色系粘質土からなり、出土遺物は皆無である。過去の調査成果を総合すると、墳丘規模(この場合、対向する墳丘外傾斜面の下縁間の距離)は、東西17.5m・南北16.0mを測り、各辺の示す方位(古墳の主軸)はN(座標北)22° Eを示す。

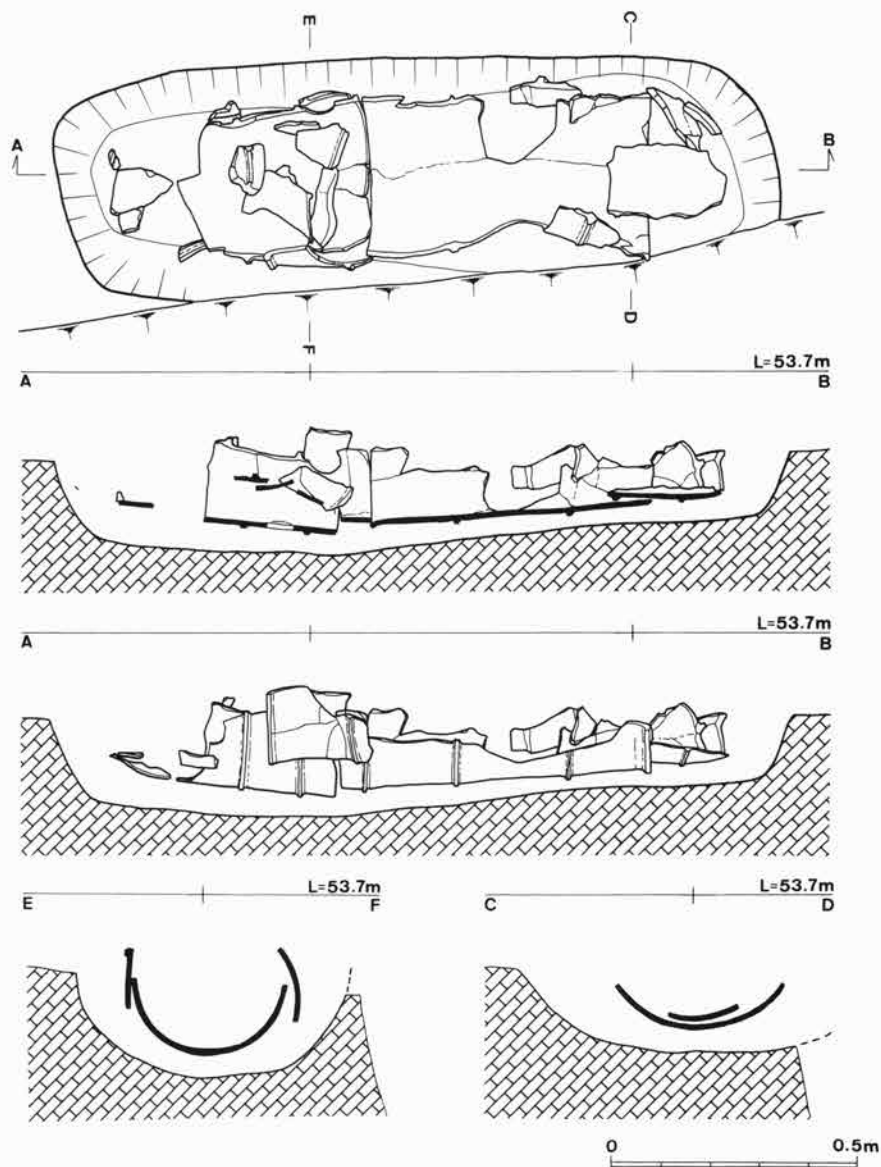
S X 9302 調査区の北西部で検出された逆「コ」字形に屈曲する素掘り溝状の遺構である。その形態や出土遺物などから、小規模な方墳とみられるため、これをA-6号墳と称することとする。南に接するA-3号墳(S X 9301)とは、主軸をそろえて(N22° E)約

6 m間隔で縦にならび、東辺周溝の中軸線はA-3号墳の東辺周溝中軸線の北延長線上にくる。西辺周溝が調査区外にはずれるため、古墳の全貌は明らかではないが、少なくとも墳丘の南北規模は、対向する周溝の中軸間で計測して9.5mであり、A-3号墳より一回り小規模である。検出した周溝は、周溝の内外で高低差がなく、墳丘盛り土部分の削平はもちろん、本来の古墳の構築面も相当削平されていると考えられる。現状での周溝は、上縁幅がほぼ一定しており、0.7~1.4mを測るが、深さは各辺の中央寄りが屈曲部より深く掘り込まれる傾向がある(屈曲部0.2m・各辺中央部0.5m)。周溝の横断面形は、その深淺を問わず、下縁ラインが不明瞭な上外方に開く「U」字形を基本とする。溝内埋土は、大きく上位より暗茶灰色系土、黄茶色系土に二分でき、上層から埴輪片が出土した(特に北辺に集中)。下層は、全体的には墳丘側に厚く堆積しており、墳丘流土とみられるが、出土遺物は少ない。墳丘部は、大小の土坑や攪乱によって乱れているが、このなかで、SX 9310・SX 9311は、出土遺物こそないが、主軸を古墳とそろえる点で関連遺構とみられる。特に、SX 9310は、西半を後世の土坑に切られているが、長軸を東西にとる土坑は2段に掘り込まれ、その下段部分に組合式木棺の小口穴らしきくぼみがみられることから、墳丘の中心より西に偏るものの、この古墳の内部施設(埋葬施設)の可能性はある。



第102図 燈籠寺遺跡 古墳・方形周溝墓周溝断面図

S X 9304 A-3号墳の北東コーナーの外周に近接するように営まれた埴輪棺である。遺存状態は悪く、棺本体の下半部の1/3が現位置を保持して残存していたにすぎない。墓壙は、隅丸長方形プランで、検出面における規模は、長軸(東西)1.45m・短軸(幅)約0.5mで、深さは0.14~0.2mで東ほどやや深くなる。主軸(長軸)ラインは、2基の古墳とほぼ一致する。棺本体は、上部を打ち欠いた円筒埴輪(西側)の底部に別の円筒埴輪(東側)の打ち欠き面を連繋して構築したもので(複棺式)、西小口部には棺本体西側に転用されたもの



第103図 S X 9304(埴輪棺)実測図

と同一個体の埴輪片を西側埴輪に一部重ねるように上載せして枕状施設としている。棺本体の連結部には、側面から上面にかけて1段相当の大きさに打ち欠いた円筒埴輪をかぶせるように載せてこの部分を覆う。小口の閉塞は、遺存状態の比較的よい西側で部分的にわかる程度で、この部分では半裁した円筒埴輪片を立てることで小口を塞いでいる。

S X 9303 調査区の東寄り中央で検出された方形にめぐる溝状遺構である。出土遺物が弥生土器(いずれも細片化している)を中心とし埴輪類を全く含まないことや、全体の規模や形態などから、弥生時代中期の方形周溝墓とみてよい。方台部の各辺が示す方位は、ほぼN47°Eを測り、正南北に対しかなり振れている。北側のコーナー部がわずかに調査区外にでており、全容を厳正にうかがうことはできない。ただ、周溝は、少なくとも東・南・西のコーナー部で狭小にはなるものの途切れることはなく、方台部の外周をめぐっている。周溝に囲まれる方台部の規模は、対向する周溝の中軸線間で北西～南東辺間が6.2m、これと直交する北東～南西間が7.0mを測り、後者がやや長い方形プランとなる。周溝の上縁幅は、遺構検出面の高低差を反映して0.5～1.0mと一定しないが、南東辺の中央南寄り外縁が大きく外方に膨らむかたちで幅を拡張(上縁幅2.5m)する。この拡張部を中心に弥生土器が集中して出土したが、いずれも小片で接合できる個体は少ない。また、北東辺は、北西半部で周溝の中軸に沿って溝底をさらに深く掘り込んでおり、いわゆる2段構造となる。この下段部分は、内外両斜面が急角度をなし、深さも上段溝底面から0.65mと深い。ただ、この深く掘り込んだところでは遺物はあまり出土していない。これらの周溝における変形部分の性格については、不明な点が多いが、溝中埋葬に関連する施設とみるのも一案であろう。周溝内埋土をみると、大きく2段階に埋まったことがわかる。各段階内の堆積土は、遺物を包含する暗茶褐色系土と無遺物の黄茶色系土に二分でき、後者が埋まった後、周溝の中軸に沿って前者がその窪みに流入する。方台部は、周溝外側の検出面と同じレベルにまで削平され地山面が直接露呈する。このため、方台部の埋葬施設は、痕跡すら確認できなかった。

S B 9305 調査区の南東隅で検出された4間(5.6m)×1間(2.9m)の東西棟の側柱建物である。柱間寸法は、梁間を2.9mと広くとる一方、桁行柱筋は1.2～1.5mと一定せず間隔も狭い。柱穴掘形は、円形あるいは桁行方向にやや長い隅丸方形プランを呈し、径あるいは長軸は0.4～0.7mを測る。柱痕跡は径15cm前後で、柱材を抜き取った形跡はない。複数の掘形埋土中から土器細片(弥生土器か)が出土したことや、柱穴規模や建物跡の形式などから、弥生時代の高床構造の建物(クラ)の可能性はある。

S K 9318 A-6号墳の墳丘北東隅に位置する長円形プランの土坑である。長径4.0m・短径2.5m・検出面からの最大深さ0.4mを測る。内部から埴輪類がややまとまって出

土したが、その内容はA-6号墳と変わらず、A-6号墳の周溝との重複関係より土坑の方が新しいことから、A-6号墳の埴輪が混入したと考えられる。

S K 9306 S K 9318の東で、A-6号墳周溝を挟んで対峙するように位置する。長軸を東西にとる不整長円形プランを呈し、長軸3.2m・最大幅2.1m・最大深さ0.65mを測る。埴輪小片が少量出土した。

S K 9321・S K 9322 いずれも南拡張区の東壁に沿って南北に隣接して検出された土坑で、部分的に調査区外にのびるため全容は正確につかめないが、長径2.0m前後の長楕円形または隅丸長方形プランを呈するとみられる。断面形は、底部が平坦な台形を呈し、深さは検出面から0.5~0.6mを測る。両土坑とも、埋土に多量の焼土と炭が混じり、弥生土器片・石器(砥石)・偏平な自然石などが出土した。

S D 9323 方形周溝墓の北東辺に接するように検出された溝状遺構で、両端が調査区外にのびるため全体の形は明らかではないが、検出部分を見ると「く」字形に屈折する平面形を呈する(検出長3.8m)。溝の上縁幅は0.5~1.2m、検出面からの深さは0.3mを測り、横断面形は上外方に開く「U」字形である。溝内には暗黄茶色土が堆積し、内部から小形の丸底に近い平底壺(布留式か)の小片が出土した。

S K 9324 調査区の東壁中央に接して検出された土坑で、トレンチ内では半円形プラン(最大径3.0m)を呈する。坑内の堆積状況は、方形周溝墓に似ており、中心寄りの暗茶褐色粘質土中から弥生土器の小片が出土した。

その他の遺構 その他、現代の建物基礎や埋設管掘形と埋土の上で明確に区別できる大小の不定形土坑やピット状土坑、小規模な溝状遺構が調査区の各所で多数検出された。ただ、これらはほとんど出土遺物を持たず、時期や性格を特定できないものが多い。こうした中で、例えばピット状土坑のS K 9307・P 25・S K 9317などは、掘形規模が相対的に大きく(一辺0.8~1.1m・深さ0.6m前後)、径25cm前後の柱痕跡をとどめるものもある。これらは、直接建物に復原できないが、包含層資料や古墳周溝上層埋土から奈良時代の遺物がかかり出土しており、その規模や形態からもこの時期の建物柱穴となる可能性はある。

(伊賀高弘)

②B地区の概要

B地区は、大部分がアスファルト舗装され、学校職員の駐車場として利用されている場所に位置する。駐車場の北西部は、現地表面から1~2mの急激な段差を有し、西にゆるやかな斜面を形成している。また、東部は、自然地形で、急な斜面となっていて、尾根筋の平坦部が一番狭くなっている。そこに南北約10m・東西20mの約200㎡の調査区B地区を設定して調査を行ったが、表土から黄褐色粘質土まで昭和になって焼却炉などで処分さ

れたゴミやガラが整地土として利用されていた。整地土除去後、黄褐色粘質土がトレンチ南西から北西・南東へ低くなり、円墳のマウンドを四分之一にしたような形状を呈した。その後、精査を行ったが、無遺物・無遺構であった。トレンチ北西部に南北・北西方向に断ち割りをを行ったが、断ち割り断面はいずれも自然堆積であった。

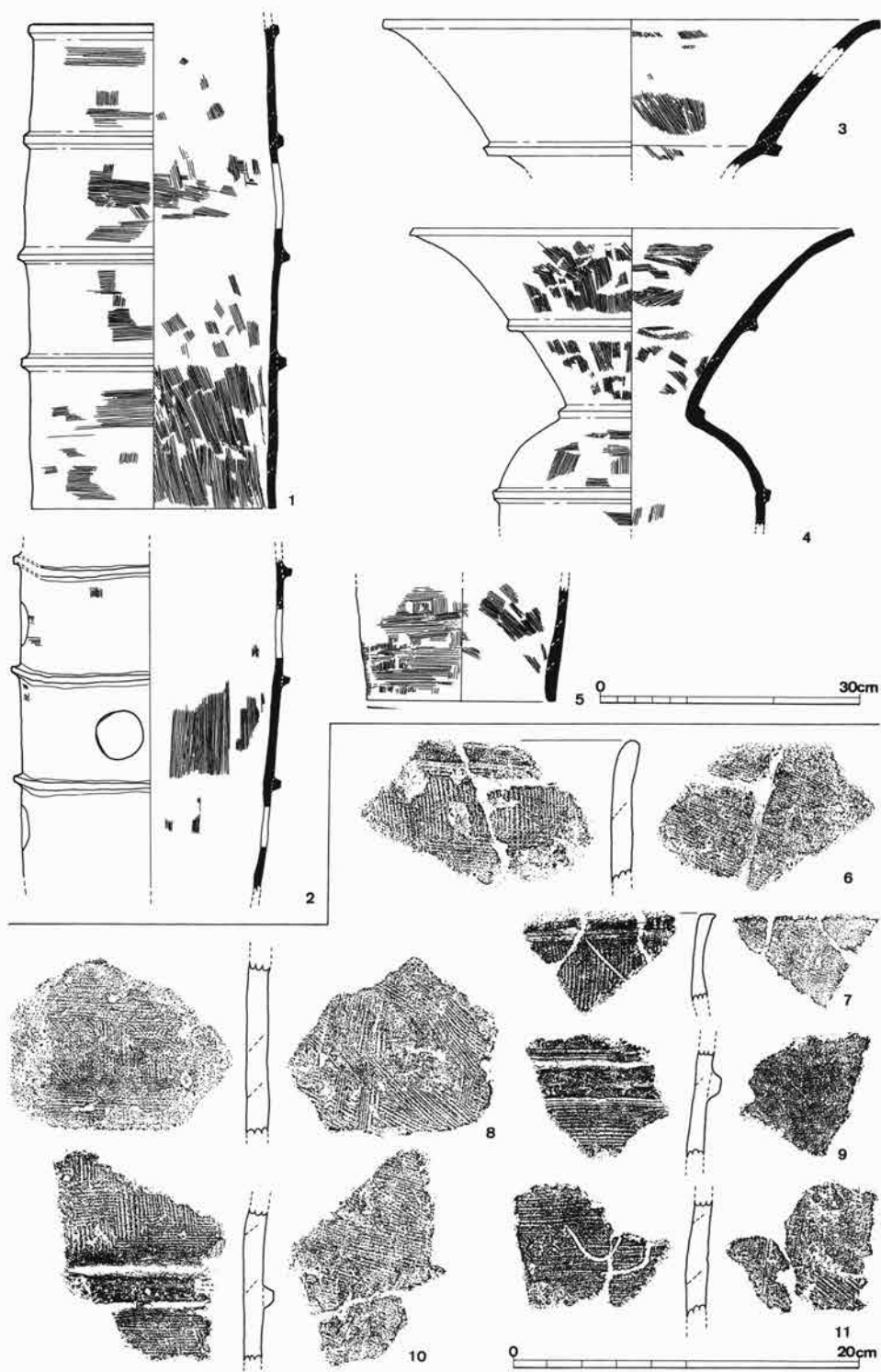
(森正哲次)

3. 出土遺物

出土遺物は、埴輪類と弥生時代の土器・石器、奈良時代の土器である。いずれも細片資料が多く、埴輪類が出土量の大半を占める。ここでは図示した資料を中心に説明する。

普通円筒埴輪 古墳周溝内出土の個体は、すべて小片であり、観察対象としてはふさわしくないが、埴輪棺に転用されていたものは比較的残存状態が良好である(第104図-1・2)。1は、口縁部を欠失して全体の形をうかがうことはできないが、底部から4段目タガ状突帯(以下、タガと記す)位まで残存する。全体形状はほぼ正円断面を呈し、その側面形は底部から上位に向かってほとんど径を変化させない円筒形を呈する。タガによって区分される各段の幅は、中間段(2段目以上)が約10.5cmと均等に割り付けられているのに対し、最下段(基底段)は15.9cmと約1.5倍の比率で広くとる。器面に残る整形・調整痕は、ハケメが主体に観察できる。外面は、器面の磨耗・剝離が進行して詳細ははっきりしないが、縦長に入る黒斑部分でみると、各段とも縦位のハケ調整の後、横位のハケを加えるのを原則とする。このうちヨコハケは、タガ剝離部分に及ばないので2次調整である。この2次調整は、段間くまなく施すが、段宛の施行方式(段宛の施行回数や工具の当たりによる縦位の静止線の有無など)を知ることはできない。おそらくストロークの長い継続的なヨコハケ(B種ヨコハケ)の可能性が高い。なお、3段目の中位付近にヨコハケに先行する断続的なナメハケがみられるが、ちょうどこの部分の内面に他の部位には施されない顕著なヨコハケがみられ、ともに乾燥単位間の接合を目的に施されたものとみられる。内面は、やや斜向(左傾)するていねいなタテハケを全面に施し(1次調整)、さらに1段目タガ位以上は、これに縦・横位の指頭ナデを加えて器面を平滑に仕上げる。なお、底端部にみられるタテハケは、自重による歪み部分にも明瞭に残っており、変形以前の初期の乾燥工程内での調整とみられる。透孔は円形で、3段目にその痕跡が認められたが、これに隣接する段(2段目と4段目)には存在しないようである。焼成はやや堅緻で褐色を呈する。

2は、底部と口縁を失い中間段のみが残存する。3cm前後の幅をもつ粘土帯を輪積みして器体を形成する。残存部をみる限り、横断面形はほぼ正円形で、上位ほどわずかに径の広がる側面形を呈する。調整技法は、器表磨耗のため、特に外面は観察できないが、内面



第104図 出土遺物実測図(1)

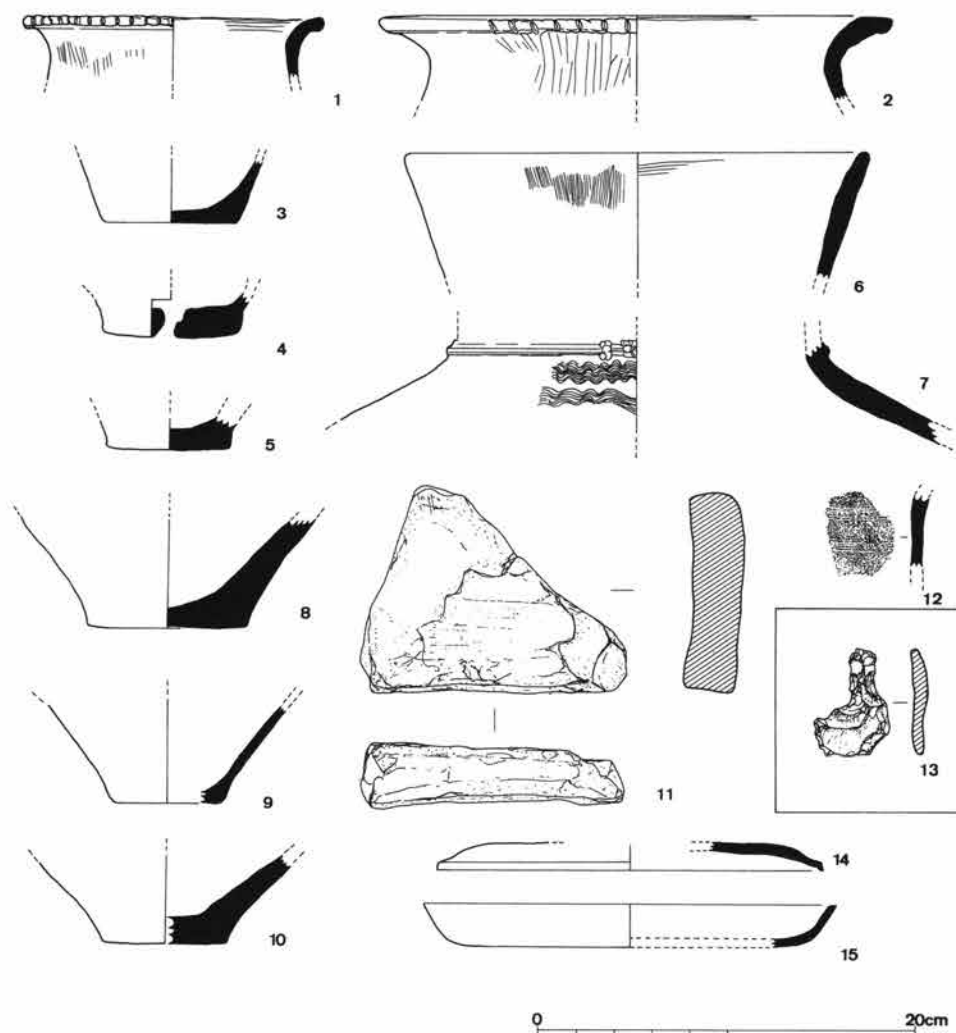
は、右傾する指頭ユビナデ(整形段階)の後、タテハケを全面にわたって施す。このハケは、工具原体の両端が条痕として顕著に残り、施行距離の比較的長い縦位の線(条痕)が一定間隔に横方向に並んで円筒内面を多面体状にしている。残存する最上段内面にみられるナナメハケは、乾燥単位間の接合を目的として施したのかもしれない。透孔は、直径5.0cm前後の正円形で、段のほぼ中央に位置する。その穿孔方式は、隣接するすべての段に、段を違えて交互に段間2個宛対向方向に穿孔している。焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。黒斑は残存部分にはみられないが、破断面に黒色を呈する部分がある。

このほかの小片資料の特徴を概観すると、内外の調整は、ほとんどの個体がハケを多用し、外面はタテハケ(1次調整)の後タガを製作して各段毎にヨコハケ(継続的=B種ヨコハケ)を加える(2次調整)。内面は、ナナメまたはタテハケを施し、部分的にこれをナデ消す資料が多い。口縁部内面はナナメハケを施して器表を整える。口縁端部の形状は、口唇部を外反させるものではなく、すべて直口状に終わる。器面にヘラ状工具によって記号(絵画?)を施すものもある(第104図-7・11)。

朝顔形円筒埴輪 4は、朝顔形円筒埴輪の肩部から口縁端部にかけての小片数個を図上で復原して合成した。口縁部は、ほぼ一律の傾度(外反度)をもってゆるやかに外反する側面形を呈するが、製作上は、1次口縁に2次口縁を付加する分割整形技法を採っている。すなわち、内外面を縦位(平面的にみれば放射状あるいは斜め放射状)のハケで調整した1次口縁の上端(口唇部)を指頭ヨコナデで一端整形した後、外反する1次口縁の口唇部内側を基礎にして、この上に粘土帯を順次輪積みして2次口縁を付加するように製作する。2次口縁は、内外とも縦位のハケを施した後、外面はその上半に、内面は2次口縁全般にわたってナナメ(斜め放射状)あるいは横位のていねいなハケを加えて調整する。口縁部中位突帯は、台形状の断面形を呈するが、これは口縁部全体が製作された後に粘土紐を貼り付け整形して製作する。肩部の調整は、外面のみ施され(内面は整形段階の左傾する指頭ナデのみで終わる)、タテハケ(1次調整)の後ヨコハケ(2次調整)が加えられる。

弥生土器 いずれも小片資料で、その遺存状態も悪いものが多い。図示したものに若干の説明を加える。甕(第105図-1・2)は、いずれも如意形に短く外反する口縁端部に粗いきざみ目を施したもので、体部から口縁部外面は粗いたてハケが、口縁部内面はその上半部に限りヨコハケ調整が加えられる。いわゆる「大和形甕」の属性を備えたものである。

底部(同3~5・8~10)は、いずれも底径6.0~8.4cmを測る水平底を呈し、底面に葉脈痕をとどめるものもある。立ち上がる体部の厚さに厚薄二様が認められ、薄手のものは甕とみられる。器面調整を知り得る資料は少ないが、3の外面にわずかなタテハケ痕が認められる以外はナデ仕上げとみられる。4の底部中央には直径5mm程度の円孔が内面から棒



第105図 出土遺物実測図(2)

状工具により刺突穿孔される。直口壺(同6)は、口唇端部がやや水平な面をもち、外面をタテハケ、内面上半をヨコハケ調整で仕上げる。7は、加飾された広口壺の体部上半部とみられる。頸部外面にはその屈曲部に断面台形状の突帯がめぐらされ、さらに上面に縦位の棒状浮文が1.3cm間隔で貼付される。体部外面は、縦位の緻密な条痕(ミガキ)で調整した後、櫛描き波状文を複数施す。内面は縦位のナデで仕上げる。頸部に突帯文を多条施した播磨型装飾壺の系譜を引くものであろうか。

石器 砥石(同11)は、雲母の混じった砂岩系の板状石材を用いたもので、上面と一側面に使用痕跡が認められる。石匙(同13)は、刃部の大半が剝離・折損しているが、つまみ部

は完存している。サヌキトイド製である。このほか、石器ではないが、サヌカイト剥片5点、黒曜石剥片1点が出土した。

奈良時代の土器 須恵器蓋(同14)は、内外とも回転ロクロナデで調整し、天井部内面はこれに不整方向のナデを加えて仕上げる。須恵器皿C(同15)は、口唇端部に水平な面を作り、器面は内外ともロクロナデで調整した後、底部外面に一定方向のナデを加えてヘラ切り痕を消している。平城宮Ⅱ～Ⅳ期に相当するものか。

4. ま と め

今回の調査成果をまとめると、以下の諸点に要約できる。

①燈籠寺遺跡が位置する尾根状地形のうち、その上面に平坦面が広がって遺構の分布に適した範囲をみると、平面的にみた場合、北に向かうほど急激に幅が狭くなる長三角形状を呈するが、詳細に見ると、この台地性丘陵の中ほどで東西に小規模な谷が入り、この部分で大きくくびれた地形となる。今回の調査区のうちB地区は、この狭くなる尾根のくびれ部に近いため、遺構・遺物が検出されなかったのはある意味で当然といえる。一方、この南約70mに位置するA地区は、尾根が大きく広がる地点であるため、ここでは遺構密度も高かった。ところが、A地区の東に接する地点は、現在木津高校の運動場などの体育関連施設として利用されているが、広い尾根の平坦部にもかかわらず、過去の調査ではほとんど遺構は検出されていない。これは、戦後まもなくこの地区に大規模な造成工事が施工され、過去の遺構面が削平されたことによるため、元来はこの地区にも遺構の広がりが見られたことであろう。したがって、尾根くびれ部以南では、旧管理棟用地であった今回の調査区を境にして、これから西方に遺構面が残されているようである。

②検出した2基の古墳は、西方で昭和56年度に検出していた内田山A-2号墳とともに、一辺9.5～17.0mの規模の小規模な方墳(小方墳)である。そして、いずれも本体が小規模なため、本来は低墳丘であったことが想定される。そのため、若干の盛り土によって築かれたマウンド部が容易に削平され、現地表面上にその姿を留めない、いわゆる埋没古墳の特質が指摘できる。一般にこの種の小方墳は、複数群在することが普通である。今回も限られた範囲ではあるが、その群在性が明らかとなった。そのため、未掘部分や削平によって遺構面がすでに失われていると推定した今回の調査区の東方地区に、さらに多くの古墳が存在することが推定できる。ところで、今回までに確認した3基の小方墳は、いずれもその周溝内から多量の埴輪資料が出土しており、埴輪が墳丘内に樹立されていたことが想定できる。そして、これらの埴輪のもつ年代観(川西編年の第Ⅲ期)から、5世紀前半代に相次いで築造されたことが判明する。また、これらの古墳は、その主軸を北に対してやや東

に振って、ほぼ方位をそろえる。墓域の占地状態を平面的にみた場合、方眼状に割り付けられた築造計画線が存在し、そこに一定の築造企画の存在が認められる。このように、小方墳が基盤目状に配列する形態は、たとえば京都府城陽市正道遺跡などが顕著な例で、ここでは、より上位の規模の大きな古墳(円墳である場合が多い)に従属する形態を採らず、小方墳のみで古墳群を構成している。したがって、このような存在形態を採る以上、燈籠寺遺跡では規模や構造上、小方墳に傑出した内容の古墳が存在する可能性は低いと考える。

③埴輪棺は、燈籠寺遺跡では初の検出となる。今回確認されたような樹立用埴輪の転用棺は、一般に埴輪を備える古墳の近くにあつて、その周辺域に営まれる場合が通例であり、この遺跡の小方墳のすべてに埴輪の存在が認められる以上、遺跡内でさらに埴輪棺が発見される可能性は高い。

④弥生時代の遺構として、方形周溝墓と掘立柱建物跡・焼土坑などを検出したが、周溝墓と焼土坑が出土遺物から弥生中期前半(畿内第三様式)に属するのに対し、建物跡の時期は遺物からは特定できない。ただ、本調査区の南に位置する平成3年度調査地点で、方形周溝墓にやや先行する竪穴式住居跡の痕跡を確認しており、今回の掘立柱建物跡が、その建物跡の形式などからも、これと並行する時期の高床式倉庫の可能性が指摘できる。そうであれば、この遺跡内の弥生時代の遺構は、弥生中期に限られた期間内で、しかも、居住域から墓域へと比較的短期間のうちに変遷したと捉えることができる。ところで、今回検出されたものも含め、これまでこの遺跡で確認された3基の方形周溝墓のうち全容が明らかかな2基は、ともに方台部の主軸を古墳の墳丘主軸に対して約45°斜交させるかたちをとるが、周溝墓同士では方位をそろえている。その意味で先の小方墳と同様に、方形周溝墓を造るときも一定の築造企画の存在を認めることができる。

⑤奈良時代の遺構に関しては、遺跡の広い範囲にわたって遺物が出土することや、遺跡が立地する歴史・地理的環境が良好なことから、以前からその存在が指摘されていた。今回の調査によっても明確な遺構こそ確認されなかったが、一辺1.0m内外の規模を有するピット状土坑はこの時期の掘立柱建物の柱穴にふさわしいもので、より広範な調査によって、建物として復原できる可能性がある。これらは、今後さらに当該期の遺構が検出される可能性を示唆する意味で貴重な発見と言えよう。

(伊賀高弘)

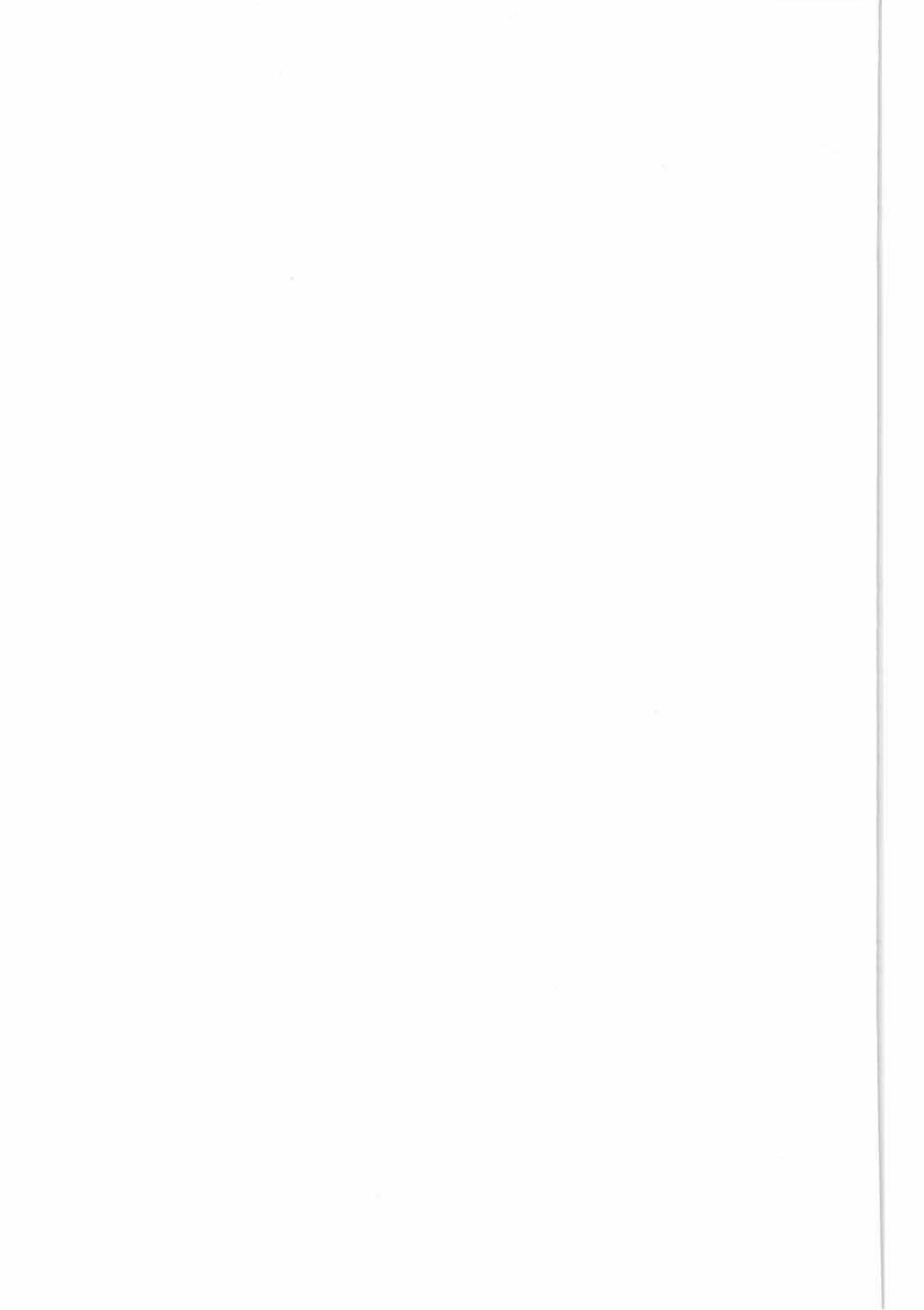
注1 石井清司・小池 寛「燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注2 調査参加者(敬称略)

五百磐頭一・日下降春・林 恵子・菱田直実

図

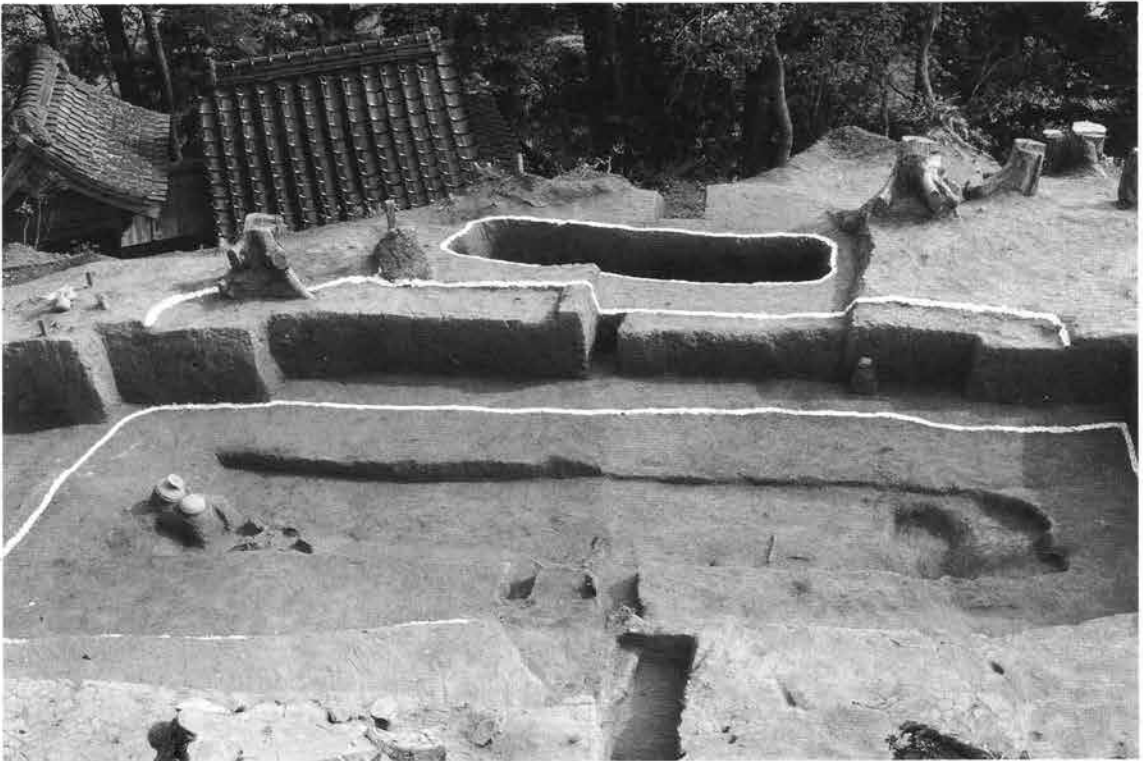
版



図版第1 嗎岡南古墳



(1) 調査地全景 (古墳は地山面まで掘削)



(2) 嗎岡南古墳主体部配列状況 (北東から)



(1) 陥穴6検出状況



(2) 陥穴3検出状況



3



1



5



4



2



6



11



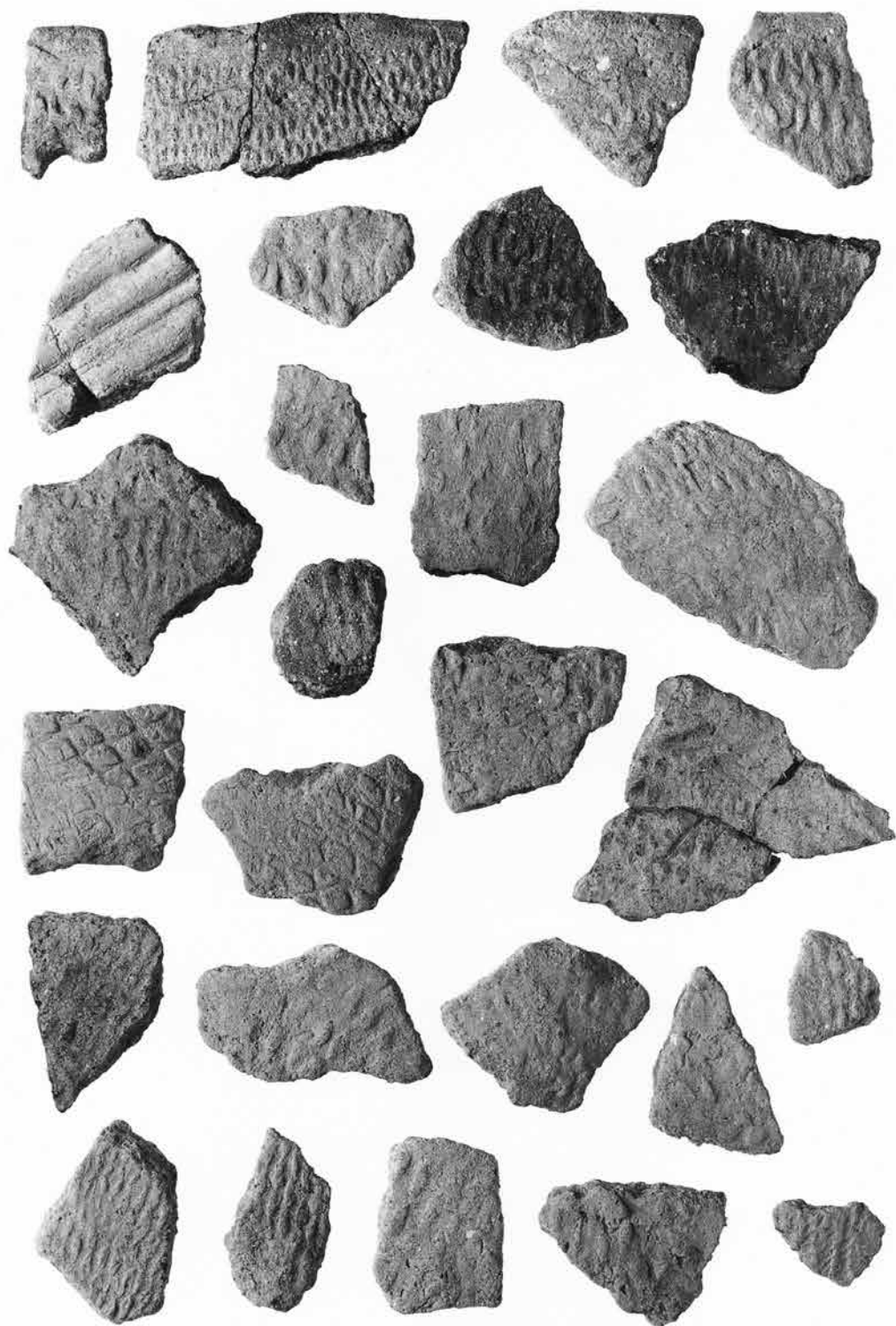
13

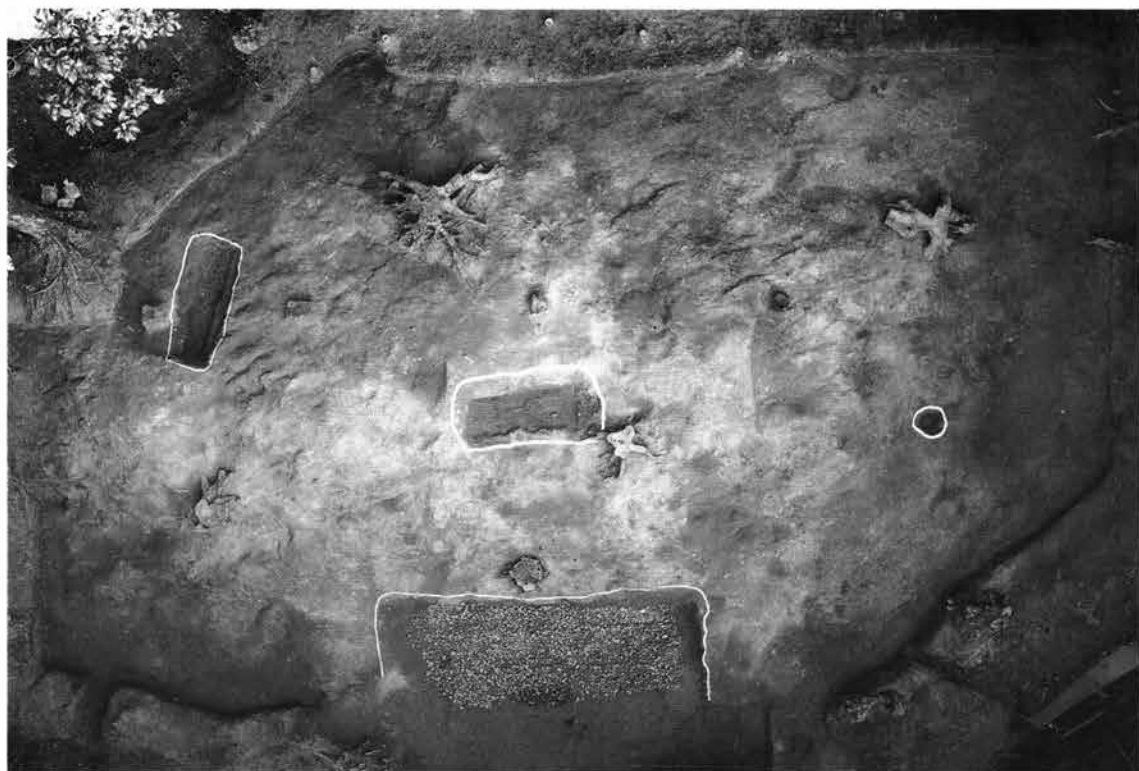


12



嗎岡南古墳出土遺物2 (番号は第7図と対応)





(1) 白米山北古墳全景



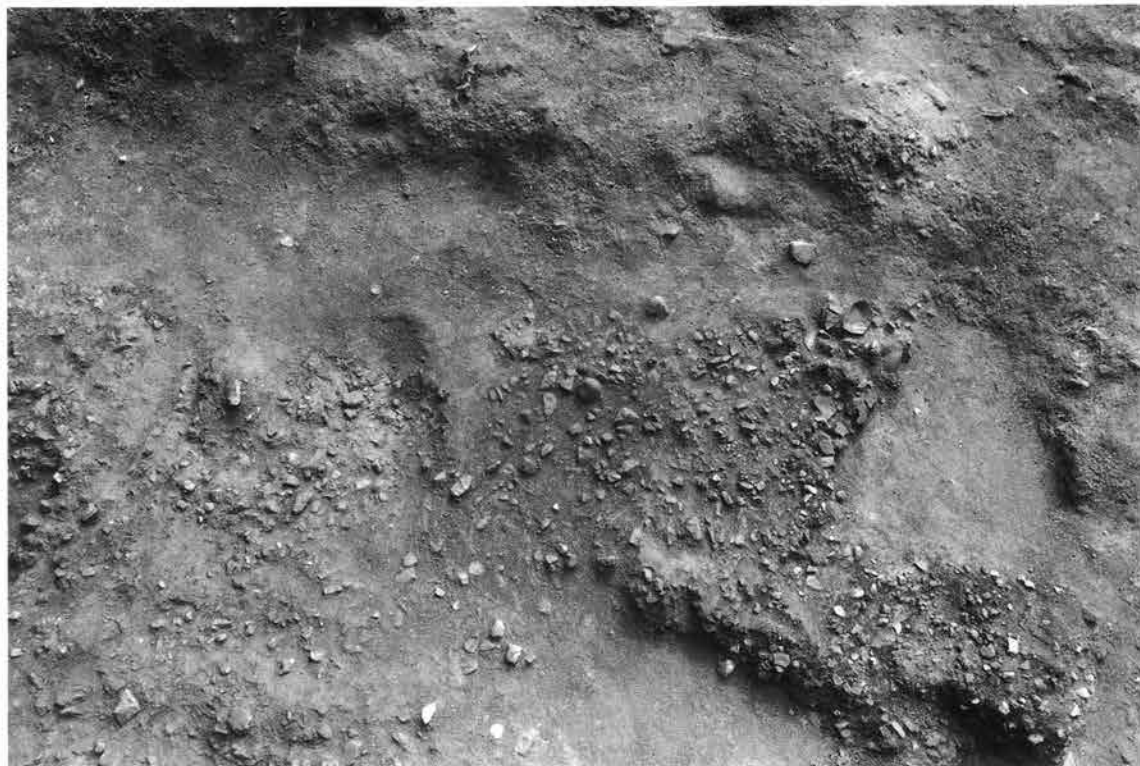
(2) 白米山北古墳第1主体部（北西から）



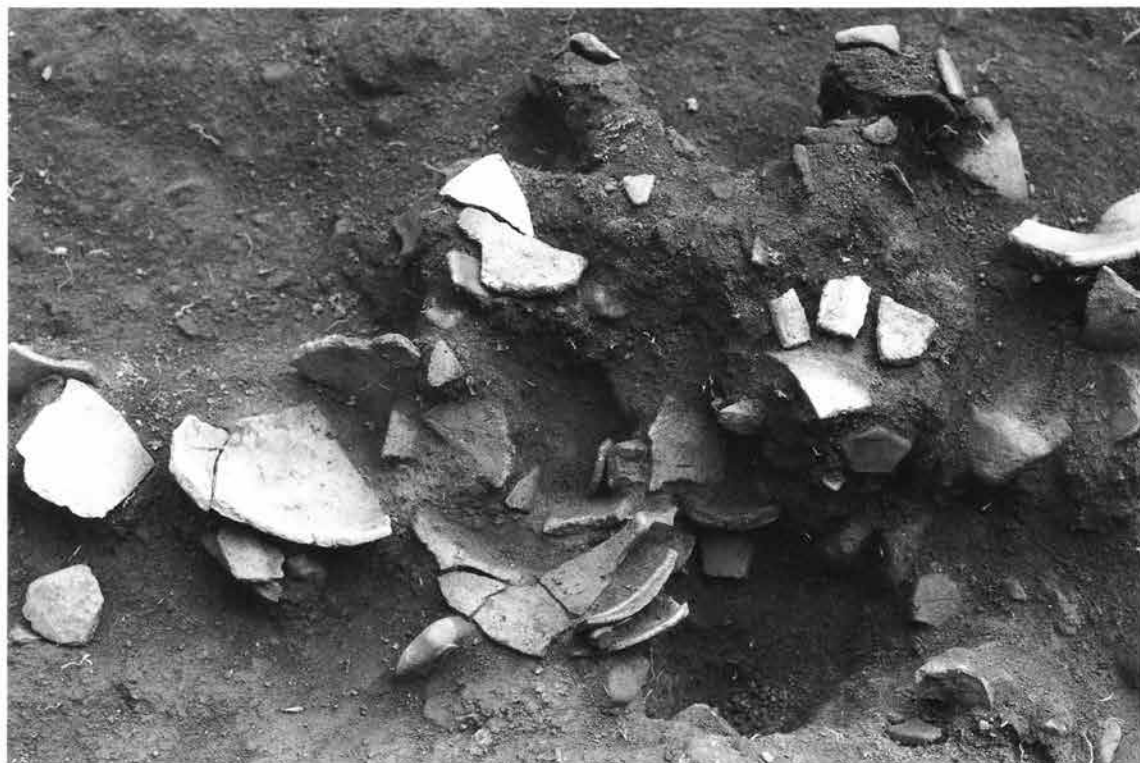
(1) 白米山北古墳第2主体部 (南西から)



(2) 白米山北古墳第3主体部 (西から)



(1) 白米山北古墳礫敷遺構全景（北西から）



(2) 礫敷遺構内の土器出土状況



白米山北古墳出土遺物1 (番号は第20・21図と対応)



2



3



4



5



白米山北古墳出土遺物2 (1: 円形浮文の拡大 2: 鉄剣 3: 剣の裏面
4: 鉄鎌 5: 鎌の裏面 6: 剣身に付着した布痕)



(1) 堀坂神社古墳群遠景（南東から）



(2) 堀坂神社2号墳近景（北東から）



(1) 堀坂神社1号墳近景 (南東から)



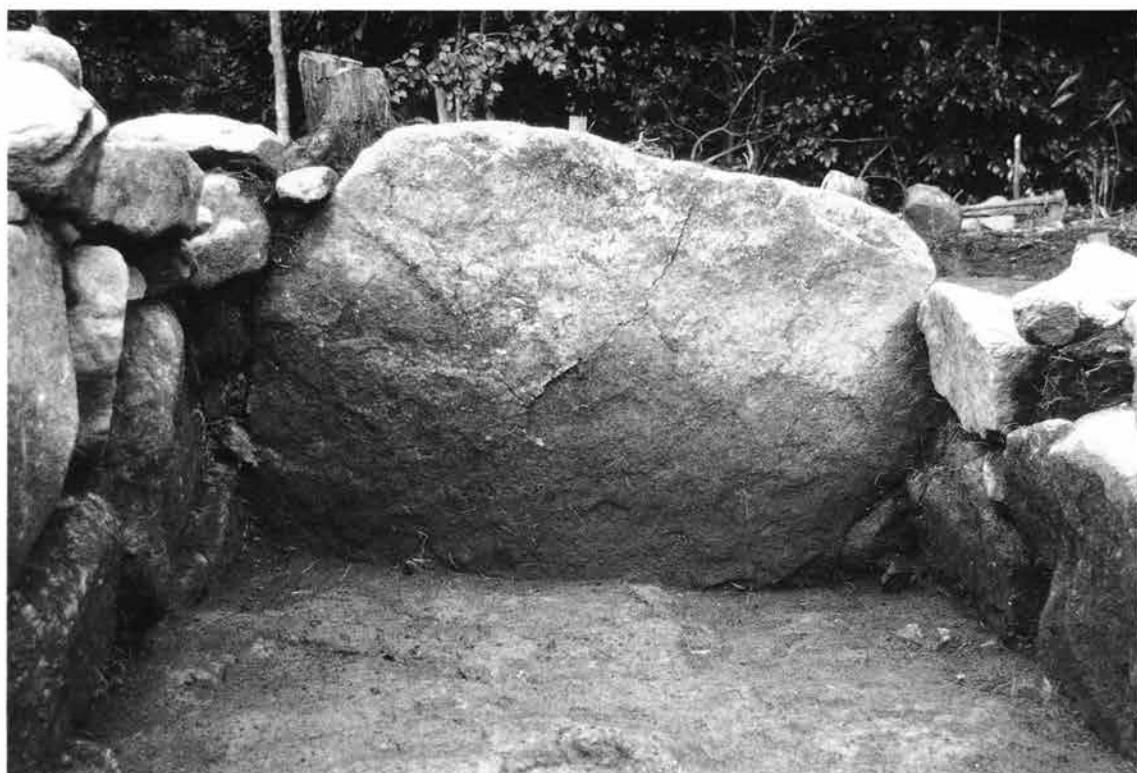
(2) 堀坂神社1号墳近景 (南東から)



(1) 堀坂神社2号墳近景（南東から）



(2) 堀坂神社2号墳近景（北東から）



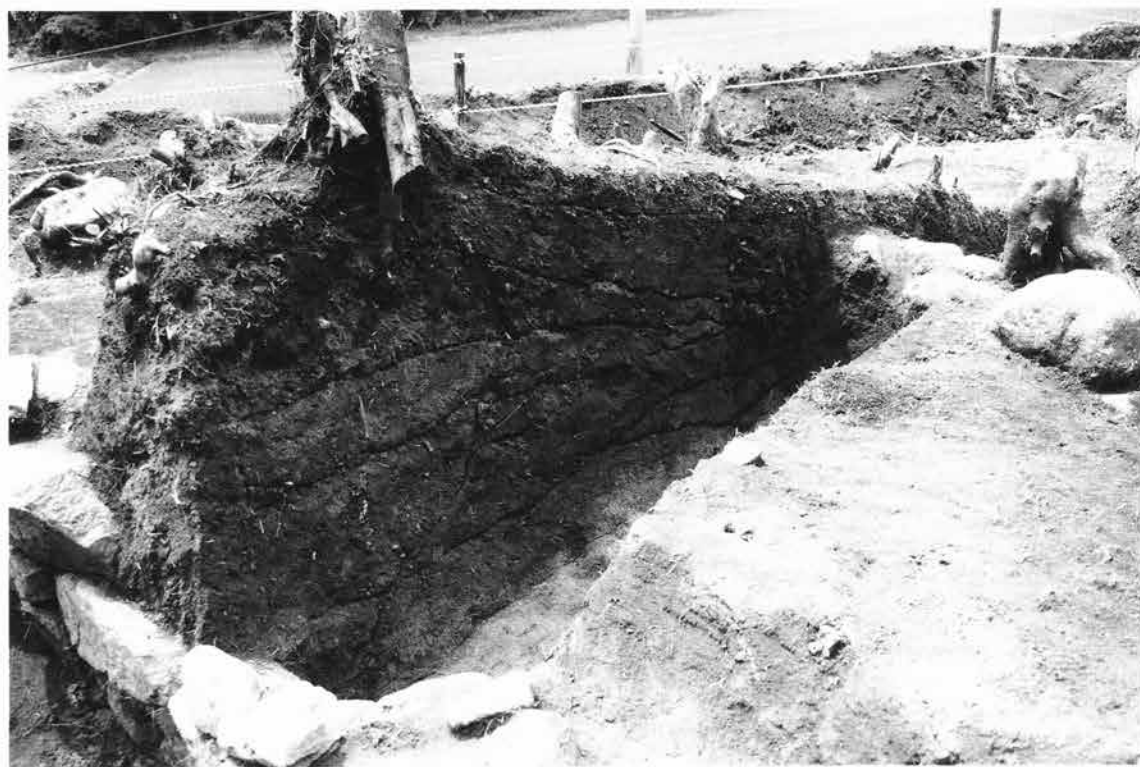
(1) 堀坂神社2号墳奥壁近景（南東から）



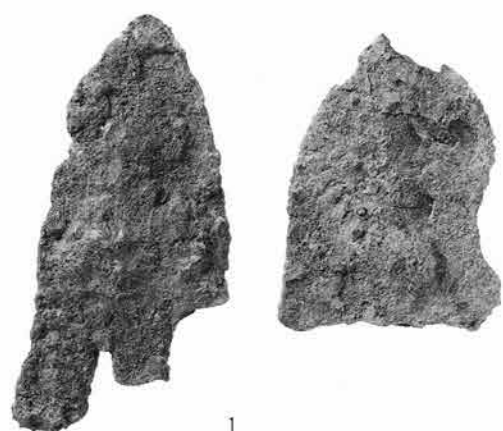
(2) 堀坂神社2号墳側壁近景（東から）



(1) 堀坂神社 2号墳閉塞石検出状況（北西から）



(2) 堀坂神社 2号墳墳丘断面（北から）



1

2



3



4



5



6



7



8



9



10

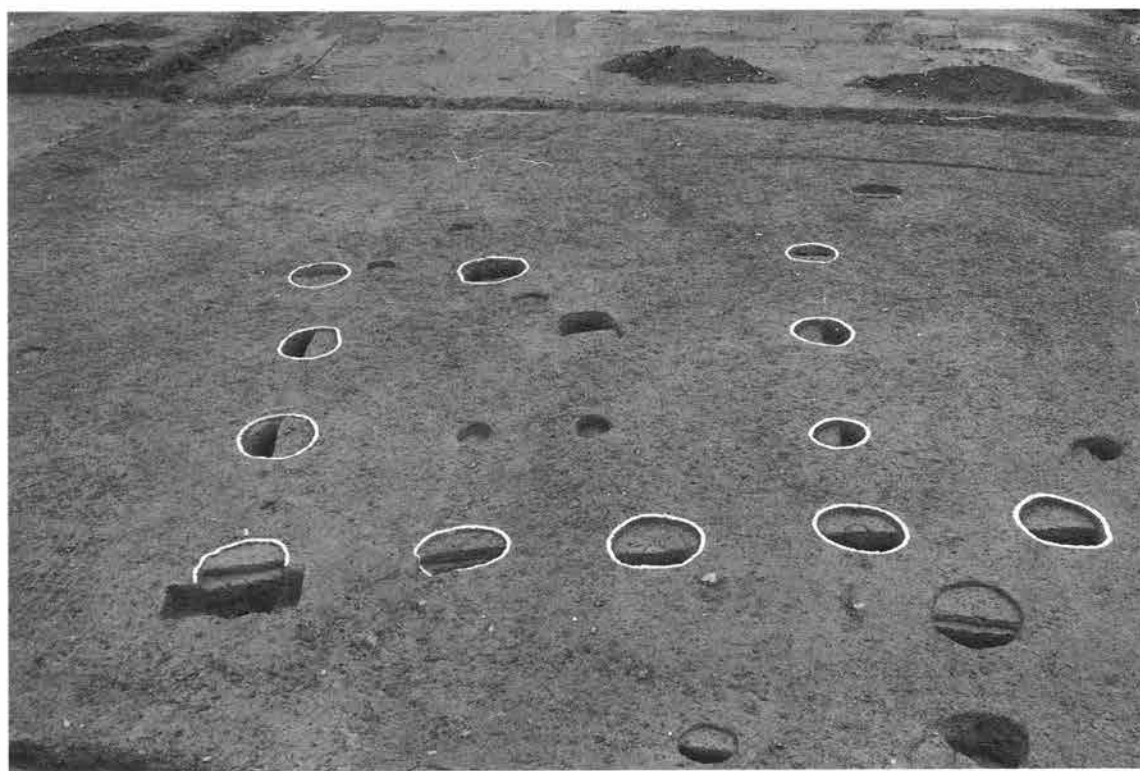


11

出土遺物 (1・2・7：石室内出土、10：周溝内出土、3～6・8・9・11：長野区保管遺物)



(1) 調査地近景 (南から)



(2) 柱穴検出状況 (北から)



(1) 柱根検出状況 (柱穴 5)



(2) 柱穴断面 (柱穴 6)



(3) 柱穴断面 (柱穴 8)



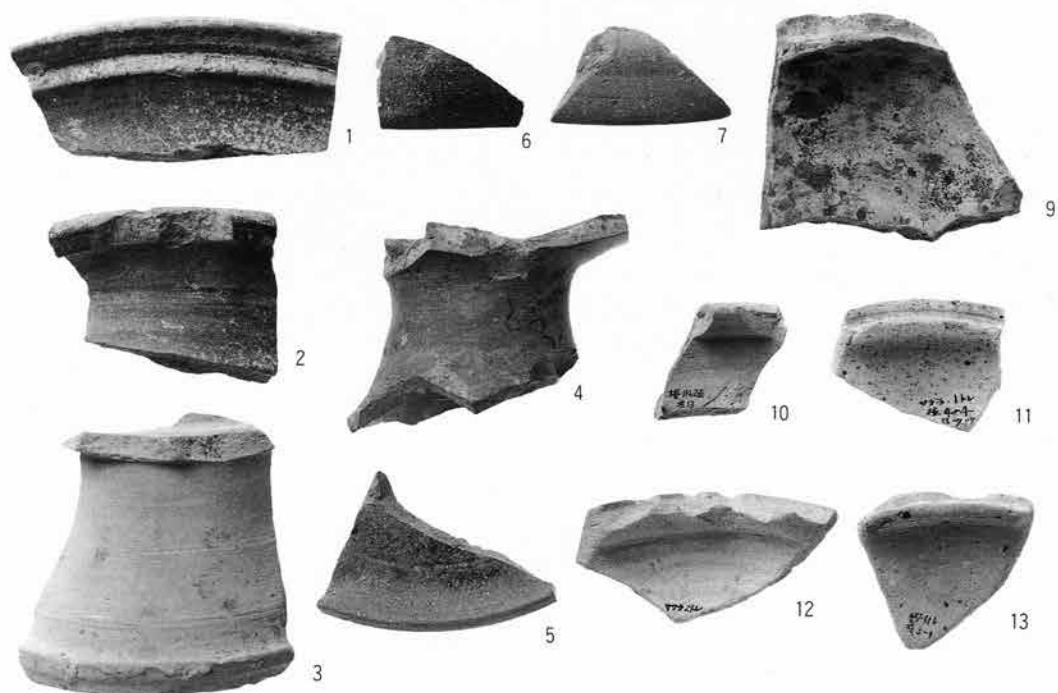
(1) 第1トレンチ



(2) 第1トレンチ近景 (北から)



(1) 第2トレンチ近景(東から)



(2) 出土遺物

図版第21 穴川遺跡



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 2トレンチ全景（東から）

図版第22 穴川遺跡



(1) 6トレンチ全景 (東から)



(2) 8トレンチ全景 (東から)

図版第23 長岡京跡左京第286次（京都工区）



(1) 京都工区B-2地区全景（北東から）



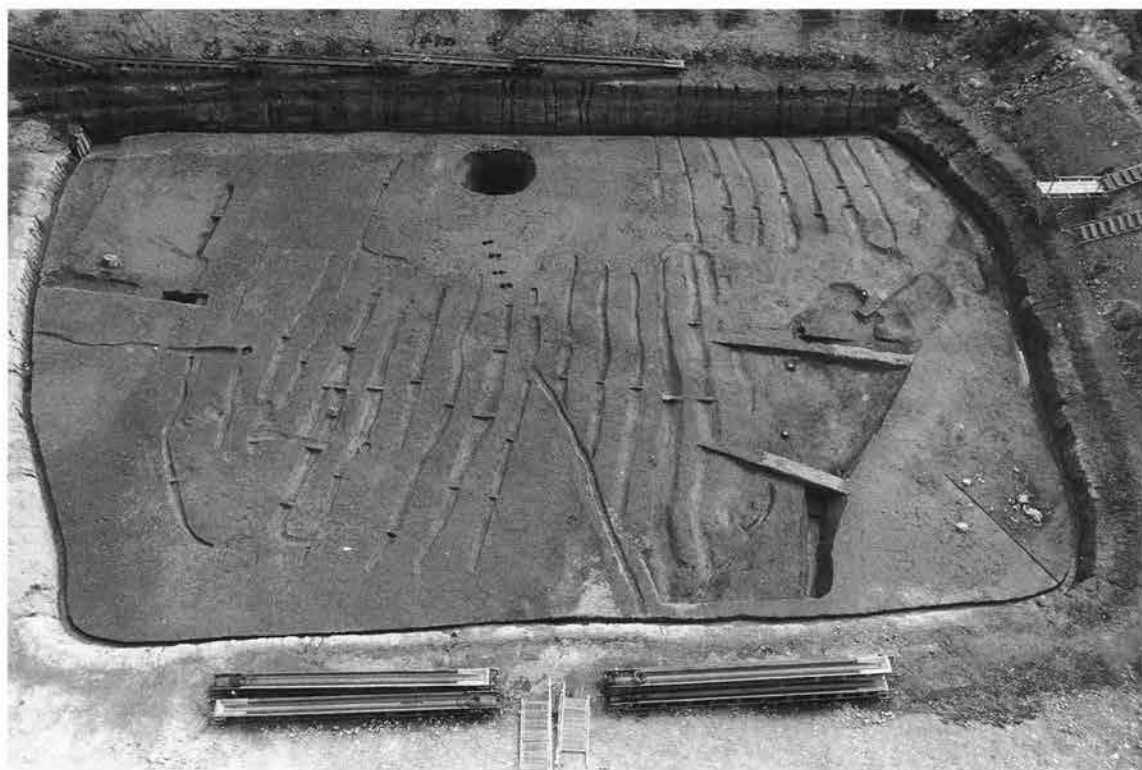
(2) 京都工区C-2地区全景（北東から）



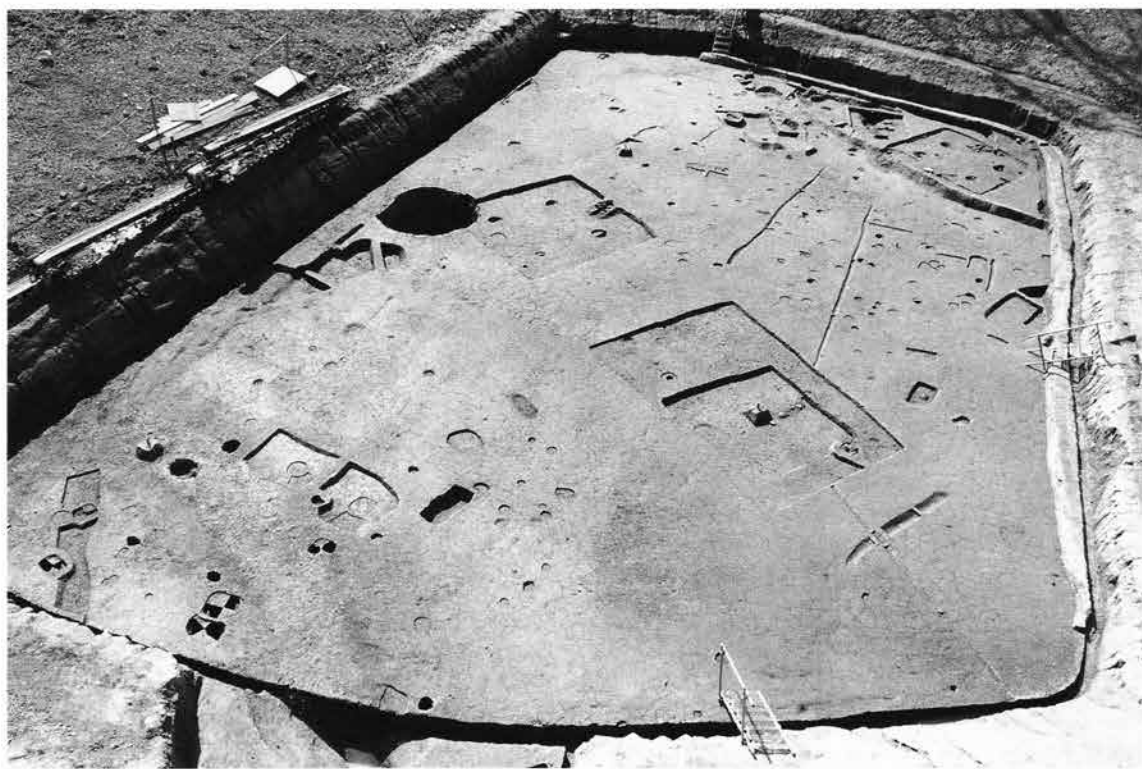
(1) A地区中・近世遺構面（西から）



(2) A地区奈良・平安時代遺構面（西から）



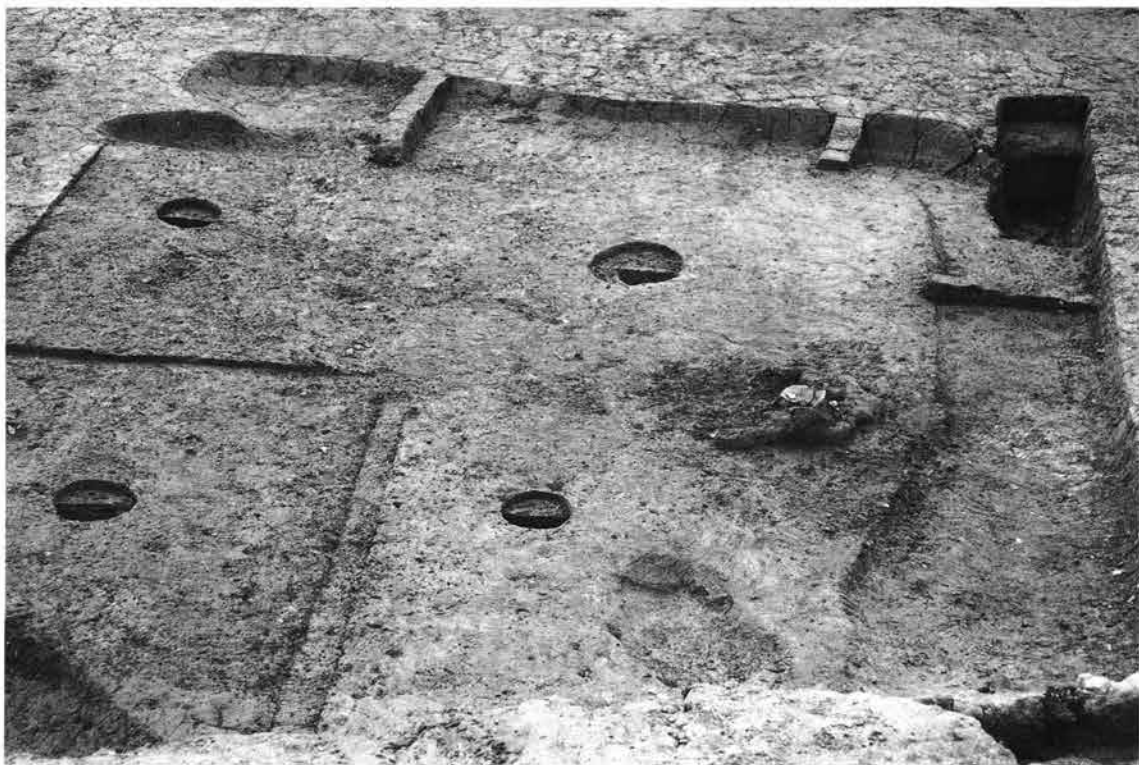
(1) A地区古墳時代Ⅰ期遺構面（北から）



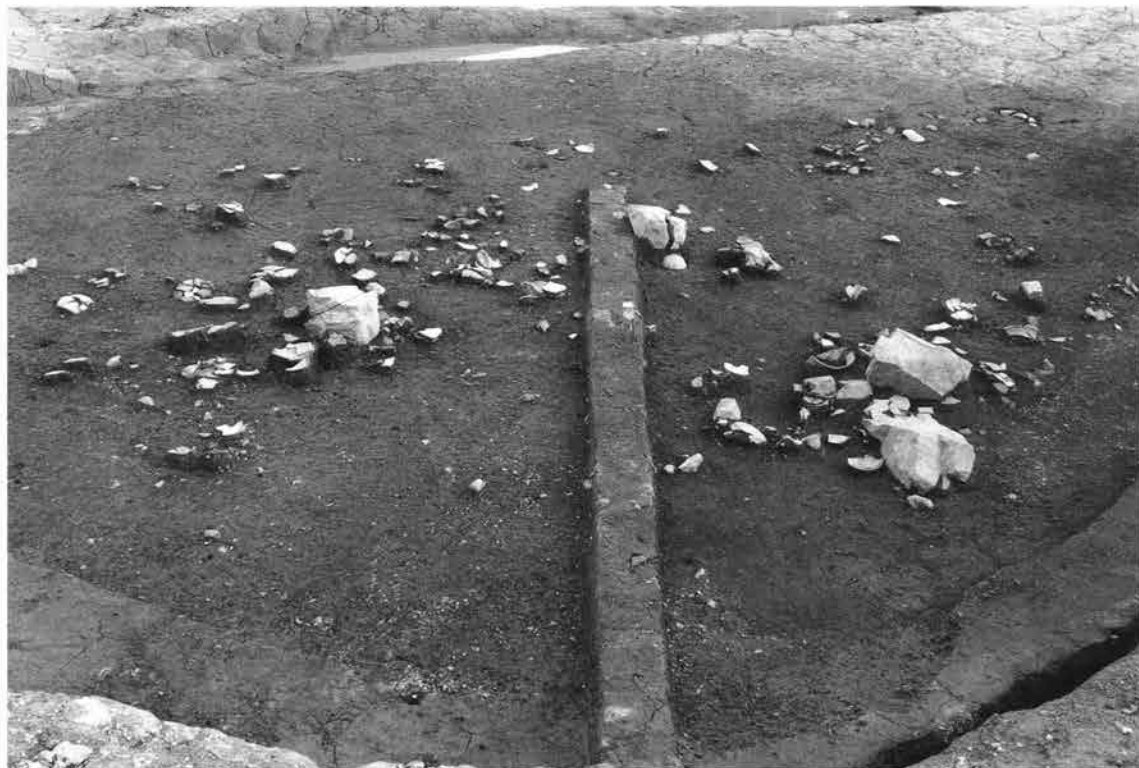
(2) A地区古墳時代Ⅱ期遺構面（東から）



(1) A地区SH395338（東から）



(2) A地区SH395336（東から）



(1) A地区SH395407上層（北西から）



(2) A地区SH395407・SX395411（北西から）



(1) A地区SH395407（東から）



(2) A地区SH395405・SH395433・SB395451・SK395504（南から）



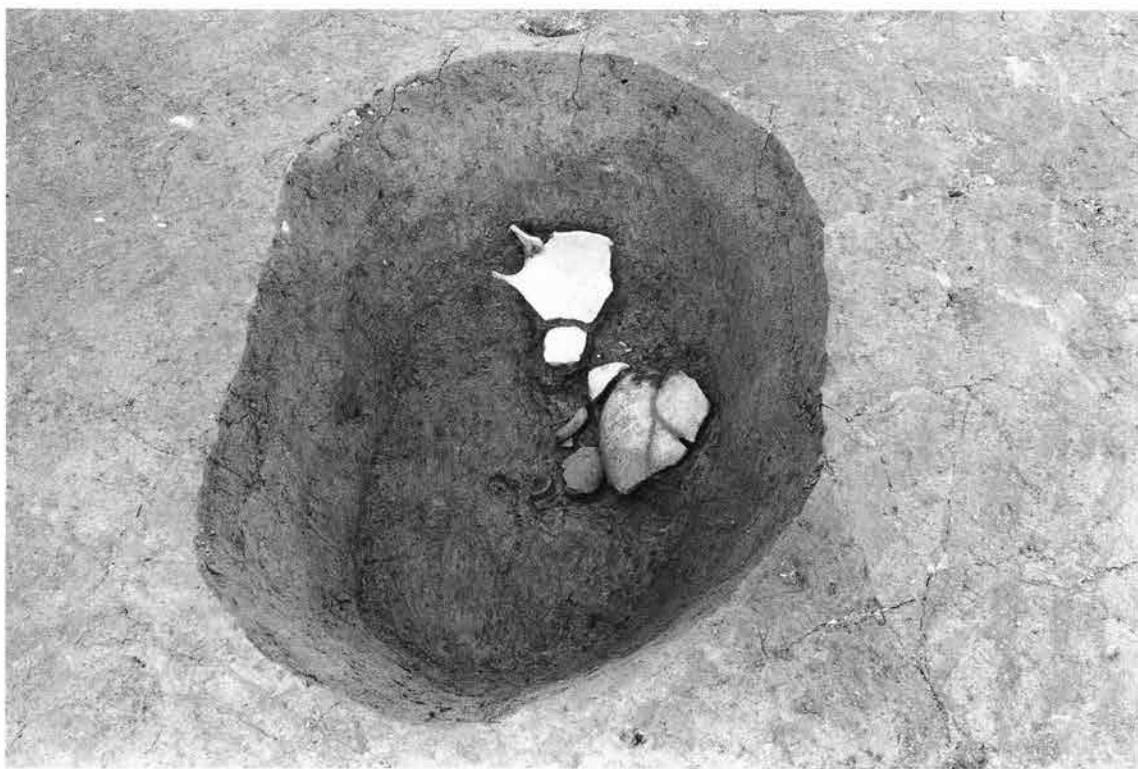
(1) A地区SH395401炭化物出土状況（南から）



(2) A地区SH395401・SK395502（東から）



(1) A地区SD395501（南から）



(2) A地区SD395501北側拡大（南から）



第47図9



第48図1



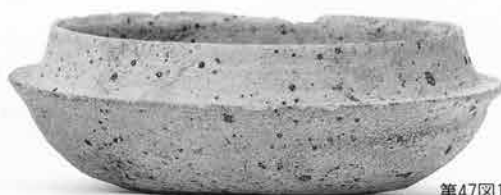
第47図3



a



第47図16



第47図17



b

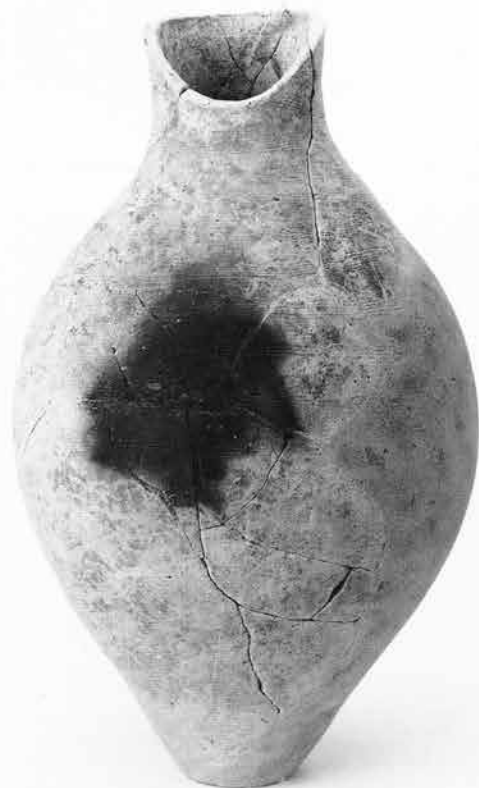


c

A地区出土遺物(1) a～c : SH395407、SX395411検出面出土



第48図4



第50図2



第49図7



第49図2



第50図4



(1) B地区全景（西から）



(2) B地区全景（東から）



(1) B地区掘立柱建物跡SB368107・SB368108・SB368105（南から）



(2) B地区井戸跡S E 368106（西から）



(1) B地区竪穴式住居跡SH368118（南から）



(2) B地区土器埋納土坑SX368131



第54図-1



第52図-1



第54図-5



第52図-4



第54図-6



第54図-13



第54図-14



第55図-1



第54図-15



第55図-2



第54図-23



第54図-24



第55図-6



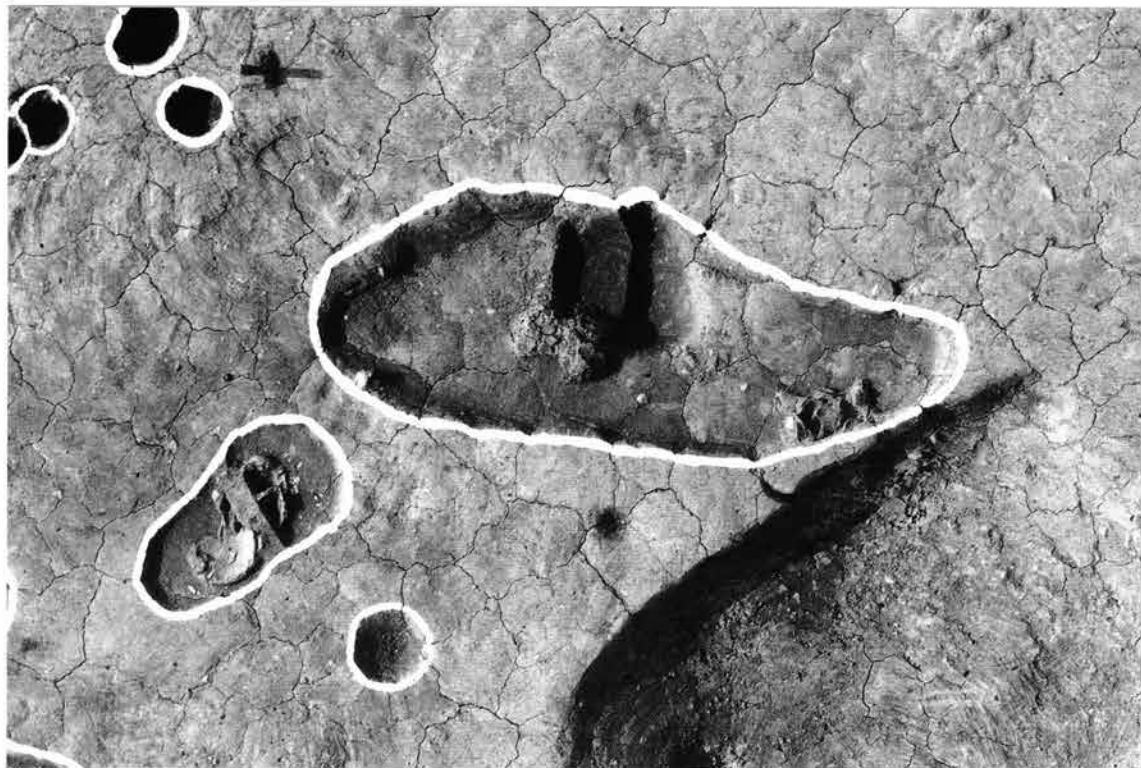
(1) C-1地区西半部全景（東から）



(2) C-1地区SD368242（南から）



(3) C-1地区SH368204（西から）



(1) C-1地区SK368248(左)・SK368226(中央) (南から)



(2) C-1地区SK368226遺物出土状況 (北から)



(3) C-1地区SK368248検出状況 (西から)



1



13



2



11



3



6



10



15



第57図1



第62図12



第62図13



第61図



第63図1



第63図2



第64図3



第63図5



C-2 地区全景（西南西から）



(1) C-2地区SK395602検出状況（南東から）



(2) C-2地区SH395685検出状況（南南西から）



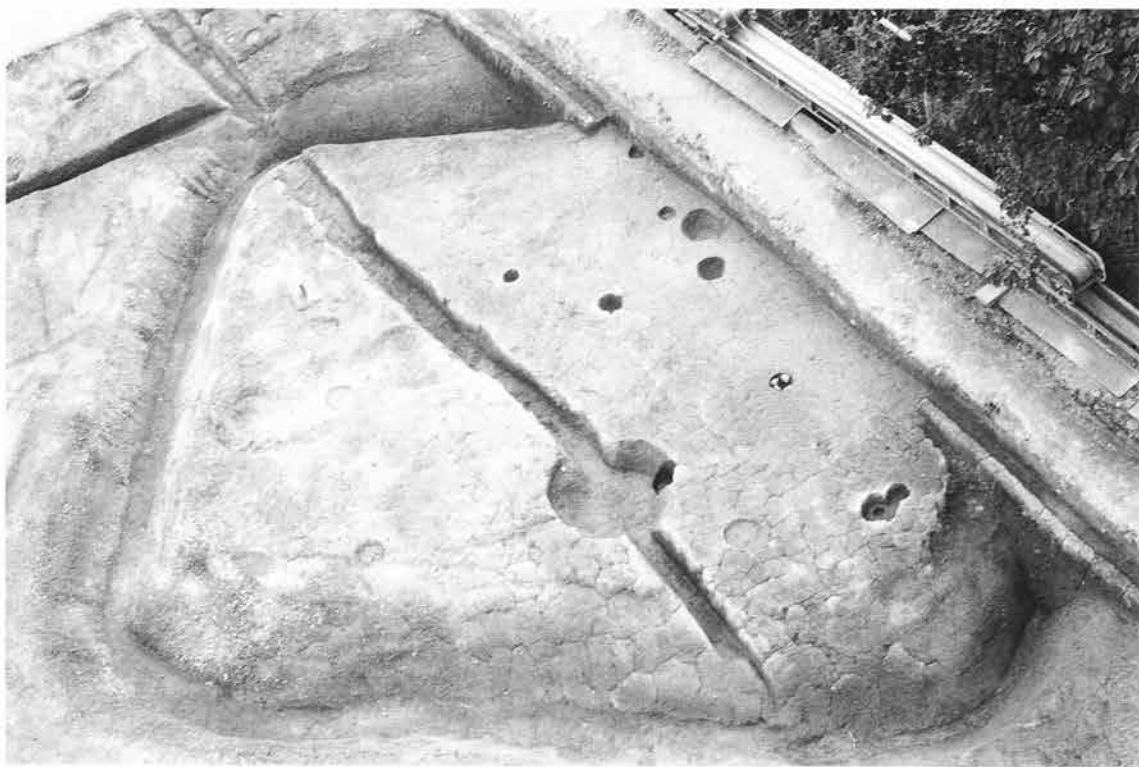
(1) C-2地区SH395677遺物出土状況（北西から）



(2) C-2地区SH395677床面検出状況（北西から）



(1) C-3 地区全景（西から）



(2) C-3 地区古墳SX268301（北西から）



第66図-12



第66図-14



第66図-9



第66図-13



a



(1) C-4 a 地区全景（南から）



(2) C-4 a 地区全景（北東から）



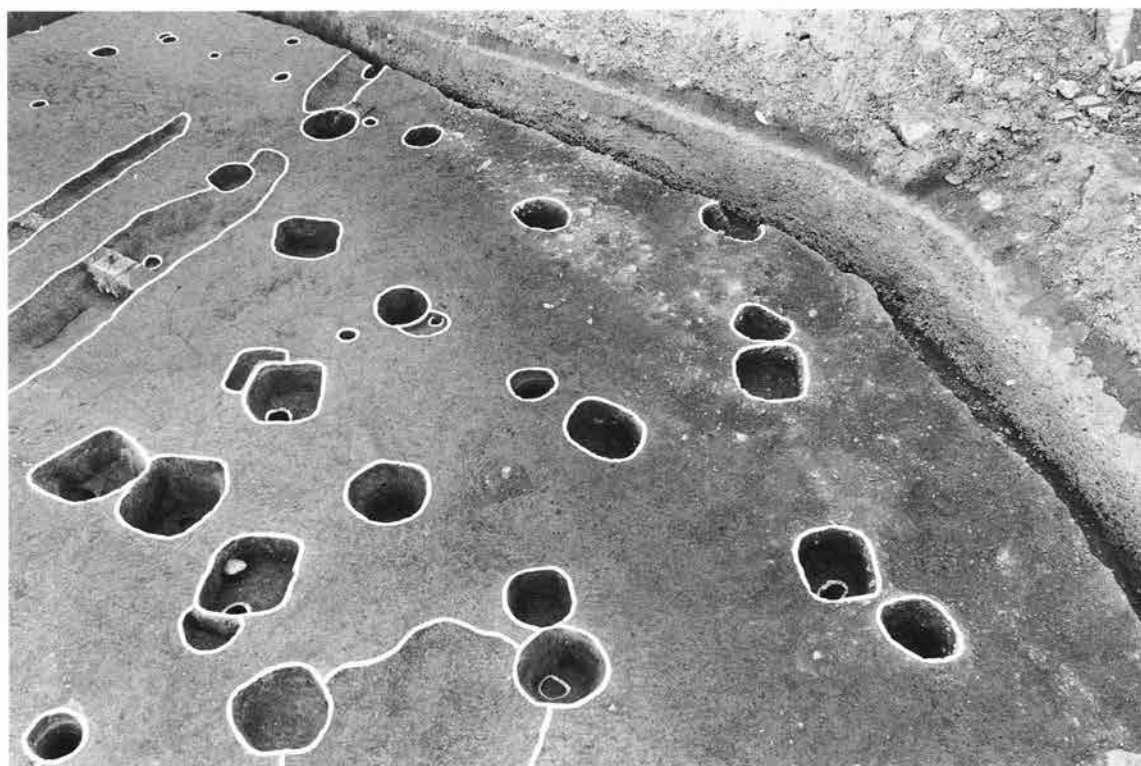
(1) C-4 a 地区SD395702遺物出土状況（北東から）



(2) C-4 a 地区SD395702埋土堆積状況（東南東から）



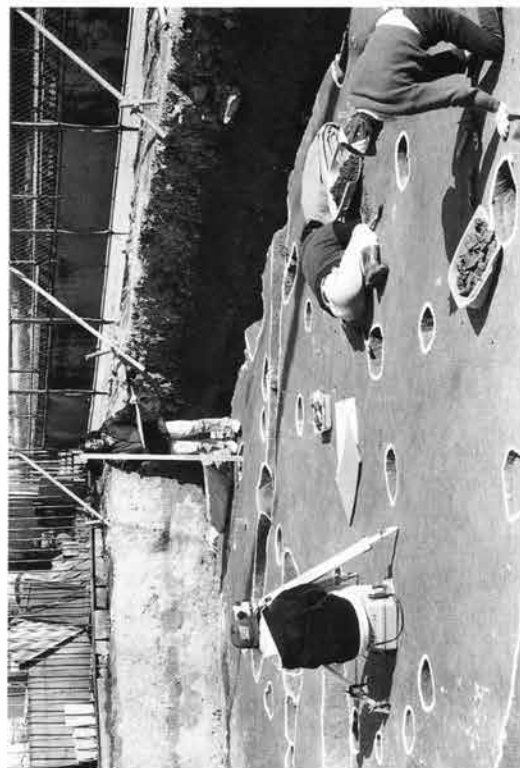
(1) C-4 b地区全景（南西から）



(2) C-4 b地区SB395821（南東から）



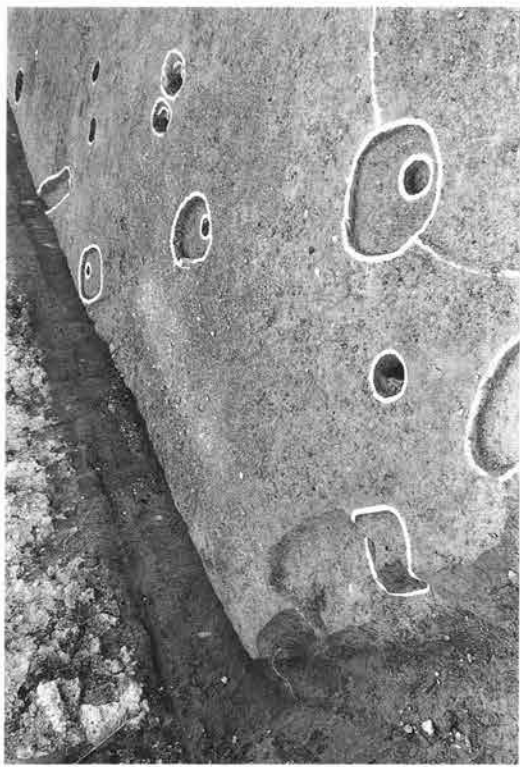
(3) C-4 b 地区SK395801 (南から)



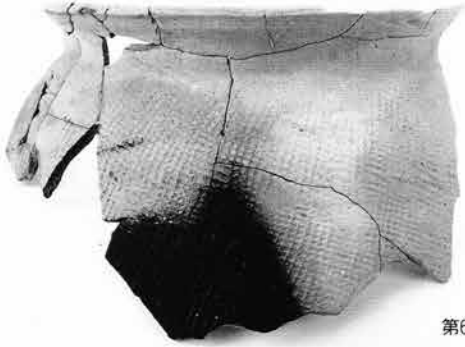
(4) C-4 b 地区調査風景



(1) C-4 b 地区SH395803 (北東から)



(2) C-4 b 地区SB395841 (南東から)



第68図5



第68図7



第68図8



a



第68図9



第69図2



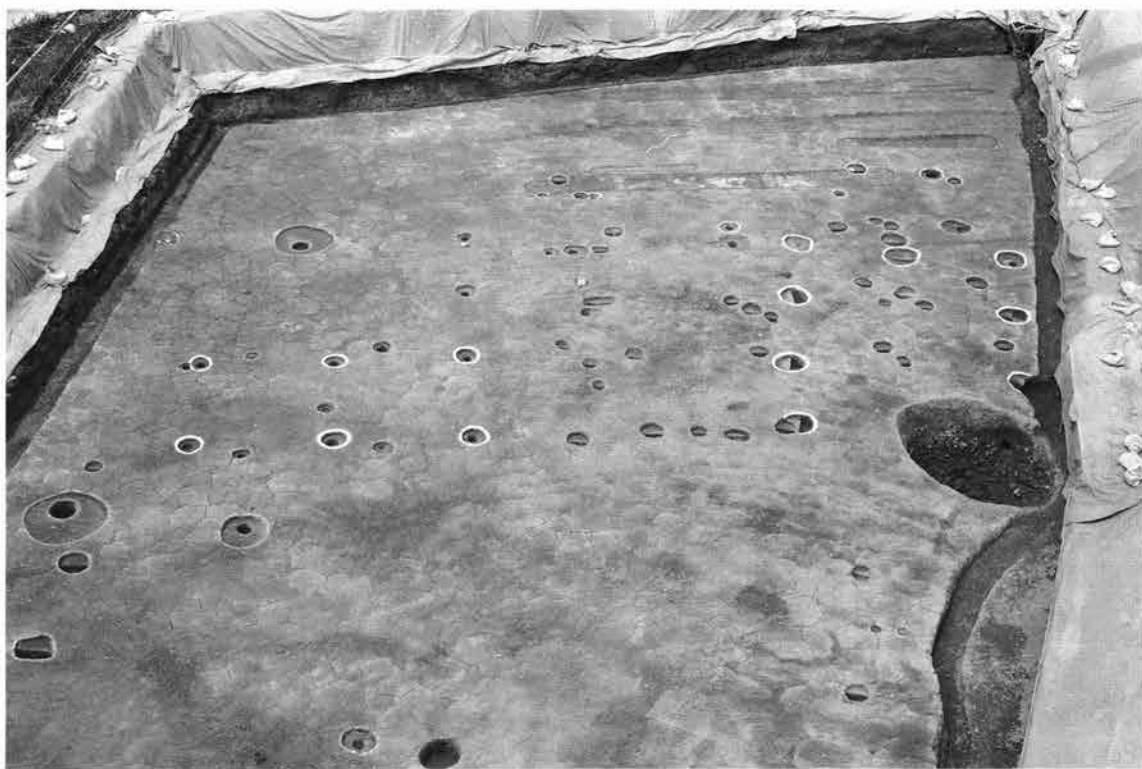
第69図7



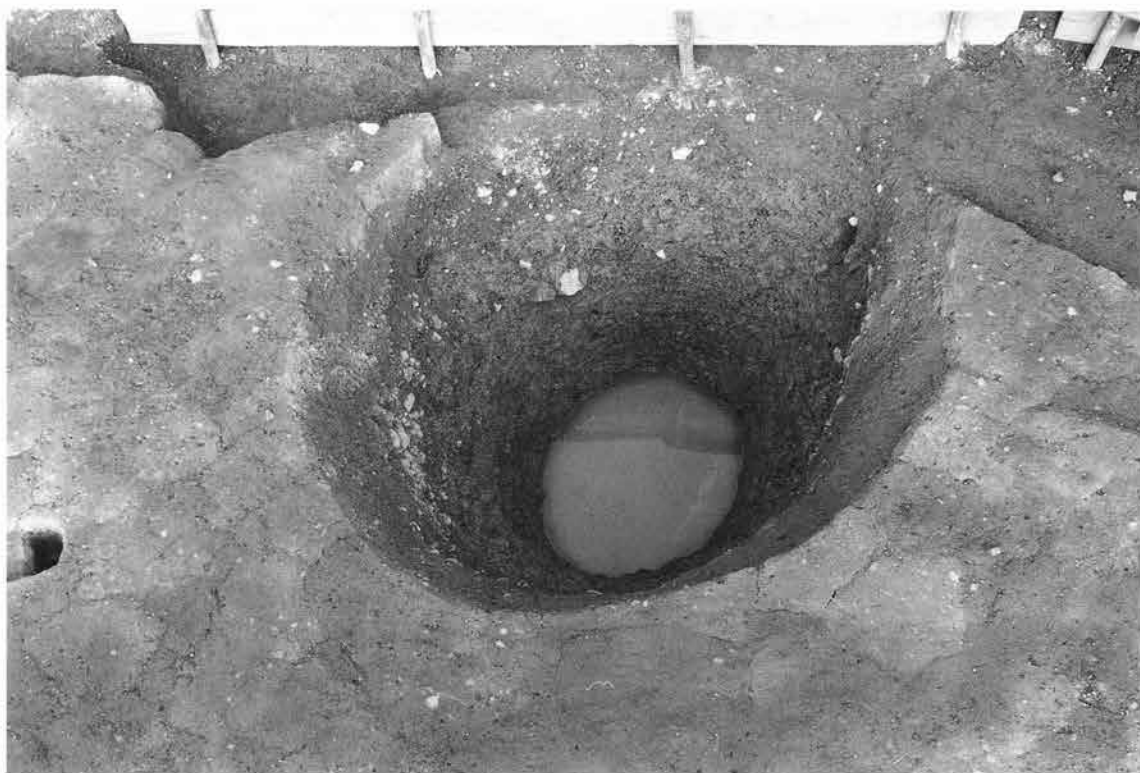
第69図6



(1) C-4 地区調査地全景（東から）



(2) C-4 地区掘立柱建物跡SB39409・10（南から）



(1) C-4地区井戸跡SE39410（西から）



(2) C-4地区埋め甕遺構SK39407（南から）



(1) C-4地区土坑SK39404（東から）



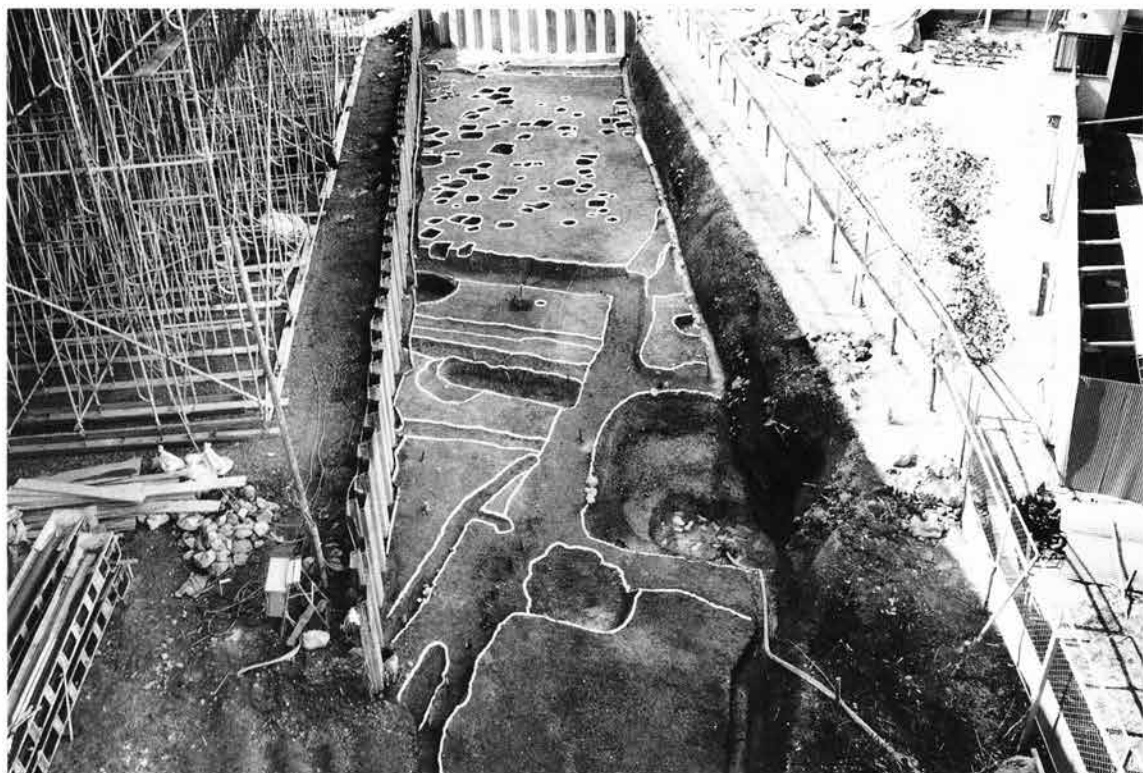
(2) C-4地区土坑SK39404完掘後（南から）



(1) D-3 地区西国街道路面・東側溝SF394103・SD394101（南から）



(2) D-3 地区SX394104（北から）



(1) D-3地区全景（東から）



(2) D-3地区西半検出柱穴群（南東から）



第80図-2



第82図-4



第81図-5



第82図-5



第82図-1



第82図-7



第82図-2



第77図-1



a



b

C-4地区・D-3地区出土遺物

a : D-3地区SX394104内出土、須恵器杯身

b : C-4地区SE394003出土、瓦器碗



第77図-15 第77図-13



第77図-12



第77図-14



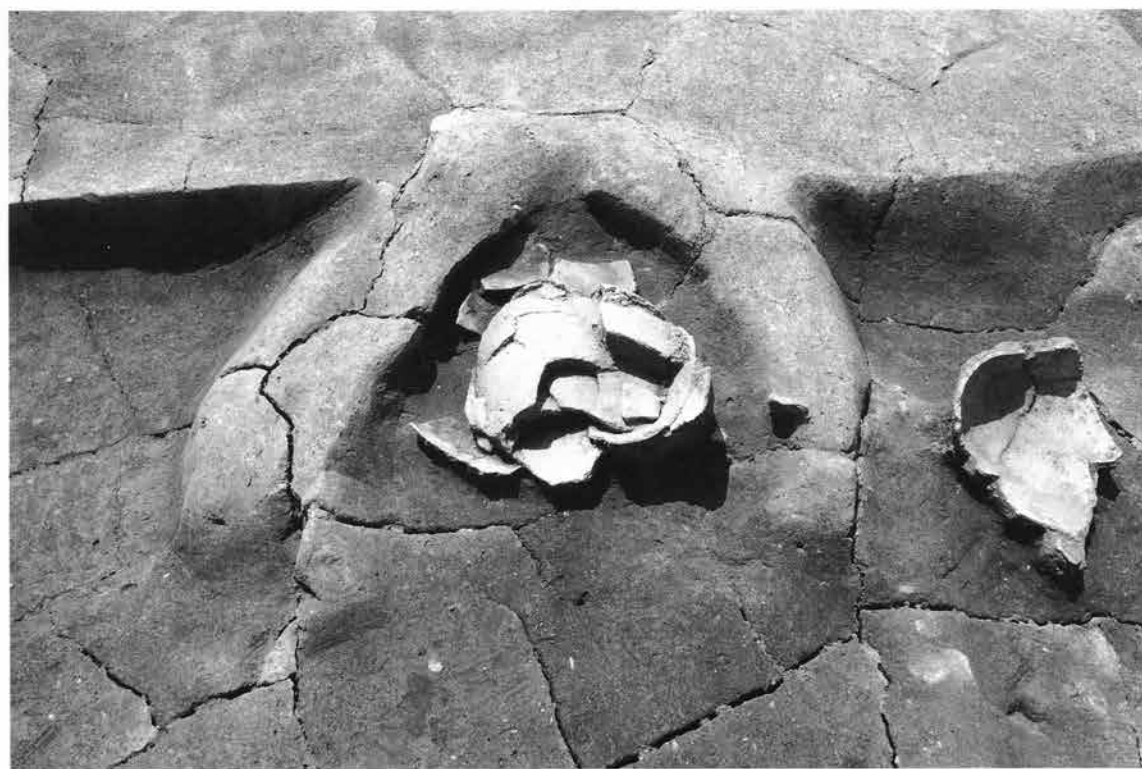
(1) E地区調査地全景（東から）



(2) E地区竖穴式住居跡SH367045（南東から）



(1) E地区竪穴式住居跡SH36747（南から）



(2) E地区竪穴式住居跡SH36747竈（東から）



第85図-3



第86図-14



第85図-4



第86図-17



第85図-6



第85図-10



第85図-12



(1) 若林遺跡全景 (西から)



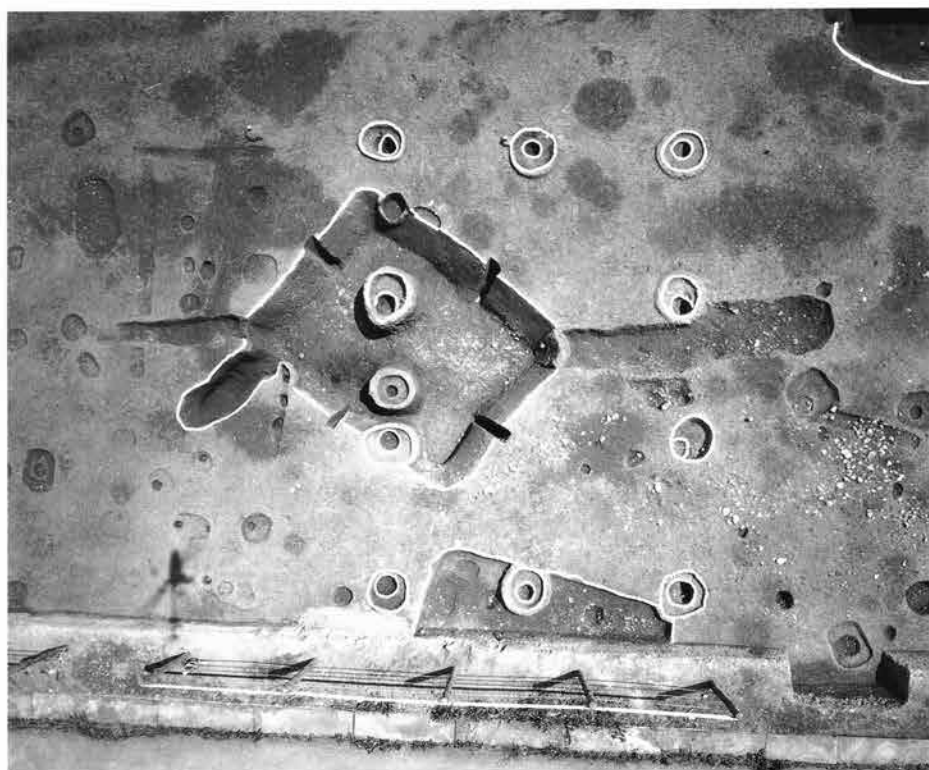
(2) 調査地全景 (北から)



(1) 調査地全景 (上空から)



(2) 調査地全景 (東から)



(1) 掘立柱建物跡1 (上空から)



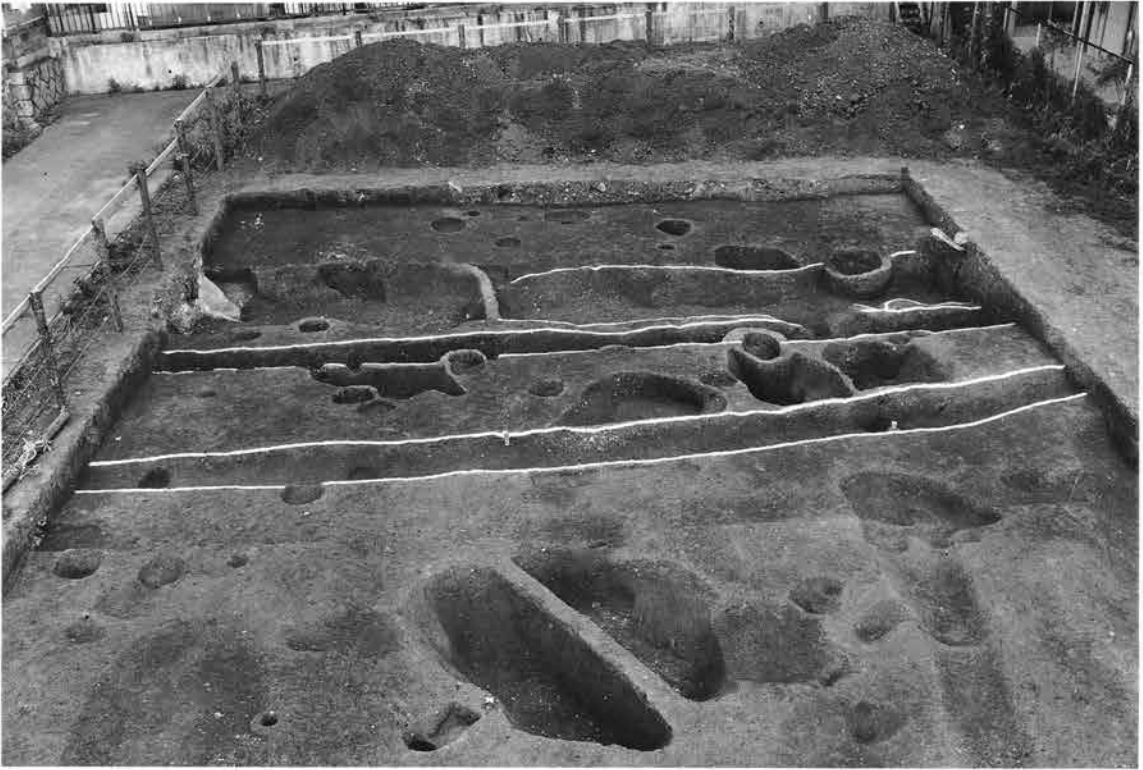
(2) 竪穴式住居跡1 (南から)



(1) 土坑13・14 (南西から)



(2) 土坑15 (北西から)



(1) 溝1～3ほか(東から)



(2) 土坑10(南西から)



1



4



1



2



6



3



6



—



9



(1) 調査地遠景（西から）



(2) 調査地遠景（北から）



(1) A地区空中写真(右が北方向)



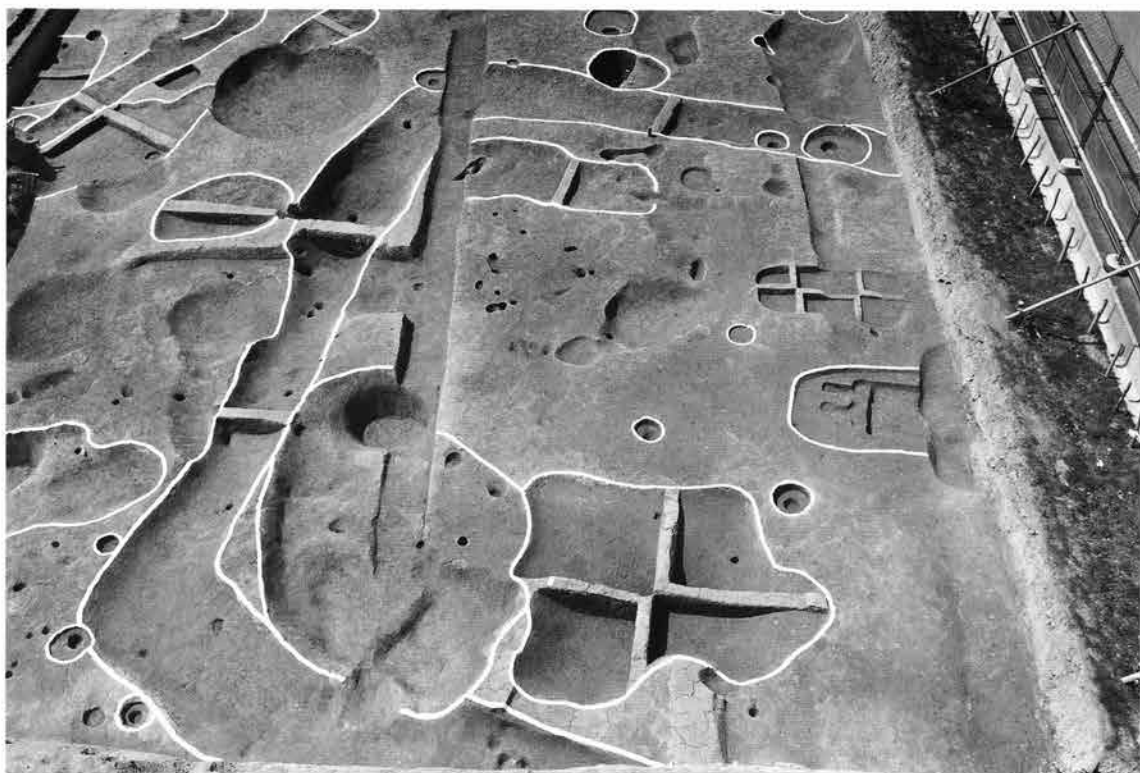
(2) A地区全景(北西から)



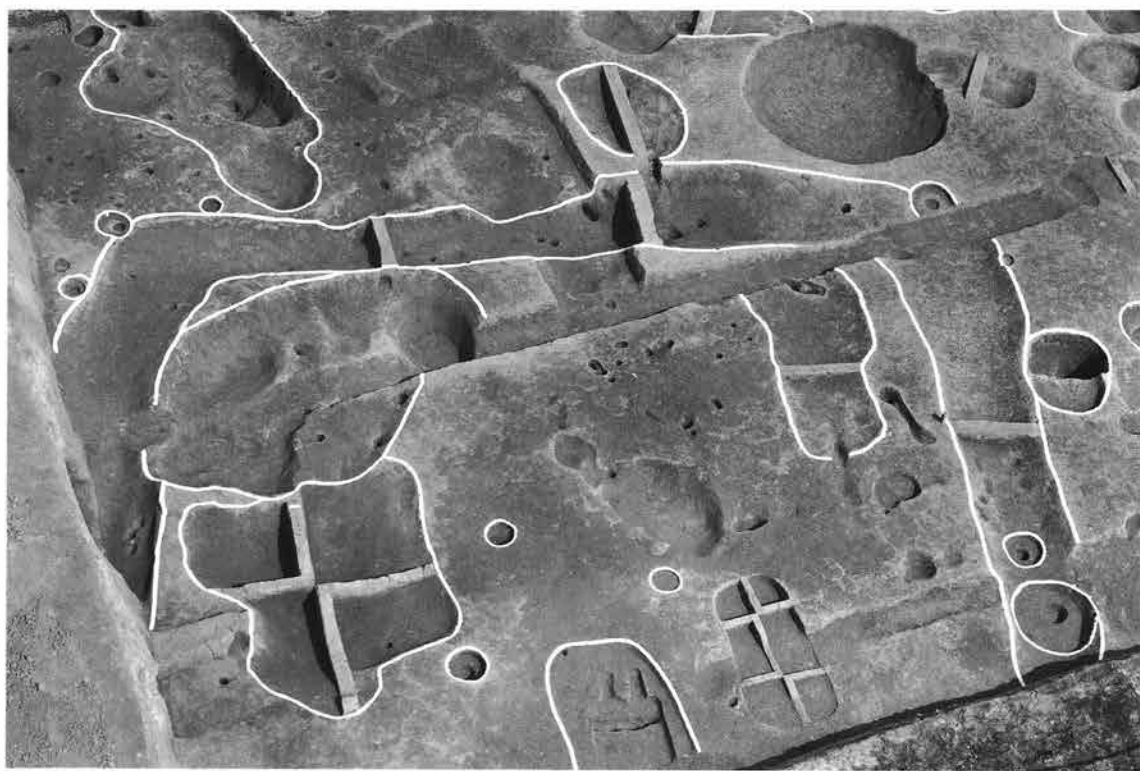
(1) A地区南西部 (SX9301・9304 北から)



(2) A地区SB9305 (北から)



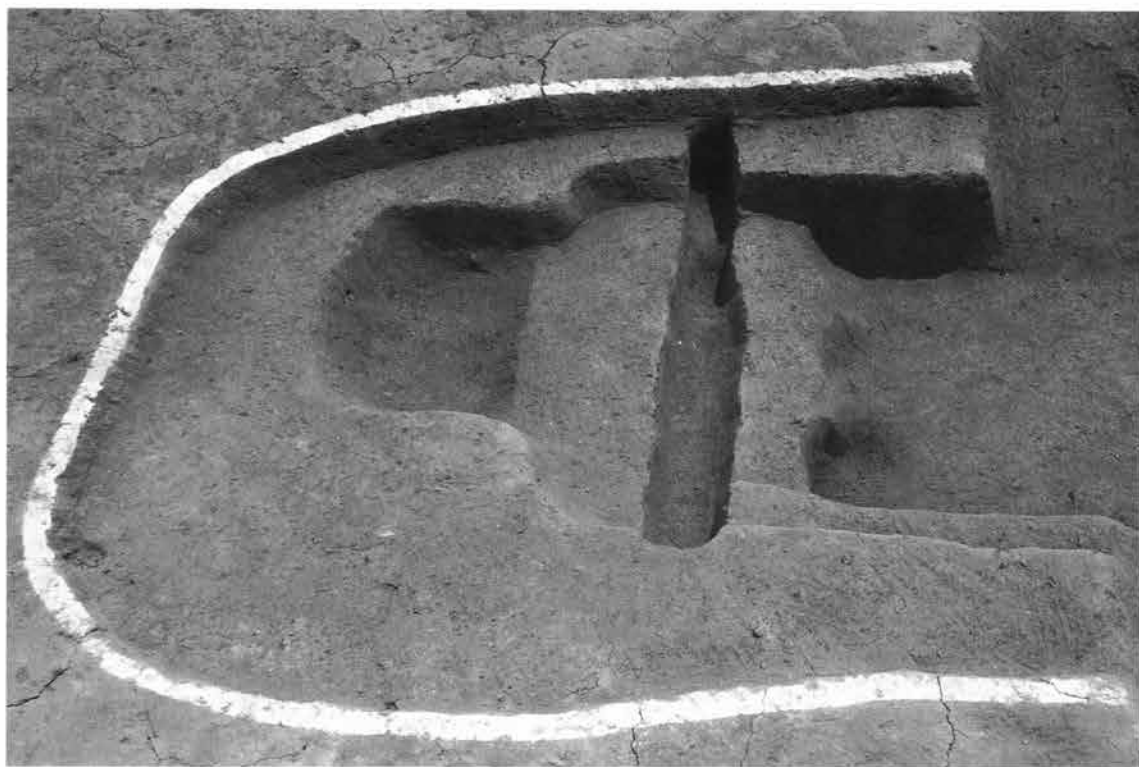
(1) A地区SX9302全景 (北から)



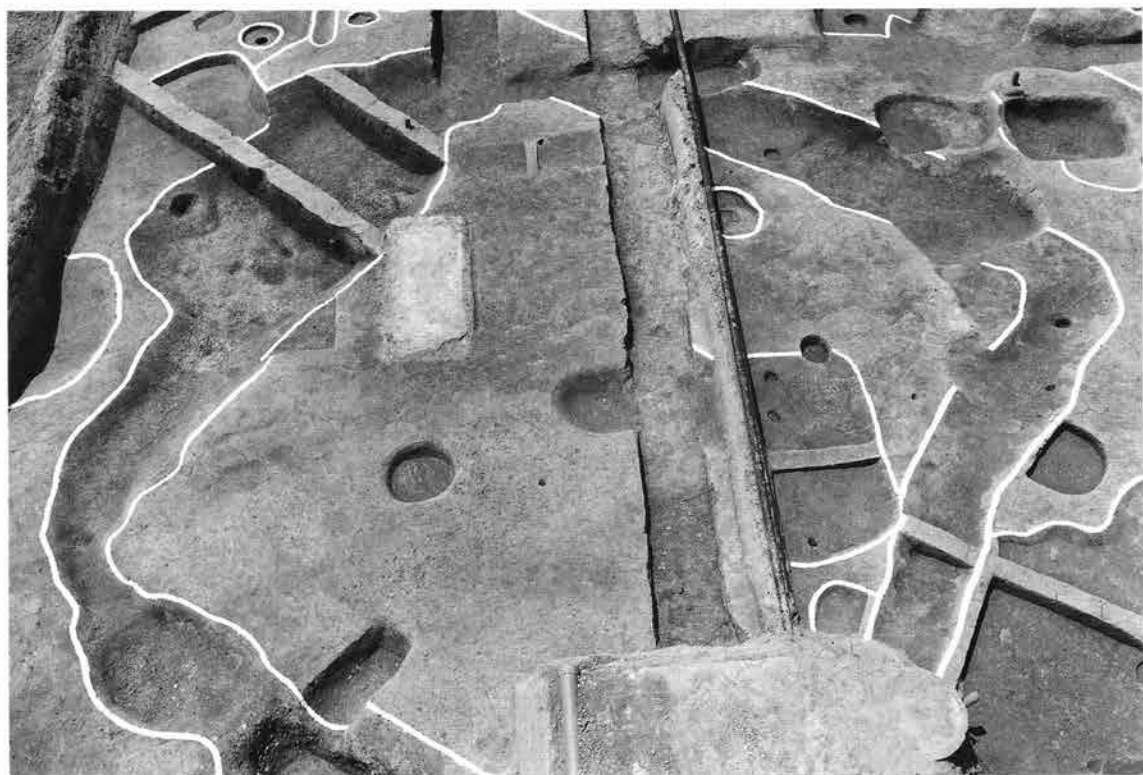
(2) A地区SX9302全景 (北西から)



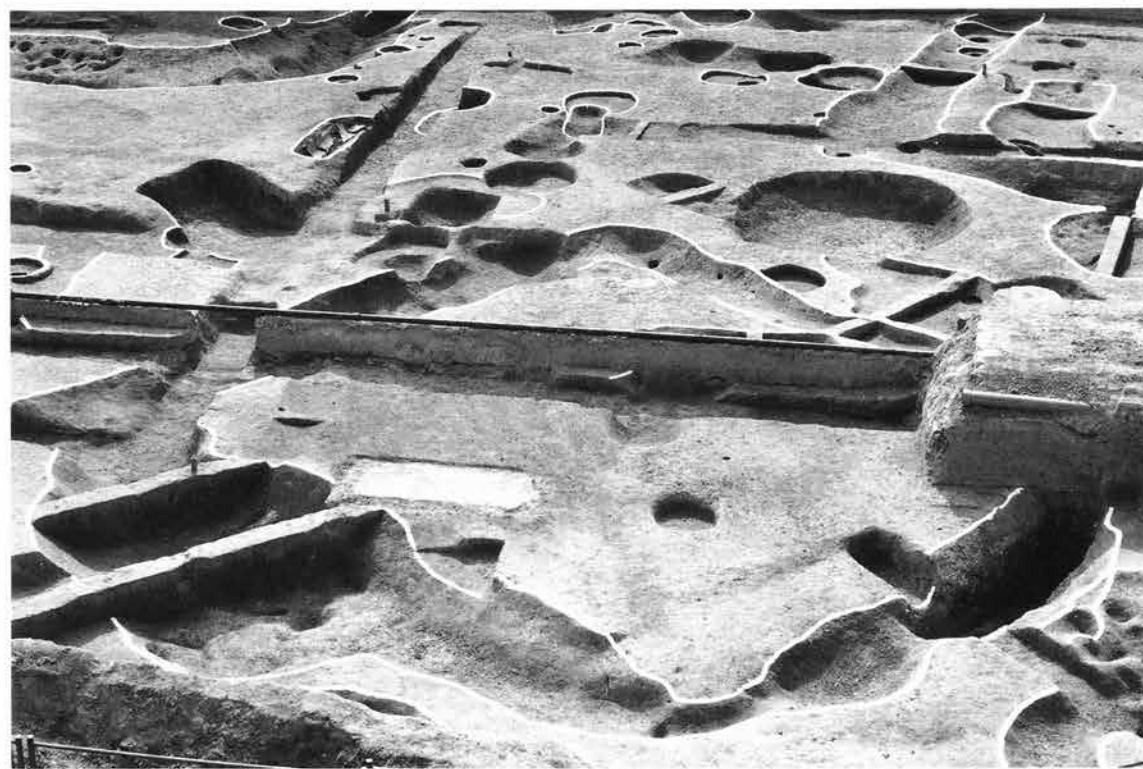
(1) A地区SX9304 (北から)



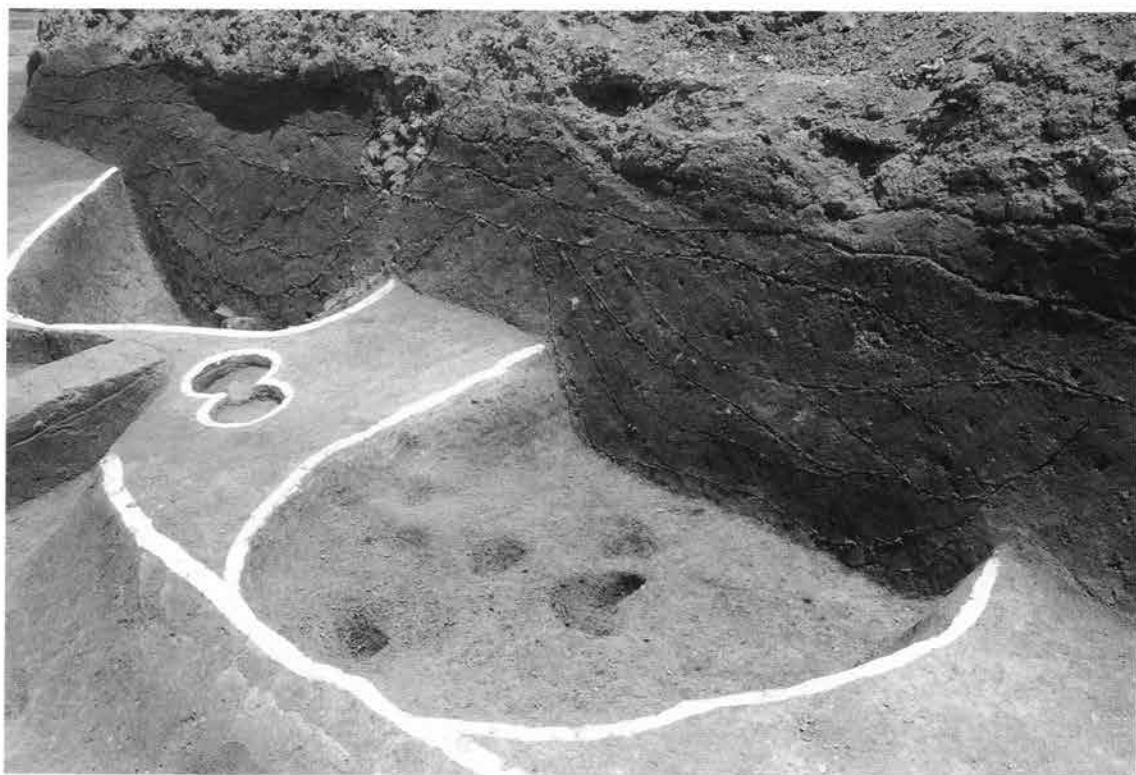
(2) A地区SX9310 (北から)



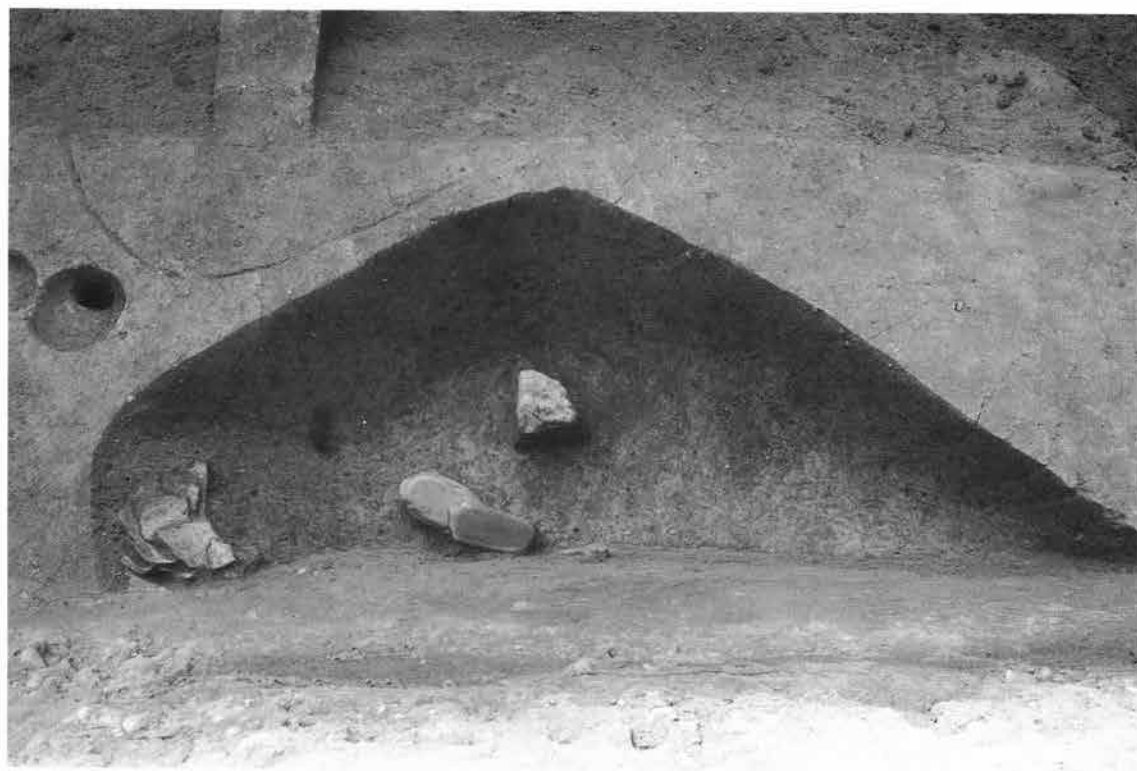
(1) A地区SX9303全景(北から)



(2) A地区SX9303全景(東から)



(1) A地区SK9321(奥)・SK9322(手前) (南西から)



(2) A地区SK9321 (東から)



(1) B地区全景（南から）



(2) B地区西半部検出状況（北から）

京都府遺跡調査概報 第57冊

平成6年3月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)